

[授業科目名] 哲学へのいざない		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけるということを授業の到達目標とする。			
授業の概要 古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第1回から第5回までは、哲学への導入と学習・思考などの諸問題を基本的考察とし、第6回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。 初回授業時に本科目に対する要望を調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する場合がある。なお、ほぼ毎回、予習や復習を目的とする課題をクイズ形式で提示する。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。また、前項に示した「課題」に対して、簡単なレポートの形式で回答してきた学生には、別途評価をする。詳しくは第1回授業時に説明するので、必ず出席するよう求める。 既に解説した内容を前提として授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 哲学とは何か ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように関わってくるのかということを考える。 「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。 第2回 考えるとはどういうことか 「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問い合わせは、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわかつたと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。 第3回 自己疎外 私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在することを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面についても考える。 第4回 ことばの働き 私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによつて大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまについて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。 第5回 隠されたカリキュラム 学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものもあると、イリイチは気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾けてほしい。 第6回 存在と価値 価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につき動かされている私たち自身の生き方に注目する。			

第7回 実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を2つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問い合わせに立ち向かう。

第8回 日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第9回 中国の哲学(1)

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回 中国の哲学(2)

老莊の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回 イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回 これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回 現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これから自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回 公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。それは個人の尊厳と背反するものではないばかりか、個の尊厳によってこそ支えられ、個の尊厳の証とさえなるものである。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回 解説と試験

筆記試験は、担当者にとっては採点評価の対象であるが、実はそれにとどまらないものである。解答を作成することは、学生にとっては最終的な自己確認であり、自己表現でもある。解答というもののこうした面を理解している学生は、授業を聴くということの本当の意味を理解していると言っても過言ではない。

上記の点や、採点基準、受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問い合わせを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

[授業科目名] 宗教と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解するようになることを、授業の目標とする。			
授業の概要 日常経験によって証明できない秩序に关心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。 ほぼ毎回、予習用のプリントを配布する。			
学生に対する評価の方法 毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。詳しくは第1回授業時に説明するので、必ず出席するよう求め。また、レポートについては必要に応じて説明する。 既に解説した内容を全体として授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 日本人は本当に無宗教か 宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。 なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。</p> <p>第2回 古代神話のヒーローたち 古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。</p> <p>第3回 イエス・キリストの7つの秘密 イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。</p> <p>第4回 コーランの響き キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。</p> <p>第5回 曼荼羅の神秘 仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。</p> <p>第6回 一休さんの悟り方 頗知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粋な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。</p> <p>第7回 浄土への祈り 浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。</p>			

第8回 「道」の世界

剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第9回 千と千尋の宗教学

宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第10回 豆腐小僧のかわいい悪戯

民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第11回 花子さんはなぜ学校に現れるか。

宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第12回 枯山水の宇宙

わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第13回 謎の微笑

仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第14回 残照の聖ミカエル

ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第15回 現代社会と宗教

現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 倫理とは何かということをまず理解する。さらに倫理上に生じるアンビバレンント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。			
授業の概要 倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。なお、ほぼ毎回、予習の手がかりとなる「問題」を提示する。 問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。前項に示した「問題」に対し、簡単なレポート形式で回答を示した学生には、別途評価をする。詳しくは第1回授業時に解説するので、必ず出席するよう求める。また、レポートについては必要に応じて説明する。 なお、既に解説した内容を前提として、授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 倫理学とは何か 「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。 「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。 第2回 黄金のルール 多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。 第3回 男らしさと女らしさ さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。 第4回 総合的学習(1) 小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。 第5回 「男と女」再考 討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エース」（この語については、第1回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。 第6回 孤独について 「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。 第7回 「いじめ」の構造 なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、そして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。			

第8回 総合的学習(2)

小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第9回 環境問題はどこが難しいか

環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。

第10回 環境問題の現状と倫理

「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が呼ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。

第11回 生命と倫理(1)

身体性に注目し、私という存在を身体の面から考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。

第12回 生命と倫理(2)

生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、1頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理学的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。

第13回 職業と倫理(1)

さまざまな職場にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。

第14回 職業と倫理(2)

回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。

第15回 まとめ

環境・生命・職業にわたるこれまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問い合わせを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 真田 郷史																																													
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部																																													
授業の到達目標及びテーマ テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」 現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。																																																
授業の概要 20世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理学的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった3つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。																																																
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全15回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。講義内容の理解(50%)・課題への積極的取り組み(50%)が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。																																																
授業計画(回数ごとの内容等) 「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の3つの領域から、それぞれ4つないし5つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は15分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。																																																
<table> <tr><td>第1回</td><td>ガイダンス</td><td>「応用倫理学」について</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>生命倫理(1)</td><td>脳死をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>生命倫理(2)</td><td>臓器移植をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>生命倫理(3)</td><td>生殖医療をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>生命倫理(4)</td><td>遺伝病をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>環境倫理(1)</td><td>人間と自然をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>環境倫理(2)</td><td>自然の権利をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>環境倫理(3)</td><td>世代間倫理をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>環境倫理(4)</td><td>地球全体主義をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>環境倫理(5)</td><td>人口爆発をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>情報倫理(1)</td><td>匿名性をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>情報倫理(2)</td><td>プライバシーをめぐる問題</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>情報倫理(3)</td><td>著作権をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>情報倫理(4)</td><td>ネット社会と現実社会をめぐる問題</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>情報倫理(5)</td><td>言語グローバリズムをめぐる問題</td></tr> </table>				第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について	第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題	第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題	第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題	第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題	第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題	第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題	第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題	第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題	第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題	第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題	第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題	第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題	第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題	第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題
第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について																																														
第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題																																														
第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題																																														
第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題																																														
第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題																																														
第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題																																														
第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題																																														
第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題																																														
第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題																																														
第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題																																														
第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題																																														
第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題																																														
第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題																																														
第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題																																														
第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題																																														
使用教科書 なし(必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。)																																																
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、TVのニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起こっているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。																																																

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 赤嶺 亜紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部は4年次のみ
授業の到達目標及びテーマ ヒトの心のはたらきを科学的にとらえ、人間を理解する際の新たな視点を得ることをめざす。			
授業の概要 心理学入門。心理学 psychology とは、psycho (精神, 心) の ology (科学, 学問) である。この講義では心理的事象に関する実証的データに基づいて、ヒトの行動について解説する。			
学生に対する評価の方法 授業中に課すレポート（おもに講義の要約）と学期末試験の成績により評価する。評価の配分はおよそ、レポート：期末試験=1:2 を考えているが、受講者の課題達成度により若干、変動することがあります。 授業に出席することは当然のことであるから、特別に出席点を加味することはない。 なお、この授業は再評価を実施しない。その点には十分留意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回：導入：心理学は何を研究するのか 第 2 回：環境の認知 (1)：感覚・知覚 第 3 回：環境の認知 (2)：注意 第 4 回：学習 (1)：古典的条件づけ 第 5 回：学習 (2)：オペラント条件づけ 第 6 回：記憶 (1)：記憶のしくみ 第 7 回：記憶 (2)：記憶の変容と忘却 第 8 回：情動と動機づけ (1)：動機づけ 第 9 回：情動と動機づけ (2)：ストレス 第 10 回：対人関係・集団 (1)：対人認知 第 11 回：対人関係・集団 (2)：社会的影響 第 12 回：パーソナリティ (1)：個人差の理解 第 13 回：パーソナリティ (2)：自己認知 第 14 回：心理学の最近のトピックス 第 15 回：試験とまとめ			
使用教科書 指定の教科書はなし。毎回、プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス ジャンルにとらわれず、自らの興味にそって読書することがよいと思います。			

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤井 真樹
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部は4年次のみ
授業の到達目標及びテーマ 心理学を学ぶということは、「心理学」という一つの窓から世界を見る態度を身につけることです。本講義では、大学生のみなさんにとって身近な問題となりうるテーマについて、科学としての心理学の知見に基づきながら考えることによって、自分なりの人間観を養うことを目指します。			
授業の概要 自分の心、他者の心について考えることは、学問の内に留まらず、今ここを生きている生身の自分自身の在り方、生き方、人間形成にそのままつながっていきます。このことを踏まえ、本講義では、大学生のみなさんにとって特に重要となる、他者理解、自己理解、他者との関係における自己の育ち、社会化・文化化といったテーマを取り上げます。			
学生に対する評価の方法 試験の評価によります。ただし、授業内でのレポート、授業態度なども加味します。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理学とは何か - 心理学を学ぶことの意味 第2回 知覚・認知 - なぜ世界はこのように見えるのか 第3回 感情 - 感情は何のためにあるのか 第4回 自己 I - 私はどこにあるのか 第5回 自己 II - 私はどのように構成されるのか 第6回 自分を知る 第7回 自己III - 自己に関するさまざまな事象 第8回 自己と他者 - コミュニケーションとは何か 第9回 記憶と学習 I - 人の行動はなぜ変わるのか 第10回 記憶と学習 II - 記憶するということ 第11回 発達 I - 人間の原初的在り方としての乳幼児期 第12回 発達II - 愛着のモデル 第13回 発達III - 年を重ねることの意味 第14回 これまでの授業のまとめ 第15回 解説と試験			
使用教科書 適宜資料を配布し、参考文献も紹介します。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で学んだものの見方、考え方を糸口として、自分自身の身の回りの出来事、人間関係、社会の動きについて新しい目で捉え直してみることが重要です。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 子どもケア専攻を除く
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の視点から青年期をとらえる視点をもち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。			
授業の概要 本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割、インターネットにおけるコミュニケーションそして自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。			
学生に対する評価の方法 再評価はしない。期間中課す4回のレポート(20%)と終盤に行う筆記試験(80%)から総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「青年期」の成立 第2回 成長する身体と性役割意識1—身体の成長と成熟する性 第3回 成長する身体と性役割意識2—性別と性役割意識 第4回 認知能力の発達1—抽象的な認知能力と情報処理能力 第5回 認知能力の発達2—他者視点の取得 第6回 成長する私1—自己と自我 第7回 成長する私2—アイデンティティの確立 第8回 友人関係の発展—社会的比較理論と友人関係の発達 第9回 彷徨する親子関係—親子間のコミュニケーション 第10回 恋愛と性行動1—恋愛に関する理論 第11回 恋愛と性行動2—恋に落ちるとき 第12回 恋愛と性行動3—恋愛の進展と失恋 第13回 恋愛と性行動4—セクシャリティの発達 第14回 レポート講評と評価 第15回 恋愛と性行動5—恋愛・セクシャリティにおけるトラブル			
使用教科書 「青年心理学への誘い—漂流する若者たちー」 和田実・諸井克英著 ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。			

[授業科目名] 日本の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代日本人のもの考え方や感じ方が、国家の歴史の枠組みの中でどう形成されてきたか、それを自分で理解し、日本のことによく知らない誰かに紹介・説明できるようになるのが目標。日本のことによく知るアメリカ人エド温・O・ライシャワー(1910-1990)の著書を材料にして、日本の歴史、東アジアの国際関係のなかでの日本の位置、日米関係を主軸とするグローバルな関係性のなかでの日本の未来などに言及する。			
授業の概要 あらかじめ指定したテキストの箇所、およびプリントの内容解説を基礎として、出席者各自が、自分の頭で考え問題に取り組む。高校までの歴史の授業とは違って、歴史上の細かな事実を知識として蓄えているかどうかは問わない。事実はそれ自体が判断の結果であるし、判断は歴史意識に左右され、歴史意識はまた歴史的に形成されてきたものである。そのことを踏まえ、歴史をもういちど自分の頭で捉えなおす機会を提供したい。			
学生に対する評価の方法 毎回、テキストと講義内容に沿った小テストを実施する。これが評価材料の全てである。小テストではテキストの理解度とともに、自分なりの思考が働いているかを見る。基本的な材料は提供されるのだから、自分で考えてみることが肝要である。細かな知識ではなく思考力と文章力を見る。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：まえがき、伝統的な日本・国土と民族、中国の模倣時代、 第2回：国風文化の発展、封建社会の発展 第3回：封建社会の成長と変遷 第4回：国内の再統一 第5回：後期封建制の変容 第6回：近代化される日本・近代国家への移行 第7回：立憲政治と帝国 第8回：経済と政治の発展 第9回：軍国主義の台頭 第10回：第二次世界大戦 第11回：戦後の日本・アメリカの占領 第12回：国家の存続 第13回：戦後の達成 第14回：懷疑の十年 第15回：世界のなかの役割 各回の項目はテキストの章立てに沿っている。進め方は、実際の進行に従って変えることがある。 遅刻しないこと。			
使用教科書 『ライシャワーの日本史』エド温・O・ライシャワー著、國弘正雄訳、講談社学術文庫			
自己学習の内容等アドバイス テキストをあらかじめ読んでおくことは必須である。高校以前の歴史教科書をいっぺん読んでおくと、理解しやすい。			

[授業科目名] 西洋の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早坂 泰行
[単位数] 2	[開講期] 1～4 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
<p>わたしたちが現在自明のものとしている思考・行動様式や社会のあり方は、どのようにして形成されてきたであろうか。本講義では主として中世後期～19世紀までの西ヨーロッパの歴史をつうじて、そうした問題を考えたい。ヨーロッパ史上の大転換点である産業革命・フランス(政治)革命と、それにさきだつ約300年間は、一般に「近代を準備した時代」といわれる。講義では19世紀も含め、この400年に生じた出来事(宗教改革や近代国家の萌芽など)を毎回扱いながら、中世から近代ヨーロッパへの道筋をたどってゆく。またそれを通じて、わたしたち自身の社会の成り立ちについても改めて考える手がかりを提示したい。</p>			
授業の概要			
<p>中世後期～近代(13世紀～19世紀)にかけての西欧の歴史を講義する。ヨーロッパ全体にかかる重要な展開を大づかみに捉えつつ、ここでは可能な限りイングランド(イギリス)の具体的な展開にも目を向けてたい。まず第1～3回は中世盛期～後期の世界について述べる。その後は中世との比較を念頭に、第4～7回では宗教改革や主権国家の黎明、第8～10回ではヨーロッパ大航海時代を主要なトピックに据えながら、近世ヨーロッパの国家・社会・人間に生じた変化を追う。最後に18世紀末の二つの変化(産業革命・フランス革命)とともに、それが現代にまでどのような影響(あるいは問題)を及ぼしているか、という点についても取り扱う。授業に際してはPowerPointなど視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な衣食住や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージをより容易に捉えられるよう配慮する。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>期末考査(80%)、および授業のなかで実施する課題レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点に十分留意すること。</p>			
授業計画(回数ごとの内容等)			
<p>第1回 イントロダクション(授業上の諸注意) 中世後期の生活と社会(1) 私たちの世界とは異なる「国家(公権力)」と社会のかたち ～封建社会のしづみ、教会の役割、自力救済(決闘・復讐)の慣習</p>			
<p>第2回 中世後期の生活と社会(2) 私たちの世界とは異なる日常生活の側面 ～家族関係、「小さな大人」としての子ども、貧者(貧しさ)へのまなざし</p>			
<p>第3回 中世後期の生活と社会(3) イングランドを事例に、中世の封建社会とその展開をみる ～マグナ・カルタと身分制議会にいたるまでのアンジュー帝国</p>			
<p>第4回 中世末・近世の社会変動(1) 英仏百年戦争～黒死病と民衆蜂起の時代</p>			
<p>第5回 中世末・近世の社会変動(2) マルティン・ルターの宗教改革と、イングランドでの国教会の成立 ～高まる民衆の宗教運動と、宗派対立により二分されるヨーロッパ</p>			
<p>第6回 中世末・近世の社会変動(3) 宗教戦争のなかから成立する初期の近代国家 ～三十年戦争と、「規律」を内面化した「近代人」の誕生</p>			
<p>第7回 中世末・近世の社会変動(4) ピューリタン革命と名誉革命 ～イギリスにおけるふたつの革命と複合国家の時代</p>			
<p>第8回 世界の一体化のなかのヨーロッパ(1) ヨーロッパの大航海時代 ～「海からの世界史」の時代におけるヨーロッパと世界の諸地域</p>			
<p>第9回 世界の一体化のなかのヨーロッパ(2) 銀・香辛料・コーヒー・砂糖そして奴隸(その1) ～スペイン、オランダを経て英・仏へと推移する世界貿易の霸権</p>			
<p>第10回 世界の一体化のなかのヨーロッパ(3) 銀・香辛料・コーヒー・砂糖そして奴隸(その2) ～イギリス・コーヒー・ハウスのインパクトと、その背景としての奴隸制度</p>			
<p>第11回 産業革命とフランス革命(1) グローバルな文脈のなかでみるイギリス産業革命 ～産業革命のイギリスと、世界の他の諸地域(インド、カリブ海周辺等)との関係</p>			
<p>第12回 産業革命とフランス革命(2) フランス革命とナポレオンへの対応 ～フランス革命・ナポレオンへの対応、および19世紀の自由主義とナショナリズム</p>			
<p>第13回 産業革命とフランス革命(3) ヨーロッパにおける技術・産業の発展と「帝国主義」 ～とくに19世紀後半のアフリカにおける植民地支配と「文明化の使命」</p>			
<p>第14回 帝国主義の時代から第一次世界大戦前夜へ</p>			
<p>第15回 全体の総括と、期末試験(60分)</p>			
使用教科書			
<p>特にない。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。参考文献については、適宜各回のレジュメに掲載する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会を捉えなおしながら、考え方や論点をまとめること。</p>			

[授業科目名] アジアの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鵜飼 尚代		
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考		
授業の到達目標及びテーマ					
最近日本と中国、韓国との関係はたいへんぎくしゃくしている。しかし、「東アジア共同体」などという語が話題になったように、結束すれば世界における一大勢力となることは確かだ。ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。					
また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われる所以、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。					
授業の概要					
世界史的観点からアジア史、特に東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史的一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。					
学生に対する評価の方法					
講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価は a (20%)、b (30%)、c (50%) を総合して判断することになる。					
授業計画（回数ごとの内容等）					
授業は以下の通り進める予定である。					
第1回	授業についてのオリエンテーション	授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。			
第2回	中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱）				
第3回	中国の近代化②（日清戦争前後）				
第4回	中国の近代化③（義和団事変前後）				
第5回	中国の近代化④（中華民国成立前後）				
第6回	中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後）				
第7回	中国の近代化⑥（現代中国への道）				
第8回	朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後）				
第9回	朝鮮半島の近代化②（南北分離前後）				
第10回	朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後）				
第11回	朝鮮半島の近代化④（南北分離前後）				
第12回	朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道）				
第13回	ベトナムの近代化①（独立前後）				
第14回	ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道）				
第15回	試験とまとめ				
但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。					
使用教科書					
必要に応じてプリントを配布する。					
【参考図書】：布目潮渢、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）					
自己学習の内容等アドバイス					
講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がるであろう。					

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦																														
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修)	[備考] 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)																														
授業の到達目標及びテーマ																																	
<p>小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校3年から6年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をNIE方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。</p>																																	
授業の概要																																	
<p>社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料を活用することができる柔軟な探究力を養うことを狙いとしている。</p>																																	
学生に対する評価の方法																																	
<p>授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(20%)、小テスト・レポート(30%)、テスト(50%)などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。</p>																																	
授業計画(回数ごとの内容等)																																	
<table> <tr> <td>第1回</td><td>社会科の目標及び授業全体の紹介</td></tr> <tr> <td>第2回</td><td>社会科教育の教科内容</td></tr> <tr> <td>第3回</td><td>小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)</td></tr> <tr> <td>第4回</td><td>小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故)</td></tr> <tr> <td>第5回</td><td>小学校第4学年社会科(ごみ、水道)</td></tr> <tr> <td>第6回</td><td>小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県)</td></tr> <tr> <td>第7回</td><td>小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業)</td></tr> <tr> <td>第8回</td><td>小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)</td></tr> <tr> <td>第9回</td><td>小学校第6学年社会科(歴史的分野)</td></tr> <tr> <td>第10回</td><td>小学校第6学年社会科(歴史的分野)</td></tr> <tr> <td>第11回</td><td>小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解)</td></tr> <tr> <td>第12回</td><td>具体的な人物学習の事例①近世の人物(伊能忠敬)・レポート</td></tr> <tr> <td>第13回</td><td>具体的な人物学習の事例②明治維新の人物(福沢諭吉)</td></tr> <tr> <td>第14回</td><td>各種統計資料の利用方法</td></tr> <tr> <td>第15回</td><td>学習のまとめと試験</td></tr> </table>				第1回	社会科の目標及び授業全体の紹介	第2回	社会科教育の教科内容	第3回	小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)	第4回	小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故)	第5回	小学校第4学年社会科(ごみ、水道)	第6回	小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県)	第7回	小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業)	第8回	小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)	第9回	小学校第6学年社会科(歴史的分野)	第10回	小学校第6学年社会科(歴史的分野)	第11回	小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解)	第12回	具体的な人物学習の事例①近世の人物(伊能忠敬)・レポート	第13回	具体的な人物学習の事例②明治維新の人物(福沢諭吉)	第14回	各種統計資料の利用方法	第15回	学習のまとめと試験
第1回	社会科の目標及び授業全体の紹介																																
第2回	社会科教育の教科内容																																
第3回	小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)																																
第4回	小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故)																																
第5回	小学校第4学年社会科(ごみ、水道)																																
第6回	小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県)																																
第7回	小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業)																																
第8回	小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)																																
第9回	小学校第6学年社会科(歴史的分野)																																
第10回	小学校第6学年社会科(歴史的分野)																																
第11回	小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解)																																
第12回	具体的な人物学習の事例①近世の人物(伊能忠敬)・レポート																																
第13回	具体的な人物学習の事例②明治維新の人物(福沢諭吉)																																
第14回	各種統計資料の利用方法																																
第15回	学習のまとめと試験																																
使用教科書																																	
特に使用しない。適宜、テーマ関連の資料を配布する。																																	
自己学習の内容等アドバイス																																	
<p>社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をNIEとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意し、自分なりの感想や意見を持つようすること。毎回、授業の感想・疑問点等を提出するので、授業に集中すること。</p>																																	

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会科学を学習するとき、常に歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観を作っていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いと思われるが、さまざまな資料・史料等を提示して、学生が興味を持つようにさせる。			
授業の概要 日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から150年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(30%)、レポート(20%)、試験(50%)などを総合的に評価する。授業ごとの授業感想・レポートを評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について 第2回 近代教育制度の成立と展開 第3回 小学校の普及と子どもの生活の変化 第4回 天皇制教育体制の確立 第5回 明治期小学校教育の実態 レポート 第6回 中等教育の拡充、高等教育の拡大 第7回 大正デモクラシー期における社会と教育の再編 第8回 都市新中間層と農村・都市下層の教育 第9回 大正自由教育の高揚 第10回 貧窮する農村、変化する社会 レポート 第11回 戦時体制下の学校と子ども 第12回 敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革 第13回 新学制の展開、戦後教育の新段階 第14回 高度経済成長後の社会と教育 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 特に使用しない。授業に関連する資料を適宜配布する。 参考図書『教育にから見る日本の社会と歴史』			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。授業時に紹介する図書などをできる限り読むようすること。			

[授業科目名] 日本の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦																														
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前期・後期リピート																														
授業の到達目標及びテーマ 智恵子抄の世界を知る。 詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、詩の深層に迫る。 学習の課程により思考力と想像力を涵養する。																																	
授業の概要 詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。																																	
学生に対する評価の方法 主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。																																	
授業計画（回数ごとの内容等） <table> <tr><td>第1回</td><td>講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ）</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して）</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで）</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>『智恵子抄』前詩「あをい雨」について・作品へのアプローチ再確認</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のこころ」、詩「おそれ」とその背景</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>詩「或る宵」とその背景</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>愛の統合的定義と『智恵子抄』について</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晩餐」とその背景</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>9年間の詩空白と二人の生活</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>テストと解説</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>『智恵子抄』その後</td></tr> </table>				第1回	講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ）	第2回	文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して）	第3回	『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで）	第4回	『智恵子抄』前詩「あをい雨」について・作品へのアプローチ再確認	第5回	第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のこころ」、詩「おそれ」とその背景	第6回	詩「或る宵」とその背景	第7回	詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景	第8回	愛の統合的定義と『智恵子抄』について	第9回	詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景	第10回	詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晩餐」とその背景	第11回	9年間の詩空白と二人の生活	第12回	第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景	第13回	第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景	第14回	テストと解説	第15回	『智恵子抄』その後
第1回	講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ）																																
第2回	文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して）																																
第3回	『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで）																																
第4回	『智恵子抄』前詩「あをい雨」について・作品へのアプローチ再確認																																
第5回	第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のこころ」、詩「おそれ」とその背景																																
第6回	詩「或る宵」とその背景																																
第7回	詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景																																
第8回	愛の統合的定義と『智恵子抄』について																																
第9回	詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景																																
第10回	詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晩餐」とその背景																																
第11回	9年間の詩空白と二人の生活																																
第12回	第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景																																
第13回	第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景																																
第14回	テストと解説																																
第15回	『智恵子抄』その後																																
使用教科書 テキスト・大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社 参考図書・大島龍彦『智恵子抄を読む』新典社・大島裕子『智恵子抄を歩く』新典社																																	
自己学習の内容等アドバイス 本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時で扱った詩とその背景について整理し、更に感想文を書くことが望ましい。																																	

[授業科目名] 英米の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 薫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
英米文学の世界に触ることで、英語学習に必要な一般常識である英語圏の歴史や文化に関する知識を獲得する。英語力のさらなる向上を目指す学習者にとって、英語圏の文学作品の背景にある歴史・社会・文化について知ることは重要となる。これらについての知識が豊富であれば、異文化理解が容易となり、コミュニケーション能力も向上するからである。国際語としての地位を確立している英語の文化的な基礎知識を獲得することは、グローバルに活躍する社会人を目指す者にとって役立つものとなるであろう。詩のリズムを学ぶことは、英語のプロソディを学ぶことであり、英語音声の表現力を培うものとなる。			
授業の概要			
英米文学の作品が誕生した背景であるイギリス・アメリカの歴史を辿りながら、代表的な作品を取り上げつつ、英米文学の歴史を概説する。次に、特定の文学作品を英語で鑑賞し、内容に触れる通して、英語という言語の特徴についても学ぶ。さらに、英語の詩や歌詞に焦点をあてて解説し、文字と音声の関わりについて知識を深める。			
学生に対する評価の方法			
受講態度 (10%)、英語圏の歴史と文学に関するテスト (45%)、米文学作品に関するレポート (15%)、英文学作品に関するレポート (15%)、英語の詩とプロソディに関するレポート (15%) を総合して評価する。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回 授業の目的・内容・日程・課題・レポート・テストなどについての説明 英語圏の歴史と文学 (古代)			
第2回 英語圏の歴史と文学 (中世)			
第3回 英語圏の歴史と文学 (中世)			
第4回 英語圏の歴史と文学 (近代)			
第5回 英語圏の歴史と文学 (近代・現代)			
第6回 英語圏の歴史と文学に関するテスト			
第7回 米文学作品の鑑賞			
第8回 米文学作品の鑑賞			
第9回 英文学作品の鑑賞			
第10回 英文学作品の鑑賞			
第11回 英語音声の変化とプロソディ			
第12回 英語の詩の韻律			
第13回 英語の詩とプロソディ (マザーグース)			
第14回 英語の詩とプロソディ (ロック・ソウル・他)			
第15回 英語の詩とプロソディ (ポピュラーソング・他)			
使用教科書			
随時、プリントを配布			
自己学習の内容等アドバイス			
毎回配布されるプリントを、年代ごとに整理すること。 歴史上の出来事が、言語や文学に与える影響に着目し、因果関係を把握する。 授業で紹介する文学作品の日本語に翻訳したものを読んだり、映画化されたものと鑑賞したりすることで、作品について理解が深まる。 英語の音声変化やプロソディの理解を容易にするため、英語の歌に積極的に触れることが薦める。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。			
授業の概要 国の最高法規であり、国的基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。 受講者の希望に応じ、隨時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めるることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし (パーセンテージでいえば 100%)、これに平常の受講態度など加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 教養とは何か 第2回 憲法とは何か 第3回 憲法とは何か (続) 第4回 社会契約説について 第5回 社会契約説について (続) 第6回 憲法の歴史 世界 第7回 憲法の歴史 世界 (続) 第8回 憲法の歴史 日本 第9回 憲法の歴史 日本 (続) 第10回 天皇制と戦争の放棄 第11回 三権分立について 第12回 自由と平等について 第13回 論文の書き方 第14回 社会権について 第15回 筆記試験 (90 分)			
使用教科書 教科書というわけではないが、『六法』は必携。(すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可)			
自己学習の内容等アドバイス 講義を理解するための復習・予習は勿論として、日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結局の早道である。読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早川 秋子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ			
周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を3本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにならう。			
授業の概要			
憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下の平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。			
必要に応じてプリント配布、DVDやパワーポイントを使用する。			
学生に対する評価の方法			
積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や内職は厳禁である。			
①受講態度 ②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうことがある） ③最終評価（筆記テスト） （①20パーセント+②20パーセント+③60パーセント）			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 (オリエンテーション) 憲法とは何か、どのような内容であるかを理解する			
第2回 国家や国民について考えてみよう 個人の尊重、国民主権の指す国民とは何か			
第3回 外国人の参政権を認める必要があるか			
第4回 憲法13条の幸福追求権の意味について考えてみよう			
第5回 新しい人権 プライバシー権を例に整理してみよう			
第6回 自己決定権 尊厳死を例に考えてみよう			
第7回 司法権 刑罰・死刑制度・国民裁判員制度について考えてみよう			
第8回 法の下の平等 非嫡出子相続分差別違憲裁判を例に平等を考えよう			
第9回 インターネットと表現の自由			
第10回 信教の自由と政教分離 靖国神社に政治家が参拝すると騒がれる理由			
第11回 平和主義1 戦争放棄（歴史的観点から考える）			
第12回 平和主義2 国際貢献（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟）			
第13回 社会権 生活保護の受給と生存権 朝日訴訟を事例に整理しよう			
第14回 一票の重み 民主主義の政治制度 改憲の可能性			
第15回 総まとめ・評価			
（筆記テストは最終日に行う 道試・再試はレポートで評価する）			
使用教科書			
大沢秀介編 『はじめての憲法』成文堂 2,200円			
自己学習の内容等アドバイス			
講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。			
いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのかと、日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。			

[授業科目名] 法と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。			
授業の概要 民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。受講者の希望に応じ、隨時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めることを目標とするので、時事教養を身につけたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 法のかたち 法とは、条文の形になったものだけではない。様々な法の形を考える。 第3回 国家法と非国家法 法とは、国家の法だけではない。国家以外の法にはどんなものがあるだろうか。 第4回 法と道徳 法と道徳は、同じものか、違うのか、違うとすればどこが違うのか、考えてみよう。 第5回 法と道徳（続） 第6回 法のちから 法は、何のために存在するのか。法の存在意義に関わる問題である。 第7回 法による制裁 前回にひき続き、法のちからについて学ぶ。 第8回 刑罰について 刑罰はいかなるものか。その種類と役割を紹介する。 第9回 裁判とはいかなるものか 裁判は、どんな役割を担っているのか。その意味を考える。 第10回 司法の制度 司法制度を、具体的に理解しよう。 第11回 民法とはいかなる法か 近代社会における民法の意味を考える。 第12回 損害賠償の法 民法における損害賠償の理論と、その役割を学ぶ。 第13回 財産所有の法 近代社会における所有権の意義を考え、他の財産権についても通観する。 第14回 契約の法 我々は、気付いていないが毎日契約を結び、それを履行して生活している。その意味と法理を考察する。 第15回 筆記試験（90分）			
使用教科書 教科書というわけではないが、六法は必携（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）。			
自己学習の内容等アドバイス 講義内容理解のための復習・予習は勿論として、日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結局の早道である。法や裁判に関する読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。それらの書名、題名については、講義中隨時提示する。			

[授業科目名] 政治と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 東江 日出郎
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代日本の政治と社会政治と社会に関する基礎的概念や制度などの内容を説明できるようになること。			
授業の概要 現在の日本社会は、急速に少子高齢化が進んでいる。それは介護等の福祉政策を必要とする。またその財源も必要になる。だが、少子化は労働力減少をも意味し、財源確保を困難にしている。他方、日本社会の格差の拡大も深刻な社会問題である。経済成長をしながら、如何に所得の再分配をするかが課題である。国際社会では、異なる価値観に基づく国や地域間の対立激化で平和と安定に問題が見られ、経済成長を目指す国々による競争は、地球環境問題をも引き起こしている。国際平和や持続可能なグローバルな社会の確立が課題である。このような国内、国際社会の諸問題を解決するための政策を審議・決定・実施するのが政治の役割である。だが、そのような政治の制度やメカニズム、実態についての体系的理解は必ずしも容易ではない。本講義では、そのような政治の諸制度や実態に関する基礎知識を習得することを目標、内容とする。			
学生に対する評価の方法 成績評価は、授業への参画態度（30%）と学期末試験（70%）の両方で行います。期末試験に関しては、試験問題を試験の1週間前までに通知します。そのため、試験に際してノートなどの持ち込みは禁止します。また、問題自体を予め通知するため、評価は厳しく行います。試験の出題形式は、大問5つの内、3つ選択して論述形式で解答してもらいます。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入（授業の概要説明及び評価手法などの説明） 第2回 政府は何をすべきなのか 第3回 世論と選挙 第4回 政党の役割 第5回 選挙制度と政党 第6回 議会の役割 第7回 内閣と官僚制度 第8回 マスメディアと政治の関係 第9回 利益団体、NPOと政治 第10回 財政・金融政策 第11回 福祉政策はなぜ必要？ 第12回 地方分権と政治 第13回 公共事業と政治 第14回 外交と内政 第15回 まとめ（テスト実施）			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス テレビのニュースや新聞の政治や経済などで、現在の日本の問題を知り、理解するように努めましょう。また、その中で自分が何を知らないかという、問題意識を持ちましょう。			

[授業科目名] 経済と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。本講の目標は、学生諸君が、自分なりの視点で経済事象について語れるようになること、具体的には、①主要な経済用語が常識レベルにおいて理解されていること、②現代経済社会の諸問題により関心を持てるようになること、③それら諸問題について自分なりに(特に文章で)説明できるようになること、である。			
授業の概要			
上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道VTR）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートI）。そして、現在の経済社会の問題を幾つかとりあげ検討してみる（パートII）。			
学生に対する評価の方法			
①授業への参画態度（評価ウエート 20%） ②産業・経済記事のレポート（アサインメント）……具体的に産業・経済に関する新聞記事を一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を述べたものを作成し提出する）。（評価ウエート 40%） ③最終課題への取り組み……授業を踏まえた最終課題に教場で取り組み提出する。（評価ウエート 40%） 以上 3 点から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 ガイダンス（授業のねらい・展開方法・評価などの説明）			
第2回 序・経済社会の基本的見方 われわれが生きる社会（市場経済）の全体像を経済的に説明する。			
《パートI 経済記事を読む上で知っておきたいキーワード》			
日常の経済記事等で出てくる一見難しく、疎遠にみえる用語は、マクロ経済学の領域で経済変数として扱われるものである。ここではこれら主要経済用語の基本的概念をかみ砕いて分かりやすく説明する。			
第3回 経済成長と経済成長率について			
第4回 物価とインフレについて			
第5回 失業と失業率について			
第6回 為替相場と国際収支について			
第7回 株と株価について			
第8回 GDPについて①			
第9回 GDPについて②			
第10回 景気について			
第11回 景気対策および財政政策について			
《パートII 経済社会の諸問題を考える》			
第12回 「豊かさ」について考える。			
第13回 「少子高齢化」について考える。			
第14回 トピカルな話題をとりあげ検討する。			
第15回 最終課題への取組とまとめ（発展的学習のための主要文献解説）			
※基本的にはこのスケジュールに従って展開するが、進度状況によって一部変更する場合もある。			
使用教科書			
釜賀雅史・岡本純編著『現代日本の企業・経済・社会』学文社、および、テーマ関連の資料・記事などに従って授業を行う。			
自己学習の内容等アドバイス			
授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。			
《より深く学ぶために》授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみること。			

[授業科目名] 企業と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、特に企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解することは必要不可欠なことである。就職活動や社会人へのパスポートとして、現代の企業の活動、実態、それに会社の仕組みや役割などの基本的知識を身につけることが目標である。			
授業の概要			
企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内ですべてを網羅することは不可能なので、下記の4つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①企業の組織形態・特質など、②企業において顧客のニーズを探り、売上・利益を仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。			
学生に対する評価の方法			
学期末試験、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識、受講態度（主体性や積極性）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 授業概要と心得、企業と社会および環境変化との関係、経済学と経営学との違いについて。			
第2回 株式会社など企業形態の諸特質について。			
第3回 企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について。			
第4回 企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境）			
第5回 基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など）			
第6回 マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて）			
第7回 市場細分化およびその基準、標的市場の選定			
第8回 マーケティングの基本戦略 ①製品戦略			
第9回 マーケティングの基本戦略 ②価格戦略			
第10回 マーケティングの基本戦略 ③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略			
第11回 組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など）			
第12回 会計 ①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書			
第13回 会計 ②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益）			
第14回 会計 ③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など）			
第15回 学期末試験および今後の学習課題の指針			
使用教科書			
教科書は使用しない。隨時、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス			
学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復習および専門用語の意味調べ等が必須である。			

[授業科目名] 情報と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会はコンピュータやスマートフォンなどの登場によって、利便性などが声高に叫ばれる社会となった。しかし、そうした情報社会のメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）をも認識することが重要であろう。広義ではそうしたさまざまな社会の病理現象を認識しつつ、その中で如何に生きるべきかを問い合わせることが目標でありテーマである。			
授業の概要 ITC（情報技術＆コミュニケーション）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。			
学生に対する評価の方法 学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数等も考慮に入れて総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明 第2回 ①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど） 第3回 ②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、eコマース、光ファイバーケーブルなど） 第4回 情報という言葉の由来と歴史的な展開 第5回 情報の性質と種類 第6回 現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質） 第7回 情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して 第8回 ①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影） 第9回 ②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影） 第10回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について） 第11回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、eビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み） 第12回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活） 第13回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象） 第14回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題） 第15回 学期末試験と今後の学習の指針			
使用教科書 『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）			
自己学習の内容等アドバイス 回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。			

[授業科目名] 社会学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会学の概要を理解すること。現代の社会の様々な面に見られるグローバル化の状況をとらえ、理解する手がかりとして、歴史的、理論的アプローチをとるとともに、現場で直接データを収集する社会調査の技法について見て行きたい。			
授業の概要 大体、下記の授業計画に沿って、各項目について講義する。社会学の概要についてはテキストを用いて、現代社会学の諸相、および歴史的な蓄積をみる。社会調査についてはプリントを配布して、概要を見て行く。そのなかで、現代社会学の理論と方法が、調査とどのような関係にあるのかが理解できるようにしたい。 テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、あくまで社会学的な見方から見ていくとしよう。 あと、くれぐれも遅刻しないでほしい。話し始めた途端、中断、また中断となるのは大迷惑だから。			
学生に対する評価の方法 適宜、講義内容に沿った小テスト（評価全体に占める割合は50%）を課す。期末テスト（評価全体に占める割合は50%）では、考え方、文章力も見たい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。 第1回 現代社会論への誘い、グローバル化とはなにか 第2回 国家と社会(1) 国家・脱国家、国民と国籍、 第3回 国家と社会(2) 人種とエスニシティ、自由と民主主義、 第4回 国家と社会(3) 戦争・国家・動員、福祉国家、 第5回 個人と集団(1) 自己と他者、国際養子の社会学 第6回 個人と集団(2) かたりの社会学（被爆体験、ハンセン病） 第7回 個人と集団(3) 日本の家族、「東京物語」 第8回 社会調査(1) 社会調査とはなにか、社会調査の歴史 第9回 社会調査(2) 社会調査の目的と方法（質的、量的、混合） 第10回 社会調査(3) 社会調査の倫理 調査の種類と実例 第11回 社会調査(4) 調査企画、仮説と論証のプロセス、 第12回 社会学の歴史(1) 啓蒙思想家からウエーバーまで 第13回 社会学の歴史(2) パーソンズと現代社会学 第14回 社会学の歴史(3) 日本社会学 第15回 期末試験とまとめ			
使用教科書 『入門 グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社			
自己学習の内容等アドバイス 予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。手がかりは『広辞苑』のような一般的な辞書であり、さらに進んで『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る場合もある。Googleをはじめとするネット上の検索手段も進化しているが、書籍の形態をとった文字情報の価値を吟味する癖をつけたい。			

[授業科目名] アメリカの社会と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河井 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人種、階級、ジェンダーの観点から、もうひとつのアメリカを見る。マイノリティの視点からアメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 自由の国としてのイメージが強いアメリカ。アメリカ社会を理解するためには、個人として、国民としてアメリカ人の自己意識にとって重要な「自由」のあり方の歴史を知る必要がある。「自由」は決して固定されたカテゴリーではなく、常に変化しているし、またその「境界」も常に変化してきた。 本授業では、アメリカの政治的自由、経済的自由、市民的自由、精神的自由という自由の4つの側面を、その意味、それを可能にした社会的条件、それを享受した人々と享受しなかった人々という3つの観点から追及する。このことは、人種、階級、ジェンダーの視点からアメリカ合衆国を見ることでもある。映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席巻する20世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる20世紀後半をみていく。 「自由」の歴史を読み解くことで、大きな政府と小さな政府、保守とリベラル、貧富の格差、帰還兵、銃の乱射、ヘイトクライム、不法移民など、アメリカが今抱えている様々な問題がなぜ起こっているのかが明らかになるだろう。毎授業時、現代社会の動向とともに、多様性に富むアメリカ社会の断面を映す映像も紹介する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度及びリアクション・ペーパーによる授業の理解度(40%)、中間レポート(20%)、最終に実施する試験(40%)で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義の概要説明 「アメリカの世紀」 第2回 アメリカの根源—その理想と現実 (植民地時代～南北戦争) 第3回 アメリカの根源—その理想と現実 (植民地時代～南北戦争) 第4回 アメリカ的文化の成立—その光と影 (南北戦争後～1890年代) 第5回 20世紀前後のアメリカ—1890年代 第6回 革新主義の時代—1900年代～1910年代 第7回 大衆消費社会の展開—1920年代 第8回 「現代アメリカ」の危機—1930年代 第9回 アメリカの世紀～—1940年代 第10回 冷戦下の「黄金時代」—1940年代後半～1950年代 第11回 激動の時代—1960年代 第12回 激動の時代—1960年代 第13回 保守の時代—1970年代～1980年代 第14回 文化戦争の世紀末—1990年代以降 第15回 試験および総括			
使用教科書 有賀夏紀『アメリカの20世紀』(上・下) (中公新書) その他、史料は随時配布する。 【参考図書】 有賀夏紀・油井大三郎編『アメリカの歴史—テーマで読む多文化社会の夢と現実』(有斐閣アルマ) 富田虎男・鶴月裕典編『アメリカの歴史を知るための62章』(明石書店)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。			

[授業科目名] 民族と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。			
授業の概要 民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50%）に、受講態度、出席カードへの記入などを加味（50%）しながら、総合的に判断する。開講時間数の3分の2以上の出席が不可欠である。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。 第2回 アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。 第3回 文化人類学と民族1。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。 第4回 文化人類学と民族2。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。 第5回 自然人類学と民族1。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。 第6回 自然人類学と民族2。人種と形質、民族との関係について述べる。 第7回 自然人類学と民族3。血液型と民族の関係について述べる。 第8回 スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。 第9回 世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。 第10回 衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。 第11回 食と民族、その1。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。 第12回 食と民族、その2。食材と食に関する禁忌。 第13回 食と民族、その3。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。 第14回 住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。 第15回 評価試験とまとめ			
使用教科書 特定の教科書は用いせず、適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。インターネットの利用は情報収集の手段にとどめ、必ず原本、実物資料にあたってほしい。			

[授業科目名] 国際社会の動き		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらのよって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。			
授業の概要 まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族・文化（言語・宗教）・国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、我が国と対照しつつ考察する。 受講者の希望に応じ、隨時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 国際社会とは 第3回 アジアの国々 第4回 ヨーロッパの国々と諸民族 第5回 地理と歴史の重要性 第6回 地理と歴史の重要性（続） 第7回 民族とは何か 第8回 言語と世界 第9回 宗教と世界 第10回 宗教と世界（続） 第11回 国家と世界 第12回 アメリカと世界 第13回 アメリカと世界（続） 第14回 日本と世界 第15回 筆記試験（90分）			
使用教科書 『グローバルマップル世界&日本地図帳』昭文社（後期は未定） 『世界史年表・地図』吉川弘文館			
自己学習の内容等アドバイス 講義を理解するための復習・予習は勿論として、日頃、新聞・テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につけること。そうすれば国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つか、数式を图形化するとこんな面白い图形になるのか、ということを、パソコンを利用してつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようにすることを到達目標とする。			
授業の概要 高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。			
学生に対する評価の方法 授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系 第2回 関数関係（1）：1次関数、多次関数（線、面積、体積） 第3回 パソコンによる1次、2次関数の图形化 第4回 関数関係（2）：弧度法と三角関数 第5回 直角座標と極座標 円、橢円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標 第6回 三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる图形化 第7回 図形の自由作成 第8回 関数関係（3）指數関数、対数関数 第9回 パソコンによる指數関数、対数関数等の图形化 第10回 微分の概念とパソコンによる近似計算 第11回 積分の概念とパソコンによる近似計算 第12回 関数関係（4）特殊な関数、パソコンによる图形化 減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リザージュ、 バラ曲線等。 第13回 ベクトル：ベクトルの概念を理解し、演習を行う 第14回 試験と解説 第15回 学習のまとめ			
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 石原 繁 編 「大学数学の基礎」 裳華房			
自己学習の内容等アドバイス パソコンを数式・数学の新しい理解に活用するため、パソコン使用時の欠席は好ましくない。パソコンが苦手な人もいるが、この授業で少しでもパソコンに慣れるようにして欲しい。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 野々山 里美
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 数学に関する興味・関心をもつことと数学的要素を養うことを目的とする。初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置き、数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理性を理解し、日常生活に活かし、数学的な考え方を身につけることを目標とする。			
授業の概要 ・本授業では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気づくとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。 ・「算数的活動」「見通しをもち、筋道を立てて考え、表現する能力」の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。			
学生に対する評価の方法 ・試験（筆記）（60%）、小テストやレポート（20%）、授業の参加態度やグループ討議の態度（20%）を総合的に判断して行う。 ・授業の遅刻や欠席等は原則的に認めず、減点対象とする。 ・試験の欠席は認めない。また、この授業の再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス（算数を学ぶことの意義・授業の進め方・授業に関する諸注意等） 第 2回 数の表し方と記数法の歴史の概観（実数・位取り記数法） 第 3回 数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九） 第 4回 数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除） 第 5回 数の計算の意味とその活用（四則計算の性質・問題作成） 第 6回 日常における数学的な事象の考察 第 7回 数と計算領域のまとめ 第 8回 小学校における図形の指導目標と内容 第 9回 「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円） 第 10回 「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形） 第 11回 「図形」：対称・合同な図形 第 12回 「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図） 第 13回 「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐） 第 14回 数と図形領域のまとめ 第 15回 ①「数」と「形」についての算数的考察 ②総括的評価テスト			
使用教科書 ・小学校算数「授業力をみがく」指導ガイドブック 啓林館 ・小学校学習指導要領解説「算数編」 文部科学省 東洋館出版 ・必要に応じて、プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス ・次回の授業の課題（ホームワーク）を提示するので、幅広い資料分析をして予習し、自分なりの考えを確立し、かつ、わかりやすい発表のための工夫をしてくること。 ・読み手に自分の考えがより深く伝わるような書き方やまとめ方を工夫したレポートや小テストの作成に心がけること。 ・授業計画は授業の進行状況に応じて前後することがある。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。			
授業の概要 ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。 具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。			
学生に対する評価の方法 毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（40%） 講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。（20%） 講義内容の理解度の程度を評価するテストを第8回と第14回に行う。（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 集合と数（ピアジェの実験、幼児の数の認識） 第2回 数の表し方と記数法の歴史（4大文明の記数法） 第3回 零の発見と位取り記数法 第4回 n 進数（2進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法） 第5回 数の拡張と演算 その1 第6回 数の拡張と演算 その2 第7回 数の拡張と演算 その3 第8回 四則演算の意味（加法、減法、乗法、除法）・小テスト 第9回 数と計算の意味の活用（指數計算、複利計算、対数計算、方程式解法） 第10回 数と計算の意味の活用（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数） 第11回 図形の形と大きさ 第12回 小学校における図形の指導目標と内容 第13回 中学校における図形の指導目標と内容 第14回 三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト 第15回 日常の事象の数学的な手法での観察			
使用教科書 《参考書》：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書 文部科学省			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 本日の授業範囲を教科書で復習しておく。 関連する内容を図書・インターネット等で調べる。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ			
<p>私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。</p> <p>確率と統計の初步的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>確率について身の回りの出来事を例にとって説明し、次に確率の延長としての確率分布（2項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回 授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ</p> <p>第2回 確率、2項分布</p> <p>第3回 パソコンによる計算と表示</p> <p>第4回 データ：データの収集、整理、平均値、広がり、標準偏差</p> <p>第5回 パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示</p> <p>第6回 ポアソン分布、正規分布、</p> <p>第7回 偏差値</p> <p>第8回 パソコンによるポアソン分布、正規分布に関する計算とグラフ表現</p> <p>第9回 最小2乗法：回帰直線、近似曲線</p> <p>第10回 共分散、相関、相関係数</p> <p>第11回 パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現</p> <p>第12回 推定と検定</p> <p>第13回 生活と統計 物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数</p> <p>第14回 試験と解説</p> <p>第15回 学習のまとめ</p>			
使用教科書			
<p>毎回、プリントを配布する。</p> <p>【参考図書】室 淳子・石村貞夫著 「Excelでやさしく学ぶ統計解析」 東京図書</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的な手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めたい。そのためには、自身で得たアンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。</p>			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子																																																																				
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻																																																																				
授業の到達目標及びテーマ																																																																							
<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようになる。 多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。 統計学独特的専門用語を身につける。 																																																																							
授業の概要																																																																							
<p>私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多い。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析したりグラフ表現を行う手法を体得したりする。</p>																																																																							
学生に対する評価の方法																																																																							
<p>毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。(40%)</p> <p>講義内容の理解を評価するテストを第8回と第14回に行う。(40%)</p> <p>自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。(20%)</p>																																																																							
授業計画（回数ごとの内容等）																																																																							
<table> <tr> <td>第1回</td><td>統計学の考え方の基礎・分析概念</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第2回</td><td>確率と確率分布の特徴</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第3回</td><td>母集団と標本・標本抽出</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第4回</td><td>階級分けと資料の作成</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第5回</td><td>標本分布の特性値</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td></td><td>・中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均)</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第6回</td><td>標本分布の特性値</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td></td><td>・変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数)</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第7回</td><td>確率とは・確率を表す方法と記号</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第8回</td><td>確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト</td><td>(テスト)</td><td></td></tr> <tr> <td>第9回</td><td>二項分布 (離散型確率分布)</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第10回</td><td>ポアソン分布 (離散型確率分布)</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第11回</td><td>一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布)</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第12回</td><td>正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第13回</td><td>統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>第14回</td><td>母平均μの推定平均・第3章と第4章のテスト</td><td>(テスト)</td><td></td></tr> <tr> <td>第15回</td><td>t分布</td><td></td><td></td></tr> </table>				第1回	統計学の考え方の基礎・分析概念			第2回	確率と確率分布の特徴			第3回	母集団と標本・標本抽出			第4回	階級分けと資料の作成			第5回	標本分布の特性値				・中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均)			第6回	標本分布の特性値				・変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数)			第7回	確率とは・確率を表す方法と記号			第8回	確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト	(テスト)		第9回	二項分布 (離散型確率分布)			第10回	ポアソン分布 (離散型確率分布)			第11回	一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布)			第12回	正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値			第13回	統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布			第14回	母平均 μ の推定平均・第3章と第4章のテスト	(テスト)		第15回	t分布		
第1回	統計学の考え方の基礎・分析概念																																																																						
第2回	確率と確率分布の特徴																																																																						
第3回	母集団と標本・標本抽出																																																																						
第4回	階級分けと資料の作成																																																																						
第5回	標本分布の特性値																																																																						
	・中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均)																																																																						
第6回	標本分布の特性値																																																																						
	・変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数)																																																																						
第7回	確率とは・確率を表す方法と記号																																																																						
第8回	確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト	(テスト)																																																																					
第9回	二項分布 (離散型確率分布)																																																																						
第10回	ポアソン分布 (離散型確率分布)																																																																						
第11回	一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布)																																																																						
第12回	正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値																																																																						
第13回	統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布																																																																						
第14回	母平均 μ の推定平均・第3章と第4章のテスト	(テスト)																																																																					
第15回	t分布																																																																						
使用教科書																																																																							
<p>「はじめての統計学」 日本経済新聞社 鳥居泰彦 著</p>																																																																							
自己学習の内容等アドバイス																																																																							
<p>次回の授業範囲を教科書で予習しておく。</p> <p>専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。</p>																																																																							

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさに感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 自然事象に関心をもつと共に、授業に積極的に参加し、自然のもつ偉大さ、巧みさ、しくみに共感し、自然を愛し、自然と共生できる人間を追求する。			
学生に対する評価の方法 試験 60%・小論文と発表 20%・授業態度 20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第4回：生物とその環境(2) 植物の生活 第5回：生物とその環境(3) 動物の生活 第6回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第7回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第8回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第9回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境(1) 食物 第14回：地球とその環境(2) エネルギー 第15回：筆記試験とまとめ			
使用教科書 テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説(理科編)			
自己学習の内容等アドバイス ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさに感動しながら自然は相互に関わりをもつてることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 自然事象に関心をもつと共に授業に積極的に参加し、自然のもつ偉大さ、巧みさ、しくみに共感し、自然を愛し、自然と共生できる人間を追求する。			
学生に対する評価の方法 試験60% 小論文20% 授業態度20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第4回：生物とその環境(2) 植物の生活 第5回：生物とその環境(3) 動物の生活 第6回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第7回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第8回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第9回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境(1) 食物 第14回：地球と環境(2) エネルギー 第15回：筆記試験とまとめ			
使用教科書 テキスト：プリント			
自己学習の内容等アドバイス ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマ： 生体のしくみ			
到達目標：生体のしくみを理解する			
授業の概要 細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみ（目で見ることができない現象）を考える基盤を作っていくましょう。			
学生に対する評価の方法 筆記試験・受講態度を総合的に評価する。評価は以下の配分で行う。 出席点：受講態度（10点） 試験点：中間試験（40点）・期末試験（50点）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命科学とは 第2回 細胞：細胞の構成 第3回 細胞：細胞内小器官の機能 第4回 生体の構成1 第5回 生体の構成2 第6回 生命の設計図1 第7回 生命の設計図2 第8回 中間試験とまとめ 第9回 代謝：解糖系・TCA回路・電子伝達系 第10回 エネルギー産生 第11回 食と健康：消化・吸収1 第12回 食と健康：消化・吸収2 第13回 脳の構造・神経細胞 第14回 記憶 第15回 期末試験とまとめ			
使用教科書 生命科学 羊土社 東京大学生命科学教科書編集委員会			
自己学習の内容等アドバイス 講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください			

[授業科目名] 人間と地球環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大矢 芳彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球上に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるために何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。			
授業の概要 授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。			
学生に対する評価の方法 基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業計画は、第1回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。 第1回 ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など） 第2回 宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け） 第3回 星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識） 第4回 太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴） 第5回 地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る） 第6回 生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか） 第7回 生命の誕生（地球上で生命がいかに誕生したのかを探る） 第8回 生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る） 第9回 地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る） 第10回 東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握） 第11回 地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識） 第12回 エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察） 第13回 地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測） 第14回 生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較） 第15回 まとめ			
使用教科書 「はるかなる地球」 大矢芳彦著 荘人社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 科学の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松浦 俊輔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然科学や、それと密接に関係する技術の思想がどう生まれ、現代の私たちの社会生活や精神活動にどうつながり、どんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。			
授業の概要 自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総体的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）はアイデアのイノベーションという面からの話題を取り上げます。			
学生に対する評価の方法 ①毎回提出してもらう授業の感想（平常点） ②授業時に行なう試験+提出物を総合評価します（①50%+②50%）が、平常点が6割に達せず、かつ、全体で合格点に達しない場合は、再評価なしの不合格とします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 科学って何（ガイダンス） 第2回 科学を論じるための共通の手がかりとなる素材の提示 第3回 A自然哲学 B科学の源流（ギリシア） 第4回 A中世 Bギリシアの先駆的業績 第5回 Aルネサンス B中世とイスラム 第6回 A望遠鏡と顕微鏡 Bルネサンス 第7回 A光の速さ B永久運動機関 第8回 Aりんごとは別のニュートン B鍊金術とフロギストン 第9回 A光の正体（ホイヘンス、ゲーテ） B原子論 第10回 A電磁波としての光 B進化論 第11回 A光、時間、空間 B 天動説から地動説へ（前提） 第12回 A光の二重性 B 天動説から地動説へ（コペルニクス的転回） 第13回 A科学と芸術（色彩と空間） B天動説から地動説へ（ケプラーとガリレオ） 第14回 A科学と芸術（抽象化） B天動説から地動説へ（ニュートン） 第15回 まとめ			
なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。			
使用教科書 教科書はとくに指定せず、授業時に資料を配付しますが、モーズリー+リンチ『科学は歴史をどう変えてきたか』（東京書籍）を読んでおくと、授業の話の歴史上の位置づけについて参考になると思います。			
自己学習の内容等アドバイス 科学的思考を身のまわりの素材で繰り返し、授業時の感想や提出物に反映させてください。また、上記やジョンソン『イノベーションのアイデアを生み出す七つの法則』（日経BP社）を積極的に読むことを勧めます。			

[授業科目名] 美術の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。			
授業の概要 主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介していく			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 フィクションとしての絵画 第3回 図像とは何か 第4回 絵の中の空間 第5回 絵の中の空間 第6回 絵の中の言葉 第7回 模倣と見立て 第8回 怪物の造形 第9回 変身のイメージ 第10回 腐乱死体の美術 第11回 絵画における描かないことと見えないこと 第12回 異界へのまなざし 第13回 試験・正答解説 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄木 千寿子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 西洋芸術音楽を聴くためにコンサート会場へ足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方で、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋音楽芸術はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在もある。この授業は、こうした西洋芸術音楽の流れを、歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(14%)、小テスト(26%)、最終筆記試験(60%)で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション(講義内容の概要、参考書の紹介、古代の音楽) 第2回 中世①(グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派) 第3回 中世②(アルス・ノヴァ) 第4回 ルネサンス①(15世紀) 第5回 ルネサンス②(16世紀) 第6回 バロック(マドリガーレとオペラの誕生) 第7回 バロック(協奏曲、バッハ) 第8回 前古典派(バッハの息子たち) 第9回 ウィーン古典派(ソナタ形式の成立) 第10回 ロマン派①(前期ロマン派) 第11回 ロマン派②(ロマン主義の諸相1) 第12回 ロマン派③(ロマン主義の諸相2) 第13回 20世紀①(第2次世界大戦まで) 第14回 20世紀②(第2次世界大戦以後) 第15回 まとめと試験			
使用教科書 片桐功他『はじめての音楽史』(音楽之友社)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲について、教科書で予習するとともに、その時代に関して各自の専門領域において調べてくことが望まれる。また、授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。 ・西洋音楽と邦楽の違いを理解し、日本における創作の意義を考察する。 ・教養としての「音楽」との接し方を学び、教養を深める。 			
授業の概要 <p>「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>「授業ごとの参加度」(30%) — 毎回のコメントにて確認 「期末レポート」(70%) — 講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 「音楽」とは何か？ — オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽</p> <p>第2回 日本の音楽（1） — 邦楽は西洋音楽だった（奈良時代、音楽の伝来、邦楽）</p> <p>第3回 日本の音楽（2） — 舶来品の西洋音楽（明治時代、西洋音楽と邦楽）</p> <p>第4回 テキストと音楽（1） — 歌い方には4通りもある（テキストと音楽との関係、西洋詩学）</p> <p>第5回 テキストと音楽（2） — 和風ラップに至る道（日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽、J-pop）</p> <p>第6回 宗教と音楽 — 感動『戦場のピアニスト』を正しく鑑賞するために（宗教、民族と音楽）</p> <p>第7回 ポピュラー音楽 — Mozart の時代にもポピュラー音楽はあった（大衆芸能と芸術の差異）</p> <p>第8回 日本音楽の受容 — エッフェル塔と三味線（パリ万博、異国趣味、印象派の音楽）</p> <p>第9回 音律 — ドレミは対数？（音響学基礎、音律、世界の音階）</p> <p>第10回 『第9』とは — なぜ『第9』は年末恒例？（戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退）</p> <p>第11回 著作権 — 自分の曲でも使用料払うの！？（音楽における国内、海外の著作権法の概説）</p> <p>第12回 オペラ — 愛の結末は・・・（古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇）</p> <p>第13回 電子音楽 — 電子立国ニッポンはすごい（発振の原理、電子音楽史、日本の技術とアーティスト）</p> <p>第14回 民族音楽 — 音楽は世界「非」共通言語（民族音楽とその関連、民族音楽からの享受）</p> <p>第15回 現代の音楽 — 音楽、なう！（20世紀後半からの音楽と思想、音楽と社会、音楽と量子力学？）</p>			
※内容は、同時代的な出来を取り扱うため、変更や順番の入れ替えがあります。			
使用教科書 <p>指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目について幅広く調べること。できれば、実際に演奏会、公演に行くこと。こうした小さな鑑賞体験の積み重ねで芸術やリベラルアートな教養は高まります。</p>			

[授業科目名] 文芸の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦																														
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考																														
授業の到達目標及びテーマ 短編小説の魅力 小説とは何か。短篇小説の方法とその魅力について知る。 小説の方程式を知れば誰でも1編の小説が書けることを知る。 ☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習I（短編小説を書く）」を受講してください。																																	
授業の概要 文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・隨筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いててもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられる。そこで本講義では小説の普遍的要素について学び、有史以来の作品について概観し、作者の立場から小説を読み解き、創作への道を拓く。																																	
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。																																	
授業計画（回数ごとの内容等） <table> <tr><td>第1回</td><td>講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法）</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて）</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>志賀直哉「山鳴」と大島龍彦「今朝は雨降り」に学ぶ小説の三要素について</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>小説の三要素と有史以来の作品 例、「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」・他</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>小説の構造1 例、志賀直哉「出来事」・大島龍彦「夜想曲」を参考にして</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>小説の構造2 例、芥川龍之介「蜜柑」・大島龍彦「台風の夜」を参考にして</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>小説のジャンル1 例、川端康成「合掌」・大島龍彦「妻からの電話」・他</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>小説のジャンル2 例、内田百閒「風の神」・大島龍彦「コルドバの女」・他</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>小説のジャンル3 例、ヘミング・ウェイ「老人と海」・大島龍彦「潮時」・他</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>模倣ということ 例、レイモンド・チャンドラーと村上春樹他</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>模倣からオリジナルへ1 例、芥川龍之介「今昔」から「鼻」へ・他</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>模倣からオリジナルへ2 例、芥川龍之介「今昔」から「運」へ・他</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>人称（視点）の問題について・大島龍彦「シャボン玉」他</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>展開図の作成方法とテスト</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>講義のまとめ</td></tr> </table>				第1回	講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法）	第2回	文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて）	第3回	志賀直哉「山鳴」と大島龍彦「今朝は雨降り」に学ぶ小説の三要素について	第4回	小説の三要素と有史以来の作品 例、「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」・他	第5回	小説の構造1 例、志賀直哉「出来事」・大島龍彦「夜想曲」を参考にして	第6回	小説の構造2 例、芥川龍之介「蜜柑」・大島龍彦「台風の夜」を参考にして	第7回	小説のジャンル1 例、川端康成「合掌」・大島龍彦「妻からの電話」・他	第8回	小説のジャンル2 例、内田百閒「風の神」・大島龍彦「コルドバの女」・他	第9回	小説のジャンル3 例、ヘミング・ウェイ「老人と海」・大島龍彦「潮時」・他	第10回	模倣ということ 例、レイモンド・チャンドラーと村上春樹他	第11回	模倣からオリジナルへ1 例、芥川龍之介「今昔」から「鼻」へ・他	第12回	模倣からオリジナルへ2 例、芥川龍之介「今昔」から「運」へ・他	第13回	人称（視点）の問題について・大島龍彦「シャボン玉」他	第14回	展開図の作成方法とテスト	第15回	講義のまとめ
第1回	講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法）																																
第2回	文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて）																																
第3回	志賀直哉「山鳴」と大島龍彦「今朝は雨降り」に学ぶ小説の三要素について																																
第4回	小説の三要素と有史以来の作品 例、「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」・他																																
第5回	小説の構造1 例、志賀直哉「出来事」・大島龍彦「夜想曲」を参考にして																																
第6回	小説の構造2 例、芥川龍之介「蜜柑」・大島龍彦「台風の夜」を参考にして																																
第7回	小説のジャンル1 例、川端康成「合掌」・大島龍彦「妻からの電話」・他																																
第8回	小説のジャンル2 例、内田百閒「風の神」・大島龍彦「コルドバの女」・他																																
第9回	小説のジャンル3 例、ヘミング・ウェイ「老人と海」・大島龍彦「潮時」・他																																
第10回	模倣ということ 例、レイモンド・チャンドラーと村上春樹他																																
第11回	模倣からオリジナルへ1 例、芥川龍之介「今昔」から「鼻」へ・他																																
第12回	模倣からオリジナルへ2 例、芥川龍之介「今昔」から「運」へ・他																																
第13回	人称（視点）の問題について・大島龍彦「シャボン玉」他																																
第14回	展開図の作成方法とテスト																																
第15回	講義のまとめ																																
なお、講義中で扱う作品については、列記した作品以外を扱う場合もある。 また、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかにしていく。																																	
使用教科書 大島龍彦著『丘上町二丁目のカラス』（新典社）また、必要に応じてプリントを配布する。																																	
自己学習の内容等アドバイス 予習・事前に指示するテキストの小説および配布する短編小説を分析しながら読んでくる。 復習・本時にあつかった作品の展開図を独自に作成したり鑑賞文を書くことが望ましい。																																	

[授業科目名] 演劇の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田尻 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ「浄瑠璃の成立と展開」 「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、浄瑠璃・歌舞伎の歴史を学び、代表的な作品を鑑賞できるようになるとともに、古典芸能や日本文化についての理解を深めることを目標とする。			
授業の概要 浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』(平曲)にまで遡る。本講義では、浄瑠璃成立までの歴史的展開をたどった後、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。			
学生に対する評価の方法 学期末試験の成績(約80%)や作品鑑賞時等のレポート(約20%)によって総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・芸能の起源 第2回 時代の特色——中世—— 第3回 『平家物語』と「語り」の成立 第4回 平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行 第5回 浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立 第6回 歌舞伎と浄瑠璃 第7回 時代の特色——近世①—— 第8回 時代の特色——近世②—— 第9回 古浄瑠璃と新浄瑠璃 第10回 近松門左衛門と世話物 第11回 ——『曾根崎心中』と『冥途の飛脚』—— 第12回 作品鑑賞① 第13回 時代物三大名作 第14回 作品鑑賞② 第15回 試験・まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 作品鑑賞に際しては、事前に鑑賞のための資料を配付するので、事前に目を通したうえで、あらすじや特色など、作品に対する理解を深めておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ			
I. 自然に興味を持たせ、自然に上達させること。 II. 各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく。 III. バトミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること。			
授業の概要			
スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要不可欠なものである。本授業では、バトミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。			
学生に対する評価の方法			
課題に対する取り組みと成果（60%）、受講態度（40%）など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
1回 実習 初歩的技能の習得 1. バトミントンの歴史 2. シャトルあそび 3. グリップ			
2回 実習 初歩的技能の習得 ○運動特性、技術、用具などに関する知識の習得 1. ハイサービス 2. ストローク 3. 簡易ゲーム			
3回 実習 初歩的技能の習得 ○各種グリップの理解 1. ショット ・ドライブ ・スマッシュ ・ヘヤピン ・ドロップ ・クリヤー ・ロブ 2. 簡易ゲーム（ハーフコートダブルスゲーム）の実践			
4回 実習 初歩的技能の習得 ○ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得 1. いろいろなサービス ・ショートサービス ・ドライブサービス ・クリックサービス 2. 簡易ゲーム（オールコート3対3のゲーム）の実践			
5回 実習 基本的技能の習得 1. 高度なストローク 2. フットワーク 3. 基本フライトの組み合わせ練習			
6回 実習 基本的技能の習得 ○ダブルスゲームの進め方の理解 1. ダブルスゲーム ・ダブルスのルール ・フォーメーション ・審判法 ・ゲームの実践			
7回 講義 VTR（全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部）を見る 1. トップアンドバック、サイドバイサイド 2. 入れ替わり（攻守）のタイミング 3. VTRを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する			
8回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○サービス中のフォルトの理解			
9回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○ラリー中のフォルトの理解			
10回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○セッティングの理解			
11回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦 I			
12回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦 II			
13回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦 III			
14回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦 IV			
15回 個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する ☆課題とは毎時間実施する20分間の有酸素運動（ウォーキング、ジョギング、ランニング）のこと			
使用教科書			
(参考図書) 大体連研修部作成教材 バドミントン（平成20年度作成DVD教材シリーズ）			
自己学習の内容等アドバイス			
バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康 I (実習 I)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1 ~ 4 年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ			
I. テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。 II. 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。 III. テニスを通してスポーツmanshipを涵養する。			
授業の概要			
最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段についてテニスを実践的に学習するなかで獲得する。 テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるでの生涯スポーツに適している。			
学生に対する評価の方法			
課題に対する取り組みと成果 (60%)、受講態度 (40%) など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回 講義 1. ガイダンス 大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。 2. スポーツのスキル			
第2回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ラケットワーク 2. グランドストローク			
第3回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ボレー 2. サービス			
第4回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. スマッシュ			
第5回 講義 テニスの技術論 1. 技術構造及び基本技術について解説する。 2. 一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。 3. 打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。			
第6回 実習 テニスの基礎 II 総合練習			
第7回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの基本戦術 1. フォーメーション 2. 連続プレイの組み立て 3. コンビネーションの理解と実践			
第8回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの応用戦術 1. フォーメーション 2. コンビネーション 3. コンビネーションの実践			
第9回 実習 ルールとマナー 1. 試合の進行 2. 審判法 3. ルール 4. マナー			
第10回 実習 テニスの基礎 II 基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用			
第11回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦1			
第12回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦2			
第13回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦3			
第14回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦1			
第15回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦2			
◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたは、サブアリーナで実施する。			
使用教科書			
(参考図書) VTR 神和住 純 監修 「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」 ポニーキャニオン VTR BBC 制作 「テニス教室決定版」 ポニーキャニオン			
自己学習の内容等アドバイス			
テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 笛川 慶
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ フライングディスク（アルティメット）			
アルティメットはフライングディスク(フリスビー)を用いた競技のひとつで、性別・年齢に問わず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しむことのできるチームスポーツである。誰もが初心者であるディスク競技を用いることで、その競技特性を理解するとともに、身体を動かす喜びやゲームの楽しさを再認識する。また、チーム競技を通して、異なる個性と関わる機会を数多く体験することで、互いに学び合い、助け合い、チームにおける強調性やコミュニケーション能力などの社会人として必要不可欠な教養を習得することを目的とする。			
授業の概要 フライングディスク(フリスビー)を用いたチーム競技であるアルティメットを実践するために、基礎的なスローイング技術、キャッチング技術から応用的な技術、戦術および練習方法を習得する。その後、チーム編成を行いアルティメットのリーグ戦を開催する。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> 授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する 出席が3分の2に満たないものは単位習得なしとする。 			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション</p> <p>第2回 基本的技能Ⅰ（グリップ、キャッチング、バックハンドスロー）</p> <p>第3回 基本的技能Ⅱ（サイドアームスロー、ハンマー、など）</p> <p>第4回 他競技スポーツ</p> <p>第5回 アルティメットのルールと班編制</p> <p>第6回 基礎練習とミニゲームⅠ</p> <p>第7回 基礎練習とミニゲームⅡ</p> <p>第8回 他競技スポーツ</p> <p>第9回 アルティメットの基本戦術について</p> <p>第10回 ポートアルティメットⅠ</p> <p>第11回 ポートアルティメットⅡ</p> <p>第12回 他競技スポーツ</p> <p>第13回 アルティメット リーグ戦Ⅰ</p> <p>第14回 アルティメット リーグ戦Ⅱ</p> <p>第15回 アルティメット リーグ戦Ⅲ</p>			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 反復練習あるのみ。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 森 奈緒美
[単位数] 1	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻子ども心理コース
授業の到達目標及びテーマ			
1) 卓球、バレーボール、バドミントン及び健康的・表現的な身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要			
本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受することによって生涯スポーツへつなげる。			
学生に対する評価の方法			
課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（35%）、レポート（15%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明			
第2回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。)			
第3回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践			
第4回 卓球③ ゲーム内容の発展			
第5回 スポーツの理論と実践法 バレーボール① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。)			
第6回 バレーボール② 応用技能の習得とゲームの実践			
第7回 バレーボール③ ゲーム内容の発展			
第8回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバドミントンの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。)			
第9回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践			
第10回 バドミントン③ ゲーム内容の発展			
第11回 健康的な身体育成法の実践			
第12回 表現的な身体育成法の実践			
第13回 リズミカルな身体育成法の実践			
第14回 歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。			
第15回 総括			
<注意事項> 第1回の授業は、NUASホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第2回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ（室内用）を着用すること。			
使用教科書			
授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス			
卓球、バレーボール、バドミントンの技術、戦術、ルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 森 奈緒美
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] 子どもケア専攻養護教諭コース
授業の到達目標及びテーマ 2) 卓球、バレー、バドミントン、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深めて効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要 本科目では、健康維持のための運動実践法について実習することを目的とする。 また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受することによって生涯スポーツへつなげる。			
学生に対する評価の方法 課題への取り組みの成果及び提出物、授業態度、レポート等を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明 第2回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 第3回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践 第4回 卓球③ ゲーム内容の発展 第5回 卓球④ ゲーム戦術の工夫 第6回 スポーツの理論と実践法 バレー① 基礎技能の習得とゲームの実践 第7回 バレー② 応用技能の習得とゲームの実践 第8回 バレー③ ゲーム内容の発展 第9回 バレー④ ゲーム戦術の工夫 第10回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 第11回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践 第12回 バドミントン③ ゲーム内容の発展 第13回 バドミントン④ ゲーム戦術の工夫 第14回 ストレッチ運動及び各種トレーニング 第15回 総括			
<注意事項> 第1回の授業は、運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第2回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ（室内用）を着用すること。			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 卓球、バレー、バドミントンの技術、戦術、ルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康II（実習II）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 高橋 篤史
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	[備考] 口論義運動公園のプールを利用
授業の到達目標及びテーマ			
<ul style="list-style-type: none"> クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。 水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。 自分の体の現状を把握し、生涯にわたって健康な体を維持するきっかけ作りにする。 			
授業の概要			
<p>生命の源“水”。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといつても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。</p> <p>授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>授業への参加態度（60%）、受講態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。</p> <p>実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。</p> <p>本授業では再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回（8/25午前）オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義</p> <p>第2回（9/2午前・午後）軽運動（柔軟性向上トレーニング）、水中ウォーキングとストリームラインの習得</p> <p>第3回（9/5午前・午後）水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック）</p> <p>第4回（9/8午前・午後）軽運動（バランス向上トレーニング）、クロール、背泳の習得</p> <p>第5回（9/16午前・午後）軽運動（筋力向上トレーニング）、クロール、平泳ぎ（姿勢・キック）</p> <p>第6回（9/18午前・午後）クロール、バタフライ（姿勢・キック）、バタフライの習得</p>			
<p>※ 第1回は教室での講義とする。その際、日程の詳細説明を行う。</p> <p>※ 第2回以降は口論義運動公園までバスで移動を行う。</p> <p>※ 3回の軽運動については大学内で行うこととする。</p>			
使用教科書			
特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス			
<p>日頃から体調管理を行い、欠席をせずに実技に取り組むことを心がけてほしい。</p> <p>実技の回数は限られていることから、授業以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。</p>			

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考えてみる。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることのメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。			
授業の概要 本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。			
学生に対する評価の方法 期末試験 (50%)、課題の提出 (10%)、受講態度 (40%) を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
1回 I-1. 身体は細胞のすみか、そして主は私 1) 自分を見る目をつくる			
2回 2) 身体運動の意味			
3回 3) 地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる			
4回 2. 宇宙空間における生体変化			
5回 3. 運動しているとき、身体の中で何がおこっているのか ー ヒトは動くようにできているー			
6回 II-1. 生涯発達と健康 1) 発達と健康科学			
7回 2) 身体能力の年齢的变化(ライフステージ)に応じた健康スポーツ			
8回 III-歩行の生涯健康 1. DNAの持つはるかな記憶 2. ヒトがサルと別れた日			
9回 3. 歩行の定義			
10回 4. 歩行の運動学的意義 1) 歩く(ウォーキング)速さと歩幅 2) 歩く速さとエネルギー消費量			
11回 3) 歩行 ー健康に良い有酸素性運動ー			
12回 4) 歩行と健康 5) 歩行と脳			
13回 IV-運動とからだの健康 1. 運動不足と健康障害 2. 肥満の予防・解消 ー基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング			
14回 3. 健康的に痩せるとはどういうことか			
V-運動の功罪			
15回 期末試験とまとめ			
使用教科書 生涯発達の健康科学 藤井勝紀共著 (杏林書院)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 奈緒美
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ			
1) 健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。 2) 生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。			
授業の概要			
本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。			
学生に対する評価の方法			
課題への取り組みの成果及び提出物 (50%)、授業態度 (30%)、レポート (20%) を総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第1回 授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、授業日程の説明			
第2回 スポーツ・運動の意義と健康との関わり			
第3回 生活習慣病予防のための運動の理論と実践法			
第4回 定期的な運動実践の効果及び運動例 体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性			
第5回 歩数による日常生活の運動量の把握 生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検			
第6回 健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した運動プログラムについて 生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。			
第7回 運動施設の整備・拡充について			
第8回 運動クラブの育成・援助について			
第9回 運動プログラム・行事の設定・提供について			
第10回 運動生活の類型、構造及び運動者行動			
第11回 運動と体力及びトレーニングの原則について			
第12回 運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法			
第13回 健康のための生涯スポーツの理論と実践法			
第14回 課題のまとめ			
第15回 総括			
使用教科書			
授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス			
専門用語について復習しておくこと。			

[授業科目名] 食と健康		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 五十里 明・日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業の到達目標：体の構造を知り、食べ物が健康に与える影響を理解する。			
授業のテーマ：食べ物と健康			
授業の概要 現在、生活習慣の乱れによる糖尿病・脂質異常症・高血圧など生活習慣病が増加してきている。本講義では、身体のしくみを理解し、なぜ食べることが大切なのか？健康でいるためにはどのような食生活が求められるのか？食べ物と生活習慣病の間にどんな関係があるか？について考え、理解する。			
学生に対する評価の方法 レポート課題（80%）、受講態度（20%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：養生訓とは・長寿者の食生活 第2回：生体の構造について 第3回：生体の構成成分 第4回：エネルギー産生（消化・吸収・代謝） 第5回：栄養素の働き（ビタミン・ミネラル等） 第6回：食事摂取基準 第7回：食習慣について 第8回：食べ物と歯 第9回：食べ物と糖尿病 第10回：食べ物と脂質異常症・メタボリックシンドローム 第11回：食べ物と高尿酸血症 第12回：食べ物と骨粗鬆症 第13回：食べ物と高血圧 第14回：食べ物とがん 第15回：まとめ			
使用教科書 参考図書：イラスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち 東京教学社			
自己学習の内容等アドバイス 講義内容を振り返り、資料やノートを見直すこと。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションA		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・モローネ・スコット・シキ クラップ・ポージン・マクドナルド ポッティンジャー・ロビソン ドーソン・ポーター
[単位数] 1	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択必修 (一部必修)	[備考] ※ヒューマンケア学部は必修 ※他学部は選択必修
授業の到達目標及びテーマ 英語ネイティヴスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。基本的な日常英会話ができるレベル到達を目指す。			
授業の概要 自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。			
尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 授業受講態度30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introducing Self and Others. (自己や周りの人の紹介) 第02回 Talking about Daily Routine. (日常生活について語る) 第03回 Asking to do Something. (してもらいたいことをお願いする) 第04回 Talking about Likes / Dislikes. (好き・嫌いについて語る) 第05回 Talking about Experiences. (自分の経験談を語る) 第06回 Exchanging Personal Information. (個人のアピールをしてみる) 第07回 Talking about Frequency of Activities. (クラブやサークルについて語る) 第08回 Talking about Past Schedule. (今までのスケジュールを紹介する) 第09回 Describing Locations of Places. (場所の具体的な位置を述べる) 第10回 Talking numbers: Time, schedule, and prices. (数表現についての練習: 時間、計画、値段など) 第11回 Checking / Confirming Information. (情報の精査と確認) 第12回 Positive / Negative Tag Questions. (肯定形・否定形の付加疑問文の練習) 第13回 Talking about Future Plans. (先々の計画について語る) 第14回 Review Activities / Prep for final oral Test. (総復習・最終オーラルテストの準備) 第15回 Final oral Test in small groups. (小グループごとの最終オーラルテストを実施)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本や雑誌またはネット上よりコピーしたもののがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聞くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。常日頃から英語音声に触れる努力をすること。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションB		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・モローネ・スコット・シキ ポージン・ポーター・モヤ・クラップ ドーソン・マクドナルド・ロビソン ポッティンジャー
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択必修 (一部必修)	[備考] ※ヒューマンケア学部は必修 ※他学部は選択必修
授業の到達目標及びテーマ 英語コミュニケーションIに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるよう訓練する。様々な状況での基本英会話ができるレベルを目指す。			
授業の概要 徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションIと同様、小人数クラスで行う。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 授業受講態度30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation. (質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。) 第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions. (意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。) 第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation. (意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。) 第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting. (指示を与える。助けを求める。感想を述べる。) 第05回 Inquiring and giving information about times and prices. (時間と値段について尋ねたり情報を与える。) 第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment. (注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。) 第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends. (助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。) 第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation. (休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。) 第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities. (新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。) 第10回 Responding to happy/unhappy news. (幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。) 第11回 Asking people to do things formally and informally. (人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。) 第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement. (薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。) 第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad. (海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語) 第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks. (感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。) 第15回 Final Oral test in small groups. (小グループでの最終会話テスト)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本や雑誌またはネット上よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聞くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。常日頃から英語音声に触れる努力をすること。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションIII		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. フアルク
[単位数] 1	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
<p>The course focus is solely on developing students SPEAKING skills with absolutely NO grammar, reading or writing skills. The course requires students to learn and demonstrate in particular, as how to initiate, hold / carry and end a basic (i) casual and (ii) formal conversation. 受講生は実生活でのコミュニケーションの自信を高めるために、iPod や iPad の電話機能を使って、名古屋外大の外国人留学生や帰国子女などの英語ネイティブスピーカーと国際電話を想定した会話を経験する。学生たちは英語を上手になることを求められるのではなく、英会話力を上達することに興味がある誰もが履修できる。</p>			
授業の概要			
<p>ほとんどの授業は、担当教員とクラス全体の学生との間で、短い形式的または格式ばらない会話、クイズ、異文化情報提供により成り立つ。下記は、英語コミュニケーション能力やその関連領域含む15回の授業の当面の計画であるが、学生の興味や学習に必要な内容、また熟達度に応じて変更されることもある。実生活における英語でのコミュニケーションを実践するために、学生たちは時々名古屋外大の外国人留学生と会合することになっている。</p>			
学生に対する評価の方法			
<p>授業参加度（50%）、最終ペーパーテスト/オーラルテスト（50%）。再評価は行うが、全授業回数の3分の1以上の欠席数がある学生単位不認定となる。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第01回 Introducing briefly the course objectives, materials, and classroom activities (授業の目標、教材、学習活動などを簡単に紹介する。)</p>			
<p>第02回 Getting to know about participants English learning experiences, interests, and aptitudes. (授業参加者の英語学習経験、興味、素質などについて知る。)</p>			
<p>第03回 Developing Informal Yes-No Questioning Speaking Skill in free communication (自由な英会話の中でのカジュアルにイエスやノーで答える質問作成スキルの上達法)</p>			
<p>第04回 Developing Informal WH Questioning Speaking Skill in free communication (自由な英会話の中でのどこでどのようにという簡単な質問文作成スキルの上達法)</p>			
<p>第05回 Developing Polite Yes-No Questioning Speaking Skill in free communication (自由な英会話の中での丁寧なイエスやノーで答える質問作成スキルの上達法)</p>			
<p>第06回 Developing Polite WH Questioning Speaking Skill in free communication (自由な英会話の中でのどこでどのようにという丁寧な質問文作成スキルの上達法)</p>			
<p>第07回 Traveling English and Home stay Communication (Learning Useful Expressions) (旅行英語やホームステイでの英会話一役に立つ表現法を学ぶ)</p>			
<p>第08回 Traveling English and Home stay Communication (Using Useful Expressions) (旅行英語やホームステイでの英会話一役に立つ表現法を学ぶ)</p>			
<p>第09回 Traveling English and Home stay Communication (Classroom Drama) (旅行英語やホームステイでの英会話-教室でのドラマ演出)</p>			
<p>第10回 Giving Personal Information (e.g. Airport, Hotel, Duty Free Shops) (個人的な情報を提供する一例: 空港で、ホテルで、免税店で)</p>			
<p>第11回 Making an informal Mini Presentation (形式ばらないミニプレゼンを行う)</p>			
<p>第12回 Practicing numbers including price and time (値段や時間などの数の表現練習)</p>			
<p>第13回 Communication with foreign students about home countries. (名外大の外国人留学生と彼らの祖国の実生活について語る)</p>			
<p>第14回 Communication with foreign students about Japan. (名外大の外国人留学生と日本の実生活について語る)</p>			
<p>第15回 Speaking test in small groups (小グループでの会話テスト)</p>			
使用教科書			
<p>原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。</p>			
自己学習の内容等アドバイス			
<ul style="list-style-type: none"> 学生は英日・日英の電子辞書、もしくは携帯電話辞書アプリを持参する。 パソコンや携帯電話を利用して、ネットで情報検索する。 			

[授業科目名] 総合英語A／I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 直良・鈴木 薫 安藤 直・増田 喜治
[単位数] 2	[開講期] 1・2年次前期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。英字新聞や雑誌を速読で大まかに理解できるレベルを目指す。			
授業の概要 語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、授業受講態度20%、授業参加貢献度20%で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 授業計画・試験方法（評価方法）についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。 第2回 演習 英文和訳① 英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 英文和訳② 第2回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 英文和訳③ 第3回で行った和訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 英文和訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 英文和訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。 第8回 演習 英文和訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第9回 演習 英文和訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第10回 演習 英文和訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第11回 演習 英文和訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第12回 演習 英文和訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 今までの英文和訳の中でもよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題訳提出 担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 各授業担当者が教科書を選定する。初回授業時に詳しく説明する。他にプリント等を配布する場合もある。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語 I（前期）では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。毎週英語の記事を最低1つは読み、理解すること。			

[授業科目名] 総合英語B／II		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 直良・鈴木 薫・安藤 直
[単位数] 2	[開講期] 1・2年次後期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 総合英語 I で習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。英字新聞や雑誌を速読で大まかに理解できるレベルを目指す。			
授業の概要 本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身辺の話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、授業受講態度20%、授業参加貢献度20%で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 授業計画・試験方法（評価方法）についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する 第2回 演習 和文英訳① 和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 和文英訳② 第2回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 和文英訳③ 第3回で行った英訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 和文英訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 和文英訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。 第8回 演習 和文英訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第9回 演習 和文英訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第10回 演習 和文英訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第11回 演習 和文英訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第12回 演習 和文英訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの和訳英訳の中でもよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題形式英作文提出 担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 各授業担当者が教科書を選定する。初回授業時に詳しく説明する。他にプリント等を配布する場合もある。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語II（後期）では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現する。毎週英語の記事を最低1つは読み、理解すること。			

[授業科目名] 総合英語III		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 水岡 久
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 総合英語IIで習得した英語読解力と英語表現力に基づいて、更に英語の総合的運用力を深めることを目標とする。			
授業の概要 本講では、A（新聞や雑誌などの出ている程度の英語を観察して、必要な表現や文の構造などについて知識を深める部門）B（日本語と英語を比較したり検討しながら、表現や語法などの要点を確認して、発表能力の基礎を作る部門）C（日常的な会話表現から、やや複雑な内容をもつ和文英訳の形式で演習する部門）の3段階で構成された英語表現の授業を行う。AとBに関しては、付属のオーディオ機器を使用する。			
学生に対する評価の方法 試験（70%）、受講態度（20%）、予習状況（10%）の総合評価をする。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 授業計画・試験方法（評価方法） 受講上の注意・勉強方法・授業の進め方の説明 Lesson1～Lesson5（総合英語IIで実施）</p> <p>第2回 Lesson 6 PREPOSITION AND PHRASES (II) A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第3回 Lesson 6 PREPOSITION AND PHRASES (II) C(和文英訳)</p> <p>第4回 Lesson 7 PAST PARTICIPLES A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第5回 Lesson 7 PAST PARTICIPLES C(和文英訳)</p> <p>第6回 Lesson 8 ING-FORMS A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第7回 Lesson 8 ING-FORMS C(和文英訳)</p> <p>第8回 Lesson 9 AUXILIARY VERBS A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第9回 Lesson 9 AUXILIARY VERBS C(和文英訳)</p> <p>第10回 Lesson 10 INFINITIVES A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第11回 Lesson 10 INFINITIVES C(和文英訳)</p> <p>第12回 Lesson 11 CONJUNCTIONS AND CORRELATIVES A(英文構造) B(空所補充)</p> <p>第13回 Lesson 11 CONJUNCTIONS AND CORRELATIVES C(和文英訳)</p> <p>第14回 総括</p> <p>第15回 解説と試験</p>			
使用教科書 プリント教材使用 辞書必携			
自己学習の内容等アドバイス 授業では、主として英文読解と和文英訳を行うが、英語ニュース・洋画・洋楽・インターネットなどで常に英語に接することが大切である。「継続は力なり」			

[授業科目名] 実践英語A／I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 増田 喜治
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部、ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目標としている。その為、テキストを通して4技能の基本を復習しながら <u>自分の弱点を発見することが重要である。</u>			
授業の概要 長文・短文の問題を解読しながら、言葉の表層的意味だけではなく、その言葉が持つ文化的、歴史的意味を語源分析により学び、語彙力を養う。音読による英語的なリズム・イントネーションを身につけることにより、速読の訓練も行う。			
学生に対する評価の方法 授業における発表と貢献度（40%）と三回行われる確認テストの点（60%）を総合的に判断して評価される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業および英検2級についての説明。基礎力判定のためのテスト実施。 第2回 語彙問題（part1） 第3回 語彙問題（part2） 第4回 語法問題（part1） 第5回 語法問題（part2） 第6回 第一回確認テストとまとめ 第7回 リスニング演習（part1） 第8回 リスニング演習（part2） 第9回 リスニング演習（part3） 第10回 第二回確認テストとまとめ 第11回 読解問題（part 1） 第12回 読解問題（part 2） 第13回 読解問題（part 3） 第14回 2次試験対策（英語面接） 第15回 総括と第三回確認テスト			
使用教科書 英検 2 級 頻出度別問題集 (CD 付き) (高橋書店)			
自己学習の内容等アドバイス 英語学習の基本は一に音読、二にも音読です。特に新出単語や熟語、長文読解文を読みこなして、身体に英語を染み込ませて下さい。			

[授業科目名] 実践英語A／I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検2級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要ではなく6割の正解で合格となる。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という攻略方法を知る事と準備の有無が合格への決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、「合格のための自分の指針を知る事」が授業のテーマになる。			
授業の概要 15回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検2級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験（英語面接）の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間があり、先回の内容を振り返りつつ授業が進む。時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料（映画、TVドラマ、インターネット）の提供を予定している。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業はComputer LABにて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会になる。授業への要望などは、受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検2級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 授業に対する取り組み（20%）、課題提出（20%）、確認テストでの得点（60%）を考慮して評価する。試験については事前に必ず告知するので、試験の実施の日は特に出席を厳守する事。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回目は、授業内容の説明および英検2級という試験を知るための模擬試験の場である。 第2回～第6回までは、英検2級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・（読解練習）」の問題演習と攻略を行う。第7回～第11回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第13回と第14回では、2次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。 第1回 授業および英検2級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。 第2回 語い問題 (part1) 第3回 語い問題 (part2) 第4回 語法問題 (part1) 第5回 語法問題 (part2) 第6回 語順整序 (part1) + 復習 第7回 第1回確認テストとまとめ 第8回 リスニング演習 (part1) 第9回 リスニング演習 (part2) 第10回 リスニング演習 (part3) 第11回 リスニング演習 (復習) 第12回 第2回確認テストとまとめ 第13回 2次試験対策（英語面接）(part1) 第14回 2次試験対策（英語面接）(part2) 第15回 第3回確認テストおよび総括			
使用教科書 英検2級 頻出度別問題集（CD付き）（高橋書店）			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語B／II		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 増田 喜治
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部、ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は TOEIC 対策を目指し、500 点を目標とする。英語圏の人々の文化や思考パターンなどを学びつつ、語彙力と文法力を強化することがテーマである。			
授業の概要 TOEIC テストの練習のみだけでなく、テキストのテーマに従ってグローバルな視点から英語学習を行う。			
学生に対する評価の方法 授業における発表と貢献度 (40%) と三回行われる確認テストの点 (60%) を総合的に判断して評価される。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業およびTOEIC に関する説明と基礎英語力調査 第2回 テキスト Lesson 1 (Traveling Abroad) 語源で語彙力を養う 1 第3回 テキスト Lesson 2 (Food and Cooking) 語源で語彙力を養う 2 第4回 テキスト Lesson 3 (Literature and Writing) 語源で語彙力を養う 3 第5回 テキスト Lesson 4 (Science) 語源で語彙力を養う 4 第6回 第一回確認テストとまとめ 第7回 テキスト Lesson 5 (International Economics) 関係代名詞で読解力を養う 1 第8回 テキスト Lesson 6 (Global Issues) 関係代名詞から読解力で養う 2 第9回 テキスト Lesson 7 (Shopping and Retail) 関係代名詞で読解力を養う 3 第10回 テキスト Lesson 8 (The World of Work) 関係代名詞で読解力を養う 4 第11回 第二回確認テストとまとめ 第12回 テキスト Lesson 9 (Learning Languages) 分詞構文で読解力を養う 1 第13回 テキスト Lesson 10 (Globalization of Japanese Universities) 分詞構文で読解力を養う 2 第14回 テキスト Lesson 11 (A Sense of History) 分詞構文で読解力を養う 3 第15回 第三回確認テストとまとめ			
使用教科書 TOEIC Test: Advantage, TOEIC 形式で学ぶ国際社会と教養 南雲堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語学習の基本は一に音読、二にも音読です。特に新出単語や熟語、長文読解文を読みこなして、身体に英語を染み込ませて下さい。			

[授業科目名] 実践英語B／II		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC の対策を目的とし、履歴書に記載可能な点数である “500 点” を目標としている。内容は決して容易な問題ばかりではない。よって、教員は授業に投入するが、履修生の努力をも必要不可欠となる。TOEIC は「Listening」、および「Reading」の 2 セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。			
授業の概要 TOEIC の問題形式はかなり固定されており、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。ただ、そのためには、普段の取り組みの中で設問のポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく含めて、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。授業の開始時には簡単な復習の時間があり、先回の内容を振り返りつつ授業が進む。また、授業への受講生からの質問などを順次答えていく予定である。積極的に質問や要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを個々人に備えた教室での授業となる。			
学生に対する評価の方法 授業態度 (20%)、課題 (20%) に加え、2 回の確認テストでの得点(60%)。試験については事前に必ず告知するので、その試験実施の日には特に出席を厳守する事。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。 ①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類) (1) 写真問題(10 問) (2)質問と返答の問題(30 問) (3)会話文問題(30 問) (4)モノローグ(一人語り)の問題(30 問) ②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類) (1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3)短文読解問題(48 問) 使用するテキストは上記の 7 つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。 (〔 〕の中は発音と構文のテーマ)			
第1回 授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。 第2回 テキスト Lesson1 (旅行) [接尾辞による品詞の見極め] 第3回 テキスト Lesson2 (日常生活) [注意すべき主語と動詞の一致] 第4回 テキスト Lesson3 (健康) [動詞の後の動名詞・不定詞の選択] 第5回 テキスト Lesson4 (外食) [分詞の叙述用法と限定用法] 第6回 テキスト Lesson5 (出来事) [関係詞の制限用法と非制限用法] 第7回 第1回確認テストとまとめ 第8回 テキスト Lesson6 (遊び) [注意すべき受動態] 第9回 テキスト Lesson7 (メディア) [同形の単語の品詞の見極め] 第10回 テキスト Lesson8 (オフィス) [3 つの完了形の違い] 第11回 テキスト Lesson9 (人材) [比較を使った慣用表現] 第12回 テキスト Lesson10 (金融) [置詞・接続詞いすれにも使える語] 第13回 テキスト Lesson11 (昇進) [従属節における主語の省略] 第14回 テキスト Lesson12 (購買) [代名詞の特殊な用法] 第15回 第2回確認テストと全体総括・今後の指針の指示。 ※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。			
使用教科書 THE NEXT STAGE TO THE TOEIC TEST Pre-intermediate 金星堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語II		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 直良
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] ファッション造形学科
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマは「TOEIC テストのスコアアップ」である。 各セクションの攻略法を説明しつつ、TOEIC テストに慣れ、最終到達目標を 500 点とする。			
授業の概要 TOEIC テストの問題構成は次の通りである。 Part 1 (写真描写問題) → Part 2 (応答問題) → Part 3 (会話問題) → Part 4 (説明文問題) → Part 5 (短文穴埋め問題) → Part 6 (長文穴埋め問題) → Part 7 (読解問題) 以上の順番により各セクションの攻略法と解説を加え授業を展開する。			
学生に対する評価の方法 ① 授業への参画態度 (評価ウエート 40%) ② 最終試験 (評価ウエート 60%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 Unit 1 リスニング Part 1 (写真描写問題) Part 2 (応答問題) 第 2 回 Unit 2 リスニング Part 3 (会話問題) Part 4 (説明文問題) 第 3 回 Unit 7 リーディング Part 5 (短文穴埋め問題) Part 6 (長文穴埋め問題) 第 4 回 Unit 8 リーディング Part 7 (読解問題) 第 5 回 Unit 8 リーディング Part 7 (読解問題) 第 6 回 Unit 3 リスニング Part 1 (写真描写問題) Part 2 (応答問題) 第 7 回 Unit 4 リスニング Part 3 (会話問題) Part 4 (説明文問題) 第 8 回 Unit 9 リーディング Part 5 (短文穴埋め問題) Part 6 (長文穴埋め問題) 第 9 回 Unit 10 リーディング Part 7 (読解問題) 第 10 回 Unit 11 リーディング Part 7 (読解問題) 第 11 回 Unit 5 リスニング Part 1 (写真描写問題) Part 2 (応答問題) 第 12 回 Unit 6 リスニング Part 3 (会話問題) Part 4 (説明文問題) 第 13 回 Unit 11 リーディング Part 5 (短文穴埋め問題) Part 6 (長文穴埋め問題) 第 14 回 Unit 12 リーディング Part 7 (読解問題) 第 15 回 まとめと試験			
TOEIC テストの問題構成: Part 1 (写真描写問題) → Part 2 (応答問題) → Part 3 (会話問題) → Part 4 (説明文問題) → Part 5 (短文穴埋め問題) → Part 6 (長文穴埋め問題) → Part 7 (読解問題)			
使用教科書 Kazushige Cho, Masanori Nakamura, and Yukari Nakamura: <i>Quick Start For The TOEIC® TEST</i> Level 2, MACMILLAN LANGUAGEHOUSE			
自己学習の内容等アドバイス 予習復習を実行し、不明な語句・単語は確実に記憶すること。 テキストに用意されている練習問題のみでは、当然のことながら量的に不足するため、自己学習を必要とする。			

[授業科目名] 実践英語C／III		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目的とし、TOEFL-ITP 試験における 450 点の取得を目標としている。 <u>英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生</u> に向けて、 <u>学術的な、アカデミックな英語力</u> をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)			
授業の概要 現在のTOEFLは、Listening、Reading、Writing、Speaking の4セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内のTOEFLでは、Listening, Grammar, Reading の3セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短期間で結果が出やすいListening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料(映画、音楽、インターネットなど)を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。海外での本格的な大学(大学院)留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 授業に対する取り組み (20%)、課題提出 (20%)、およびテスト (60%) での得点を考慮して評価する。試験については事前に必ず告知するので、実施の日には出席を特に厳守する事。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) ・TOEFLへの準備段階として、第2回～第7回までは一文ずつに区切った形でTOEFLの英文に取り組み、さらに学術的な語りに触れていくための内容を行う。スコアアップへの実践力を高めるため、第9回からはTOEFLの実際の問題に似た形の英文を対象にして授業を進めていく。(受講生の実力により変更はある) ・時間が許す限り、毎回の授業でGrammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。 第1回 講義に関する Introduction 、およびTOEFLについての説明。受講生のTOEFLへのニーズ調査。 受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない) 第2回 問題演習 : Listening (4～5語のディクテーション / 5～6語のディクテーション) + α ① 第3回 問題演習 : Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(notの短縮形)) + α ② 第4回 問題演習 : Listening (ディクテーション 1とr / 発音とスペル) + α ③ 第5回 問題演習 : Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④ 第6回 問題演習 : Listening (慣用表現 / 7～8語のディクテーション) + α ⑤ 第7回 問題演習 : Listening (第2回から第7回までの復習) + α ⑥ 第8回 第1回模擬試験実施 (授業内) および既習事項確認 第9回 問題演習 : Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar or Speaking 第10回 問題演習 : Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar or Speaking 第11回 問題演習 : Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar or Speaking 第12回 問題演習 : Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar or Writing 第13回 問題演習 : Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar or Writing 第14回 問題演習 : Listening (第9回から第13回までの復習) + Grammar or Writing 第15回 第2回模擬試験実施 (授業内) および総括			
使用教科書 TOEFL テストリスニング問題 350 喜田慶文 著 (旺文社)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「英単語・英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた表現や英文はできるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので活用して欲しい。			

[授業科目名] フランス語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）の習熟を目指す。また、フランスの文化についての理解も深める。 フランス語検定試験の5級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課ごとに小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課ごとに行う小テストを70パーセント、授業中の会話や聞き取りへの参加を30パーセントとして評価する。小テストの追試は特別な場合以外行わない。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。 再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 授業について説明、第0課（アルファベ、あいさつ）</p> <p>第2回 第0課の復習</p> <p>第3回 第0課のテスト、第1課（国籍を言う）</p> <p>第4回 第1課復習</p> <p>第5回 第1課のテスト、第2課（自己紹介する）</p> <p>第6回 第2課復習</p> <p>第7回 第2課のテスト、第3課（好きなものを言う）</p> <p>第8回 第3課復習</p> <p>第9回 第3課のテスト、第4課（これは何ですか？）ものについて尋ねる</p> <p>第10回 第4課復習</p> <p>第11回 第4課のテスト、第5課（ここはどこ？）場所を尋ねる</p> <p>第12回 第5課復習</p> <p>第13回 第5課テスト、第6課（年齢を尋ねる）</p> <p>第14回 第6課復習</p> <p>第15回 第6課テストとまとめ</p>			
使用教科書 藤田裕二著、『パリのクール・ジャパン』、朝日出版社			
自己学習の内容等アドバイス 復習してテストに備えること。			

[授業科目名] フランス語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>フランス語Ⅰに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）の習熟を目指す。</p> <p>また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の4級が目標。</p>			
授業の概要 <p>はじめの数回はフランス語のⅠで学習した内容を復習し、その後はフランス語Ⅰで使用した教科書（『パスカルオジャポン』または『パリのクールジャパン』）をもとに重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課ごとに小テストを行う。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>各課で行う小テストを60パーセント、授業への参加を40パーセントとして評価する。小テストの追試は特別な場合以外、行わない。遅刻は欠席とみなし、5回欠席すると失格。</p> <p>再試験は実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 フランス語Ⅰで学んだ内容の復習（第0課～第2課）</p> <p>第2回 同上（第3、4、5課）</p> <p>第3回 同上（第6、7、8課）</p> <p>第4回 第9課（家族について語る）</p> <p>第5回 第9課テスト、第10課（年齢を言う）</p> <p>第6回 第10課テスト、第11課（時刻を言う）</p> <p>第7回 第11課テスト、第12課（紹介する）</p> <p>第8回 第12課テスト、第13課（日課を説明する）</p> <p>第9回 第13課テスト、第14課（量を表す）</p> <p>第10回 第14課テスト、第15課（天候を言う）</p> <p>第11回 第15課テスト、第16課（比較する）</p> <p>第12回 第16課テスト、第17課（過去のことを語る）</p> <p>第13回 第17課テスト、第18課（未来のことを語る）</p> <p>第14回 第18課テスト、復習</p> <p>第15回 まとめ</p>			
使用教科書 <p>フランス語Ⅰで使用した教科書（藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社または藤田裕二著、『パリのクールジャパン』、朝日出版社のどちらでも可）</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>必ず復習し、テストのために準備して下さい。</p>			

[授業科目名] 中国語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初步的な会話を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかりと教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第1課 中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。 第3回 第2課 母音・子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。 第4回 第3課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文、疑問文の学習。 第5回 第3課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第4課 「これはなんですか？」。指示代名詞、疑問詞、副詞の学習。 第7回 第4課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第5課 「あなたはどこに行きますか？」。動詞の学習。 第9回 第5課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第6課 中国語と中国事情 第11回 第7課 「これはどうですか？」。形容詞の学習。 第12回 第7課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。			
(受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 中国語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。			
授業の概要 この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」についてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わつたごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション</p> <p>第2回 第8課 「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。</p> <p>第3回 第9課 「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。</p> <p>第4回 第10課 「あなたは食事をしましたか？」。過去形、完了文を学習する。</p> <p>第5回 第10課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。</p> <p>第6回 第11課 「彼はいつ用事がありますか？」。時間の表現を学習する。</p> <p>第7回 第11課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。</p> <p>第8回 第12課 「あなたの家は遠いです遠くないか？」。介詞、反復疑問文を学習する。</p> <p>第9回 第12課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。</p> <p>第10回 第13課 中国語と中国事情</p> <p>第11回 第14課 「あなたは何時から始まりますか？」。助動詞を学習する。</p> <p>第12回 第14課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。</p> <p>第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。</p> <p>第14回 総合的復習。</p> <p>第15回 全体のまとめ。</p> <p>(受講者の理解度をみながら進度を調整する)</p>			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部 前期・後期リピート
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならぬ事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ） 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンに「接続語」はいらない。 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 これまでの講義内容に関する質疑応答の後テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くことを勧める。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 瓦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 講義では、日本語表現に関わる範囲のうち特に文章表現について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法そして書かなければならぬ事柄へのアプローチの方法、それらを表現する具体的な方法について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業に取り組む姿勢と、レポートなどの提出物等とによって総合的に評価する。 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <ul style="list-style-type: none"> 第1回 講義概要、作文を書く 第2回 言語活動の重要性、情報処理の仕方・文章の書き方 第3回 言葉との出会い、文章とは何か 第4回 コミュニケーション論（『人は見た目が9割』など） 第5回 言語表現の言語学、多義文 第6回 修飾の仕方、読点の打ち方 第7回 修飾について 第8回 論文・レポートの書き方 第9回 間違えやすい日本語・敬語 第10回 『記号空間論』 第11回 日常生活の言葉の冒険・言葉遊び 第12回 小論文の書き方（就職対策） 第13回 精神的な冒険・エコグラム 第14回 物理的な冒険 第15回 講義のまとめ 			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切です。毎日数行日記を書くこと、日常生活に目をこらし、話したことをメモしておくことなどに注意を払ってみてください。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 石川 稔子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において国語力や文章力が問われることがたびたびある。特に自分の考えを正確に、しかも簡潔に文章で述べることは困難である。単にキーワードを並べるだけでは書き手の意図は伝えられない。 この講義では日本語の様々な問題を考察しながら、実生活で必要な日本語表現力を養成し、基本的な文章が正確に書けることを目標とする。			
授業の概要 本講義では、文章表現を行うために、まず日本語とはどういう言語か、間違いやすい日本語はどのようなものかを分かりやすく講義する。その上で、具体的な文章の書き方を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 1. 授業に取り組む姿勢と、授業内容に関わるレポートなどの提出物によって全体の40%を評価する。 2. 授業内容の理解度をはかる最終試験は全体の60%の評価とする。 以上2点から総合的に評価する。なお、再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス 日本語の特色 第 2回 国語の書き方を決めるのは誰? 第 3回 日本語の文字① 日本語のマナ・カナとは? 第 4回 原稿用紙の使い方と用字法 第 5回 日本語の文字② 漢字はどのようにできたのか? 第 6回 要約文は創作文? 第 7～8回 間違いやすい日本語（主語と述語・修飾語・副詞の呼応） 第 9回 待遇表現 基本的な敬語表現の確認 第 10回 日誌の書き方 第 11～13回 論文・レポートの書き方と文献資料の扱い方 第 14回 試験・エントリーシートを書いてみよう 第 15回 講義のまとめ			
使用教科書 必用に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 辞書は授業だけでなく、頻繁に使用することが望ましい。分からぬ言葉が出てくるとすぐに調べる習慣をつけること。提出物は授業時間内に仕上げること。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典・内田 君子・山本 恒子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 1年次前期：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ ネット社会では、情報の伝搬速度は著しく速い。それが正しい情報であっても間違った情報であっても、である。ネット社会を生きる我々にとっては、あふれる情報の中から真偽を見極めデマや噂に振り回されない姿勢こそが肝要になる。そして、このような姿勢のためには情報リテラシーが必要となる。情報リテラシーは情報活用能力ともいい、情報に対する真偽判断だけではなく、現状分析、取捨選択、加工、発信といった広範にわたる行為が適切に行える能力をさす。本授業では、大学生活では必ず必要となるレポート作成というものをテーマに、PCの基本操作能力（コンピュータリテラシー）とこれら情報リテラシーの修得を目指す。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。			
具体的な演習内容として、 • パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など） • ワープロソフト（Microsoft Word）の基本操作 • レポートの書き方とワープロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などの積極的な情報収集や考察が望まれる。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	[備考] 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ ワードを使った文章作成・編集・校閲などのレポート作成能力と図形・图表・写真などを使った保健室だよりや学級通信制作能力を身につけることが本授業の目標である。また、その過程で、情報リテラシーであるPC操作能力（コンピュータリテラシー）と情報の取捨選択や発信能力（メディアリテラシー）を身につけることが目標である。IT関連の知識や社会的時事問題も随時とりあげ、注意を喚起していく。			
授業の概要 大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、ワードの機能を活用しつつ、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といった、レポートそのものの作成技法の習得も必要である。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、ワードの操作の仕方、活用の仕方を含めた、初年次教育におけるアカデミックライティングの基礎を学ぶ。また、保健室便りや学級通信などの作成能力なども養成する。 学習項目の区切りで練習問題や復習問題を随時実施し、知識を定着させていく。学期途中に何度か総合問題を出題する。また、単にパソコンの操作技能だけではなく、論理的なレポートを書くために必要な考え方、ネットワーク社会におけるマナー やソフトウェアの著作権、情報の取捨選択といった事柄まで学習する。			
学生に対する評価の方法 受講態度・授業への参加態度(60%程度)、授業内で作成するレポート課題(20%程度)と保健室だよりや学級通信などの課題(20%程度)で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作(パソコンコンピュータについての概論、各種基本操作) 第3回 インターネットとメール(インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法) 第4回 ワードの基本的各種操作とWord Web Appの利用 第5回 ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方1 第6回 ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方2 第7回 ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方3 第8回 ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方4 第9回 ワードを使ったレポート課題の作成 第10回 ワードを使ったレポート課題の作成と提出 第11回 ワードによる図形・图表・写真の作成と挿入1 第12回 ワードによる図形・图表・写真の作成と挿入2 第13回 ワードとエクセルの連携 第14回 保健室便りまたは学級通信作成 第15回 保健室便りまたは学級通信作成			
使用教科書 学生に役立つWord2010 基礎 および ドリル (FOM出版) 参考図書はその都度紹介する。必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 教科書を使って、予習や復習をすると知識がより定着します。読むだけではなく、実際に操作をしてみましょう。また、欠席をした場合は、教科書を使って自習し、次回までに進度を合わせるようにしましょう。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 恭子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	[備考] 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ ネット社会では、情報の伝搬速度は著しく速い。それが正しい情報であっても間違った情報であっても、である。ネット社会を生きる我々にとっては、あふれる情報の中から真偽を見極めデマや噂に振り回されない姿勢こそが肝要になる。そして、このような姿勢のためには情報リテラシーが必要となる。情報リテラシーは情報活用能力ともいい、情報に対する真偽判断だけではなく、現状分析、取捨選択、加工、発信といった広範にわたる行為が適切に行える能力をさす。本授業では、大学生活では必ず必要となるレポート作成というものをテーマに、PCの基本操作能力（コンピュータリテラシー）とこれら情報リテラシーの修得を目指す。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活はもとより、実社会においても、多くの場面で調査や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要なってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要な考え方や知識を学ぶ。最後に自らが自由に決めたテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none">・パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など）・ワープロソフト（Microsoft Word）の基本操作・レポートの書き方とワープロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などの積極的な情報収集や考察が望まれる。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 古藤 真
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ			
到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS) Excel2010 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やABC分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。			
授業の概要			
表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。			
学生に対する評価の方法			
<p>① 授業への参加態度 (評価ウエート 10%)</p> <p>② 課題提出 (試験も含む 評価ウエート 80%)</p> <p>③ 情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト (評価ウエート 10%)</p> <p>以上3点から総合的に評価する。なお課題提出 (試験) は、添付ファイルで提出させる。</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等)			
第 1回 ガイダンスおよび基本操作 受講するまでの諸注意や演習の概要、成績の評価方法など			
第 2回 Excel の基礎知識 データ入力			
第 3回 Excel 入門 簡単な表の作成 ファイル操作 プリントの操作 演習室利用の際の諸注意			
第 4回 ワークシートの活用 1			
第 5回 ワークシートの活用 2 (課題 1 ファイルの添付方法)			
第 6回 ワークシートの活用 3 (課題 2・課題 3)			
第 7回 ワークシートの活用 4 (課題 4)			
第 8回 グラフ 1			
第 9回 グラフ 2			
第 10回 データベース 1			
第 11回 データベース 2			
第 12回 データベース 3 (課題 5)			
第 13回 Excel の応用 1 (課題 6・課題 7)			
第 14回 Excel の応用 2 (課題 8・課題 9 圧縮フォルダの作成方法と添付)			
第 15回 グラフ試験 1 またはグラフ試験 2 (第 7回～第 8回の範囲) とまとめ			
使用教科書			
Windows 7 対応 30 時間でマスター Excel 2010 実況出版編集部編 (実教出版)			
自己学習の内容等アドバイス			
ソフトウェアの修得には、短期間で集中して学ぶことも必要です。時間があれば各自のペースで教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡するので、随時実施すること。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 1年次後期：管理栄養学部、幼稚保育専攻 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 大学生活や将来の企業内の作業では、ワープロや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度は高い。この授業では、まず代表的な表集計ソフトEXCELの基本的な使い方について学習する。その後、各自が決めた目的のワークシートを作成していく。受講者は、実現目標の設定、実現のための問題点抽出、試行錯誤による問題点の解決など、問題解決に必要な様々なプロセスを、これら演習を通して体験していくことになる。このような体験を通じて問題解決能力の修得を目指すことが本授業の大きなテーマである。 これは仕事や研究に直結する能力でもあるので、研究などでデータ収集を必要とする下級生から就職を控えた上級生まで多くの学生が受講されるとよいだろう。			
授業の概要 本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、 <ul style="list-style-type: none">・代表的な表計算ソフトEXCELの基本操作や機能について・アンケートによるデータ収集方法について・実践的な活用法 を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なったアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤のチャレンジで完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。			
学生に対する評価の方法 受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点が加点される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明）とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できうるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 表計算ソフトのエクセルを用いて、情報の収集、管理、様々なデータの分析と活用ができるようになることが本授業の目標である。また、その過程で、情報リテラシーであるPC操作能力（コンピュータリテラシー）と情報の取捨選択や発信能力（メディアリテラシー）を身につけることが目標である。IT関連の知識や社会的時事問題も随時とりあげ、注意を喚起していく。			
授業の概要 本授業は、表計算ソフトを用いて様々なデータに関する、情報の収集、管理、分析の仕方について学ぶ。エクセルの基本操作や機能について学んだ後、最後に、保健あるいは心理に関するアンケート等を行い、エクセルを使って収集したデータを分析し、グラフ化する。ワードと連携させ、科学的論文形式に沿ってまとめる。初年次教育におけるアカデミックライティングの基礎を学ぶ。 学習項目の区切りで練習問題や復習問題を随時実施し、知識を定着させていく。学期途中に何度か総合問題を出題する。 認定心理士資格取得希望者は受講を強く望まれる。			
学生に対する評価の方法 受講態度・授業への参加態度(60%程度) および授業内で提出する課題(40%程度) で総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とエクセルの基礎知識、データの入力・編集の基本。 第2回 データの入力、Excel Web Appの利用 第3回 数式の入力、関数の利用 第4回 関数の利用 第5回 表の作成、表の印刷 第6回 グラフの作成と活用 第7回 グラフィックの利用 第8回 複数シートの操作、複数ブックの操作 第9回 データベースの利用 第10回 ピボットテーブルとピボットグラフの作成その1 第11回 ピボットテーブルとピボットグラフの作成その2 第12回 マクロの作成 第13回 保健あるいは心理アンケート用紙の作成と実施 第14回 アンケートから得たデータの打ち込みと分析その1 第15回 データの分析その2と解釈、レポート作成			
使用教科書 学生に役立つExcel2010 基礎 および ドリル (FOM出版) 参考図書はその都度紹介する。必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 教科書を使って、予習や復習をすると知識がより定着します。読むだけではなく実際に操作をしてみましょう。また、欠席をした場合は、教科書を使って自習し、次回までに進度を合わせるようにしましょう。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 純子
[単位数] 2	[開講期] 1～4 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト (Microsoft PowerPoint) を活かしながら課題探求することである。 特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 今日、プレゼンテーションの知識やスキルに対するニーズはますます高まっていく傾向にある。特に、研究発表や企画の説明など、ビジネスの場におけるプレゼンテーションは一層重要性を増している。 そこで本科目は、プレゼンテーションの基本的理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。 具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。			
学生に対する評価の方法 プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど) 第2回 プrezentationの基礎 (プレゼンテーションの概要と PowerPoint の基本操作) 第3回 プrezentationデータ作成の基礎1 (テキストデータによるスライドの作成) 第4回 プrezentationデータ作成の基礎2 (スライドの編集・加工、印刷) 第5回 プrezentationデータ作成の基礎3 (図表やグラフの利用) 第6回 プrezentationデータ作成の基礎4 (スライドマスターの利用、特殊効果の設定) 第7回 復習問題 第8回 プrezentationの実践1 (オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成) 第9回 プrezentationの実践2 (情報の収集、スライドの作成) 第10回 プrezentationの実践3 (スライドの作成) 第11回 プrezentationの実践4 (シナリオの作成) 第12回 プrezentationの実践5 (発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術) 第13回 プrezentationの実践6 (リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価) 第14回 発表1 (プレゼンテーションの実施と聞き手による評価) 第15回 発表2 (プレゼンテーションの実施と聞き手による評価)			
使用教科書 プリント教材			
自己学習の内容等アドバイス 復習課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。解答は、翌週の授業で解説する。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 恒子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標：①プレゼンテーションの定義、目的が理解できる、②PowerPoint を用いた効果的なスライド資料が作成できる、③論理的なプレゼンテーションの組み立てが理解できる、④スライド資料を活用したプレゼンテーションが実践できる。 テーマ： スライドを活用したプレゼンテーション技法の習得			
授業の概要 プrezentation能力は、学生生活では研究発表、社会人となってからも企画提案や事業報告など、多くの場面で必要とされている。本科目では、プレゼンテーションソフト (Microsoft PowerPoint) を用いて資料 (スライド) 作成の技術を習得する。さらに、論理的なプレゼンテーションの組み立てや話し方を学び、自分の伝えたいことを限られた時間の中で効果的に伝えるプレゼンテーション技法を身につける。 授業の成果として、各自で選択したテーマに基づきインターネットや書籍等を活用しながら情報収集を行い、テーマに相応しいスライドと発表シナリオを作成し、対面式のプレゼンテーションを行う。その際に相互評価と自己評価を行い、改善点を把握することでプレゼンテーション能力の向上を目指す。			
学生に対する評価の方法 以下の各項目の得点を合計し、評価する。 ・総合試験 (50%)：スライド資料を用いたプレゼンテーションを行う (発表時間 5 分、ビデオ撮影)。 ・課題 (30%)：授業内で提出する課題。 ・受講態度 (20%)：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要、進め方、成績の評価方法を把握する) 第2回 プrezentationとは PowerPoint の基本操作(1) 画面構成／レイアウトの選択／テキストの入力／ヘッダーフッターの設定 第3回 PowerPoint の基本操作(2) 図形の挿入／アニメーションの設定／画面の切り替え効果／スライドショーの実行／リハーサル機能 第4回 PowerPoint の基本操作(3) スライドマスター／表・グラフの挿入 第5回 PowerPoint の基本操作(4) 配付資料の作成／印刷形式 第6回 プrezentation技法(1) ストーリー構成／情報収集の方法 第7回 プrezentation技法(2) 話し方・態度・表現方法／評価のポイント 第8回 総合試験の準備(1) テーマの設定／ストーリーシートの作成 第9回 総合試験の準備(2) 情報収集 第10回 総合試験の準備(3) スライド作成 第11回 総合試験の準備(4) シナリオ作成 第12回 総合試験の準備(5) リハーサル／レーザーポインタの使い方 第13回 総合試験① プrezentationの実践と相互評価 第14回 総合試験② プrezentationの実践と相互評価 第15回 まとめ プrezentation結果のフィードバックと自己評価			
使用教科書 なし。必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 総合試験 (プレゼンテーションの実践) に向けて、授業外の時間も有効に使い情報収集に努めてほしい。			

[授業科目名] データベース演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 純子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。 特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト（Microsoft Access）を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。 具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成（テーブル）、データの抽出や集計（クエリ）、データ入力画面の作成（フォーム）、各種報告書や宛名ラベルの印刷（レポート）等の各項目について学習していく。			
学生に対する評価の方法 期末試験（50%）、提出を義務付けた課題（30%）、授業における取組状況（20%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど） 第2回 データベースの基礎1（リレーショナルデータベースとは、データベースソフト Access の基本操作） 第3回 データベースの基礎2（データの検索、並べ替え、印刷） 第4回 テーブルの作成1（テーブルとは、データの形式、データの入力） 第5回 テーブルの作成2（入力支援機能の活用、効率的なデータ入力） 第6回 フォームの作成（フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集） 第7回 クエリの作成1（クエリとは、選択条件の作成） 第8回 クエリの作成2（集計処理、式ビルダの利用、関数の利用） 第9回 クエリの作成3（アクションクエリの利用） 第10回 データベースの設計1（新規テーブルの作成、フォームの設計） 第11回 データベースの設計2（リレーションシップの設定） 第12回 データベースの設計3（リレーションシップされたクエリの作成と計算） 第13回 レポートの作成（レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能） 第14回 全体の復習 第15回 期末試験とまとめ			
使用教科書 実教出版編集部（編）『30時間でマスター Access2010』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 復習課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。解答は、翌週の授業で解説する。			

[授業科目名] プログラミング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な考え方を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができる。</p> <p>本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、論理的な考え方を養い、自分の新しい可能性の発見とこれから挑戦の糸口には十分なものとなるであろう。</p>			
授業の概要			
<p>本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができる JavaScript を用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Java スクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Java スクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能となる。</p> <p>なお、映像の学生は専門科目の中より高度なプログラミングを履修することが可能であるため、本科目は映像以外の学生を優先（映像の学生は、受講者に余裕がある場合のみ受講可能）とするが、映像以外の学生も希望者多数の場合は、抽選となる場合があるので注意していただきたい。</p>			
学生に対する評価の方法			
普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<p>第1回 オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。</p> <p>第2回 HTML と CSS について（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習）</p> <p>第3回 主なタグ（HTML 言語を用いて簡単な Web ページの作成）</p> <p>第4回 JavaScript の概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子）</p> <p>第5回 入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力）</p> <p>第6回 分岐 1（IF の基本的な使い方）</p> <p>第7回 分岐 2（条件分岐の応用）</p> <p>第8回 繰り返し 1（繰り返し処理の作り方）</p> <p>第9回 繰り返し 2（多重ループ）</p> <p>第10回 関数（関数とは、作り方、呼び出し方）</p> <p>第11回 配列（配列とは、配列の利用方法）</p> <p>第12回 課題作成 1（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する）</p> <p>第13回 課題作成 2</p> <p>第14回 課題作成 3</p> <p>第15回 評価</p>			
使用教科書			
なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス			
今までの経験からみて、初学者が授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難と言わざるを獲ない。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。			

[授業科目名] 情報基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ol style="list-style-type: none"> コンピュータの基礎知識と技術を習得する。 パソコンの基本的な問題に対処できる。 			
授業の概要 <p>コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア／ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 試験 (80%) : 第15回授業時に実施する。 授業参画態度 (20%) : 授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画 (回数ごとの内容等) <p>第1回 ガイダンス (授業の基本方針と期間の授業計画)</p> <p>第2回 コンピュータの特徴 (世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴)</p> <p>第3回 ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置 (ハード／ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、CPU)</p> <p>第4回 ディジタルとアナログ (ディジタル／アナログの定義、ディジタルの利点、ディジタル化の方式)</p> <p>第5回 基数変換 (2進数、16進数、基数変換)</p> <p>第6回 数値表現① (固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差)</p> <p>第7回 数値表現② (ゾーン10進数、パック10進数)</p> <p>第8回 文字表現 (1バイト系コード、2バイト系コード)</p> <p>第9回 命令とプログラム (命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ)</p> <p>第10回 補助記憶装置 (ハードディスク、フロッピーディスク、CD)</p> <p>第11回 補助記憶装置 (DVD、光磁気ディスク、半導体ディスク)</p> <p>第12回 入出力インターフェース (シリアルインターフェース、パラレルインターフェース)</p> <p>第13回 入出力装置 (入力装置、出力装置)</p> <p>第14回 ソフトウェア (オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア)</p> <p>第15回 まとめと試験</p>			
使用教科書 <p>なし</p> <p>但し、隨時プリント等の補足資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>本講義は、情報処理技術者試験の「IT パスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでおり、関連の書籍が参考になる。</p>			

[授業科目名] 情報倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。			
授業の概要			
インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策、SNS（ソーシャルネットワークシステム）など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。			
学生に対する評価の方法			
学期末試験（70点）、単元ごとの達成度小テスト（5回分合計30点）、受講態度等を考慮して、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など）			
第2回 情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性）			
第3回 個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権）※第1回達成度小テスト			
第4回 社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化）			
第5回 身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響）※第2回達成度小テスト			
第6回 電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト）			
第7回 Webページによる情報の受信・発信（Webページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション）			
第8回 情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ）※第3回達成度小テスト			
第9回 コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウィルス、スパムメール・チェーンメール）			
第10回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為）※第4回達成度小テスト			
第11回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為）			
第12回 ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル）			
第13回 まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面※第5回達成度小テスト			
第14回 まとめ：健全な情報社会のあり方（SNSも含む）を考える			
第15回 学期末試験および今後の学習課題について			
使用教科書			
使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス			
講義内容（プリント配布）から出題する「達成度小テスト」（30点）のためにも、無欠席と授業内容を十分に理解することが最低条件である。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前期・後期リピート
授業の到達目標及びテーマ 【短編小説を書く】 小説作法を実践的に学び、1編の短編小説を書き上げる。			
授業の概要 近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の1つのプロセスを学び、1編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は、提出作品を中心に受講態度、予習、復習など、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する） 第2回 あるテーマとその描き方について学ぶ。 第3回 テーマの見つけ方・各自10のテーマを設定する。 第4回 初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10のテーマのうち、5つのストーリーを書く。 第5回 小説にプロットは欠かせない。5つのうち、3つの設計図（小説の姿）を書く。 第6回 3つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。 第7回 場面と3つの作品の参考資料の収集。 第8回 3つの設計図から1編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。 第9回 1編の小説を書き始める。 第10回 1編の小説を書き終わる。 第11回 第1回改訂作業（登場人物は機能しているか） 第12回 第2回改訂作業（導入部は読者の心を擗むか・障害物は適切か） 第13回 第3回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か） 第14回 各自朗読と批評1 第15回 各自朗読と批評2			
使用教科書 大島龍彦『丘上町二丁目のカラス』（新典社刊）・必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ※募集人数は15名前後
授業の到達目標及びテーマ			
【マーケティング】 マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。			
授業の概要			
世に多く出版されている雑誌の分析を、それぞれマーケティングから考える。マーケティングとは「売れるための仕組み作りや流行をいち早くキャッチして商品化・サービス化する」ものである。ある意味では文化創造活動といった見方ができる、われわれの生活に密着した学問である。専攻コースに関連した自分たちの興味あるテーマをマーケティング的に研究する。			
学生に対する評価の方法			
積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度をレポートにまとめた内容（独自の発想や視点）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 ゼミ（演習）の概要とマーケティングとは何かを説明する。			
第2回 マーケティングの歴史と理論（平易に解説）			
第3回 マーケティングの基本理論 第1章—製品戦略に関する解説・説明			
第4回 マーケティングの基本理論 第2章—価格戦略に関する解説・説明			
第5回 マーケティングの基本理論 第3章—プロモーション（広告等）に関する解説・説明			
第6回 マーケティングの基本理論 第4章—流通チャネルに関する説明・解説			
第7回 マーケティングの最近の手法（気付かないで多用している身近な話題）			
第8回 マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。			
第9回 消費者行動について			
第10回 各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連した興味・関心のあるテーマ収集作業			
第11回 各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）			
第12回 各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）			
第13回 各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）			
第14回 総括			
第15回 レポート等の提出と半期を振り返って。			
使用教科書			
使用しない。各自必要な文献等があればこちらで購入する。			
自己学習の内容等アドバイス			
基本となるマーケティングの理論を短期間でマスターすること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 直良
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 各自がそれぞれのテーマについて、調査し十分な情報を得、リポートにまとめる。調査段階で、英文内容を的確に把握できることと、外大留学生にインタビューすることにより、実用英語の習得とリポートにまとめる能力を養うことが目標である。			
授業の概要 各自興味関心のあるトピックについて、調査しまとめる。情報源は、選択したトピックについて調査した後、外大留学生にインタビューし、討議し、アドバイスを受け、リポートにまとめる。 例として、次のようなトピックについて考察することにする。 ① 観光スポット ② 現地で流行の漫画、映画、音楽、テレビ番組、ゲーム ③ 文化の相違 ④ 各言語（オーストラリア英語、カナダ英語、アイルランド英語など）⑤ その他興味を持っているトピック			
学生に対する評価の方法 ① 授業への参画態度（評価ウエート 30%） ② 第1段階提出リポート（評価ウエート 30%） ③ 最終提出リポート（評価ウエート 40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス、 テーマの選択法、テーマの根拠と有効性について考える。 第 2回 テーマの選択と今後の展望について調査し考える。 第 3回 テーマについて調査とディスカッション 第 4回 テーマについて調査とディスカッション 第 5回 テーマについて調査とディスカッション 第 6回 調査しリポートにまとめる 第 7回 調査しリポートにまとめる 第 8回 第1段階リポート提出と発表 第 9回 テーマについて留学生にインタビュー 第10回 テーマについて留学生にインタビュー 第11回 テーマについて留学生にインタビュー 第12回 テーマについて留学生にインタビュー 第13回 最終リポート準備 第14回 最終リポート準備 第15回 リポート提出と発表			
各自が興味あるテーマについて、調査し、インタビューし、リポートにまとめる。			
使用教科書 特にないが、随時提案する。			
自己学習の内容等アドバイス 諸外国の実状について日頃より関心を持ち、視野を広めることが肝要である。ネットや書籍、更には、大勢の留学生から直接情報を得ることができる環境にあることを自覚し、積極的にテーマに取り組んでみること。			

【授業科目名】 教養総合演習 I		【授業方法】 演習	【授業担当者名】 加藤 英明
【単位数】 2	【開講期】 2～4年次前・後期	【必修・選択】 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 【新聞を読む】 デジタルネットワーク全盛の時代、新聞紙購読率の低下は顕著で、学生諸君もその数字に一役買っているであろう。日々当面の情報入手のみならいざしらず、それを自分なりに理解し、分析して社会に生きる一個の人間としての成長、蓄積につなげようとするなら、新聞紙を読むことは、最も効果的な作業である。 本演習では、毎回様々な新聞記事を読み、受講者間の討議を通じて新聞の読み方を学ぶとともに、社会人としての力量向上をめざす。			
授業の概要 受講者は毎回その週読んだ新聞記事のうち、興味をもった記事、また逆に理解できなかつた、わからなかつた記事を報告し、これを材料に受講者皆で討論する。議論の中で専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読み解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。			
学生に対する評価の方法 試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告・発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 新聞とは。新聞の読み方。 第3回 今週の新聞を読む。 第4回 同 第5回 同 第6回 同 第7回 同 第8回 同 第9回 同 第10回 同 第11回 同 第12回 同 第13回 同 第14回 同 第15回 総括			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎日新聞を読み、興味ある記事を抜き出しておくこと。わからない、理解できないところは、自分なりに少しでも調べること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照
授業の到達目標及びテーマ 【健やかにダイエット】 ・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。 ・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる“健やかにダイエット”」 <受講の要件> ・体格指数(BMI) 25 以上の学生が対象 体格指数(BMI) の計算式は、体重(Kg) ÷ 身長(m) ²			
授業の概要 本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。			
学生に対する評価の方法 受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。 なお、期末試験および再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 身体と運動を考える（サイエンスを学ぶ） ○ 文献研究 1 第 2 回 身体と運動を考える（サイエンスを学ぶ） ○ 文献研究 2 第 3 回 身体運動の展開（栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する） ○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定 ○ ライフコーダ（生活習慣記録機）の使用説明 第 4 回 身体運動の展開 1 ○ ライフコーダによる 1 週間分のデータを分析する ○ コンバインドトレーニングの実施（レジスタンストレーニング、エアロビクス） 第 5 回 身体運動の展開 2 第 6 回 身体運動の展開 3 第 7 回 身体運動の展開 4 第 8 回 身体運動の展開 5 第 9 回 身体運動の展開 6 第 10 回 身体運動の展開 7 第 11 回 身体運動の展開 8 第 12 回 身体運動の展開 9 第 13 回 身体運動の展開 10 ○ コンバインドトレーニングの実施 ○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定 第 14 回 データをまとめて結果を考察する（レポート作成） 第 15 回 データをまとめて結果を考察する（レポート作成） ↑ 全 10 回 トレーニングを実施する ↓			
使用教科書 必要に応じて、資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス ・運動している自分自身を科学する。 「やってみること」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」 ・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. フアルク
[単位数] 2	[開講期] 2~4年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ			
【諸外国事情】 ステップアップコミュニケーション英語セミナー：このセミナーの目標は、例えば①海外旅行②海外留学③就職など教室の外で自然に人と英語でコミュニケーションを取れる基本的な必要な会話レベルを学生たちに習得させるものである。学期の終わりまでに、とりわけ先述の①~③までの状況下で自信を持って形式的なもしくは格式ばらない会話をやり始め、運用し、修得する。受講生は実生活でのコミュニケーションの自信を高めるために、iPod や iPad の電話機能を使って、名古屋外大の外国人留学生や帰国子女などの英語ネイティブスピーカーと国際電話を想定した会話を経験する。学生たちは英語を上手になることを求められるのではなく、英会話力を上達することに興味がある誰もが履修できる。			
授業の概要 ほとんどの授業は、担当教員とクラス全体の学生との間で、短い形式的または格式ばらない会話、クイズ、異文化情報提供により成り立つ。下記は、英語コミュニケーション能力やその関連領域含む 15 回の授業の当面の計画であるが、学生の興味や学習に必要な内容、また熟達度に応じて変更されることもある。実生活における英語でのコミュニケーションを実践するために、学生たちは時々名古屋外大の外国人留学生と会合することになっている。			
学生に対する評価の方法 授業参加度 (50%)、最終ペーパーテスト/オーラルテスト (50%)。再評価は行うが、全授業回数の 3 分の 1 以上の欠席数がある学生単位不認定となる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 オリエンテーションと授業の概要 第02回 Introduction of speed of spoken English: Slow, Fast, Natural (口語英語の速度訓練：ゆっくり、早く、自然に) 第03回 Introduction and practice of Survival English Prompts. (即答英語の導入とその練習) 第04回 Meeting, greetings and introducing self and others at casual or informal situations. (格式ばらない会合、挨拶、自分自身や他人の紹介) 第05回 Getting around, staying at hotels/ homes, and dealing with airport formalities. (観光、ホテル滞在、ホームステイ、空港の利用法) 第06回 Shopping, handling money, eating, and entertaining. (買い物でのお金の使い方、食事や娯楽) 第07回 Formal and informal spoken communication. (格式的な、または格式ばらない話し方) 第08回 Formal and informal written communication. (格式的な、または格式ばらない英文の書き方) 第09回 Cultural differences (文化の違いについて) 第10回 Meeting, greetings and introducing self and others at formal situations. (格式的な会合、挨拶、自己紹介および他の人の紹介) 第11回 Making small presentations. (簡単なプレゼン法) 第12回 Giving and taking interviews informally/ formally. (格式的な、または格式ばらないインタビューの受け方/やり方) 第13回 Real-life communication with NUFS foreign students about home countries. (名外大の外国人留学生と彼らの祖国の実生活について語る) 第14回 Real-life communication with NUFS foreign students about Japan. (名外大の外国人留学生と日本の実生活について語る) 第15回 レポート提出			
使用教科書 教科書購入は不要。下記の本などからプリントを作成し配布する。 (1) <i>Speaking Naturally</i> . Tillitt, B & Bruder, M. Cambridge University Press.; (2) <i>How to Survive in the U.S.A.</i> Church, A & Moss, A. Cambridge University Press., (3) <i>Business Opportunities</i> . Hollett, V. Oxford University Press.			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none">学生は英日・日英の電子辞書、もしくは携帯電話辞書アプリを持参する。パソコンや携帯電話を利用して、ネットで情報検索する。クラス内での学習において、パワーポイントのスライドを作成する知識は、学生にとって役に立つ。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 【オペレーションズ・リサーチ】 人が生活していくと、身の回りには多くの課題や問題が発生する。それら問題を解決するための判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実で効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ (OR) である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。			
授業の概要 この授業では、就職活動を進める学生が対象となるため、就職対策としてビジネスで活用できる実践的な EXCEL の勉強から始まり、就職活動に必要な情報の収集、目的の企業・業界の研究を経て、自分の希望会社を、数値シミュレーションや AHP といった OR 手法を適用することで選別することを試みる。その他の細かい授業内容については学生と担当教員で話し合って決めていくことになる。 なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理 1）、表計算演習（または情報処理 2）を事前に履修しているか、もしくはこれらと同等以上のスキルを有することが望まれる。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題 (EXCEL のワークシート) などから総合的に評価する。 なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（書注意、講義内容、進め方の話し合い、成績評価方法など） 第2回 ビジネスと表集計ソフトの活用（データの集計） 第3回 ビジネスと表集計ソフトの活用（予算管理） 第4回 ビジネスと表集計ソフトの活用（物品管理） 第5回 ビジネスと表集計ソフトの活用（売上げ管理） 第6回 ビジネスと表集計ソフトの活用（予算計画） 第7回 ビジネスと表集計ソフトの活用（家計簿の作成と生活費の管理への活用） 第8回 ビジネスと表集計ソフトの活用（ABC 分析） 第9回 シミュレーションによる問題解決 第10回 就職情報の読み方 第11回 企業情報についての研究・調査 第12回 数値シミュレーションによる企業希望条件の洗い出し 第13回 AHP とは 第14回 AHP を用いた、希望会社の絞り込み 第15回 まとめ その他、進捗度合いや学生との相談の上、PERT/CPM を用いた工程管理、整数計画問題などが行われる場合もある。			
使用教科書 なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）			
自己学習の内容等アドバイス 時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちの場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。			

[授業科目名] 教養総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 【心の深層を探る】 宗教や、その周辺の諸文化が、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて幅広い視野の中で考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。			
授業の概要 研究のための視点として宗教心理学を講じることから始める。それに並行して文化の諸領域についても解説し、心理学的な分析をする。受講生の必要に応じて、宗教社会学・宗教人類学の内容を取り入れることもある。受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。 限定という意味ではないが、できれば「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宗教心理学とは何か 心理という人間一般の地平で宗教を眺めようすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとする意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。			
第2回 心の深層と象徴 宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100万回生きたねこ』などを題材に解説する。			
第3回 元型(1) ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。			
第4回 元型(2) 「マンダラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーター・パン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。			
第5回 神話に学ぶ愛のかたち 神話などの物語の中には、様々な愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン（アーサー王伝説）・かぐや姫などを題材とする。			
第6回 変容 一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常の生活の中にも存在し得る。鍊金術・茶道・キャンプファイア・箱庭などを題材に解説する。			
第7回 「身体」の宗教心理学 「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得ることについては、第6回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探求する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。			

第8回 「回心」の研究

「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第9回 宇宙飛行士の悟り

「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第10回 生と死の心理

前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第11回 芸術と宗教

芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第12回 演習レポートの書き方(1)

どのようにレポートのテーマを決めるか、これは最初の最も重要な課題である。この点について講じる。資料の探索について解説し、資料や原稿の整理作業に着手する。

第13回 演習レポートの書き方(2)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。解説を踏まえて原稿の整理作業も進める。

第14回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説する。原稿の整理作業も進める。

第15回 演習論文の書き方(4)

レポートには必要な構成、要件がある。前書きや後書きなども、非常に重要な意味を持つ場合、またそのような書き方というものもある。それらの具体的なことがらについて解説する。原稿の整理作業も進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 教養総合演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ			
【人間性研究】 「人間性とその業績」をテーマとして研究作業をする。			
学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史的背景、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触ることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、人生の遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要			
「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面をも切り口として、その人間性を研究する。			
「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも1科目の単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法			
授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 「人間性」とは何か なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。			
第2回 人間性研究の方法論 研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社會的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。			
第3回 資料について 資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。			
第4回 日記・手記・伝記・評伝 日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。			
第5回 人物の背景 歴史的社會的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。			
第6回 ライフ・サイクル ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個性的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。			
第7回 契機 個性的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。			

第8回 評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第9回 歴史的影響(1)

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回 歴史的影響(2)

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回 「人間性研究」のまとめ

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかなくても、それに近い考察のし方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。参考資料の探索と整理についても説明する。

第12回 演習レポートの書き方(1)

どのようにレポートのテーマを決めるか、これは最初の最も重要な課題である。この点について講じる。原稿の整理作業に着手する。

第13回 演習レポートの書き方(2)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。解説を踏まえて原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(4)

レポートには、必要な構成、要件がある。前書きや後書きなども、非常に重要な意味を持つ場合、またそのような書き方というものもある。それらの具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] アートとしての数学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大内 雅雄
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考 映像メディア学科専門科目 ※映像メディア学科生を除く1年次のみ
授業の到達目標及びテーマ 映像、音響、造形などのアートは、物を作るための手作業や、身近な自然現象の観察などにおいて、数学とも、通底している。この授業では、手作業や実験観察を通して、アートと数学の結ばれ方に気づき、新たな表現技法を生み出すことを目指す。 講師の話しを聞くだけでなく、実際に手を動かし創意工夫する経験を多く積むことを促し、学生が今後のアート作品制作において、数学や自然科学との自分なりのかかわり方の糸口を見つけてもらうことを、目標とする。			
授業の概要 具体的なテーマは、(1)映像=(光と影の造形と運動)の実験的試み (2) 紙の造形と数学 (4) 形と比と数列 (黄金比とフィボナッチ数列など)。 数学的な作業として必要なのは、最低限で、比例計算や倍率計算と、紙折りによる作図などである。小数計算は 電卓を使ってできればよい。			
学生に対する評価の方法 (1) 授業内容を基にした工作作品の提出。 (2) 授業であつかった数学的内容についての筆記試験。 (1)、(2)を総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 暗い部屋で水面と光が壁や天井に映し出す映像を見る。反射、屈折、虹などの現象。 第2回 ピンホールカメラとレンズカメラを作り、カメラの光学的原理の基礎を知る。 第3回 ハーフミラーを用いた万華鏡等の実験と制作。 第4回 シャボン膜による球面鏡やシャボン膜の性質の実験。 第5回 針金に樹脂膜を張らせて作る形。 第6回 プリズムやレンズによる光の屈折と虹の観察。 第7回 一定倍率で小さくなる同じ形の図形を一定配置で並べるとどんな形が現れるか。対数螺旋。 第8回 紙で作る対数螺旋。ビデオカメラのモニター画面撮影で生まれる図形。 第9回 紙の編み込みが生む形。 第10回 紙の編みこみの制作と工夫。 第11回 松かさやヒマワリの花とフィボナッティ数列。 第12回 フィボナッチ数列で葉や花を描く。数列から作る音楽や図形。 第13回 黄金分割について。ペンタグラムと魔よけ。結界の生む造形と物語。 第14回 提出作品の講評。今期授業のまとめと補足。 第15回 数学内容に関する筆記試験。			
使用教科書 使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で触れたことを、身のまわりに見つけ出したり、ヒントにして何か作り出せないか、試してほしい。 授業で配布するプリント類は、次のURLにも載せる。 http://homepage1.nifty.com/haniu/nuas/			

[授業科目名] 映像史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 光 幸國・柿沼 岳志
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考 映像メディア学科専門科目 ※映像メディア学科生を除く1年次のみ
授業の到達目標及びテーマ 自分が感動した映像は、たとえ一瞬見た作品であっても一生忘れない。この視点から先人の優れた作品を鑑賞しながら、感動や作品の読み方、その時代背景等を講義する事により、受講生に自分の創作活動を一人よがりならず、創造性やオリジナリティーのある創作を行うために、人間とは何か、社会とは何か、自分とは何かを深く考察探求する知的好奇心を持つ事であり、その事を理解し行動する姿勢の習得を目的とする。			
授業の概要 講義は映像作家を志す受講生に、映像史上の著名な作家の作品を鑑賞しながら、それぞれの思想、目的、技術、コンセプトを学び、如何に主体的に、オリジナリティーを持ちながら、感動と社会に適応する創作を行なうかと云う視点から講ずる。特に世界に多大な影響を与えた世界の1840年代～1990年代の作家を中心に、その時代背景（近代史）と照らし合わせながら講義する			
学生に対する評価の方法 小テスト2回（20%）・学期末テスト（80%） 当講義では再評価をしない。授業の出欠には十分注意する事。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回講義総論・写真の始まりから（ニエプス、ダゲール、タルボット）初期の写真家（ナダール、タルボット、キャメロン） 第2回シネマの確立・サイレントからトーキーへ（リュミエール兄弟、メリエス、グリフィス） 第3回、アメリカに渡った写真（フレディー等）写真の父アルフレッド・スティーグリッツ、 ファンション写真をアートと確立及び不滅の写真展開催を企画したエドワード・スタイケン 第4回写真黎明期（ユウジエーヌ、アジェ、マン・レイ、モホリ・ナジ） 第5回写真のピカソ（エドワード・ウエストン）、ランドスケープの巨匠（アンセル・アダムス） 第6回映画の黄金時代・巨匠達の映画（ヒッチコック、フォード、ホークス、ラング） 第7回報道写真家（ロバート・キャパ）ドキメンタリー写真家（ユージン・スミス） フランスの巨匠達（ブレッソン、ドアノー、プラッサイ、ケルテス） 第8回戦争と映画・世界大戦以降、ベトナム、中東、湾岸、と半世紀に起きた戦争と映画の関わりを分析 第9回小テスト・20世紀の偉大なファンション写真家（アーヴィング・ペン・リチャード・アヴェドン） 第10回・ロバート・フランク、メープルソープ、植田正治、セバスチャン・サルガド、サラムーン 第11回映画の新潮流・ネオアリズモ、ヌーヴェルヴァーグ（ロッセリーニ、フェリーニ、ゴダール） 第12回ポートレートの巨匠ユージェーヌ・カーシュ、ドキメンタリー作家のポートレート・ダイアン・アーバス 第13回小テスト・現代の写真（田原桂一、シーフ、ジャコモリ） 第14回現代映画について・多様化する表現形態（アニメ、CG、3D、） 表現形態により変わるものと変わらないもの 第15回テスト・その他の写真家			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 図書館で名作のDVDや写真集を鑑賞し、美術館で名作のオリジナル作品を見る事			

[授業科目名] デザイン論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木村 一男 他
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	[備考] 一部オムニバス形式 デザイン学科専門科目 ※デザイン学科生を除く1年次のみ
授業の到達目標及びテーマ 広範なデザインの領域の活動、その社会的役割や使命について解説することをテーマとして、総合的にデザイン活動の全容を捉え、これからデザイン学習の基本を習得することを目標とする。			
授業の概要 前半をデザインの、その役割、分野、展開等について講義し、後半をオムニバス形式でデザインの各分野について担当教員が述べる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度とレポートによる			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 デザインを学ぶに際して 第2回 デザインのめざすもの 第3回 デザインの領域 第4回 デザインの展開 第5回 デザインと生活 第6回 デザインと社会 第7回 デザインと企業 第8回 これからのデザイン 第9回 ◆ヴィジュアル・デザインI 第10回 ◆ヴィジュアル・デザインII 第11回 ◆スペース・デザインI 第12回 ◆スペース・デザインII 第13回 ◆プロダクト・デザインI 第14回 ◆プロダクト・デザインII 第15回 まとめ ◆=オムニバス			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 広いデザイン領域に視野を広げ、あらゆる事象に常に关心を持って観察し、評価する態度を持つことを期待したい。			

[授業科目名] 子どもと社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア学科専門科目 ※子どもケア学科生を除く1年次のみ
授業の到達目標及びテーマ 当講座のテーマ：「社会環境の変化と子ども」子どもを取り巻く社会環境に光をあて子どもの生活世界の変容を広く考察する。当講座の目標：15講の(歴史的)考察を通して、多面的かつより深く「子ども」のイメージを持てるようになること(広い視野に立って子どもと子どもにかかわる諸問題を考えられるようになること)、これが当講座の目標である。			
授業の概要 授業の全体構成・展開は次のとおり。まず、西欧における子ども観の変遷を考察しつつ、前近代的(封建的)慣習が残る戦前の日本社会における子どものありようを注目する(Part I)。次に、50年代から現在に至る戦後日本社会の発展・変容とそれに伴う子どもの生活世界の変化を追究する(Part II)。さらに、世界的視野にたち世界の子どもが抱える問題を鳥瞰するとともに、途上国の子どもの置かれた状況も考察する(Part III)。最後に、それらの考察を踏まえ、子どものくらしに関する話題を取り上げ検討する(Part IV)。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参画態度 ②レポート……授業内容に即したテーマで中間レポートと最終レポートを作成し提出。 評価ウエートは①30% + ②(30%+40%)で、総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス(授業のねらいと目標、運営方法などの説明) <Part I 子どもに注がれる眼差し(子ども社会の歴史的考察)> 第2回 子どもが「ちいさな大人」だったとき 一アリエスの『子どもの発見』に即して一 第3回 昔は本当にやかかったか? 一戦前の日本社会と子どものくらしー① 概観的講義 第4回 昔の子どものくらしぶり 一戦前の日本社会と子どものくらしー② 事例の考察 <Part II 戦後日本社会の発展・変容と子ども> 第5回 戦後日本社会の鳥瞰図ー戦後日本をウォッチングするー 第6回 都市化と生活の近代化は子どものくらしをどう変えたか?① ー子どものくらしの全体的風景ー 第7回 都市化と生活の近代化は子どものくらしをどう変えたか?② ー遊びと学びの変容ー 第8回 子どもの生活(遊び)再考ーDVDの映像を通してあるべき子どもの姿を考える <Part III 情報化社会に生きる子どもたち> 第9回 情報化の進展と子どものくらしの変容 第10回 近年の子どもをめぐる諸問題①ー75年(高校進学率90%に達した年)以降の状況ー 第11回 近年の子どもをめぐる諸問題②ーパソコン、ケータイと子どもたちー <Part III 世界の子どもたちー発展途上国の状況ー> 第12回 世界における子ども問題の鳥瞰図 第13回 グローバル化・市場経済化と途上国の子どもたち <Part IV ケース・スタディ> 第14回 現代の子ども問題を考える (具体的な事例を取り上げディスカッションする) 第15回 前講の続きと最後のまとめ ※パワーポイントを使って講義する。また、できる限り報道記録や映画などDVDの映像をとりいれビジュアルに説明する。なお、この計画に従って展開するが、進度状況によっては一部変更する場合がある。			
使用教科書 教科書は使用しない。授業は配布資料・教材にしたがって進める。当講座との関連で一読を薦めたい文献としては次のようなものが挙げられる。 本田和子「変貌する子ども世界」(中央新書)、高橋勝・下田裕彦編著「子どものくらしの社会史」(川島書店)など。また、それぞれ具体的なテーマに即してその都度参考図書を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。 《より深く学ぶために》授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみること。			

[授業科目名] 総合講座 クリエーション ナウ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] メディア造形学部 教員
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア造形学部を構成する映像メディア、デザイン、ファッショント造形、各学科が包括する領域の全容を学ぶことで、この学部の関わる広大な世界と相互の密接な交流、関係、影響などを知る。かつ多彩な表現の技術、思考、展開手法と、各分野の現代の先端的な動向や潮流に触れ、自ら積極的に他の領域に目を向け、参画する姿勢を養う。			
授業の概要 映像メディア、デザイン、ファッショント造形、各学科が持つさまざまな専門コース・分野について、各担当教員から、その分野の概要とあわせ、活動の世界、現代におけるその分野の役割や新しい動向、これから展望、社会との関わりなどについて解説する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度、学科単位で行うレポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 今、メディア造形のあり方とは～領域を越えて 第2回 映像メディア1 (映像メディアについて・映像基盤としての写真) 第3回 映像メディア2 (CGとアニメーション表現) 第4回 映像メディア3 (TVというメディア) 第5回 映像メディア4 (映画の世界) 第6回 映像メディア5 (サウンドとインスタレーション) 第7回 デザイン1 (総合) 第8回 デザイン2 (プロダクト・デザイン) 第9回 デザイン3 (ビジュアル・デザイン) 第10回 デザイン4 (環境空間デザイン) 第11回 ファッショント造形1 (ファッショント・トレンド予測) 第12回 ファッショント造形2 (ファッショント・プレゼンテーション) 第13回 ファッショント造形3 (生活者の意識変化とファッショント小売業態) 第14回 ファッショント造形4 (ビジネスの世界) 第15回 拡張するメディア造形～			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 自分の専攻以外の学科について、特に注目すること。			

[授業科目名] 現代映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像理解の基礎として見ることの構造、映像装置の歴史を知り、映像における時空間、光、色彩、対象物などの関係性認識し、そこから動画の基礎を習得することを目標とする。			
授業の概要 映像表現の出発点として、映像装置の歴史（ゾーマトロープ、フェナキストスコープ、立体視、レイヨグラフ）、視覚と見ることの構造、光と映像の歴史の考察を経て、映像のより深い認識と表現へ向かう。 また、講義内容の理解を深めるために、実験やテーマについての小論文、コミュニケーション能力を養うためのプレゼンテーションも取り入れる。			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度(45%) 授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(45%)に加えて、課題への参加意識やコミュニケーション能力など(10%)で総合的に評価する。本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 見ることの構造	見ることとは何かから、遠近法による関係性の認識		
第2回 視覚構造(1)	視差、錯視、3Dなど視覚特性を利用した表現の考察		
第3回 視覚構造(2)	動画装置のさまざま		
第4回 光と視覚(1)	光の認識、光と色彩		
第5回 光と視覚(2)	光による映像表現		
第6回 映像における時間	時間の概念と映像における時空間		
第7回 映像と抽象表現(1)	抽象と具象、抽象表現の基礎 点・線・面が生み出す感情		
第8回 映像と抽象表現(2)	点・線・面による表現実践		
第9回 映像の抽象表現(3)	イメージの言語化作業(情報伝達のための文章作成とプレゼンテーション)		
第10回 映像と情報	映像、コンセプトを読み解く(映像作品を見て疑問点を見つけ出す)		
第11回 映像と情報	情報のデジタル化		
第12回 情報と情報デザイン	情報の組織化		
第13回 情報とコミュニケーション	情報の組織化から視覚化へ(4コマで視覚化する)		
第14回 作品と講評	映像作品の発表と講評		
第15回 映像論 まとめ	総論		
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 講義で得たことについて復習し、自分で実験、実践を試みる。			

[授業科目名] メディア論 (コミュニケーションとメディア)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本のメディアと限定することなく、グローバルデジタル化の変遷の渦中にいることで、その変化の詳細を検証する。現存のメディアがネット上の仮想空間に吸収され、そのメディアとしての性格も変化を余儀なくされる。そんなデジタル環境の変化の中から、不安なく人間が歓迎できる新しいメディアの盟主を探求・考察し、既存メディアとの共存共栄を検証しながらそれぞれの学生の‘メディア論’の構築を到達目標とする。			
授業の概要 放送、新聞、出版、広告、インターネット、アニメ、ゲームなど、19世紀に発達したメディアの形成の歴史に触れながら、現在の社会的本課と称されるマス・メディアというものの功罪を学ぶ。さらに、ソーシャルメディアとの融合を不可避とするデジタル化する既存メディアの性格の変化に伴い、人間や社会との関係、メディアインフラ、法律、モラル、ジャーナリズム、そして将来のメディアリテラシーについても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解と好奇心、探究心の提示（30%）、受講態度（40%）、試験レポート（30%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回. 過去のメディア、現在進行形のメディア、将来完了形のメディアの変遷 メディアとネットとの融合が生み出すものは 変化する「メディア」という性格、自分メディアの社会性とは 第2回. マス・メディアの役割と功罪 メディアリテラシーの基礎理論 第3回. 表現の自由（1）言論・表現の自由とは 第4回. 表現の自由（2）プライバシーの権利、知る権利 第5回. 表現の自由（3）著作権、芸術性とわいせつ表現 第6回. 現在のメディア性（1）ジャーナリズム論の理論化 第7回. メディアの未来（2）メディア格差、文字離れの実態 第8回. テキストメディアの現実と将来予測 第9回. 映像メディア（1）映像誕生から映画制作の現状 第10回. アニメーションメディア（1）アニメーションのグローバル席巻 第11回. 放送のメディア性（1）ネットとの融合 第12回. 放送メディアの支配力（2）ジャーナリズムはどのように生き残るか 第13回. インターネットの特性と既存メディアの関係 有名無実の「匿名性」 第14回. インターネットツールの拡大とメディアの住み分け 第15回. 試験レポート			
使用教科書 書籍「Seeing Voices」、「仮説の検証」、「アートと女性と映像」などを参考にする。			
自己学習の内容等アドバイス デジタル世代の視座をもとに、過去、現在、将来のメディアの性格、社会的使命の変化の源泉を探求する。日常的なメディアとの関係性に、恣意的違和感や不安を想定し、人間が歓迎する未来のメディアを検証する。			

[授業科目名] 認知心理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伊藤 君男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア学部に所属する学生にとって、「人がどのようにものを認識しているのか」についての知識を得ることは、各々の専門を深く習得するために役立つと思われる。本講義では、認知心理学が提供する知識を習得し、人間の認知機能についての理解を深めることが目標である。			
授業の概要 認知とは、人が自分をとりまく環境をどのように認識し、そこからどのような知識を、どのような方法で手に入れているのか、そして、どのように、それらの知識を使用し、判断しているのかを説明しようとするものである。本講義では、知覚・記憶・問題解決・推論などを中心に解説していく。			
学生に対する評価の方法 最終的におこなう試験 (50%)、授業時のレポート課題(30%)、平常の授業態度(20%)によって評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 本講義の概要 第2回 錯視と運動錯視 第3回 立体視 第4回 記憶のメカニズム 第5回 短期記憶と注意 第6回 長期記憶と検索 第7回 記憶の歪み 第8回 パターン認識 第9回 文脈効果と認識の歪み 第10回 問題解決 第11回 推論のメカニズム 第12回 推論の歪み 第13回 対人認知 第14回 ステレオタイプ 第15回 試験			
使用教科書 使用しない。参考書などは、講義中に必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 認知心理学に習得した知識を、講義内だけでなく、他の講義や日常生活の理解などに適用してみるよう、心がけるとよい。			

[授業科目名] 美学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 絵画、映像、音楽、空間造形（建築、都市）などの歴史的変遷を考察することで、東洋と西洋の認識の差異、表現方法の差異を認識し、グローバル化の情報環境における美とは何かを考えることを目標とする。			
授業の概要 東洋、西洋の代表的油画、浮世絵、建築作品、現代美術、映像を参考に取り上げつつ、美の概念、美の遠近法の解体と再構成の変遷を考察。また記号論、アフォーダンス理論を念頭に置いた情報の読み取りと構成を試みることで、アプローチする手がかりを獲得する。			
学生に対する評価の方法 受講態度(45%)、授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(45%)に加えて、コミュニケーション能力(10%)などで総合的に評価する。本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <インターネット編> 第1回 インターネット概論、HTML 復習 第2回 インターネット&Web ビジネスに必要な知識 第3回 EC サイトの現状、EC サイト分析 <インターフェースデザイン編> 第4回 インターフェースデザイン（1）－基本的デザイン技法 第5回 インターフェースデザイン（2）－認知心理学応用、デジタルデザイン 第6回 デジタルデザイン 第7回 カラーコーディネイト（1） 第8回 カラーコーディネイト（2） <サイトマネージメント編> 第9回 Web 制作（1）Web 制作フローの理解 第10回 Web 制作（2）サイト企画段階、サイト設計段階－サイトデザインアーキテクト 第11回 Web 制作（3）ユーザビリティ&アクセシビリティ 第12回 Web 関連法（1）著作権法 第13回 Web 関連法（2）IT 関連法 第14回 Web 制作（6）－企画書制作技法、プレゼンテーション技法 第15回 Web 制作（7）－Web 仕様書制作技法			
使用教科書 前期終了時に指示			
自己学習の内容等アドバイス セクションごとに課題を実施するので、授業後に用語などをしっかりと理解しておくこと。授業時間内で完成しなかった課題については、次週までに必ず仕上げておくこと。			

[授業科目名] 芸術英語コミュニケーション		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉見 かおる																														
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考																														
授業の到達目標及びテーマ テーマ：「芸術が果たす役割—今アートが訴えるもの」																																	
<p>本講義は、英語文献（写真、映像、絵画、建築、アニメーション、ファンタジー、デザイン等）を講読し、専門分野における用語や制作における方向性を明確にできる力を養うことを目標とする。また、本講義のテーマである「芸術が果たす役割」を考察する上で、特に写真（ジャーナリズム）、ドキュメンタリー（映画）、アニメーションという媒体が果たす役目に焦点を当て、その分野で活躍する現役アーティストの作品とそれが訴えるメッセージを追求する。芸術英語を習得しながら現代における「芸術の力」を探求したい。</p>																																	
授業の概要 <p>教材は講義の事前に配布し、講義内で内容の確認をおこなう。同時にそれぞれのメディア媒体を鑑賞しながら課題を深める。テストは講義で扱った内容について、またリサーチ課題は講義内容と関連したテーマを自由に選びこなしてもらうものとする。</p>																																	
学生に対する評価の方法 <table> <tr> <td>授業への参加態度</td> <td>15%</td> </tr> <tr> <td>テスト</td> <td>20%</td> </tr> <tr> <td>リサーチ課題</td> <td>25%</td> </tr> <tr> <td>学期末</td> <td>40%</td> </tr> </table>				授業への参加態度	15%	テスト	20%	リサーチ課題	25%	学期末	40%																						
授業への参加態度	15%																																
テスト	20%																																
リサーチ課題	25%																																
学期末	40%																																
授業計画（回数ごとの内容等） <table> <tr> <td>第1回</td> <td>講義概要説明、学生アンケート</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td><u>テーマ① 写真（ジャーナリズム）の力</u> * フォト・ジャーナリスト、“Days Japan” 編集長 広河隆一（日）から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>文献講読</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>文献講読・ディスカッション</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>*テスト1</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td><u>テーマ② ドキュメンタリー（映画）の力</u> * ドキュメンタリー作家 Linda Hattendorf（米）から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>ドキュメンタリー『ミリキタニの猫』（2006）鑑賞</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>文献講読</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>ディスカッション</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td><u>テーマ③アニメーションの力</u> * アニメーション作家、Michel Ocelot（仏）から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>アニメーション『アズールとアスマール』（2006）鑑賞</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>文献講読 *リサーチ課題の取り組み</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>文献講読</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>ディスカッション・まとめ</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>期末試験</td> </tr> </table>				第1回	講義概要説明、学生アンケート	第2回	<u>テーマ① 写真（ジャーナリズム）の力</u> * フォト・ジャーナリスト、“Days Japan” 編集長 広河隆一（日）から学ぶ	第3回	文献講読	第4回	文献講読・ディスカッション	第5回	*テスト1	第6回	<u>テーマ② ドキュメンタリー（映画）の力</u> * ドキュメンタリー作家 Linda Hattendorf（米）から学ぶ	第7回	ドキュメンタリー『ミリキタニの猫』（2006）鑑賞	第8回	文献講読	第9回	ディスカッション	第10回	<u>テーマ③アニメーションの力</u> * アニメーション作家、Michel Ocelot（仏）から学ぶ	第11回	アニメーション『アズールとアスマール』（2006）鑑賞	第12回	文献講読 *リサーチ課題の取り組み	第13回	文献講読	第14回	ディスカッション・まとめ	第15回	期末試験
第1回	講義概要説明、学生アンケート																																
第2回	<u>テーマ① 写真（ジャーナリズム）の力</u> * フォト・ジャーナリスト、“Days Japan” 編集長 広河隆一（日）から学ぶ																																
第3回	文献講読																																
第4回	文献講読・ディスカッション																																
第5回	*テスト1																																
第6回	<u>テーマ② ドキュメンタリー（映画）の力</u> * ドキュメンタリー作家 Linda Hattendorf（米）から学ぶ																																
第7回	ドキュメンタリー『ミリキタニの猫』（2006）鑑賞																																
第8回	文献講読																																
第9回	ディスカッション																																
第10回	<u>テーマ③アニメーションの力</u> * アニメーション作家、Michel Ocelot（仏）から学ぶ																																
第11回	アニメーション『アズールとアスマール』（2006）鑑賞																																
第12回	文献講読 *リサーチ課題の取り組み																																
第13回	文献講読																																
第14回	ディスカッション・まとめ																																
第15回	期末試験																																
使用教科書 <p>市販の教科書は使用しない。教材は事前に配布する。</p> <p>プリント教材（英字新聞・雑誌・インタビュー教材、映画スクリプト教材等）</p>																																	
自己学習の内容等アドバイス <p>予習復習を必ず進めてください。</p>																																	

[授業科目名] 西洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 百合草 真理子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
1. 人が芸術に対して何を求め、時を隔ててどのように考え方を変えてきたかを学ぶとともに、異なる時代の文化や社会を見る方法を知る。 2. 美術や視覚文化について自ら思考し、それを的確な言葉に直すことのできる表現力を養う。			
授業の概要			
15世紀のイタリア・ルネサンスから20世紀前半までの西洋美術の展開を、重要な芸術家、流派、時代を転換させた作品を取り上げて概観する。当時の政治・社会・思想的背景や作家の造形的な探求など、作品をめぐるコンテクストと結びつけながら、さまざまな時代の絵画や彫刻について理解を深めることで、芸術が人間にとてどのような意味を持っているかを考える。			
学生に対する評価の方法			
授業での小レポート40%、期末レポート60%。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回 ガイダンス 第2回 ルネサンス(1) 古代の復興 第3回 ルネサンス(2) ラファエッロ 第4回 ルネサンス(3) ヴェネツィアの絵画 第5回 ミケランジェロの芸術 第6回 バロック美術の時代 第7回 ロココから新古典主義へ 第8回 ロマン主義と写実主義 第9回 マネと近代絵画のはじまり 第10回 印象派の画家たち 第11回 セザンヌの絵画とその影響 第12回 後期印象派 第13回 象徴主義と世紀末美術 第14回 装飾美術とアール・ヌーヴォー 第15回 20世紀の美術			
使用教科書			
特になし。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。参考文献については講義の中で適宜紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス			
美術館や展覧会に訪れ、実作品と向き合う機会を多く設けてほしい。			

[授業科目名] 日本美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木下 稔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] スライド使用
授業の到達目標及びテーマ 美術の歴史は、美の殿堂でもあり、人間の生活の記録でもある。美術作品は、美しさを通して、我々に感動と興奮を覚えさせる。美術作品が、我々に呼びかけ、語りかける意味とその意味の関連について考察し、異なる時代に於ける美術の特徴、制作意識、技術的意味と意義など自ら理解できるよう指導する。			
授業の概要 本講では、特に平安・鎌倉時代の「やまと絵」、室町時代における「水墨画」及び近世初期、桃山から江戸初期に至る障屏画、近・現代の絵画を中心に、それぞれの様式上の特徴と変遷、その意味と意義、そして今日的意義を概説、考察する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、各授業項目の理解度（30%）、最終に実施する試験（50%）などで総合的に評価を行う。尚、出席率は3分の2以上を必要とする。特別理由の無い限り再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <ul style="list-style-type: none"> 第1回 講義内容の説明、そして造形美術の意味と意義について 第2回 造形美術との出会い、造形美術は如何にあるべきか 第3回 先史時代の美術　—その生活と文化— 第4回 奈良時代の美術、彫刻・工芸を中心に 第5回 平安時代の美術について、日本独自の美術様式の成立 第6回 「やまと絵」　—源氏物語絵巻を中心に、<u>小テスト</u> 第7回 鎌倉時代の絵画　—中国宋・元画と日本の絵画について— 第8回 室町水墨画と雪舟の世界 第9回 桃山時代の美術とその精神 第10回 桃山時代の美術　—永徳・等伯・友松を中心に— 第11回 光悦・宗達、そして琳派について　—その世界と時代思潮— 第12回 江戸時代初期における美術について、その流派と画家達 第13回 近・現代の美術、絵画を中心に（劉生・麿光・大觀・古徑・遊亀ほか） 第14回 評価試験 第15回 日本美術の精神、そして今後における造形美術の使命 			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じてその都度、文献資料の紹介と資料コピーを提供。 参考図書　山根有三監修『日本美術史』美術出版社 他			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を事前に知らせる。そして必ず質問事項を尋ね アドバイスする。			

[授業科目名] 東洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本はアジア文化圏の一隅を形成しており、古来この圏内のさまざまな文化を吸収することで独自の文化を形成してきた。この授業では日本に影響をおよぼしてきたアジア文化の歴史的展開について、特に美術的な観点から理解することを目標とする。			
授業の概要 広範な東洋美術の歴史について、中国・韓半島の絵画史、およびインドから中国・韓半島に及ぶ仏教彫刻史を概観する中で論じる。			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 北朝時代までの中国絵画（第1章①②） 第3回 中国の石窟寺院の仏教壁画（第1章③④） 第4回 隋・唐・五代の絵画（第1章⑤⑥⑦） 第5回 北宋時代の中国絵画（第1章⑧） 第6回 南宋時代の中国絵画（第1章⑨） 第7回 元代以降の中国絵画（第1章⑩⑪⑫） 第8回 韓半島の絵画（第1章⑬⑭⑮） 第9回 インドの仏教彫刻（第2章①②③） 第10回 中国の初期仏像（第2章④⑤⑥⑦⑧） 第11回 隋から宋代にかけての仏像（第2章⑨⑩⑪⑫） 第12回 韓半島の仏像（第2章⑬⑭⑮） 第13回 試験・正答解説 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 竹内順一監修『すぐわかる東洋の美術』（東京書籍）定価 2100 円 ISBN-10: 4808709635			
自己学習の内容等アドバイス 授業初回に通達するサイトから必要資料をダウンロードし、常に次回分を予習すること。ほとんどの学生にとって東洋美術史は予備知識のない領域なので、予習なしに授業を理解することは難しい。また復習もこまめに行うこと。膨大な情報量をまとめて復習できると思ってはならない。			

[授業科目名] 先端芸術論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間の能力と先端技術を藝術によって融合させ、新しい文化と共生関係を創造し続けている現代の藝術は、従来の絵画、デザイン、工芸、彫刻という表現領域では推し量れないものになってきている。そこで来るべき時代意識に即した様々な藝術表現を探り、広く社会に目を向けた創造とはどのようなものがあるかを知り、視野を広げることを目標とする。特に現代美術の終焉以降のアート有り様を中心に、様々な場で発表されている変容するアート表現としてのドキュメントを見ながら解釈し、ポスト・アートとして呈示する。			
授業の概要 テクノロジーの発展において現在の藝術は、今までの価値観・文脈の延長上では捉えきれない表現内容・方法を取っており、様々な展開を今現在見せている「アート」の具体的な作品を多数とりあげ、新たな創造的活動を見つめていく。			
学生に対する評価の方法 試験期間中に授業内容に関する題目でリポートを作成し、その内容で評価する。 受講態度をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第一回 「藝術表現とはなにか」～ コンテクストとアートワールドの逸脱 第二回 「モダンアート」～ 創作上の自由宣言・主義主張 / 個人の自律という幻想 第三回 「前衛って何?」～ お藝術でなければ何でもいい 社会の文脈を問うその質があつた時代 第四回 「モダンアートの終焉の始まり」～ 複製の環境のなかで / 主体でなくなる 第五回 「大衆音樂」～ ROCK MUSIC 百花撲滅 / ポップと箱(制度)からの脱出 第六回 「身体」～ 他者としての私 / 汗・臭いがない漂白世界と記号化する世界 第七回 「リアリティからリアルへ」～ 日常と世界の彼方 / 2001-9. 11 以後 第八回 「日常のマイノリティ」～ 大袈裟でないリアルなもの / 透明な日常 第九回 「他者との交わり」～ 知らないものとの出会い / 不気味さと興味 第十回 「情報を経験する」～ データーベースの憂鬱を超えてテクノロジーと制御不可能な私 第十一回 「錯綜する複数のナラティヴ」～ 物語の破綻からものかたる 第十二回 「メディアがコンテンツ」～ 透明化するメディアの前で 第十三回 「ニュー・メディア」～ 新たな画像～ 可能性としてのメディア 第十四回 「再び、アートとはなにか」～ アートは必要か 2011-3. 11 から見つめる 第十五回 「Alter Modern」～ もうひとつの基軸 / クレオール化・フィクションとしての正当性			
*現代におけるアート・創造的活動で人は何をするのかを、見つめていきます。			
使用教科書 参考文献「ニュー・メディアの言語—デジタル時代のアート」(レフ・マノヴィッチ)、「藝術の陰謀—消費社会と現代アート」(ジャン・ボーデリヤール)			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等は授業後でもよいので必ず確認すること。			

[授業科目名] アントレプレナー I (会社設立)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井上 芳郎
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家（新しい事業を起こす人）と企業家（既存の組織を変革する人）の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会（ビジネスチャンス）を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、起業家及び変革に必要なプロセスについて概説したうえで、自らの事業計画作成を通じて、起業に際して求められる条件を考察します。			
授業の概要 企業経営を理解するには、企業経営を取り巻く環境を理解したうえで企業経営を評価する理論的な枠組みを駆使することが必要です。この授業では特にアントレプレナーのマインドを意識しつつ企業経営の歴史的変遷を確認するとともに、企業経営を理解する上で必要な切り口（経営戦略、マーケティング、ビジネスシミュレーション等々）を説明します。その上で、学んだ知識をビジネスプランに反映させる方法を体験してもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の授業参加態度と発言（50%）、ビジネスプランについてのレポート（50%）により評価する。 受講者数によってはグループによる演習を行う。その場合は、グループワークの成果も評価に加えることがある。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：日本のベンチャー創業の現状と課題／日本における開業率の低下の現状と、これに伴う課題について学ぶ 第2回：第1回の続き 第3回：日米のベンチャー創業の比較分析／ベンチャー先進国米国との比較を通じて、日本の置かれた現状と課題について学ぶ 第4回：経営に関わる理論／アントレプレナーに必要な経営理論を学ぶ 第5回：第4回の続き 第6回：事例を通じた経営理論の理解 第7回：第6回の続き 第8回：マーケティングに関わる理論 第9回：第8回の続き 第10回：事例を通じたマーケティング理論の理解 第11回：前回の続き 第12回：シミュレーションの枠組みと事例研究 第13回：ビジネスアイデアの発想法／ビジネスアイデアを見つけだす際の着眼点について学ぶ 第14回：演習 第15回：演習と発表			
**本科目は集中講義です。項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進度及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがあります。			
使用教科書 関西ベンチャー学会編「ベンチャー・ハンドブック」ミネルヴァ書房			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名] アントレプレナーII（会社運営）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井上 芳郎
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家（新しい事業を起こす人）と企業家（既存の組織を変革する人）の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会（ビジネスチャンス）を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、アントレプレナーIの受講者を対象に、新たに開始した事業を順調に成長させるために必要となる専門的な知識を、事例研究と演習をもとに学びます。			
授業の概要 現実の企業経営では事業の発展段階に応じて経営課題も多様化し、それに応じた対応が求められます。この授業では、こうした経営課題の中から特に重要とされる経営戦略と市場開拓、マーケティング活動に焦点をあてて、基本的な知識について講義した後に実在する企業経営を評価します。その上で、各自が事業戦略の策定やマーケティング計画の作成におこなってもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の参加態度（50%）、戦略とマーケティング計画に関して作成したレポート（50%）により評価する。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：事例を通じた経営戦略の理解① 第2回：事例を通じた経営戦略の理解② 第3回：事例を通じた経営戦略の理解③ 第4回：事例を通じたマーケティング戦略の理解① 第5回：事例を通じたマーケティング戦略の理解② 第6回：事例を通じたマーケティング戦略の理解③ 第7回：発展段階に応じた経営理論の適応① 第8回：発展段階に応じた経営理論の適応② 第9回：ビジネスプランの作り方① 第10回：ビジネスプランの作り方 第11回：グループによるビジネスプラン（演習） 第12回：第11回の続き 第13回：ビジネスプランのプレゼンテーション① 第14回：ビジネスプランのプレゼンテーション② 第15回：個人別ビジネスプランの作成 **この科目は集中講義です。よって、項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進度及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがあります。			
使用教科書 関西ベンチャー学会編「ベンチャー・ハンドブック」ミネルヴァ書房			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。また、ビジネスプラン作成の参考のために、実際の企業の活動に注目してください。			

[授業科目名] 映画鑑賞・評価		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画を自分自身の眼で見、自分自身の考えで読み解く事を目的とし、映像の表現者を志す者、又は生涯にわたり映画から多くの糧を得ようとする者に、よく視ることがよく表現することの第一歩であることを理解してもらう。と同時に、安易に量産される商品としての映画と、映像表現の精華であり時の重圧に耐えうる作品としての映画を見極める鑑賞眼を養う。			
授業の概要 映画とはどうゆうメディアか。それを理解するための構造分析、思考、映像表現等の講義と、実際の映画上映とその研究解説を主軸とする。上映する映画は年代、国籍を問わず広範囲に選択されるが、必ずしも名作と言われるものにかぎらず、映画としての充実度が重視される。また上映される作品は毎年変わる。限られた数本の映画ですべてを語る事は出来ないからである。			
学生に対する評価の方法 中間、期末の2回の試験で評価する。 試験は、映画を上映してその後、その場で論文を作成するもので、当日まで作品題名は伏せるので、学生独自の視点と思考が重要視される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 映画その構造、原理、社会性、人間に与える影響 人はなぜ映画を観たがるか? 第2回 講義 映画的表現とはなにか、映画に映っているなにに注目すべきか? 自作CMの表現を例に解説。 以後3回から14回は映画の上映と解説を行うが、すべて上映作品は当日発表する これは先入観なしで映画と向き合ってもらうためである。従って、ここには前年の授業内容を参考として紹介する。 (2013年度の内容) 第3・4回 「殺人の追憶」(韓国)ポン・ジュノ 真実と闇の対立構造、未解決事件にみる不合理性、 複眼(二人の刑事)は時代との距離をはかる。 第5・6回 「海外特派員」(アメリカ)アルフレッド・ヒッチコック 場から場へと移動するサスペンス、映画の空間表現 当時の様々な技巧を駆使した巨匠の名人芸 第7・8回 「シベールの日曜日」(フランス)セルジュ・ブルギニヨン 中間試験 正像と歪像、偏見と共感の悲劇。 静謐な映像美の心理的深層。 第9・10回 「雨に唄えば」(アメリカ)スタンリー・ドーネン 半世紀以上の時を凌駕する“映画芸”的神髄。 映像、音楽、踊り、美術、すべてが映画に昇華する。 第11・12回 「そして船はゆく」(イタリア)フェデリコ・フェリーニ 美術としての映画造形とカリカチュア性。 映画におけるリアリティーとは何か。 第13・14回 「羅生門」(日本)黒澤明 期末試験 映像の記号性と意味 俳優の身体表現と視線の劇、そして変容。 第15回 講義 映画のDNA 映画誕生に至る経緯とその独自性 「月世界旅行」ジョルジュ・メリエス			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の性質上特に予習は必要ないが、復習は重要である 授業中に参考として紹介された映画、資料は必ず鑑賞、参照しておくこと。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習 (フォト)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小山 智大・村上 将城
[単位数] 2	[開講期] 1年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像の原点である写真を通して表現する事の楽しさを身につける。写す楽しさ、写るおもしろさ、被写体を観察する大切さ等を知り、レンズを通して自己表現を実感させることで写真の本質を理解する。基礎的な撮影技術の修得と写真を見る力、読む力、選ぶ力を学ぶ。			
授業の概要 35 ミリフィルム 1 眼レフカメラ (NikonFM10) を使用しながら前後期を通して課題に取り組み、繰り返し撮影演習を行うことで基礎的な撮影技術を修得する。 前期は撮影は授業時間外で自由に行い、撮影された全てのプリントを机上に並べ、受講者全員で鑑賞し見る力、読む力、選ぶ力を身につける。A2 上にレイアウトし自己表現の大切さを学ぶ。 夏期休暇中は課題として、「一人旅」を撮影する。 最終的に前後期に繰り返し行った A2 上のレイアウトを発展させた My Interest (私の関心事) を制作する。			
学生に対する評価の方法 課題 My Interest の評価 (40%) 授業への参画態度 (20%)、夏期休暇課題の作品 (20%)、校外撮影実習時の作品 (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 1 : 総論、前期課題の My Interest の説明 2 : NikonFM10 の使用説明および初步的撮影知識の修得。 ネガカラー 1 本で遠景 / 中景 / 近景を撮影し、次回の授業にプリントを持参。 第2回 1 : レンズの画角について、露出について、フィルムの種類および感度について撮影知識の修得。 2 : 学内撮影実習作品発表 / ギャラリー。 全体作品講評。次週への課題説明 (テーマは自由で学外撮影自習作品ネガカラーで 1 本撮影)。 ポートレイトについて 第3回 1 : ポートレイト作品 / ギャラリー。セレクト後、講評。 2 : 光について。光の種類 (デーライト、ストロボライト、タングステンライト他)、性質について 絞り、シャッタースピードの組合せなど撮影知識の修得。 第4回 1 : 後期課題 My Interest のレイアウト練習。A-2 上へ仕上げ。 2 : 夏期休暇課題の説明 (一人旅)。前期終了 第5回 1 : 夏期休暇課題作品発表 / ギャラリー / レイアウト演習。絞り、シャッタースピードの復習。 2 : 作品講評。後期課題の映像の絵本の説明。 第6回 1 : 校外撮影実習作品発表 / ギャラリー。レイアウト演習。 2 : 作品の講評。後期課題「My Interest」の説明。 第7回 1 : 「My Interest」制作 / 講評。 2 : 同上 ※上記以外に校外撮影実習も行う。			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 隔週で 2 組に分かれての授業です。授業と授業の間隔がながいので要注意。(4週) その間に課題の撮影と自主的な撮影を積極的に行ってください。映像を学ぶ学生なので常に光りを感じながら日常生活を過ごす事。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習(映画・ビデオ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 横井 照政・吉野 真理子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 「企画」「撮影」「編集」という映像制作におけるプロセスを理解するとともに、柔軟で独創的な発想力および作者の意図が的確に伝わる映像技法の基礎を習得することを目標とする。			
授業の概要 映像を制作する上で必要な最低限の技術（ビデオカメラ・編集ソフトの使用方法など）を習得したのち、個人制作課題として30秒～45秒程度の『自己PRビデオ』を各自企画し、制作する。			
学生に対する評価の方法 個人制作課題の作品評価（70%）、授業態度（30%）			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンス ・個人制作課題の課題説明 ・撮影の基礎知識 <p>第2回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・撮影実習 <p>課題制作に向け、ビデオカメラの操作方法をマスターする</p> <p>第3回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・編集実習 <p>課題制作に向け、編集ソフト Premiere Pro の操作方法をマスターする</p> <p>第4回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人制作課題の制作 <p>企画／コンテ制作、および企画チェック</p> <p>第5回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人制作課題の制作 <p>撮影／編集／MA</p> <p>第6回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人制作課題の制作 <p>撮影／編集／MA</p> <p>第7回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人制作課題の試写および講評 			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 映像作品にふれる機会を増やすと同時に、制作サイドに立った視点での観察・評価を心がけること。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習 (コンピュータグラフィックス)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人
[単位数] 2	[開講期] 1年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 写真、映画、TV、WEBあるいはインスタレーションなどに、現代では道具としてのコンピュータは不可欠です。そのコンピュータを用いた映像表現の基礎を培います。空間と時間の技術的制御と映像アート表現の第一歩を目指します。			
授業の概要 CGの基礎としてDraw系とPaint系の2Dグラフィックスアプリケーションソフトを用い、ペーパーメディアにおける平面構成や、ビデオ映像における色や形の構成を習得します。			
学生に対する評価の方法 提出作品および目標達成度で総合的に実施します。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要と計画、コンピュータグラフィックスのオリエンテーション Illustratorのインターフェイスと基本操作 塗りと線、ペンツール(ベジェ曲線)のハンドリング、レイヤーワーク オブジェクトの変形(移動、回転、拡大縮小、リフレクト等) 第2回 音楽を2D平面に表現する1 音のイメージの視覚化 平面上におけるリズムとメロディーの表現 第3回 音楽を2D平面に表現する2 ペーパー出力、プレゼンテーション・講評 第4回 2Dモーショングラフィックス概要 IllustratorデータからPhotoshopデータへの変換、 画像サイズ、カラーモード、画像圧縮 モーション設定(サイズ、回転、移動、モーションパス、不透明度) キーフレームによるサウンドとの同期 第5回 2Dモーショングラフィックスの制作1 グラフィック素材とサウンド素材の準備 Adobe Premiereのインターフェイス 第6回 2Dモーショングラフィックスの制作2 モーションタイポグラフィの制作 第7回 2Dモーショングラフィックスの制作3 QuickTime書き出し プレゼンテーション・講評			
使用教科書 授業の中で適宜提示			
自己学習の内容等アドバイス 周囲の様々なもの観察して、色彩の用い方、形のありかたなどを常に考える習慣を身につける。形の美しさ、動きの面白さ、その幾何学的造形や、時間軸の捉え方をつねに分析の視点で考える。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習（サウンド）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 悅久
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ この演習授業では、音による1分間のオリジナル作品を制作する。作品制作の過程を通じて、録音機器やDAW（デジタルオーディオワークステーション）の操作方法、音を表現するための基礎的なテクニックを習得する。作品に使用する音素材は、全て各自が録音する。これらの素材を用いて、音を時間軸上に、また空間的に構成、構築する力を身につけ、さらに各自がオリジナリティーを見出し、個々のアイデアを実現する事を授業の目標とする。			
授業の概要 この演習授業では、日常で耳にする音や生活に関わる音、能動的に発せられる声などの音を採取し、それらを素材に作品制作を行うことで身近にある音に着目し、音が発せられる理由や音が発せられる背景にある視覚的要素など、音についての理解を深める。また、自ら採取した音を構成・構築し、作品の制作意図を具現化する事で音を扱うための技術を習得し、音を表現するための概念を把握する。 データをバックアップするため、USBメモリーや外付けHDDなどの外部ストレージを持参すること。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 50%，課題提出 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） <ul style="list-style-type: none"> 第1回 音の仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・デジタル音響編集に必要な、音の知識を身につける。 ・録音機器を用い、制作に必要な音素材を採取する。 第2回 コンピューターを用いた音の操作 <ul style="list-style-type: none"> ・波形編集ソフトウェアを用いた波形編集の基礎を習得する。 第3回 マルチトラック編集 <ul style="list-style-type: none"> ・DAWソフトウェアを用いマルチトラック編集の基礎を習得する。 第4回 音の空間配置 <ul style="list-style-type: none"> ・ボリューム、パンのオートメーションやイコライザーなどのエフェクタを使い、音を加工した効果や表現、音の空間配置に留意した編集方法を身に付ける。 第5回 オリジナル作品のコンセプトシート作成 <ul style="list-style-type: none"> ・コンセプトシートを作成し、制作意図を明確に捉える。 第6回 作品制作 第7回 制作発表と講評 			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 一つ一つの事柄を習得する際に、様々な方法を試すことが機材やソフトウェアの機能を深く理解することにつながる。限られた時間ではあるが、なるべく多くの方法や手段を試み、様々な発見を通じて自己の想像力を磨いて欲しい。また、日々生活する中でたくさんの音が存在する事に気付き、音の聴こえ方や音が持つ背景について観察することで自分が音の何に興味を馳せるのかなど、自分自身と音との関係性を常に意識することが自己表現を発展させるのに多いに役立つ。 授業の中ではたくさんの専門用語を学ぶので、ノートやメモをとるなど各自工夫して確実に覚えるように。			

[授業科目名] 映像メディア基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬口 雅人
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 多様な映像のすべてのカテゴリーを学ぶのが当学科カリキュラムの特長である。4年間の映像教育のプロローグとして、映像メディア学科教員の紹介も含め、学科基本コンセプトを多様に伝える。序曲として、もう一つの特長である最前線のプロフェッショナル教員陣により、各メディアの最も重要であり最先端の部分を紹介し、幅広い映像メディアの基礎と未来を見通す力を身につける。			
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> 各メディアの教員陣が、それぞれのカテゴリーの基礎と先端の表現を紹介する。 多様な映像世界をオリジナリティあふれアーティスティックに表現をする「映像メディアマトリックス」を制作する。 			
学生に対する評価の方法 映像メディアの多様性研究制作「映像メディアマトリックス」作品			
授業計画（回数ごとの内容等） <ul style="list-style-type: none"> 第1回 総合的な映像メディア論、[映像メディアマトリックス]オリエンテーション 第2回 アートとしての映像概論 第3回 写真の基礎、銀塩のしきみ・暗室のプロセス 第4回 デジタル写真の現在と未来 第5回 TVの世界の多様な要素1 第6回 TVの世界の多様な要素2 第7回 TVの世界の多様な要素3、[映像メディアマトリックス]構築 第8回 映画概論-1 第9回 映画概論-2 第10回 CG・コンピュータの歴史と未来 第11回 CGの基本概念 第12回 映像にとってのサウンド 第13回 サウンドアートとプログラミング 第14回 映像基礎のまとめ 第15回 [映像メディアマトリックス]講評 			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 日頃から幅広く様々な映像メディアに積極的に触れ、その分析を試みる。そして自分ならではの表現を常に考える習慣を身につける。			

[授業科目名] 人間研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西宮 正明・光 幸國
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 必修	[備考] 新聞、公共ポスター制作
授業の到達目標及びテーマ 現在、人間性の喪失が著しい。社会人の基本として、ディベートを重ね、考察しながらテーマを決定し、人間研究新聞、公共ポスター制作を行う。その過程において芸術教育にマッチングさせながら、自分とは何か、人間とは何か、社会とは何か、を深く考察探求する姿勢や独創性等を修得し、メディア人として、人間としてのバックボーンを育てる事を目的とする			
授業の概要 世界的に若者達の活字離れが危惧されて久しい。共同での新聞制作を通して時代の風潮に流される事無く、主体的に考察探求し、他人の考えを知り、現代社会の問題、自分達の問題をまとめ上げるコミュニケーション能力、企画力、指導力、創造性を持った人間形成。又公共ポスター制作を通して、如何に言語を説明的でなくインパクトのある映像イメージとして伝えるかをテーマに独創的発想の出来る知的メディア人の育成			
学生に対する評価の方法 小論文「私の人間研究」を一枚のイメージ・フォトと共に決められた用紙（アート紙A4）で提出 12グループに分かれ人間研究新聞、公共ポスター制作を行い、グループ研究の修得			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回人間研究概論（西宮正明、光 幸國） 人間研究新聞、公共ポスターについて 受講生を11グループに分け、デスク、サブデスク2名を選出 11グループより編集委員を選出（編集長1名、副編2名、編集委員8名） 第2回編集委員による現代の問題点についてディベート 第3回グループ別公開ディベート 第4回グループ別公開ディベート 第5回グループ別プレゼンテーション（テーマ決定） 第6回各グループ調査、取材、原稿作成、編集 第7回各グループ調査、取材、原稿作成、編集 第8回各グループ調査、取材、原稿制作、編集、編集委員会紙面構成、課題「私の人間研究」 第9回各グループ原稿構成プレゼン、課題レポート「私の人間研究」提出 第10回各グループ原稿構成プレゼン、 第11回各グループ原稿構成プレゼン 編集委員会編集、各グループ公共ポスター制作 第12回各グループ原稿構成プレゼン、各グループ公共ポスタープレゼン及び制作 第13回記事完成・編集委員による紙面構成発表、公共ポスター最終プレゼン印刷入校 第14回新聞印刷入稿、ポスター完成・発表、レポート「私の人間研究発表」 第15回新聞印刷上がり、特集ポスター印刷上り、新聞、ポスターについての検証、配布先作業 上記の基本的なワークに加えて、毎週の頭に、その時々のライブな時事、ニュースをテーマに学生達と話し合う、10分程の時間を持つ事を重要な要素としている。			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 一般新聞の購読、日々世の中の問題に興味を持ち考える事			

[授業科目名] ドローイング		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 小笠原 則彰・松田 友宏
[単位数] 1	[開講期] 1年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 自分の頭の中でイメージする世界を相手により明確に伝達するためには、スケッチやイメージボードなどに像を描くこと、即ち2次元に置き換えられた図像を容易に用いることができる望まれる。そのためにも、自らイメージする空間と人物を、的確に素早く描写できる力を身につけることを目標とし、具象的描写能力を養う。また、三次元空間を二次元に変換するだけでなく、二次元から三次元とへと再変換するための構造把握としての力を、パースペクティヴ(二次元における三次元的イリュージョン)描写を通して養う。			
授業の概要 三次元空間を二次元に変換して描写する力として、まずは基本的遠近法を学ぶ。その上で、空間に配置される個々の要素としての人物やオブジェを多視点で捉え描写できるドローイング実践を積む。また、光と影の描写を通して、物体の質感を捉えることができる実技を行っていく。			
学生に対する評価の方法 制作課題(80%)、授業態度(20%)等で総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 ドローイング授業内容の概要と目的～記憶にある形の描写と記録としてある記号の描写を通して + 平面造形として画面構成(点・線・面という要素と構造について) 【空間のプロポーション素描(パースペクティヴの修得)】 第2回 遠近法1 立方体・円柱・球体と地平線 第3回 遠近法2 地平線と消失点 第4回 遠近法3 オブジェクト描写(ペットボトル・椅子など) 第5回 遠近法実践1 教室風景描写 垂直線と水平線のプロポーション把握 第6回 遠近法実践2 建物描写 建造物との関係 <テスト制作課題1> 第7回 人体描写(骨格・筋肉・関節による構造とプロポーション・重心)から手・手首の構造と描写1 第8回 手・手首の構造と描写2～足・足首の描写 第9回 顔より部分として～眼の構造と描写 第10回 顔より部分として～鼻と口の連続する構造と描写 第11回 頭部(頭と首・肩・鎖骨・胸部のバストアップ)の構造と描写 第12回 頭部描写 <テスト制作課題2> 第13回 人体構造 間接位置とプロポーション、重心軸の把握 第14回 様々なポーズ描写 第15回 全身像ポーズ描写 <テスト制作課題3>			
使用教科書 参考資料 「マンガ描こうよ」総集編 廣済堂出版			
自己学習の内容等アドバイス 白い紙と鉛筆さえあれば、いつでもどこでも描くことはできる。億劫がらず、積極的に手を動かすこと。			

[授業科目名] グラフィックデザイン I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 瀬口 雅人・伊藤 明倫
[単位数] 1	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ クリエイティブな映像表現にとって色や形などのデザイン能力が欠かせない。グラフィックデザイン I ではデザインの基本である色彩・平面構成など効果的な表現方法を体験的に学び、総合的なデザイントレーニングを行うとともに、デジタルデザインツールである Adobe Illustrator の習得もめざす。			
授業の概要 グラフィックデザインの基礎である平面構成や、色彩、タイポグラフィなどを体系的・実践的に学びながら、さらにどのように考えて作品制作したのか、自分の作品やその考え方あるいは自らの視点について発表出来る力を養う。			
学生に対する評価の方法 授業態度(20%)、各課題への取り組み方(20%)、提出作品(60%)などで総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 グラフィックデザイン概要、色と形 第2回 色彩構成1 色の三属性・混色・対比・色の感情などによる色彩構成 第3回 色彩構成2 色の平面分割による四季の表現 第4回 色彩構成3 色の平面分割による四季の表現 発表・講評 第5回 タイポグラフィ1 文字から発想する視覚的アプローチによるイメージ表現 組版を意識した情報構成・エディトリアルの表現 第6回 タイポグラフィ2 文字から発想する視覚的アプローチによるイメージ表現 組版を意識した情報構成・エディトリアルの表現 発表・講評 第7回 小型グラフィック構成 タイポグラフィを意識したペーパーメディアデザイン			
使用教科書 Design Basic Book 【第2版】はじめて学ぶ、デザインの法則 生田信一著 ISBN978-4-8610-0695-1 出版社: ビー・エヌ・エヌ新社			
自己学習の内容等アドバイス 授業で学んだ内容を、日常生活でも自分なりの視点で観察・分析してみること。			

[授業科目名] グラフィックデザインⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 瀬口 雅人・伊藤 明倫
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 意思や思考、概念や論理を視覚化することがグラフィックデザインの基本概念である。ペーパーメディアにおけるDTP(デスクトップパブリッシング)の方法論を学び、デジタルプロセスにおけるグラフィックデザインの可能性を追求する。			
授業の概要 前期グラフィックデザインⅠで学んだ平面基礎書形をベースに、実践的な作品制作を行う。			
学生に対する評価の方法 授業態度(20%)、各課題への取り組み方(20%)、提出作品(60%)などで総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 視覚化のためのコンセプトメイク1 第2回 視覚化のためのコンセプトメイク2 第3回 シンボルマークデザイン 第4回 タイプフェイスの検討とコーポレートカラーの策定 第5回 DTPの基本概念、ペーパーメディアデザイン1 Adobe IllustratorとAdobe Photoshopの連携 第6回 ペーパーメディアデザイン2 ポスターデザイン 第7回 ペーパーメディアデザイン3 ポスターデザインのプリントアウトと発表・講評			
使用教科書 Design Basic Book【第2版】はじめて学ぶ、デザインの法則 生田信一著 ISBN978-4-8610-0695-1 出版社 ビー・エヌ・エヌ新社			
自己学習の内容等アドバイス 授業で学んだ内容を、日常生活でも自分なりの視点で観察・分析してみること。			

[授業科目名] コンピュータリテラシー演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 齋藤 正和
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ (Mac OSX を前提とした) コンピュータリテラシー基礎と下記の知識と技術の習得を目標とする。 ・デジタルグラフィックス (ベクター/ビットマップ) ・デジタルムービー			
授業の概要 映像メディア学科で行う作品制作及び研究に必要不可欠と思われる基礎的な知識／技術のレクチャーを「リテラシー」として位置づけ講義する。(※「リテラシー」とは「識字能力、読み書き能力」を指す)			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度 授業内で提出される課題、期末試験などで総合的に判断する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 基礎リテラシー1 導入、ハードウェア、ソフトウェア 第2回 基礎リテラシー2 Mac OS X、デジタルデータ、ネットワーク 第3回 ベクターグラフィックス1 Illustrator I 第4回 ベクターグラフィックス2 Illustrator II 第5回 ベクターグラフィックス3 Illustrator III 第6回 ベクターグラフィックス4 Illustrator IV 第7回 ビットマップグラフィックス1 Photoshop I 第8回 ビットマップグラフィックス2 Photoshop II 第9回 ビットマップグラフィックス3 Photoshop III 第10回 ビットマップグラフィックス4 Photoshop IV 第11回 ベクターグラフィックスとビットマップグラフィックスの連携・課題制作 第12回 デジタルムービー 導入、Premiere I 第13回 デジタルムービー Premiere II 第14回 デジタルムービー Premiere III 第15回 期末試験			
※授業の進行状況を見て適宜進めます。			
使用教科書 特に指定しない。 適宜資料を提示・配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 独立した授業として捉えずに、他の授業と関連づけて取り組むように意識すること。			

[授業科目名] 映像芸術概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近現代美術の台頭と時を同じくして生まれた映像メディアの世界では、美術家、音楽家たちのアヴァンギャルト精神によって実験的表現が試みられ、映像分野における芸術が花開いた。本講義では、こうした映像芸術の歴史的変遷を追いつながら映像作品を鑑賞し、独自の表現世界を確立するための足がかりを築くことを目標とする。			
授業の概要 映像表現のアグレッシブな試みは、デザイン、CM、サイバースペースに至るまで多大な影響を与え続けている。本講義では、現代美術とリンクしながら発展した映像作品を中心に幅広く鑑賞し、作品の生み出されたストーリーを追うだけにとどまらず、作品がつくられた社会背景、作品を裏付ける哲学、美学、映像言語など、作品に内在する情報の読み取りを実践し、授業ごとに小論文を提出する。			
学生に対する評価の方法 ①受講態度 (評価45%) ②授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(45%) ③映像作品鑑賞への参加意識やコミュニケーション能力など(10%) 以上3点から総合的に評価する。なお本講義では再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 毎回、さまざまなテーマを設定し、それについて小論文を提出する。 第1回 映像のはじまり 被写体の探求から、映像の表現へ。 第2回 アートと映像 (1) 映像のシユールレアリズム。多様な視点によるショットの構成 第3回 アートと映像 (2) クレショフ、エイゼンシュテインの映像言語。 第4回 映画の主権 独自のスタイルを求めて。純粹映画と絶対映画 第5回 イメージと現実 (1) ドキュメンタリーとネオアリアニスモ 第6回 映像と音楽 オペラを背景としたイタリアンネオ・リアリスモ 第7回 映像の潮流 (1) さまざまなイズム 第8回 映像の実験 (1) ベラ・巴拉ージュの表現論 映像による身体表現 第9回 映像の実験 (2) アヴァンギャルドと実験精神 第10回 映像の実験 (3) トータルメディア、トータルシアター 第11回 新しいメディアと映像 (1) 映像メディアとネットワーク ビデオの登場 第12回 新しいメディアと映像 (2) ビデオアート第2世代 ビル・ビオラ以降 第13回 情報と空間 映像と空間表現 インスタレーション世代 第14回 情報の発掘 情報を発掘するまなざしとキュレーション 第15回 情報の再構成 情報の作品化			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス MLCに収蔵されている映像作品をできるかぎり多く見て、多様な映像言語に馴れる。			

[授業科目名] アートとしての数学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大内 雅雄
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ※教養一般開放科目
授業の到達目標及びテーマ 映像、音響、造形などのアートは、物を作るための手作業や、身近な自然現象の観察などにおいて、数学とも、通底している。この授業では、手作業や実験観察を通して、アートと数学の結ばれ方に気づき、新たな表現技法を生み出すことを目指す。 講師の話しを聞くだけでなく、実際に手を動かし創意工夫する経験を多く積むことを促し、学生が今後のアート作品制作において、数学や自然科学との自分なりのかかわり方の糸口を見つけてもらうことを、目標とする。			
授業の概要 具体的なテーマは、(1)映像=(光と影の造形と運動)の実験的試み (2) 紙の造形と数学 (4) 形と比と数列 (黄金比とフィボナッチ数列など)。 数学的な作業として必要なのは、最低限で、比例計算や倍率計算と、紙折りによる作図などである。小数計算は 電卓を使ってできればよい。			
学生に対する評価の方法 (1) 授業内容を基にした工作作品の提出。 (2) 授業であつかった数学的内容についての筆記試験。 (1)、(2)を総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 暗い部屋で水面と光が壁や天井に映し出す映像を見る。反射、屈折、虹などの現象。 第2回 ピンホールカメラとレンズカメラを作り、カメラの光学的原理の基礎を知る。 第3回 ハーフミラーを用いた万華鏡等の実験と制作。 第4回 シャボン膜による球面鏡やシャボン膜の性質の実験。 第5回 針金に樹脂膜を張らせて作る形。 第6回 プリズムやレンズによる光の屈折と虹の観察。 第7回 一定倍率で小さくなる同じ形の図形を一定配置で並べるとどんな形が現れるか。対数螺旋。 第8回 紙で作る対数螺旋。ビデオカメラのモニター画面撮影で生まれる図形。 第9回 紙の編み込みが生む形。 第10回 紙の編みこみの制作と工夫。 第11回 松かさやヒマワリの花とフィボナッティ数列。 第12回 フィボナッチ数列で葉や花を描く。数列から作る音楽や図形。 第13回 黄金分割について。ペンタグラムと魔よけ。結界の生む造形と物語。 第14回 提出作品の講評。本期授業のまとめと補足。 第15回 数学内容に関する筆記試験。			
使用教科書 使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で触れたことを、身のまわりに見つけ出したり、ヒントにして何か作り出せないか、試してほしい。 授業で配布するプリント類は、次のURLにも載せる。 http://homepage1.nifty.com/haniu/nuas/			

[授業科目名] 著作権		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小池 保夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 小泉元首相が2002年の施政方針演説で知的財産立国を宣言して以来、知的財産を核とした産業界、大学、行政の連携も積極的に進められており、技術系、事務系を問わず、現代社会で活動する者にとって知的財産についての素養は必須と考えられています。そこで、本講義では、文化的創作物である著作物を保護する著作権の概要を理解してもらうことを目的とする。			
授業の概要 知的財産法における著作権法の位置づけを解説するとともに、著作権の保護対象、著作権の主体、権利内容、著作権の制限など著作権制度全体の仕組みについて、質疑応答を取り入れ、わかりやすく解説する。			
学生に対する評価の方法 毎回配布する出席カードの記入内容、問題意識、受講態度及び毎回課す授業内容に関するレポートを総合的に評価する。 本授業は、期末試験及び再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 知的財産法の概要 第 2回 著作物（1） 第 3回 著作物（2） 第 4回 著作者 第 5回 著作者人格権 第 6回 著作財産権 第 7回 著作者隣接権 第 8回 著作権の制限 第 9回 著作権の侵害、 第10回 特許権、実用新案権（1） 第11回 特許権、実用新案権（2） 第12回 意匠権 第13回 商標権 第14回 育成者権、不正競争防止法 第15回 おわりに			
但し、上記の授業計画は、受講生の質問、その回答を授業中に紹介するので一部変更することもある。			
使用教科書 ・著作権テキスト(文化庁長官官房著作権課発行) [コピー配布] ・産業財産権標準テキスト総合編(独立行政法人工業所有権情報・研修館発行) ・その他の資料 [講義時に必要に応じ配布]			
自己学習の内容等アドバイス 新聞、テレビなどで報道されている知的財産関連ニュースに興味を持つように心がけて欲しい。			

[授業科目名] 映像史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 光 幸國・柿沼 岳志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	[備考] ※教養一般開放科目
授業の到達目標及びテーマ 自分が感動した映像は、たとえ一瞬見た作品であっても一生忘れない。この視点から先人の優れた作品を鑑賞しながら、感動や作品の読み方、その時代背景等を講義する事により、受講生に自分の創作活動を一人よがりならず、創造性やオリジナリティーのある創作を行うために、人間とは何か、社会とは何か、自分とは何かを深く考察探求する知的好奇心を持つ事であり、その事を理解し行動する姿勢の習得を目的とする。			
授業の概要 講義は映像作家を志す受講生に、映像史上の著名な作家の作品を鑑賞しながら、それぞれの思想、目的、技術、コンセプトを学び、如何に主体的に、オリジナリティーを持ちながら、感動と社会に適応する創作を行なうかと云う視点から講ずる。特に世界に多大な影響を与えた世界の1840年代～1990年代の作家を中心に、その時代背景（近代史）と照らし合わせながら講義する			
学生に対する評価の方法 小テスト2回（20%）・学期末テスト（80%） 当講義では再評価をしない。授業の出欠には十分注意する事。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回講義総論・写真の始まりから（ニエプス、ダゲール、タルボット）初期の写真家（ナダール、タルボット、キャメロン） 第2回シネマの確立・サイレントからトーキーへ（リュミエール兄弟、メリエス、グリフィス） 第3回、アメリカに渡った写真（フレディー等）写真の父アルフレッド・スティーグリッツ、 ファション写真をアートと確立及び不滅の写真展開催を企画したエドワード・スタイケン 第4回写真黎明期（ユウジエーヌ、アジェ、マン・レイ、モホリ・ナジ） 第5回写真のピカソ（エドワード・ウエストン）、ランドスケープの巨匠（アンセル・アダムス） 第6回映画の黄金時代・巨匠達の映画（ヒッチコック、フォード、ホークス、ラング） 第7回報道写真家（ロバート・キャパ）ドキメンタリー写真家（ユージン・スミス） フランスの巨匠達（ブレッソン、ドアノー、プラッサイ、ケルテス） 第8回戦争と映画・世界大戦以降、ベトナム、中東、湾岸、と半世紀に起こった戦争と映画の関わりを分析 第9回小テスト・20世紀の偉大なファッショントラベラー（アーヴィング・ペン・リチャード・アヴェドン） 第10回・ロバートフランク、マープルソープ、植田正治、セバスチャン・サルガド、サラムーン 第11回映画の新潮流・ネオアリアリズモ、ヌーヴェルヴァーグ（ロッセリーニ、フェリーニ、ゴダール） 第12回ポートレートの巨匠ユージェーヌ・カーシュ、ドキメンタリー作家のポートレート・ダイアン・アーバス 第13回小テスト・現代の写真（田原桂一、シーフ、ジャコメリ） 第14回現代映画について・多様化する表現形態（アニメ、CG、3D、） 表現形態により変わるものと変わらないもの 第15回テスト・その他の写真家			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 図書館で名作のDVDや写真集を鑑賞し、美術館で名作のオリジナル作品を見る事			

[授業科目名] デジタルフォトワーク基礎		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小山 智大
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デジタル環境における写真や画像の取り扱い、色補正・写真修復などを学びながら、クリエイティブ環境の可能性を広げる事を目的とします。			
授業の概要 前半では Adobe Photoshop の基本操作や画像データの取り扱いなど、技術指導をします。 中盤以降は写真修復など、より実践的な技術指導を行います。 最終的にレタッチを施した課題の制作を行います。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 50%、試験（2回）30%、最終提出課題 20% 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Adobe Photoshop 概要説明及びデモンストレーション（ワークショップ） 第02回 Adobe Photoshop 演習1（基本操作編） 第03回 Adobe Photoshop 演習2（色の考察、RGBとCMYK、ビットレート等） 第04回 Adobe Photoshop 演習3（色調補正編） 第05回 Adobe Photoshop 演習4（ブラシ操作編） 第06回 Adobe Photoshop 演習5（スタンプ編） 第07回 中間試験（写真修復） 第08回 Adobe Photoshop 演習6（解像度編・プロファイル編・保存フォーマット編） 第09回 Adobe Photoshop 演習7（レイヤー、マスク編） 第10回 Adobe Photoshop 演習8（レイヤーモード編） 第11回 Adobe Photoshop 演習9（パスワーク編）+期末課題発表 第12回 Adobe Photoshop 演習10（選択範囲編） 第13回 Adobe Photoshop 演習11（高度な切り抜き編）+テキストによる試験 第14回 課題制作 第15回 課題の講評			
使用教科書 必要に応じテキストを配布します。			
自己学習の内容等アドバイス 技術的な指導が多いため原則すべての授業の参加をする事。 Photoshop やデジタルカメラに関連する雑誌や本など、授業の予習・復習としてなるべく目を通す。			

[授業科目名] ネットワーク演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 基礎知識としての 1) 「ネットワークとインターネット」 2) 「HTMLとCSS」 に関して各種検定試験の初級レベル合格水準を到達目標とします。			
授業の概要 前半はTCP/IPをはじめとするネットワーク技術の基礎的な知識に関する講義を行います。 後半はそれらを実用するための身近な技術として、wwwサーバ上で展開するwebページ制作に関する基礎的な知識と技術を身につけます。2年次以降でwebについての学習を深める基礎となる講座です。Web系の講座を履修する学生、検定の受検を希望する学生がこの講座の履修を強く勧めます。			
学生に対する評価の方法 ミニ課題 webページ制作課題 受講態度 ※再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） (ネットワーク知識) 第1回 導入、インターネットの概念 第2回 LAN、無線LAN、Bluetooth 第3回 ブロードバンド 第4回 インターネット・プロトコル 第5回 webサーバ、メールサーバ 第6回 インターネット・リテラシー 第7回 セキュリティ 第8回 著作権法、個人情報保護法 (HTML基礎) 第9回 W3C準拠、DTD 第10回 ブロック要素 第11回 インライン要素 第12回 練習 第13回 Cascading Style Sheet 第14回 練習 第15回 webページ制作課題提出			
使用教科書 毎回資料を用意します。			
自己学習の内容等アドバイス 特殊なソフトウェアを使った授業内容ではありませんので、自宅のコンピュータでも予習・復習が可能です。			

[授業科目名] 音楽基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では音楽をあつかう上で基礎となるルール（＝楽典）を学習します。また、現代の音楽シーンの理解には不可欠な「コードネーム」を中心に、音楽の構築法について学習します。 毎回の授業は、前半の「楽典」などの学習に加えて、後半には映像と音楽との関係を、実例を挙げ学習します。			
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な音楽のルールを理解する コードネームを読み書きできる 映像作品における音楽的な視点を持つ 			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度（30%）、期末考査（70%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 楽譜（音部記号、音符） 第2回 音名（各国語での表記） 第3回 拍とは（拍、拍子—単純拍子、複合拍子、変拍子） 第4回 楽語（各国語での表記と意味、その背景） 第5回 調性（調性、調号、長調、単調） 第6回 音程（完全協和音程系、5度） 第7回 音程（不完全協和音程系、3度） 第8回 コード1（メジャーコード、マイナーコード） 第9回 コード2（セブンス） 第10回 ドミナント・モーション 第11回 循環コード（循環コード、カデンツ） 第12回 コードの応用（1） 第13回 音階と旋法（長音階、短音階、さまざまな旋法） 第14回 コードの応用（2） 第15回 期末考査（筆記）			
※進度によって、授業内容が複数回にまたがる事がある。			
使用教科書 『ポピュラー音楽理論』北川裕著、リットーミュージック刊			
自己学習の内容等アドバイス 授業は毎回連続してステップアップしていきます。必ず復習をし、毎回の学習内容を理解しておく必要があります。			

[授業科目名] クリエイティブアニメーション基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伏木 啓・小笠原 則彰 他 映像メディア学科教員によるオムニバス
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義は、国内外の多くのアニメーション作品に触れることで、今まで漠然と抱いていたアニメーション（あるいは「アニメ」）に対するイメージを広げ、映像表現の多様な可能性を探求することを目的とする。			
授業の概要 平面、立体、2D/3DCG などの様々な技法によるアニメーション作品について学ぶ。また、アニメーションにおけるイメージの読み解き/解釈や、美術、メディア・アート、ゲーム、サウンドなどの領域とアニメーションの関わりについても学ぶ。 ※本講義は映像メディア学科教員によるオムニバス形式で行なわれる。			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後的小レポートにて確認）及び、学期末レポート課題による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション/初期アニメーション（伏木） 第02回：エクスペリメンタル・アニメーション（伏木） 第03回：世界のアニメーション1（伏木） 第04回：世界のアニメーション2（伏木） 第05回：日本のアニメーション1（伏木） 第06回：日本のアニメーション2（伏木） 第07回：日本のアニメーション3（伏木） 第08回：アニメーションと映画（柿沼） 第09回：アニメーションとサウンド（森） 第10回：アニメーションと美術1（小笠原） 第11回：アニメーションと美術2（小笠原） 第12回：アニメーションとインターラクティヴメディア1（山本） 第13回：アニメーションとインターラクティヴメディア2（山本） 第14回：アニメーションの今後の可能性（齋藤） 第15回：総括（伏木）			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 講義内では広範なアニメーションの一端にしか触れることができない。その為、映画館、美術館、図書館／MLC、インターネットなどをを利用して、講義の中で紹介した作品、またはそれらの作家に関する文献、映像資料などに触れるよう心がけて欲しい。			

[授業科目名] メディアリテラシー演習Ⅰ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山田 亘
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 我々がいかに日常生活を媒体（メディア）を通して把握しているのかということを知り、客観的にそれらを見つめ直していく。一般的に意識されているインターネットや紙媒体にとどまらず日常の生活や行為に潜む様々なメディアの役割や、自身との関係を見つめなおすことで、メディアを分析、評価し、さらに発信、活用できる能力であるメディア・リテラシーを獲得することを到達目標とする			
授業の概要 さまざまなメディアに囲まれて生活する私たちにとって、マスメディアやインターネットのみならず、日常の中に様々な形で存在する媒体が提示する「現実」を客観的・批評的に読み解き、メディアを主体的に活用する能力を身につけることが重要になっている。 本科目では、講義とワークショップを組み合わせて行う。講義部分では、過去や現代のメディア状況と様々な取り組みや作品を紹介する。演習部分では、自らの視点からメディアを批評的に読み解きながら、積極的に活用するための試みをグループで企画する。映像メディアを学ぶ将来のクリエイターとして、日常的に関わったり制作するメディアと社会の関係を意識的に捉えてほしい。 授業中に随時レポートや小課題を課す。また、内容は受講生の理解度に応じて適宜変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（30%）、レポート・小課題（40%）、最終課題プレゼンテーション（30%）などで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 全体概要説明 メディアとは何を意味するか 課題の提出について 第2回 メディアリタラシーとは 概論及び具体例の提示 授業用のウェブサイトについて 第3回 報道写真および記事等の嘘、操作、省略などについて 第4回 映像の中での情報の整頓・省略などについて 第5回 マンガ・アニメの文法はどのように発達変遷してきたか 映像的な分析 第6回 ネットワーク上の社会 SNS ウェブサイトなどの情報伝達について 第7回 システムという媒体 国や街のもつ社会システム（政治・経済・教育）や iOS や Android 等のプラットフォーム等による意味の伝達について 第8回 メディア・ワークショップ1（人と人をつなぐ物理メディア） 第9回 メディア・ワークショップ2（特定の内容に対する多様なメディア） 第10回 課題説明 グループワークについて 組織と役職という媒体 第11回 課題制作・発表準備 第12回 課題制作・発表準備 第13回 課題発表・相互評価 第14回 課題発表・相互評価 第15回 授業総括			
使用教科書 【参考図書】 菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書。 そのほか、各種サイト、新しい媒体についてなど、授業中に随時指示する。			
自己学習の内容等アドバイス ほぼ毎回小課題を課すので、自己学習の時間をとって積極的に課題に取り組むこと。 小課題については、パスワードのある授業用ウェブサイトに投稿する形での提出を予定しています。			

[授業科目名] 映像メディア表現論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安達 洋次郎・加藤 和郎・伏木 啓
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像というメディアを扱っていくうえで不可欠な思考力、批評眼を身につけることを目標とする。それは現在の高度メディア社会のなかで「自己を定位」し、情報を受容するだけではなく「読み解き」「発信する力」を身につけることを意味する。従って、本講義では作品分析のみではなく、創り手の立場でそれぞれの作家がその時代の「何を感じ」「何を表現しようとしたのか」考え、あなた自身の「視点」を築くことを主題とする。			
授業の概要 19世紀における「写真」発明以降、映像メディアは常に新しい技術とともに発展してきた。本講義では、それらの歴史的文脈を辿りながら、写真、映画、テレビジョン、ビデオ、コンピュータをメディアとして扱う作家や作品に触れ、19世紀以降の映像メディアが人々にどのような影響をもたらし、またそれらの映像がその時代の何を表象してきたのかを探る。最終的には、課題「マイ・フレーム」を制作し、自分たちが「現在」をどのように切り取り思考するのか、発表する。			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後的小レポートにて確認）、最終課題（マイフレーム）による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション 第02回：19世紀・20世紀初頭の映像 第03回：映像メディア論I「記号と映像」 第04回：第二次世界大戦期及び戦後の映像 第05回：1960・70年代の映像 第06回：1960・70年代以降の写真表現を巡って（安達作品とともに） 第07回：映像メディア論II「反記号としての映像」 第08回：1980・90年代の映像 ※課題提示「マイ・フレーム」 第09回：映像メディア論III「虚構と現実」 第10回：映像という哲学（西宮作品とともに）※変更になる可能性もあります 第11回：現在（2000年以降）の映像 第12回：マイ・フレーム発表と講評 第13回：マイ・フレーム発表と講評 第14回：マイ・フレーム発表と講評 第15回：マイ・フレーム発表と講評及び、総括			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 講義内では時間の都合上、一部の作品にしか触れることができない。その為、図書館やMLCなどを利用し、講義の中で紹介した作家や作品に関係する文献、写真集、映像資料などに目を通すよう心がけて欲しい。			

[授業科目名] インスタレーション演習Ⅰ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小笠原 則彰・井垣 理史
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代のアート作品の多くは、単体のオブジェクト(モノ)として象徴的に表現する以上に、テキストとオブジェクト、映像と場との関係など様々な構成要素を空間全体に配置し、それらをひとつの作品として表現する手法を用いている。そこで、この演習では、空間を意識してあるオブジェクトを設置する実践を通して、場とオブジェクトの関係性を考え装置化する技術を修得していく。これはインスタレーション表現における特性のひとつ、「空間」の意識と、その環境全体を対象視し構成する力を養うことになる。			
授業の概要 ある「場」(特定された空間・サイトスペシフィック)に設置するオブジェクトとの関係作用を考え、実際の空間で設営しながら、テーマに添った表現を実際の制作を通して学ぶことをめざす。			
学生に対する評価の方法 課題制作におけるテーマの理解力・表現内容の追及の深さ・構想能力を中心に、各作品発表(プレゼンテーション)より、評価する。 受講態度より、授業に対する意欲として判断し、評価とする。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「関係性の表現」 多様な表現「インスタレーションとはなにか」について 第2~3回 スタディーモデル制作「線材の構成」立体構成の基礎技術 第4~5回 テーマ「ひとつの場に直線を立てる」道具と素材、空間構成の基礎技術 第6回 線と面の材料の加工についての現場演習 第7回 「インスタレーション作品の体験」 学外授業・ギャラリーにて、今現在の作家がどのように表現しているかを実際の作品の空間の中で体感する こにより、空間表現の重要性について認識する。			
 第8~15回 「空間にひそむ線」制作 空間の持つ力を、線の材料を用いることで顕在化させること 1~2. 場所のリサーチ(チーム)撮影、場所決定 3. セッティングイメージ決定～企画書作成 4. 企画書提出及び、セッティング制作(場所撮影許可申請) 5. セッティング制作完了～設営シミュレーション 6. 現場設営・撮影・アーカイヴ制作 7. プrezentation			
使用教科書 Installation art (Smithsonian Books 出版社)で多くのインスタレーション作品を事前に調べ、ランドスケープ空間の諸相(角川書店)を参考していく。			
自己学習の内容等アドバイス 授業全体の流れを把握し、事前にテーマに即して映像資料(撮影などをし)、材料・道具などを調べ用意していくこと。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、特定されたテーマの表現伝達方法を考え、発表内容を論理的に構成し、プレゼンテーションを限られた時間内に完成させ実践する（3回の実践）。「聞く人たちの存在とその配慮」を意識するとともに、プレゼンテーションというコミュニケーションの可能性と限界を知る。さらには3年次のゼミ展、4年次の卒業作品展において、自分の作品におけるプレゼンテーションにも応用できる技能を獲得する。			
授業の概要 主題（テーマ）を伝達・表現するプレゼンテーションを演習することで、「無関心」を「関心」に転化させる工夫と説得力を予測する。そして「聞く人たち」の心理を理解する力を身につける。授業では、テーマ伝達の理念、伝達対象（聞く人たち）の把握、伝達内容の構成、伝達支援の活用方法などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容と効果への理解度（30%）、受講態度（30%） 評価対象の3つのプレゼンテーション完成度（40%）を総合的に評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 口頭発表（プレゼンテーション）が活かされる状況と場面 概論 第2回 プrezentationの目的、主題（テーマ）の決定、内容、構成、対象、効果などの説明 第3回 プrezentationの支援素材の活用 その（1） 第4回 プrezentationの支援素材の活用 その（2） 第5回 プrezentationの実践 15名 その（1）テーマ「なぜ名古屋学芸大学への進学を選んだか」 第6回 プrezentationの実践 15名 その（1）テーマ「なぜ名古屋学芸大学への進学を選んだか」 第7回 第1回プレゼンテーションの反省と改善点（30名全員による講評） 第8回 第1回プレゼンテーションの反省と改善点（30名全員による講評） 第9回 プrezentationの実践 その（2）テーマ「プレゼンテーションをよりよくするための プレゼンテーション」（全員による講評） 第10回 プrezentationの実践 その（2）テーマ「プレゼンテーションをより良くするための プレゼンテーション」（全員による講評） 第11回 プrezentationの準備 その（3） テーマ「社会性、時事性を背景とする自由テーマにおけるプレゼンテーション」 内容は自分の映像・表現論の構築を目標とするもの 第12回 プrezentationの準備 第13回 プrezentationの発表 第14回 プrezentationの発表 第15回 全員による講評 発表（プレゼンテーションの実践）は、1回目以降も15名ずつ2回に分けて実施する。			
使用教科書 書籍「パワープrezentation」、「パーフェクトプレゼンテーション」等を参考にする。			
自己学習の内容等アドバイス 単なるプレゼンテーションソフトを使いこなせることを目標としていない。自分の考え方、思考背景、テーマへの探求心から表現・伝達するという行為の難しさ、そして可能性を探求する。			

[授業科目名] 映像メディア演習（フォト）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安形 嘉真・小山 智大・村上 将城
[単位数] 4	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像の原点である写真の基礎を、各カテゴリー（ポートレイト・スチルライフ・スナップ・風景）を通じて作品を制作する。その課程に於けるコンセプトワークも含め、写真の基本を考察し修得する事を達成目標とする。			
授業の概要 映像の基本は写真である事を基軸に、上記各カテゴリー作品制作を通じて、フレームワーク、コンセプトワーク、フォーカスワーク、ライティングの基本から応用まで修得し、あらゆる映像表現に適応出来る能力を身につける。			
学生に対する評価の方法 平常の演習態度（20%） 途中提出するスチルライフ1枚（20%）、ポートレイト1枚（20%）、最終回に提出する7枚の課題作品評価（40%） なお再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 総論／カメラの仕組み（開放絞り、パンフォーカス、シャッタースピードと絞りの関係）/小テスト 第2回 学外実習 距離1.5m/70mmで開放絞り1枚、パンフォーカス1枚、自由作品1枚 第3回 二班に分かれ一班は現像・コンタクト／二班は4×5撮影（絞り開放、パンフォーカス） 第4回 二班に分かれ二班は現像・コンタクト／一班は4×5撮影（絞り開放、パンフォーカス） 第5回 2Lにてアナログプリント（開放絞り1枚、パンフォーカス1枚、自由作品1枚） 第6回 ポートレート（屋外）自然光ライティング／デジタルの基本 第7回 ポートレート（スタジオ）スタジオライティング／デジタルの基本 第8回 スチルライフ（屋外）自然光ライティング／デジタルの基本 第9回 スチルライフ（スタジオ）スタジオライティング／デジタルの基本 第10回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ）／デジタルの基本 第11回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 第12回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 第13回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 合格者はラボにプリント出し 第14回 最終作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 合格者はラボにプリント出し 第15回 提出作品（1.ポートレート、2.スチルライフ、3.風景 or スナップ or その他）計7枚の講評			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 写真技術書を自主的に購入し映像の原理原則を知る事 演習での課題は最低限であり、自発的に作品制作を行い教員からアドバイスを受ける事 大学図書館にある著名な映像作家の作品集や写真集を鑑賞する事 積極的に美術館やギャラリーに行き名作のオリジナル作品を鑑賞する事			

[授業科目名] 映像メディア演習（映画・ビデオ）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 真・柿沼 岳志
[単位数] 4	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標はオリジナルの「ドラマ映像」を制作すること。 テーマは映像制作のための基礎的な技術を個人として習得しつつ、グループ制作というプロセスを経ることで、仕事の分担や責任といった社会的な負荷を意識し、他者とのコミュニケーション能力を高める。その制作プロセスで必要な情報の共有、情報の公開、説明責任などを理解していく。			
授業の概要 すべての映像制作プロセスの基礎をプロフェッショナル仕様教材を使って学び、作品を完成させていく。 前半は映像制作のための基礎技術や用語を実際に機材に触れて習得する。その後制作過程に入り、役割に応じた指導の下、完成をめざしていく。脚本（文字言語）から映像言語への移行技術だけではなく、高度な翻訳行為でもあり、日常的に映像からの意味の読み取りを訓練し意識していく（は）け（け）ない。			
学生に対する評価の方法 制作および発表の態度。授業内小テストとレポート。制作物。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業説明/グループ分け/企画検討（企画案選定）/役割決定 第2回 プロダクションガイドブックの利用方法/企画検討（プロット作成） 第3回 撮影機材/録音機材取扱い 第4回 照明機材取扱い/参考上映 第5回 小テスト/プロット書き出し/脚本検討 第6回 脚本読み合わせ（脚本提出）/撮影シミュレーション/プロダクションブック提出 /機材貸出表提出 第7回 撮影実習 第8回 撮影実習 第9回 撮影実習 第10回 編集基礎講義/編集実習 第11回 編集実習 第12回 編集実習/整音 第13回 編集実習/作品チェック 第14回 編集実習/提出（映像・ポスター） 第15回 講評			
使用教科書 プロダクションガイドブック配布（初回授業時）			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業の前にプロダクションガイドブックの項目を予習しておきたい。 実習時もプロダクションガイドブックを参照し、撮影時も確認し誤作業のないようにしたい。 機材は名称を理解するだけではなく、慣れることも必要である。 添付されているサンプルの書式や項目にも目を通して欲しい。			

[授業科目名] 映像メディア演習 (コンピュータグラフィックス)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武・森下 豊美
[単位数] 4	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 2DCG アニメーション作品の制作を通して、Adobe Premiere CS6, Adobe AfterEffects CS6, Adobe Photoshop CS6 等のソフトウェアの使用法を習得する。また表現手法として、キャラクターアニメーション、VFX アニメーション、抽象的なアニメーション、実験的なアニメーションを用い、それぞれが持つ固有の視覚言語の習得と分析を行う。			
授業の概要 1 : Adobe AfterEffects 等の基本～応用操作を習得 2 : グループによるコンセプトワーク、ストーリーボード制作、アニメーション制作 3 : 作品素材の編集、ポストプロダクション作業 4 : 発表、講評、分析			
学生に対する評価の方法 受講態度、グループワーク状況、完成作品 ※ 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入、作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第2回 作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第3回 作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第4回 グループワーク ストーリーボード制作 第5回 ストーリーボード プレゼン 第6回 グループワーク アニメーション制作 / グループ毎に進捗をチェック / 技法に関する調査など 第7回 同上 第8回 同上 第9回 同上 第10回 同上 第11回 同上 第12回 同上 第13回 同上 第14回 ポストプロダクション作業、最終調整、プレゼン準備など 第15回 作品発表、分析 / 個々の今後の展望について			
使用教科書 特に指定しない			
自己学習の内容等アドバイス グループワーク、アニメーション制作は、授業時間以外にも活発に行ってください。			

[授業科目名] 映像メディア演習（サウンド）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康・鈴木 悅久
[単位数] 4	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考 ※ 必ず個人用ヘッドフォンを持参すること
授業の到達目標及びテーマ コンピュータを用いた「作曲」の演習を行う。テーマは「映像と音楽」であり、「映像イメージ」や実際の「映像ムービー」を前提に、音楽制作を行う。そのために必要な知識と技術、コンピュータを用いた今日的な作曲技法について実際に課題をこなしながら学ぶ。さらに音楽と映像との新しい結びつきの可能性についても体験する。これまで作曲を一度も経験したことがない人でも半年後は音楽を作れるようになる。音楽経験がある人は、一層その可能性を大きく広げることができる。 履修にあたって 楽器演奏や楽譜の読み書きの能力は問わない。			
授業の概要 DAW ソフト APPLE Logic による音楽制作。MIDI、サンプリング、デジタル・オーディオ、エフェクタ、オートメーション、ミキシングおよびマスタリングなどについて基礎的な知識と技術を身につけ、実際の制作を通じて映像に対する音楽的イマジネーションの訓練を行う。同時に作曲経験や楽器の経験を前提としない作曲技法として、ミニマル、モード、音色の音楽などを学ぶ。課題制作は「映像イメージによる作曲」「アニメーションへの作曲」「ミックス／リミックス」を行う。さらにインタラクティブな映像／音響プログラミング言語 Max を体験し、音楽と映像の現在～未来の関係を展望する。			
学生に対する評価の方法 授業態度 [30%]、課題作品とレポート [70%] で総合的に評価する。 遅刻については厳しくマイナス評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） *** Logic をマスターする *** 第1回 イントロダクション 音楽と映像の関係、Logic の基礎 第2回 Logic 課題演習(1) ソフトウェア音源の利用、MIDI の基礎 第3回 Logic 課題演習(1) エフェクタの基礎 第4回 Logic 課題演習(1) オートメーションとミキシングの基礎 第5回 Logic 課題演習(1) 制作発表と講評 *** アニメーションを素材にした本格的な音楽制作 *** 第6回 Logic 課題演習(2) コンピュータをベースにした今日的な作曲技法 第7回 Logic 課題演習(2) 映像解釈と音楽表現 第8回 Logic 課題演習(2) 高度なエフェクタの使用 第9回 Logic 課題演習(2) 本格的なミキシング 第10回 Logic 課題演習(2) 制作発表と講評 *** ミックス／リミックス演習 *** 第11回 Logic 課題演習(3) ミックス／リミックスの概念と事例 第12回 Logic 課題演習(3) オーディオ・トラックの編集 第13回 Logic 課題演習(3) 制作発表と講評 *** インタラクティブな映像と音楽の関係を体験する *** 第14回 Max/MSP 演習 インタラクティブに音や映像を演奏する 第15回 Max/MSP 演習 プログラミングでつながる音+映像+インスタレーション、まとめと展望			
使用教科書 参考図書：「最新 音楽用語辞典（改定新版）」、「Max の教科書」（共にリットーミュージック社）			
自己学習の内容等アドバイス 課題の音楽制作に集中すると、耳が中立ではなくなり冷静な判断ができなくなる場合が多い。それを避けるため、①積極的に教員や友達に途中経過を聞かせて意見を聞き、②ヘッドフォンを取り替え試聴してみること。先入観を持たずに、さまざまなジャンルの音楽を聞くこと。その時、何度も繰り返し「分析的に聴く」訓練をして欲しい。例えば、ひとつの楽器だけに集中して聴いたり、高音／低音のバランスに注意したり、音の広がりや奥行き感に注意したり…。この訓練で確実に耳が鍛えられ、自分の音楽制作にも大いに役立つはずだ。			

【授業科目名】 メディアリテラシー演習 II		【授業方法】 演習	【授業担当者名】 杉本 達應
【単位数】 2	【開講期】 2年次後期（集中）	【必修・選択】 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 従来から謳われているメディアリテラシーを獲得するだけでなく、現在のメディア状況に即した新たなリテラシーを探求し、現代のメディアリテラシーを涵養するための活動プログラムを企画し、わかりやすく発表できる能力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 現在の生活に不可欠な存在となっているメディアは、現実を切り取って再構成して私たちを取り囲んでいる。本科目は、講義とワークショップを組み合わせて行う。講義部分では、現代のメディア状況と様々な取り組みや作品を紹介する。ワークショップ部分では、自らの視点からメディアを批判的に読み解きながら、積極的に活用するための活動プログラムを企画し発表する。 受講生には、映像メディアを学ぶ将来のクリエイターとして、メディアとメディア表現の新しい可能性や活用方法を主体的に探求し積極的に議論することが求められる。 本科目は、「メディアリテラシー演習 I」の単位習得者を対象に開講する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（30%）、レポート・小課題（30%）、最終課題プレゼンテーション（40%）などで総合的に評価する。集中講義を予定しており、自己学習時間を十分にとれないため、全回出席を前提として授業を進める。そのため、授業欠席は大幅な減点となる。特に初回と最終回の欠席は失格とするので、必ず出席すること。 本科目は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 全体概要説明 第2回 メディアリテラシーとは メディアの分析とメディア表現 第3回 メディアの変遷 技術、装置、電子メディアの可能性 第4回 メディアと産業 ジャーナリズム、職業 第5回 メディアと学び 教育、ミュージアム、ワークショップ 第6回 メディアとコミュニティ 市民メディア、インターネット、モバイル・メディア 第7回 メディアリテラシーをテーマとした企画オリエンテーション 第8回 メディアリテラシーをテーマとした企画作成 第9回 企画発表準備 第10回 企画発表とディスカッション 第11回 企画をもとにした制作1 第12回 企画をもとにした制作2 第13回 発表準備 第14回 最終成果発表と相互評価 第15回 まとめ			
使用教科書 【参考図書】 菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書。 水越伸『21世紀メディア論』放送大学教育振興会。 そのほか、必要な資料は授業中に指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 講義期間中は、自己学習の時間をとって積極的に課題に取り組むこと。			

[授業科目名] 映像演出論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ コミュニケーションとしての「演出」を基本にふまえながら映像表現と「演出」の関係を具体的に理解する。 映画のなかの様々な要素、技術の効果的な活用の仕方を学ぶ。			
授業の概要 様々な映像作品から、優れた「演出」のエッセンスを抽出して紹介する。 過去の名作から自作CMまでを例にとり、適切、具体的に解説する。 観念的ではなく、自らの映像制作現場の経験に基づいた、即応用可能な実践的授業である。			
学生に対する評価の方法 最終的には課題に基づくレポートで評価するが、中間で行う演出コンテ作成の実習も評価に加えられる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1・2回 映像演出の現状 自作CMを例に具体的な演出法を紹介 第3・4回 巨匠の現場 世界的名監督の貴重な現場風景 エピソードの紹介 現場の演出シーンと完成シーンの比較 第5・6回 コンテ主義と即興主義 名場面に観る演出の極意 第7・8回 すべての映画はサスペンス映画である 第9・10回 中間小試験 テーマに基づいて簡単なストーリー又はコンテをつくる 第11回 撮影における演出 撮影監督ヴィットリオ ストラーロ 他 第12回 映像と音楽 作曲家 バーナード ハーマン 他 第13回 映画の美術 美術監督 アレクサンドル トローネ 他 第14回 編集について 画面構成とモンタージュの諸相 第15回 未完成という名の演出？ 人間と人生についての探求			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 授業中に取り上げられた映画をかならず全編鑑賞すること。 紹介された映画作家のほかの作品、文献にも眼を通すこと。			

[授業科目名] SFX演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐藤 敦紀・押井 守
[単位数] 2	[開講期] 2~4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 昨今すべての方法論が「デジタル・CG」の一言で括られる風潮のある VFX の世界であるが 実は現実の現場はもう少しややこしく複雑だ。ましてやそれらの「デジタル」技術も過去の膨大な「アナログ」技術に拠って支えられている事を忘のがちだ。本講では映像技術の発達と共に進化を遂げてきた「視覚効果」の世界を、その歴史を縦軸に技術を横軸にしながら全体を俯瞰し理解し基礎技術を習得してもらうことを到達目標とする。			
授業の概要 講師が担当した作品の実体験を踏まえた VFX メイキングも含め 国内外の多くのメイキング映像を使用しながら SFX の世界を俯瞰してもらいつつ それらがどのように映像作品に寄与し影響を与えてきたかを考えて行きたい。			
学生に対する評価の方法 レポート提出			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1・2回 視覚効果／概論 第 3・4回 MAT ペインティング 第 5・6回 キャラクター／ストップモーションからゴーモーションそして CGI へその1 第 7・8回 キャラクター／ストップモーションからゴーモーションそして CGI へその2 第 9・10回 キャラクター／ストップモーションからゴーモーションそして CGI へその3 第 11・12回 コンポジット／合成 第 13・14回 コンポジット／合成 第 15回 ミニチュアと視覚効果			
使用教科書 特に使用せず 映像と KeyNote を併用して行く予定			
自己学習の内容等アドバイス 映画を観てください 空気のように観てください			

[授業科目名] シナリオ演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 長崎 俊一・柿沼 岳志
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 脚本は頭の中にあるイメージを具体的にしていく映画作りの最初の作業だ。それを実作によって体感し、脚本とは何かを考える。また、お互い批評し合い、他人の意見を自分のプラスにしていくことを体験する。			
授業の概要 自分たちが書きたいものをとにかく書く。他人が書いたものを読み、感想を言う。どうしたら、よりよく伝わるのか、面白いものになるのか試行錯誤する。			
学生に対する評価の方法 脚本に向け提出される課題。書いた脚本。発表された意見。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
1日目			
第1回 講義の狙い、目的について。 私（長崎）にとって刺激的だった映画。参考部分上映 宮本武蔵一乗寺の決闘（内田吐夢監督）/アдельの恋の物語（フランソワ・トリュフォー監督） 課題 自分の好きな映画を一本挙げ、どこが好きか伝える。			
第2回 課題の発表。 新たな課題 1自分が挙げた好きな映画のあらすじを書く。2自分が作りたい映画（30分程度が目安）のイメージを思い浮かべ、アバウトでいいからメモする。どんな内容でも良い。これを仮に「企画」と呼ぶ。			
2日目			
第3回 前回課題1=皆の書いたあらすじを元に映画の物語の基本要素を考える。課題2=各自の「企画」を発表。その「企画」について質疑応答。			
第4回 映画の企画には何が必要か考える。参考部分上映 野良犬（黒澤明監督）/今日、キミに会えたら（ドレイク・ドレマス監督）/宇宙人ポール（グレッグ・モットーラ監督）/ナイト&デイ（ジェームズ・マンゴールド監督） 新たな課題 自分の「企画」を進化させ、物語の大枠を考える。			
3日目			
第5回 前回課題=各自進化させた企画を発表。その上で、受講生は、ひとりで脚本を書くか、3人で書くか選ぶ。3人で書くチームは、第7回までにチームの「企画」を決める。			
第6回 映画の構造とキャラクターを見てみる。参考部分上映 生活の設計（エルンスト・ルビッヂ監督）/リンカーン弁護士（プラッド・ファーマン監督） 新たな課題 各人、各組、「企画」に即してキャラクター、設定、粗筋、構成などを詰める。			

4日目

第7回 進行した各「企画」について、感想、質疑応答。

脚本の書式、書き方を説明する。脚本の締切りを設定する。脚本には企画意図と粗筋を添付する。

第8回 映画の始め方を見てみる。参考部分上映 ライフ・アクラティック（ウェス・アンダースン監督）／機動警察パトレイバー（押井守監督）／おかあさん（成瀬巳喜男監督）／プライズメイズ史上最悪のウェディングプラン（ポール・フェイク監督）

5日目

第9回 各組の組別相談。（この間他の組は作業を進める）各組に今必要なことを考える。何を描こうとするか確認する。

第10回 物語を転換する、進めるにはどうするか？ 参考部分上映 フランケンシュタインの怪獣サンダ対ガイラ（本多猪四郎監督）／耳をすませば（近藤喜文監督）／めまい（ヒッチコック監督）

6日目

第11回 各組の組別相談。書き終えるにはどうするか？

第12回 台詞の役割を考える。参考部分上映 お熱いのがお好き（ビリー・ワイルダー監督）／ファミリー・ツリー（アレクサンダー・ペイン監督）

映画には様々な形があることを見てみる。参考部分上映 気まぐれな唇（ホン・サンス監督）／シルピアのいる街で（ホセ・ルイス・ゲリン監督）／田園に死す（寺山修司監督）

7日目

第13回 提出された脚本の講評。受講生は事前に他の脚本を読み、感想を言う。

第14回 作った脚本の1シーンの本読みをする。脚本の直しとは何か？

脚本と実際の撮影、編集との関係は？参考部分上映 黒帯/少女たちの羅針盤（長崎俊一監督）
新たな課題 他の人の感想や本読みを元に脚本を直す。脚本のプレゼンテーションを考える。

8日目

第15回 脚本をプレゼンテーションする。直した脚本の講評、感想。人気投票をし、この講義で一番人気のある脚本を決める。

*参考上映作品は、提出「企画」の内容、スケジュール等で変る。

使用教科書

なし。受講者の書いた脚本。（メールで配信）

既存映画のDVD。

自己学習の内容等アドバイス

授業時間の関係上、参考上映は抜粋に留まることが多い。可能な限りMLCなどを利用し作品全体を視聴すること。また授業で触れられている作品以外の作品も出来るだけ多く鑑賞することを薦める。

[授業科目名] フィルムアーカイブ特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 石原 香絵
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画フィルムを含む映画遺産を次世代に向けて守り残すことの意義、フィルムアーカイブの機能、そしてフィルムアーキビストの役割を理解すること。			
授業の概要 この授業では、映画フィルムを中心に多様な動的映像メディアを取り上げる。前半はその基本構造や物的性質、修復・復元の倫理、後半は国内外の映画保存活動の現状を実例から学ぶ。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（30%）、授業内レポート（30%）、最終日に実施する試験（40%）によって総合的に評価する。試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 視聴覚資料の概要（映画フィルム、レコード盤、磁気テープ、光学ディスク等） 第3回 映画フィルムの基本構造 1（カラー） 第4回 映画フィルムの基本構造 2（サウンド） 第5回 映画フィルムの修復、復元、保存 1（サイレント） 第6回 映画フィルムの修復、復元、保存 2（トーキー） 第7回 アーカイブズと視聴覚アーカイブの類型 第8回 フィルムアーカイブ活動 1（国内事例） 第9回 フィルムアーカイブ活動 2（海外事例） 第10回 フィルムアーキビストの役割 第11回 小型映画（アマチュアフィッテージ、ホームムービー、オーファンフィルム） 第12回 映画フィルムの上映（映写）と活用 第13回 映画保存の実際 1（発掘→調査→現像所での作業） 第14回 映画保存の実際 2（フィルムアーカイブでの作業→上映→長期保存） 第15回 試験とまとめ			
使用教科書 参考テキスト ① レイ・エドモンドソン（著）『視聴覚アーカイブ活動：その哲学と原則』（ユネスコ）、② 全米映画保存基金（編）『フィルム保存入門：公文書館・図書館・博物館のための基本原則』			
自己学習の内容等アドバイス 上記参考テキストを講義の前後に参照のこと（何れも映画保存協会のウェブサイトよりダウンロードできる）。 ① http://filmpres.org/preservation/translation05/ ② http://filmpres.org/preservation/translation03/			

[授業科目名] CM映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗・梶田 渉
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 授業日程に注意
授業の到達目標及びテーマ 世界経済や社会構造が大変換期を迎える、今までの制度や装置が機能不全を起こしている現在。広告宣伝もまた同じ問題を抱えている。一時はサブカルチャーとまでもてはやされたCMは、その本来の姿を幾重にも変容させ、時代と社会のニーズに応じながら、行く先も定まらぬまま迷走を続けている。この授業は、従来の社会科学的な外側からの視線で論じられて来た現象結果的考察ではなく、30年以上に渡ってCMに携わった者による内側からの視線で、CMを解体分析し、その本質を功罪ともに問い合わせし、広告における新たな映像表現の可能性を探求するものである。			
授業の概要 2部に分かれる。前半の広告CMの一般的概要、社会性、変遷については広告CMの送り手の立場から梶田が講義を行い、後半はCMの「つくり」を脳科学を使って分析、検討し、さらに「中身(働き)」であるCMの企画、クリエイティブについての考察を制作側から金巻行う。CMの成否は90パーセント企画に掛かっているといつても過言ではない。 従って、期末試験は課題に基づき企画立案、コンテ作成、プレゼンテーションを学生にやってもらい、それを評価する。			
学生に対する評価の方法 期末試験で評価する。再評価なし。			
授業計画(回数ごとの内容等) 梶田担当 第1回 広告そしてCMとは何か? ACC 2013 第2回 ACC 2011 第3回 ACC 50年の歩み 第4回 海外CM(カンヌ作品を中心に) ※ 第6回 杉山登志のCM作品 第7回 資生堂のCM 第8回 梶田のCM作法 金巻担当 第5回 ※CM映像前史 映像と宣伝または煽動 トリック=モンタージュ=プロパガンダ 第9回 脳科学でCMを分析する1 人はいかに潜在意識下でコントロールされるか 第10回 脳科学でCMを分析する2 CMにおける消費者の説得の構造 第11回 脳科学でCMを分析する3 感覚刺激映像の功罪 (以下4回は2コマ連続で行う) 第12、13回 クリエイティブ発想法/課題オリエンテーション ブレインストーミング 第14、15回 企画作成 プレゼンテーション			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 日々実生活でみられるすべての広告物に注目し、それらが何を伝えようとし、どんな表現で伝えているのかを読み取る習慣を身につけるよう心がける。			

[授業科目名] ドキュメンタリー制作論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 海老名 敏宏
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 講座では常に「ドキュメンタリーとは何か」を問い合わせる。テレビに限らず、上映、さらには新しいメディアでの表現も視野に、映像表現者としての志しや思いを伝えるために、ドキュメンタリーを論評できる力と、等身大の企画を提案できるようにすることを講座の目標とする。企画書を作り上げる過程を通して様々な課題を具体的に取り上げ、幅広い感性と視野を広げていくことが目的である。			
授業の概要 講座では、テレビ、上映ドキュメンタリーを多く視聴しながら、ドキュメンタリーの多様な概念や考え方、さらに表現方法、取材方法など制作者のモラル、志も含めて問い合わせる。自分なりのドキュメンタリーへのアプローチの方法をつかんでもらうことを目指す。			
学生に対する評価の方法 講座に対する姿勢(30%)、講座の理解度を求めるリポート(30%)、最終講座までに提出するドキュメンタリー企画書(40%) 毎回ドキュメンタリー作品を視聴するので出欠はそのまま評価に反映する。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講座の目的と進め方 第2回 ドキュメンタリーとは何か ドキュメンタリー制作者の志とは何か ※リポート課題 第3回 ドキュメンタリーの変遷 第4回 ドキュメンタリーは何を記録してきたか メディアの進化と時代の記録 第5回 ドキュメンタリーのジャンルとテーマ 第6回 記録する側と記録される側 事実とは何か 取材の仕組み ※リポート課題 第7回 ドキュメンタリーの演出とは何か 第8回 ドキュメンタリーの仕掛けとやらせ 第9回 ドキュメンタリーの構成 第10回 ドキュメンタリーを編集するということ 効果のありかた ※リポート課題 第11回 ドキュメンタリーは嘘をつく タブーと挑戦 第12回 テレビドキュメンタリーの課題と限界 第13回 ドキュメンタリーの可能性 第14回 企画書とは何か、プレゼンテーション方法 ※企画書提出 第15回 企画書プレゼン ドキュメンタリーを目指す人たちへ体験的ドキュメンタリー論 ※最終試験は提出されたドキュメンタリー企画書で評価 ※各リポートのテーマはその都度提示する			
使用教科書 特に使用しない。資料等はその都度用意する			
自己学習の内容等アドバイス 講座期間中、意識してドキュメンタリー作品(テレビ、上映)の視聴を薦める ドキュメンタリーの時代背景を学ぶ必要のある場合は、その都度提示する			

[授業科目名] ノンリニアエディティング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 斎賀 和彦・齋藤 正和
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本格的な映像制作を行う3年次以降に必要となる基礎的制作スキルとして主に映像編集系の内容に特化したハンズオントレーニング型の演習を行う。そのため、編集技術に精通まではしなくとも、基本的にひとりでポストプロダクション作業（オンライン編集および初步的オンライン編集）が行えるまでの技術取得を目標とする。			
授業の概要 映像編集は、編集機（あるいは編集ソフト）を使いこなす、という技術的スキルの側面と、演出を理解し、編集段階でより深く、映像の意味性を補強する創造性の側面という2軸がつねに存在する。トータルな意味で「映像編集」を実行できる能力は映像制作者の重要な要件である。そのうち、本演習は技術習得が中心となる。			
学生に対する評価の方法 実技テストおよび受講態度　スキル取得の要素が大きい演習ゆえ、出席日数への要求は厳しい。原則として1/3を越える欠席もしくは実技テスト欠席者は成績評価の対象としない（再評価はおこなわない）。また、同じ観点から大幅な遅刻も欠席として扱われることを予め知つておいて欲しい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 演習アジェンダの解説（演習の進行スタイルの提示と到達目標、評価方法について） 第2回 編集入門：縦軸編集、横軸編集、カラーグレーディングの理解 第3回 編集スキル1：基本操作 インターフェイスの理解 第4回 編集スキル2： 基本操作 編集、トリム、カット編集、インサート、オーバーライト 第5回 編集理論1： トリミングとモンタージュ、トランジションの考え方 第6回 編集スキル3：エフェクト、パラメータの制御 第7回 技術講義1：ビデオフォーマットの種類と特徴、コーデック、 第8回 編集スキル4：オーディオ、マルチトラック編集 第9回 編集スキル5： キャプチャ、素材管理 第10回 編集スキル6： 合成、縦軸編集 第11回 技術講義2： コンポジットの理論とマスク 第12回 編集スキル7： タイトル、モーショングラフィック 第13回 編集理論2： 時間軸 第14回 編集操作全般（再確認） 第15回 実技テスト			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 毎回、習得内容を設定して進むため、授業時間内で習得できなかつた部分、不安な部分、また、欠席した場合などは他の同等設備を使って復習することを推奨します。			

[授業科目名] 3DCGコンピュータアニメーション I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 1	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ Mayaによるモデリングを中心とした基礎的な3DCG技法のマスター。あわせて、3DCG制作に必要な知識を学習する。			
授業の概要 授業は、Mayaを使った実際の制作方法を学ぶ演習系授業と、CG全般について学ぶ理論の講義系授業から編成されています。講義系授業では、できるだけ多くの実例からCG技法を学びます。			
学生に対する評価の方法 各項目での制作30(%)、知識編の筆記試験40(%)、最終課題(30%)			
授業計画(回数ごとの内容等) <実技編> 第1回 3DCGツール概説(Mayaインターフェース) 第2回 モデリング概説 第3回 ポリゴンモデリング(1) 第4回 ポリゴンモデリング(2) 第5回 ポリゴンモデリング(3) 第6回 ポリゴンモデリング(4) 第7回 ポリゴンモデリング(5) 第8回 NURBSモデリング(1) 第9回 NURBSモデリング(2) 第10回 NURBSモデリング(3) 第11回 NURBSモデリング(4) 第12回 NURBSモデリング(5) 第13回 Shadingとマテリアル 第14回 制作実習(1) 第15回 制作実習(2) <知識編> 第1回 コンピュータグラフィックスの定義と応用範囲 第2回 デジタル画像の基礎 第3回 座標系、回転、移動、拡大縮小 第4回 モデリング技法 第5回 マッピング技法とマテリアル 第6回 カメラワーク、ライティング、レンダリング 第7回 演出、制作進行			
使用教科書 「Autodesk Maya セルフトレーニング」ボーンデジタル刊 (ISBN:978-4-86246-152-0)、「デジタル映像表現」CGarts協会 (ISBN:978-4-903474-10-6)、配布プリント			
自己学習の内容等アドバイス 単元ごとの技法は次回までに必ず習得しておくこと。			

[授業科目名] 3DCGコンピュータアニメーションⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ※同講座Ⅰを履修したもの
授業の到達目標及びテーマ 同講座Ⅰに引き続き、Mayaを使用した3DCGのさまざまな技法を習得する。 3DCG制作過程の理解と制作を到達目標とする。CGそのものの技法から、作品を作る上で必要なトータルな技法の習得を学習する。			
授業の概要 毎回の授業は、個別な単元にまとめられている。授業は、実習と課題制作から構成されている。			
学生に対する評価の方法 各単元での制作(60%)、最終課題(40%)			
授業計画(回数ごとの内容等) <実技編> 第1回 モデリングの復習 第2回 モデリングの応用(1) 第3回 モデリングの応用(2) 第4回 モデリングの応用(3) 第5回 マテリアル設定 第6回 シェーディング 第7回 ライティング応用 第8回 アニメーション(1) 第9回 アニメーション(2) 第10回 スケルトン、IK 第11回 レンダリング応用 第12回 映像編集(1) 第13回 映像編集(2) 第14回 制作(1) 第15回 制作(2)			
使用教科書 「Autodesk Maya トレーニングブック3」ワークスコーポレーション刊 (ISBN:978-4862671165)			
自己学習の内容等アドバイス 授業内の課題は、次回までに必ずマスターしておくこと。			

[授業科目名] アニメーション演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 杏名 健一
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではアニメーションの構成要素の一つである「動き」に着眼する。 万物の動きを分析的に捉え、それがアニメーションの歴史の中でどのように表現されてきたかを学ぶ。そして現実の動きの再現にとどまらず、新しい動きを創造する事を最終目標とする。			
授業の概要 3 アニメーションの技術を体系的に捉え、作品鑑賞や実習を交えながら基礎的な技術と知識を習得する。 本講義を受講するに際し、必ずしも絵が描ける必要は無い(棒人間が描ければ十分)。			
学生に対する評価の方法 受講態度、各講義における成果物により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 イントロダクション 絵が動く喜び 第02回 基礎理論 なぜ絵が動いて見えるのか 第03回 Adobe Flash のアニメーションに特化した使い方(1) フレームアニメーション 第04回 Adobe Flash のアニメーションに特化した使い方(2) モーショントゥイーン 第05回 運動の法則(1) 等速運動、加速度に則した運動 第06回 運動の法則(2) 作用・反作用 第07回 運動の法則(3) 演習(ボールを使ったアニメーションを作成) 第08回 エフェクトアニメーション(1) 自然現象をどう捉え、どう描くか 第09回 エフェクトアニメーション(2) 演習(ランダムの作成、波の作成) 第10回 エフェクトアニメーション(3) 演習(水、炎、煙、雷) 第11回 ロトスコープ(1) 実写をトレースする事により学べること 第12回 ロトスコープ(2) ロトスコープ演習 第13回 演習(1) 1 5秒CMの作成 第14回 演習(2) " " 第15回 講評、総評			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 教科書の隅にぱらぱら漫画を描いてみてください。			

[授業科目名] アニメーション演習Ⅰ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 雅則
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、アニメーション表現の原点に立ち返り、キャラクターを自らの目と手を用いて「動かす」という体験を通じて実際に作品を制作、形として残すことにより、表現の基礎を学ぶことを目的としている。			
授業の概要 映像表現におけるアニメーションの技法は日々多様化し、デジタル技術に負う部分も増加の一途をたどっている。しかし、本来動かないものを動かし生命を与えるというアニメーションの持つ本質的な目的はアナログ／デジタルに関係なく共通である。本講義ではその基本概念を演習形式で学習する。アニメーション演習Ⅰは基礎を重点に、アニメーション演習Ⅱでその発展を、演習を通して実践する。			
学生に対する評価の方法 受講態度、課題作品による総合的な判断による。 特に課題作品を重視する。(70パーセント) 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 簡易的なキャラクターを組み立て、撮影、編集までの一連の流れをワークショップ形式で経験する事により、アニメーション制作の理論と仕組みを体験する。 本講義では主にカットアウトアニメーション(切り紙アニメーション)と呼ばれる技法を通じ、基礎的なキャラクターアニメーションについて学習する。			
第1回 アニメーションとは① カットアウトアニメーション 第2回 アニメーションとは② 作品研究Ⅰ 第3回 アニメーションとは③ 作品研究Ⅱ 第4回 キャラクター制作① 第5回 キャラクター制作② 第6回 撮影① 第7回 撮影② 第8回 撮影③ 第9回 キャラクター制作③ 第10回 キャラクター制作④ 第11回 撮影③ 第12回 撮影④ 第13回 撮影⑤ 第14回 編集 第15回 総評			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 歩き、ジャンプなどの基本的な人の動きについて、友人や街中の人などを普段からよく観察してみてください。			

[授業科目名] アニメーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 沓名 健一
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ※同講座Ⅰ(沓名)を履修したもの
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではイメージの持つ機能を学ぶと共に、アニメーションの歴史の中でイメージの持つ機能がどの様に扱われてきたかを学ぶ。そしてアニメーション演習Ⅰで学んだ技術と本講義で学んだイメージの持つ機能を使って総合的にデザインされたアニメーションを制作することを到達目標とする。			
授業の概要 アニメーションの技術を体系的に捉え、作品鑑賞や実習を交えながら基礎的な技術と知識を習得する。本講義を受講するに際し、必ずしも絵が描ける必要は無い(棒人間が描ければ十分)。			
学生に対する評価の方法 受講態度、レポート、制作作品の表現内容により総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第01回 「撮影」 アニメーションにおけるアナログ撮影技術、現代の撮影コンポジット 第02回 「デザイン」 イメージの選択、記号化、キャラクターデザイン 第03回 「リアリティと身体性」 宮崎駿、押井守の作品を例に解説 第04回 キャラクターアニメーション(1) 人体構造の理解 第05回 キャラクターアニメーション(2) 演習(歩き) 第06回 キャラクターアニメーション(3) 演習(走り) 第07回 キャラクターアニメーション(4) 演習(芝居) 第08回 演習(1) 条件を設定したキャラクターアニメーションの作成 第09回 演習(2) " 第10回 機能的なアニメーション(1) モーショングラフィックス 第11回 機能的なアニメーション(2) サイケデリックなイメージ 第12回 機能的なアニメーション(3) 「萌え」 アニメについて 第13回 演習(5) 機能的なアニメーションの作成 第14回 演習(6) " 第15回 講評、総評			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 出来るだけ多様なアニメーション作品に触れておいてください。			

[授業科目名] アニメーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 雅則
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ※同講座Ⅰ（吉田）を履修したもの
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、アニメーション表現の原点に立ち返り、キャラクターを自らの目と手を用いて「動かす」という体験を通じて実際に作品を制作、形として残すことにより、表現の基礎を学ぶことを目的としている。			
授業の概要 映像表現におけるアニメーションの技法は日々多様化し、デジタル技術に負う部分も増加の一途をたどっている。しかし、本来動かないものを動かし生命を与えるというアニメーションの持つ本質的な目的はアナログ／デジタルに関係なく共通である。本講義ではその基本概念を、演習形式で学習する。本演習はアニメーション演習Ⅰの発展であるので、同講義を受講している事を履修の条件とします。			
学生に対する評価の方法 受講態度、課題作品による総合的な判断による。 特に課題作品を重視する。（70パーセント） 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 自ら考案したキャラクターを作成し、撮影、編集までの一連の流れをワークショップ形式で経験する事により、各自の作品制作への扉を開き第一歩を踏み出すきっかけとする。 本講義では主にカットアウトアニメーション（切り紙アニメーション）と呼ばれる技法を通じ、基礎的なキャラクターアニメーションについて学習する。			
<p>第1回 アニメーションとは① カットアウトアニメーション</p> <p>第2回 アニメーションとは② 作品研究</p> <p>第3回 キャラクターアイデア①</p> <p>第4回 キャラクターアイデア②</p> <p>第5回 プレゼンテーション①</p> <p>第6回 プレゼンテーション②</p> <p>第7回 キャラクター制作①</p> <p>第8回 キャラクター制作②</p> <p>第9回 キャラクター制作③</p> <p>第10回 キャラクター制作④ キャラクターの完成</p> <p>第11回 撮影①</p> <p>第12回 撮影②</p> <p>第13回 撮影③</p> <p>第14回 撮影④</p> <p>第15回 総評</p>			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 簡単なストーリーを組み立て、実際にショットを制作することにより、後に必要となる独自な映像表現への基礎作りをします。普段から、好きな映画などのショットの割り方を分析しながら見るように心がけてください。			

[授業科目名] インタラクティブメディア基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山本 努武
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ インタラクティブとは「対話性」や「双方向性」をあわらします。つまり、受け手がいて初めて成り立つやりとりの仕方であり、コミュニケーションを主体としたメディアのあり方であると言えます。 この授業では最も身近なインタラクティブメディアである、スマートフォンコンテンツに関する基礎的な知識と技術を習得します。			
授業の概要 スマートフォンとは? スマートフォンとhtml5 / スマフォブラウザ iOSとObjective-C(xcode)			
学生に対する評価の方法 授業参加態度 (50%)、各課題評価 (50%)			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 導入 第02回 スマフォを知る 第03回 html5でwebアプリを作つてみる (1) 第04回 html5でwebアプリを作つてみる (2) 第05回 html5でwebアプリを作つてみる (3) 第06回 iOSとは? 第07回 xcodeとobjective-C入門 (1) 第08回 xcodeとobjective-C入門 (2) 第09回 iOS開発の手順 第10回 iOS UIKitフレームワークを活用する (1) 第11回 iOS UIKitフレームワークを活用する (2) 第12回 iOS UIKitフレームワークを活用する (3) 第13回 iOS UIKitフレームワークを活用する (4) 第14回 iOSアプリの企画 第15回 発表			
使用教科書 授業で使用する教科書はありません、教員が準備したスライド教材を使用します。 ※ 参考図書「iPhoneアプリ開発「超」入門」 等			
自己学習の内容等アドバイス 講義に対する「課題」の提出を重視するので、必ず、既定の方法で作成すること。評価時のプレゼンテーションについても準備すること。			

[授業科目名] Web マネジメント演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ビジネスとして、html 制作、または、EC サイト制作と関わる上で必要な知識と技能を身につける。 すでに学習済みの HTML 基礎技法に続けて、さらに進んだ Web の書法、制作法を学習します。さらに、そうした技法をビジネスとして結びつけるための「企画書・仕様書作成」「Web マネジメント」「カラーマネージメント」「Web ビジネス」「IT 関連法」などについて、実践的に学習します。			
授業の概要 授業は講義と、それに基づいた演習とで構成される。大学教育であるので、単なる技術習得を目標にせず、制作全体を統括する能力を習得することを本講座の目標とします。演習科目であるので、授業の前半は知識習得、後半はそれを使った演習で構成されます。			
学生に対する評価の方法 単元ごとに実施される課題 (60%)、最終課題 (40%)			
授業計画（回数ごとの内容等） <インターネット編> 第1回 インターネット概論、HTML 復習 第2回 インターネット&Web ビジネスに必要な知識 第3回 EC サイトの現状、EC サイト分析 <インターフェースデザイン編> 第4回 インターフェースデザイン（1）－基本的デザイン技法 第5回 インターフェースデザイン（2）－認知心理学応用、デジタルデザイン 第6回 デジタルデザイン 第7回 カラーコーディネイト（1） 第8回 カラーコーディネイト（2） <サイトマネジメント編> 第9回 Web 制作（1）Web 制作フローの理解 第10回 Web 制作（2）サイト企画段階、サイト設計段階－サイトデザインアーキテクト 第11回 Web 制作（3）ユーザビリティ&アクセシビリティ 第12回 Web 関連法（1）著作権法 第13回 Web 関連法（2）IT 関連法 第14回 Web 制作（6）－企画書制作技法、プレゼンテーション技法 第15回 Web 制作（7）－Web 仕様書制作技法			
使用教科書 前期終了時に指示			
自己学習の内容等アドバイス セクションごとに課題を実施するので、授業後に用語などをしっかりと理解しておくこと。授業時間内で完成しなかった課題については、次週までに必ず仕上げておくこと。			

[授業科目名] 映像サウンド演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 幸長
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考] 履修者数制限あり
授業の到達目標及びテーマ 制作を通じ自主性、協調性をあわせもつ学生の育成をテーマとします。様々な映像に対する「音響効果」を考察、考案し、音を自分で収録、加工して目的となるシーンに合うふさわしい音をゼロから作成する能力を身につける。と同時に相対的なラウドネスを意識し客観的なミキシングが出来ることを到達目標とする。			
授業の概要 音響効果という観点から作品を取り上げ、実際に使用されている効果音の道具やその作成方法など、録音からミックスまでを実技を交えて解説し習得させる。またチーム制作を通じ、ディスカッションを頻繁に行うことで3年次に向けたチーム制作における基礎能力や各自の責任感も養う。録音機器の貸出、映像へのアフターレコーディング（アフレコ）を音響編集室で行います。			
学生に対する評価の方法 課題1が30%、課題2が30%、授業態度40%、で評価する。 作品制作における授業態度を重要視する。遅刻は評価点が下がります。再評価なし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 音響スタジオにてアフレコ体験～録音基礎1（音声信号の流れマイクロフォンを使用した録音演習。） 第2回 録音基礎（エフェクター1 コンプレッサー、イコライザー、ディレイ、リバーブの解説、演習） 第3回 効果音制作1（音を分解する。どんな音が何に似ているかを解説。編集の基礎） 第4回 効果音制作2（課題1シチュエーションマップを作成し効果音をレコーダーで収録、整音。音楽の選曲） 第5回 効果音制作3 課題1（ショートドラマ制作） 第6回 効果音制作4 課題1（ショートドラマ制作） 第7回 発表&講評 課題1に対するレポート提出 第8回 映像に対するアフレコ&効果音制作1（チームに分かれシナリオ制作） 第9回 映像に対するアフレコ&効果音制作2（この週から音響スタジオでのセリフ録音チーム順に開始。） 第10回 映像に対するアフレコ&効果音制作3（制作の進行に合わせ指導） 第11回 映像に対するアフレコ&効果音制作4（制作の進行に合わせ指導） 第12回 映像に対するアフレコ&効果音制作5（制作の進行に合わせ指導） 第13回 映像に対するアフレコ&効果音制作6（制作の進行に合わせ指導） 第14回 映像に対するアフレコ&効果音制作7（完成作品提出日） 第15回 講評、作品レポート提出			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 大学内外で観賞する映画やTV、また日常のありとあらゆる音について、この授業で学んだ事を意識し高めることがどんなジャンルに進んでも役に立ちます。また制作過程に置いてフィールドレコーダーを貸出しますので常に携帯し録音するチャンスを逃さない事。			

[授業科目名] 映像音響論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 幸長・周防 義和
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な映像作品にある音をテーマとし、音楽／音響という観点から音への意識向上を目標とする。			
授業の概要 映画、テレビ番組、CMなど映像メディアにとって、音楽／音響は欠かせない存在である。しかし、映像作品を見るとき、そこで使われている音をはっきりと意識して聞いている場面は、意外に少ない。本講義は、こうした映像作品における音楽／音響の特色、効果、技術、技法について、実際の作曲ならびにサウンド・エンジニアリングをふまえた分析と考察を行う。			
学生に対する評価の方法 課題提出、授業態度、提出作品で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 【映像と音響】 全7回 普段なにげに鑑賞している映画やテレビ、ラジオ。そこに含まれる音が自然であればある程、視聴者は自然に作品の世界へと誘われる。実際には映っていないフレームの外にある空間の広がりや現実にはない音を制作し使用する事によって、映像だけでは表現しきれない効果も生まれる。その映像、ラジオにおける音響効果、整音技術を実際の映画等のシーンを抜粋、鑑賞し、解説する。（森 幸長） ●映像と音響——全7回（森 幸長） 第 1 回 授業内容説明 無意識の中にある音 音の仕事 MA とは？ タイムコード概要 必要な機材 第 2 回 ステレオ再生の基礎 音ってなに？ 音像の定位 位相について 第 3 回 録音基礎 音のレベルをとる ケーブルコネクタの種類と構造 第 4 回 現場での録音 同録について これだけは守ろう 7 篇条 ●映像と音楽——全8回（周防 義和） 第 5 回 CM音楽・映像と作曲-その1 デザイン的な作曲法。短い秒数の音楽分析 第 6 回 CM音楽・映像と作曲-その2 広告戦略のどの部分にアジャストする音楽か 第 7 回 TVドラマ劇中音楽の考察-その1 シーンを繋ぐ役目としての音楽。他の音との共存 第 8 回 TVドラマ劇中音楽の考察-その2 心情に合わせるか、アクションに合わせるか 第 9 回 声（voice）を使った音楽の作曲法。長調短調以外のスケールの音楽 第10回 映画音楽の分析-その1 リディアン&ドリアンモードスケール、4度の堆積和声での作曲法 第11回 映画音楽の分析-その2 ライトモティーフとアンダースコア、という考え方 ワンドモチーフのヴァリエーションで構成する劇中音楽作曲法 第12回 映画音楽の分析-その3 タイミングを合わせる音楽・劇中音楽の基本傾向 ●映像と音響（森 幸長） 第13回 CMについて テレビ放送における音声レベル運用基準について、ラウドネスマーターの導入に置ける日本の取り組み。 第14回 フォーリーアーティストの仕事 効果音実践 エフェクターについて 効果的なエフェクト処理 ノイズの効果。 第15回 総論。全講義を振り返り質疑応答を行う。最終レポート課題提出。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス (森) 日常のあらゆる音を意識するよう心がける。屋内、外での音の響きの違いや、音質の違いを感じる事。自宅でのリスニング環境を整え、お気に入りのヘッドフォンやスピーカーを見つけ自分のリファレンスを持つ事も大切。いろいろな環境で音や音楽を聴き違いを感じる事。(周防) TVCMでの学習後では実際に家で見る時に今までとは異なる視点で、なぜその映像にその音楽が使用されたか考察する。授業題材の映画は一部の観賞であるため、学習ポイントや、その前後の流れを把握するためにレンタル等で見ることがより深い理解を得られる。観賞の際、単に話の筋書きの面白さや俳優の演技だけにとらわれず、カメラの動き、アングル、客観的にセリフの意味や、セリフSE等のあるシーン、ないシーン、そして音楽の入るシーンの意味、またその入るタイミング、終わるタイミングの意味を理解できるように心がける。			

[授業科目名] サウンド・メディア・アート特別演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 下田 展久
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 受講には筆記具が必要です。
授業の到達目標及びテーマ 音楽とは別に音というメディアを用いたアート、サウンドアートについて作家の活動やその作品を知る。また、ワークショップを通して音というメディアの基礎的な特質を理解する。サウンドアーティスト、その作品を理解・評価し、他者に紹介するための技術を身につける。自分の視点をたてること、人に伝えるという意識を持つこと、そのための実践的な技術を持つことを目標にする。			
授業の概要 芸術作品はそれ自体、全体で多様な意味をなしていて要約することは難しい。しかし、アーティストの活動や作品に触れた感動や興味深さを紹介する努力はできる。自分が感じた興味を分析し自分なりの視点をたて、人の共感を得る、そのための技術としての編集、構成、企画について講義を行い、文章を書く演習をおこなう。			
学生に対する評価の方法 授業中随時のプレゼンテーション(20%)、小レポート(40%)と最終のレポートあるいは成果物(40%)で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 サウンドアートとは 第2回 サウンドメディア体験演習 第3回 音響、音の物理現象について 第4回 サウンドアーティスト紹介／映像、テキスト、写真、音などを用いて 1 第5回 アーティスト紹介／映像、テキスト、写真、音などを用いて 2 第6回 人に伝える 1／情報の収集と取材の方法 第7回 人に伝える 2／取材演習／インタビューセッション 第8回 人に伝える 3／コンテンツの編集／プロットを構成する 第9回 人に伝える 4／プレゼンテーション 第10回 人に伝える 5／プレゼンテーション 2 第11回 アーティストを紹介する／情報収集と分析 第12回 アーティストを紹介する／自分の視点をたててみる／企画 第13回 アーティストを紹介する／インタビューセッション／記録 第14回 アーティストを紹介する／編集 第15回 アーティストを紹介する／グループディスカッション			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス インターネットでサウンドアートという言葉の使われ方を調べ、できるだけ多くの作品ビデオに触れておく。疑問に思った事と興味をもつたことをメモしておく。			

[授業科目名] パフォーミング・アーツ論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伏木 啓
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、映画、舞台芸術、現代美術、メディア・アートの文脈における「身体表象」を多様な視点から学ぶことによって、映像メディアにおいて記号的な扱いとなりがちな「身体」を、「生身のからだ」として見つめ直し意識的に捉えることを目標とする。			
授業の概要 本講義では、パフォーミング・アーツを次の3つの視点より学ぶ。 ・演劇、舞踊などの近代以降の舞台芸術 ・20世紀以降の脱芸術的意図/日常に対する非日常性の介入をねらった「行為としてのパフォーマンス」 ・映像やインスタレーションと身体を複合的に扱うメディア・アートとしての「パフォーマンス」			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後的小レポートにて確認）、最終レポート課題による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション（授業概要など） 第02回：物語と身体（スタニスラフスキイ・システムと演劇/映画演技） 第03回：反物語と身体（オスカー・シュレンマー、イサドラ・ダンカン、マーサ・グラハムなど） 第04回：脱芸術としてのパフォーマンス1（未来派、ダダ、シュールレアリスムなど） 第05回：脱芸術としてのパフォーマンス2（フルクサスなど） 第06回：日本の身体の再考1（舞踏:土方巽、大野一雄など） 第07回：日本の身体の再考2（鈴木忠志、唐十朗など） 第08回：日本における現代演劇1（1970年代の演劇/寺山修司など） 第09回：日本における現代演劇2（1980年代-90年代の演劇/野田秀樹、平田オリザなど） 第10回：コンテンポラリーダンス1 第11回：コンテンポラリーダンス2 第12回：メディア・アートとパフォーマンス1 第13回：メディア・アートとパフォーマンス2 第14回：現在のパフォーマンス 第15回：総括			
※授業期間中に、おすすめの舞台/パフォーマンスがある場合、課題として鑑賞するように指示する可能性があります。ただ、鑑賞料を支払う必要があるので、受講生の皆さんと相談し、決めたいと思います。			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 舞台芸術やパフォーマンスは、本来は記録映像としてではなく、劇場等で実際に体感することが重要である。そのため、できるだけ劇場などに足を運ぶことをおすすめする。また、講義でとりあげた作家や作品に関して、図書館などで関連文献を調べ、新たな「気づき」を持つ機会を増やすことも大切である。			

[授業科目名] パフォーマンス演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 伏木 啓
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 本演習履修前に前期「パフォーミング・アーツ論」の受講をすすめる
授業の到達目標及びテーマ 映像メディアにおいて記号的な扱いとなりがちな「身体」を、「生身のからだ」として見直し、意識的に扱う方法を実践的に学ぶ。また、映像作品における「演技演出」や、アート作品における「パフォーマンス」に応用できるようにする。			
授業の概要 本演習では、パフォーマンスを次の3つの方向性から捉え、実践を通して学ぶ。 ・演劇や映画などの物語を背景とした「演技」 ・20世紀以降の脱芸術的意図/日常に対する非日常性の介入をねらった「行為としてのパフォーマンス」 ・映像、インスタレーションと「身体」を複合的に扱うメディア・アートとしての「パフォーマンス」			
学生に対する評価の方法 受講態度、作品発表による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション（授業概要/グループ分けなど） 第02～04回：演技/身体表現などの実践 または、日常を非日常化する「行為としてのパフォーマンス」の企画 第05回：作品発表と相互批評 第06回：パフォーマンスに関するレクチャー/予備日 第07～15回：複合的なメディアを扱った「パフォーマンス」の実践 第07～09回：作品研究、グループ分け及び、企画、実験。 第10回：実験 第11回：実験 第12～13回：作品制作 第14～15回：作品発表と相互批評 ※授業期間中に、おすすめの舞台/パフォーマンスがある場合、課題として鑑賞するように指示する可能性があります。ただ、鑑賞料を支払う必要があるので、受講生の皆さんと相談し、決めたいと思います。			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 映画、舞台、テレビ、あるいは美術やパフォーマンスなどを鑑賞するさいに、「身体」（演技、ダンスなどの「行為」だけではなく、表象としての身体やその扱われ方）を意識的に観るようにすること。			

[授業科目名] インスタレーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 2年生前期に学んだインスタレーション分野の知識・技法を踏まえ、オブジェクト、テキスト、映像、そして身体と場との関係を空間全体で捉え、一つの空間作品として構成する力を養うことを目的とし、新たな表現の可能性を自ら追求する姿勢を養う。			
授業の概要 前半では、あるテーマのもと、そのテーマに基づいた行為と場所との関係性を意識させ、場所性による必然的な手法で空間を作り上げていく。また、ある一定の素材を用いてつくられた空間に投影すべき映像を編集し、その空間の中でパフォーマンスする作品をつくることで、舞台芸術を射程に入れた空間表現を行う。			
学生に対する評価の方法 課題制作におけるテーマの理解力・表現内容の追及の深さ・構想能力中心に、各作品発表(プレゼンテーション)より、評価する。 受講態度より、授業に対する意欲として判断し、評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～7回「fake stone」～フェイクと場との関係表現（個人制作） 1. 課題の把握と制作手順の理解 2. 量材による石の制作 形と質感 3. 石の彩色 色彩の基本 4. 場に置けるゲニウス・ロキ(土地の記憶など)の理解 5. 場と石の関係より設営決定 6. 現場撮影と編集 7. プrezentation 第8回「インスタレーション作品の体験」 学外授業(美術館・ギャラリー)にて、今現在の作家がどのような新たな表現手法しているか、パフォーマンスも含めたインスタレーション作品に触れる。 第9～15回「映像と空間構成」表現（チーム制作） 面材料によって構成される空間に、時間を有する映像を投影し身体で表現する課題 1. テーマを知り、映像と空間をイメージする *役割分担・空間制作・映像制作・脚本制作など 2. 空間構成を決定し、その場にあった映像とタイムラインについて討議する 3. 面材による空間制作と映像撮影・編集、脚本(タイムライン)の仕上げ 4. 空間設営と身体表現の練習 5. 通しでの演技練習 6～7. プrezentation 使用教科書 空間とパフォーマンスに関する映像資料(ダム・タイプ、東京など)を参考			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などを)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] インター・メディア・アート論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 佐近田 展康
[単位数] 2	[開講期] 2~4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代のアート状況はメディア技術を置いては語れない。これを解釈するために、この講義があげた目的は3つある。まず「メディア論」と呼ばれるものの考え方を理解すること。それを具体的なメディアとアートの歴史をたどることで検証すること。最終的に、現代のアート状況をメディアの観点から批判的に考察する目を養うこと、である。これら3つの目標は、知識の習得だけに終わるべきではなく、自身の発想や作品制作に役立たせることで真価を發揮する。知識と制作をつなぐこの回路を各自が体感することが到達目標になる。			
授業の概要 目、光、影、鏡、声、文字....といった原初のメディアから、最新の情報テクノロジーにいたるまで具体的に検証し、メディア技術とアートの深い結びつきについて、古今東西あらゆるジャンルを横断しながら理解する。具体的には、絵画、美術、写真、映画、テレビ、ビデオアート、音楽、サウンドアート、ダンス、パフォーマンス、ファッショント、メディアアート（インターラクティブ・アート、デバイス・アート、ネットワーク・アート等）、可能な限り多くの作品を鑑賞する。 そのうえで、マクルーハンやベンヤミンに代表される「メディア論」的なものの考え方を理解しながら、私たちの《日常的な現実》体験がいかにメディアによって構成されているのかを知り、生きるため、作品を作るためになぜこのような「理論」を知ることが必要なのかを考察したい。 そして、これらのメディア論とさまざまなメディア技術の交わる点に、もっとも現代的な表現として「（インター）メディアアート」を位置づけ、その未来を展望する。			
学生に対する評価の方法 受講態度 [40%]、レポート [60%] で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 イントロダクション 《眼差し》の不思議 ～デカルト、マッハ、フッサー、錯視、カメラの視線 第2回 光と影(1) 影のアート ～プラトンの洞窟、影絵芝居、ファンタスマゴリア 第3回 光と影(2) 光と影のパフォーマンス ～ドゥクフレ、ジュリアン・メール、幻燈ダンス 第4回 鏡と反射(1) 鏡と精神分析 ～マグリット、デュアン・マイケルズ、ゲイリー・ヒル 第5回 鏡と反射(2) 最初の問い合わせ「メディアとは?」 ～パイプ・モデルと鏡モデルの対比、ベラスケスの鏡 第6回 フレームと現実(1) 《切り取る》という映像の宿命 ～アジェ、ダグラス・ゴードン、リップチンスキイ 第7回 フレームと現実(2) フレームを超えるとする欲望 ～パノラマからVR、拡張現実まで 第8回 声と文字(1) 声の文化と文字の文化 ～マクルーハンのメディア論、世界のヴォイス・パフォーマンス 第9回 声と文字(2) 亡靈の声 ～初音ミクと人工音声 第10回 身体と装飾(1) 皮膚の拡張としてのファッショント/身体造形 ～コルセットと身体の文化 第11回 身体と装飾(2) メディアとしての身体 ～マシュー・バニー、勅使河原三郎、ビヨーク、ジェミニノイド 第12回 メディアの脱構築 脱構築とアート ～ケージ、パイク、マクラレン、クリスチャン・マークレー 第13回 サウンドとメディア サウンドアート/実験音楽 ～ビル・フォンタナ、キソン、スティーブ・ライヒ 第14回 テクノロジーとメディア 機械に追い込まれる芸術家たち、メディアアートとは何か 第15回 まとめ メディア技術を通じて「現代」を問い合わせ、思考し、表現すること			
使用教科書 参考図書: W・テレンス・ゴードン著『マクルーハン』筑摩書房 ヴァルター・ベンヤミン著『ベンヤミン・コレクション1』ちくま学芸文庫 石田英敬著『記号の知/メディアの知』東京大学出版会、鷺田清一著『ちぐはぐな身体』ちくま文庫			
自己学習の内容等アドバイス 授業で触れた用語、人名、作品をインターネット等で調べ整理すること。可能な限り動画サイトで関連作品を検索すること。調査した内容はテキストにまとめ、復習・参照できるよう保存すること。			

[授業科目名] 放送制作論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 和郎
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ラジオの誕生は事件・災害の「速報」を可能とすると共に、流行歌などの演芸文化が全国的に共有されることになった。さらにTVは「視聴者の関心に添う森羅万象の映像化」を探り続けると共に、衛星中継による「リアルタイム報道=即報」を可能にした。このため、伝える側には「緻密なリサーチに基づく企画構成」と共に「瞬時の判断」をも要求されることになった。実際に放送された番組を「制作側」の観点から分析することにより、狙いと効果を考察する。また、自ら番組を企画提案することで「視点+思点」を磨く。それは、放送に限らず、ネットやパッケージ等あらゆるコンテンツに共通する制作の基礎でもあるからだ。			
授業の概要 毎回冒頭にメディア界の動きを解説し、時流としての「いま」を強く意識させる。特に「放送倫理・番組向上機構（BPO）」や「日本新聞協会」の最新見解については制作の規範として重視する。講義で視聴する番組については、制作データや解説資料をテキストにまとめて毎回配布する。それをもとに、制作側と視聴者側の双方の視点からテーマ・構成・内容を討論形式で吟味し、出席票にミニリポートを記入して提出。			
学生に対する評価の方法 教材映像の視聴態度と視聴後の討論内容、およびミニリポートにより毎回の評価とする。最終評価は、課題の「君がつくりたい番組」の企画提案内容を加味する。試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ラジオ放送の誕生と社会変革（全国同時の速報、共通語の普及、ラジオ体操・ラジオ歌謡の登場） 第2回 テレビの誕生と番組開発の歴史（草創期のニュース映像と、放送史に残る名番組） 第3回 速報から即報へ（衛星中継による戦場からの生中継など、タイムラグ・ゼロをめざす技術革新） 第4回 企画編集の思点とカメラの視点（番組制作の原点はドキュメンタリーにある） 第5回 ドキュメンタリー① 人間を観察する：個人密着型ドキュメンタリーを分析する 第6回 ドキュメンタリー② 社会を観察する：告発型や啓発型のドキュメンタリーを分析する 第7回 ドキュメンタリー③ 自然を観察する：自然探求型ドキュメンタリーを分析する 第8回 教育・教養番組：こども番組やサイエンス番組をエデュティメント化する演出 第9回 エンタテインメント番組①：ドラマ・音楽・バラエティーなど娯楽番組の演出 第10回 エンタテインメント番組②：制作費およびプロダクションの役割 第11回 スポーツ番組：生の迫力を多視点でリズミカルに捉える醍醐味 第12回 放送と言葉：コメントの重要性、人権に関わる禁止用語など放送番組基準について 第13回 放送はサムシング・ニューを求める：「君が作りたい番組」の提案表を配布 第14回 メディア産業としての放送の未来：「放送番組制作作業実態調査」（総務省）などを参考 第15回 課題の企画プレゼンテーション：数編を選択して企画会議風に討論する			
使用教科書 テキスト資料を毎回配布するので教科書は特に用いないが、以下を参考書として薦めたい。 「情報力（長谷川慶太郎：サンマーク出版）」「テレビアリティの時代（大見崇晴：大和出版）」「TV魔法のメディア（桜井哲夫：ちくま新書）」「脳内イメージと映像（吉田直哉：文芸新書）」「社会の今を見つめて：TV ドキュメンタリーをつくる（大脇三千代：岩波ジュニア新書）」			
自己学習の内容等アドバイス 番組を「自分だったら、これをどのように捉えて構成するだろうか」と、制作する側に立って視聴すること。それが、メディアリテラシーや伝える力を磨く最も効果的な手段です。			

[授業科目名] Web プログラミング		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ Html5 + CSS3 js 入門、jQuery 入門、gmap API v3 wordpress を使った CMS 構築と php + MySQL			
授業の概要 作家活動や専門職への就職活動をする上で、自分のポートフォリオサイトを作つておくと何らかの助けになることが期待されます。この授業では、今日的な web 表現で中心になっている web プログラミングの初級を学び、ポートフォリオサイトを制作します。(ネットワーク演習を受講していない学生は、まずそちらを受講してください。)			
学生に対する評価の方法 課題提出 ※再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 導入 第2回 html5 と CSS3 (1) 第3回 html5 と CSS3 (2) 第4回 js 入門 シンタックス 第5回 js 入門 実装演習 (1) 第6回 js 入門 実装演習 (2) 第7回 jQuery 入門 (1) 第8回 jQuery 入門 (2) 第9回 gmap API v3 (1) 第10回 gmap API v3 (2) 第11回 wordpress (1) 第12回 wordpress (2) 第13回 wordpress (3) 第14回 wordpress (4) 第15回 課題提出			
使用教科書 授業では教員が用意したスライド教材やサンプルコードを使用します。 参考書籍 Google Maps API プログラミング入門、WordPress レッスンブック、JavaScript 中級講座 等			
自己学習の内容等アドバイス 日々閲覧している Web ページや Web アプリケーション、サービスの構造と仕様を分析してください。			

[授業科目名] 海外研修		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 齋藤 正和・村上 将城 他
[単位数] 2	[開講期] 2・3年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現地でのホームステイ、ESL 受講後に研修先大学で実際に開講されている講義を英語で受講することによる語学の修得と併せてポストプロダクション見学を始めとした海外の映像業界視察も行う。日本とは異なる文化や歴史を持つ国を訪れ、実際に生活し、学ぶことで国際感覚を養い参加学生の視野と可能性を大きく広げることを目的とする。			
授業の概要 研修先大学にて ESL、実際に開講されている講義科目を受講し語学力の向上を図る。現地のポストプロダクション視察、美術館 / ギャラリー訪問、各自がプランニングするエクスカーションなども設ける。			
学生に対する評価の方法 事前研修を含む研修レポート（90%）、研修への参画態度（10%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 海外デザイン研修オリエンテーション 第2回～5回 研修先国内事前説明 / 準備 <ul style="list-style-type: none">・研修国内事情の説明、渡航手続き方法、その他・研修先についての解説（訪問先施設：学校、美術館、博物館など）・外部講師による基礎英語講座等・事前レポート提出 第6回 事前研修（最終説明会）：研修先確認、危機管理 第7回 現地研修 第8回 現地研修 第9回 現地研修 第10回 現地研修 第11回 現地研修 第12回 現地研修 第13回 現地研修 第14回 現地研修 第15回 研修レポート提出			
使用教科書 担当者作成の資料			
自己学習の内容等アドバイス 研修先の事前調査を行い、件数先への興味・関心を高めて研修に参加すること。 また、研修後の報告書を必ず提出すること。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（西宮）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 西宮 正明
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A（フォト）を履修する必要があります。
授業の到達目標及びテーマ 日々進化し続ける映像メディアの中で、フォトは現実を自らの思想と感性で切り取る。すべての映像表現の基本であるというコンセプトで1・2年次に習得した自己表現を更にプロレベルに高まる諸々のレクチュア。実験を国際感覚で学習することを第一の目標としている。			
授業の概要 ドキュメントもコマーシャルも、メディアに対する自らの映像表現という点では共通であり、単に静止画像としてのフォトに止まらず動画とのコラボレーション、スチールアニメーション等の多様な映像表現としてのフォトグラフィーを根本より、分析・哲学して自らの社会への言葉とする国際感覚の表現を広く自らに求める授業を行う、特にコンセプトワーク、ディレクションワークを制作の基本として重視して行く。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 20% ゼミ展作品評価 40% ポートフォリオ 40% 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2～3回 目標設定及び試作を始める。 第4～5回 作家又はプロの制作について 第6～7回 コンタクトチェック及び撮影指導 第8～9回 ポートフォリオ等、レイアウト、エディティング実習 第10～14回 試作研究 第15回 試作研究の講評 ゼミ展に向けテーマの発表 第16回 前期まとめ（制作スケジュール確認） 第17～20回 ゼミ展に向け研究と制作 第21回 ゼミ展及び作品講評 第22回 ゼミ展作品反省会及びアーカイブ 第23～26回 作品研究及び共同制作 第27～29回 デザインを含めポートフォリオ完成のための制作 第30回 ポートフォリオの講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス アーティストは常に自らの現実をみつめ、常に自己の作品を撮り続けることが望ましい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (安達)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安達 洋次郎
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A(フォト)を履修する必要があります。
授業の到達目標及びテーマ 写真で『何を伝え、何が伝えられるか』を考察し研究する。現代社会を直視し、問題意識を持って研究、制作にあたる。その過程において社会に順応しうる、コミュニケーション能力、問題解決能力、企画力等をつけ責任ある人格形成を到達目標とする。最終的にはプロフェッショナルフォトグラファーを目指す。			
授業の概要 1. ドキュメンタリー フォト (リアルに一瞬を切り撮る写真) しっかりと目的意識をもち、社会に向けてレンズを通して、メッセージを発信する。特に人間社会をテーマにしたヒューマン ドキュメンタリーを研究する。 2. コマーシャル フォト (コンセプトに対して一瞬を創る写真) 目的をしっかりと (ターゲット、メディア等をしっかりと決め)、コンセプトに対してビジュアルインパクトの強い写真を研究する。 1. 2. の過去の名作よりフォトリテラシーを学び、キャンデットフォト、ポートレートフォトを徹底追求する。ゼミ生の個性を大切にしながら試作を繰り返し、ポートフォリオの充実をはかる。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 20% ゼミ展作品評価 40% ポートフォリオ 40% 再評価はしない			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション 第2~3回 フォト リテラシー (過去の名作より写真を読む) 第4~5回 ポートレートフォトの研究 (スタジオ及び戸外) 第6~7回 キャンデットフォトの研究 (演出と絶対非演出について) 第8~9回 テーマの検討 (資料収集及び現況分析) 第10~14回 試作研究 (2テーマ以上、14点以上の作品を前期中に仕上げる) 第15回 試作研究の講評 ゼミ展に向けテーマの発表 第16回 前期まとめ(制作スケジュール確認) 第17~20回 ゼミ展に向け研究と制作 第21回 ゼミ展及び作品講評 第22回 ゼミ展作品反省会及びアーカイブ 第23~26回 作品研究及び共同制作 第27~29回 デザインを含めポートフォリオ完成のための制作 第30回 ポートフォリオの講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 日社会の動静に敏感になるため、日常より新聞を読む習慣をつける。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（小山）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小山 智大
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A（フォト）もしくは領域演習B（デジタルフォトワーク）のどちらかを履修する必要があります。
授業の到達目標及びテーマ 日常における何気ない光を感じイメージし、情景・思いをフォトメディアによって具体化していく。 レンズを通して取得したビジュアルで、何が伝えられるかを研究。1、2年次で取得した基礎的な技術をふまえ、より柔軟で発想力のある制作を個々に追求していきます。その過程において社会に適応しうるコミュニケーション能力・企画力を構築し、責任感のある人格形成を到達目的とします。			
授業の概要 個々にテーマを設定し、写真（フォト）というメディアを考察・研究し、独創的な作品制作を定期的に進め、新しいアイデア・手法の発見と展示構想を具体化し制作発表します。 終盤ではポートフォリオを企画からデザイン・設計まで指導し、社会に向けて自己をプレゼンテーションする為のツールを制作します。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 20% ゼミ展作品評価 40% ポートフォリオ 40% 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 第2回 フォト考察（写真とは何かディスカッション） 第3～4回 個人面談・作品企画（作品の方向性を個別に確認） 第5～6回 表現手段考察（作品の展示方法や手段をグループで探る） 第7～9回 テーマの検討（ゼミ展に向けて、テーマ・題材を作る） 第10～14回 試作研究 第15回 試作研究の講評 ゼミ展に向けてテーマの発表 第16回 前期まとめ（制作スケジュール確認） 第17～20回 ゼミ展に向け研究と制作 第21回 ゼミ展及び作品講評 第22回 ゼミ展作品反省会及びアーカイブ 第23～26回 作品研究及び共同制作 第27～29回 デザインを含めポートフォリオ完成のための制作 第30回 ポートフォリオの講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 日頃から光を意識し、捉え、常に写真をとる姿勢を維持する事。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（瀬口）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A（CG I）を履修すること
授業の到達目標及びテーマ Media Design がテーマである。2DCG, 3DCG をベースに新たなメディア表現の可能性を追求する。 映像表現の基礎を確立し、実験映像・立体映像・立体空間表現にまとめる。 独創的で、豊かな表現が到達目標である。			
授業の概要 1. CG 映像の調査・分析・計画・展開 2. ストーリーボードの制作 3. ワークフローの構築 4. モデリングあるいは描画 5. アニメーション設定 6. ポストプロダクション処理 7. 上映フォーマットの計画・実施 8. 研究・制作プロセスを論文にまとめる 9. 作品のアーカイブ			
学生に対する評価の方法 実践的な作品制作を基本に評価する。評価の基準は、目標到達度と作品の完成・発表による。 <u>再評価は実施しない。全ての授業への出席を必須とする</u>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ゼミ オリエンテーション 第2回 テーマの調査・分析・コンセプト構築 第3回 コンセプト・方法論構築 第4回 ストーリーボード制作 第5回 制作概要プレゼンテーション 第6回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）1 第7回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）2 第8回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）3 第9回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）4 第10回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）5 第11回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）6 第12回 第1回中間発表 第13回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）7 第14回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）8 第15回 作品制作（モデリング・描画・テクスチャ・光源・アニメーション設定等々）9 第16回 ポストプロダクション1 第17回 ポストプロダクション2 第18回 作品完成・プレゼンテーション 第19回 ブラッシュアップ1 第20回 ブラッシュアップ2 第21回 ゼミ展による作品発表 第22回 アーカイブメディア制作1 第23回 アーカイブメディア制作2 第24回 アーカイブメディア制作3 第25回 作品制作のまとめ（論文） 第26回 作品制作のまとめ（論文） 第27回 卒業研究・制作のテーマ研究1 第28回 卒業研究・制作のテーマ研究2 第29回 卒業研究・制作のテーマ研究3 第30回 卒業研究・制作のテーマ研究4			
使用教科書 授業の中で適宜提示する。			
自己学習の内容等アドバイス CG の映像表現には、コンピュータハードやアプリケーションソフトの習得に目が向きがちであるが、造形の基本である色と形と動きを常に意識し、世界の広さやあるいは長い人類の歴史を俯瞰して、現在の自分がおかれている環境を分析しつつ目標設定し、自分なりの羅針盤で表現を考えてほしい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (山本)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 機械は融通が効かない面倒な道具ですが、私たちが気づかなかつたリアリティを提示してくれます。ちょっと前までは「バーチャルリアリティー」なんていう言葉が流行りましたが、今になってみると、「バーチャル」ではなかつたと顧みることができます。機械が提示するものの捉え方、考え方はこれからリアリティそのものに変容してゆくでしょう。そうゆうことを表現できたらすばらしいですね、というゼミです。			
授業の概要 授業は毎週ワークショップ形式で進めます。毎回2コマで完結するプログラムを用意してきますので、それを進め、終わりには一つの練習作品が出来上がっている、というようなかたちです。内容は授業計画にあるとおりですが、若干の変更があると思います。このゼミではコーディングやコンピュータサイエンスに関する講義を行いませんので、全くの初心者でも進められるように工夫しておきます。			
学生に対する評価の方法 感覚の鋭さや、柔軟さを重要視します。また、多様性を受け入れられる価値観も評価します。 作品の完成度や内容ももちろんですが、それに至る過程も評価します。 技能的な評価はあまり行いません。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入 これからの世界理解 第2回 機械に絵を描かせてみる (1) 第3回 機械に絵を描かせてみる (2) 第4回 日常++ 拡張現実 (1) 第5回 かわいい手品 実世界指向UI (1) 第6回 日常++ 拡張現実 (2) 第7回 かわいい手品 実世界指向UI (2) 第8回 日常++ 拡張現実 (3) 第9回 かわいい手品 実世界指向UI (3) 第10回 機械の目はすごいな 画像解析 (1) 第11回 機械の目はすごいな 画像解析 (2) 第12回 映像テクスチャ PM (1) 第13回 映像テクスチャ PM (2) 第14回 作品構想 第15回 作品構想発表 第16回～第30回 ゼミ展 作品制作指導 ゼミ展以降 作品アーカイブ作業 その後 Web 展に向けた活動			
使用教科書 毎回教員がスライド資料や、コードテキストを作成してきます。 参考書籍は授業内で適宜掲示します。			
自己学習の内容等アドバイス いろんな手段でいろんな人と繋がってください。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (渡部)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 真
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A (映画I) を履修すること
授業の到達目標及びテーマ 映画制作の中で撮影監督は技術集団の要であり、その重要な役割と責任の大きさは単に知識の集約だけでは務まらない。個人としては常に最新映像技術に敏感であり、さらにはそれを適時企画に生かす応用力、集団をまとめる統率力、安全への気配りなど全人格的なバランスを必要とする。ゼミでは撮影者からの切り口で映画を分析し、歴代の撮影監督の技と知恵、日本とハリウッドのシステムの相違とその理由をたどる。			
授業の概要 映画の発生当時スタッフは技術的に未熟であったが、すぐに職能集団として組織化され、作品ごとの態勢を作り上げていく。それはずか10年を経ずして世界的に拡大に到るが時代の要請でもあった。視覚文化が運動を表現したとき、その先にナラティブ(Narrative)への希求があったのだ。これが現在のWEB空間にもつながっていることを学びたい。またここで垣根を越えて切り取る撮影者の意識がこうした映像文化とどう関わっているのかも実践的に学びたい。			
学生に対する評価の方法 作品解釈レポート (20%)、制作レポート (40%) 発言 (20%) エチュード (習作) 評価 (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 ガイダンス 機械を通して見る映像 第02-03回 カメラマンの意識 宮川一夫の世界「雨月物語」 第04-05回 構図から運動への軌跡 グリフィスとビリービッツラー。 第06-07回 光とドラマ 「ブレードランナー」ヒジョーダン・クローネンウェス 第08-09回 光とドラマ ネストール・アルメンドロスの自然とは「天国の日々」 第10-11回 光とドラマ グレッグ・トーランドの陰影 「市民ケーン」 第12-13回 光とドラマ ゴードン・ウィリスのこだわり 「ゴッドファーザー」 第14-15回 ヴィットリオ・ストラーロの狂気と正気 「地獄の黙示録」 第16-17回 撮影と準備 主観と客観のはざま 第18回 撮影と予測 天気を相手にして勝てるのか 第19-20回 移動撮影について 小津安二郎「東京物語」 第21-22回 移動撮影実習 第23-24回 マルチカメラとスイッチング マルチカメラ実習 第25-26回 音楽と撮影 撮影技術に編集を考えられるか 第27-28回 アメリカのやり方と日本のやり方がそれぞれ何を産むか 第29-30回 まとめ			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 各回に出ているテーマから内容を予測し、調査をしておくこと。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (仙頭)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 仙頭 武則
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習 A (映画 I) を履修すること
授業の到達目標及びテーマ あらゆる物事には作法がある。映画も例外ではない。最終的には自由に表現すれば良いのだが、作法を知った上で自由に表現しようとして試みることこそが"道"に沿って歩むことにはならない。道は、作ろうとする者、観ようとする者、全てに通ずる。知るべし。			
授業の概要 前期は短編制作ゼミ展制作作品を念頭において即興的講義主体。後期は長編制作へのアプローチとして映画製作の概念を高速で作品鑑賞と平行しながら講義。 観る能力、すなわち徹底したリテラシーの向上。映画は「社会を映す鏡」であり「集団の記憶装置」であること、さらには様々な社会の「場」という認識を実感できるよう映画的悟性を研磨する。			
学生に対する評価の方法 企画プレゼンテーション 作品への取り組み方（面談などを含む） 提出作品・論文評価、制作レポート			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス、ミーティング 第2回 「観てなければ話にならない」100本の映画について 第3回 「世界の短編映画」を鑑賞して目からウロコ! その一 第4回 「世界の短編映画」を鑑賞して目からウロコ! その二 第5回 「世界の短編映画」を鑑賞して目からウロコ! その三 第6回 映画芸術論（芸術映画とは） 第7回 映画作法 その一 第8回 映画作法 その二 第9回 映画作法 その三 第10回 脚本基礎 すべての映画は「関係性の成長」にある 第11回 撮影・現場基礎 演技を見ることで監督の目・カメラマンの目 第12回 映画とは編集である 省略と拡大の理論 第13回 映画音楽とは 「感情と状況」の論理 音楽の重要性を知る 第14回 いかにして短編映画を製作するか 第15回 前期まとめ 第16回 ゼミ展制作作品の検証 その一 第17回 ゼミ展制作作品の検証 その二 第18回 ゼミ展制作作品の検証 その三 第19回 ゼミ展制作作品の検証 その四 第20回 どこを見ているのか 第21回 観る力こそ、創る力 第22回 「観てなければ話にならない」100本の映画 作品解釈法 第23回 「観てなければ話にならない」100本の映画 作品解釈法 第24回 「観てなければ話にならない」100本の映画 技術講習 第25回 「観てなければ話にならない」100本の映画 技術講習 第26回 「観てなければ話にならない」100本の映画 技術講習 第27回 「観てなければ話にならない」100本の映画 技術講習 第28回 「観てなければ話にならない」100本の映画 技術講習 第29回 映画祭とけみこか→取り残された日本の危機 第30回 総括・TV型日本映画との決別と未来への希望			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 講義初回に手渡される「観ておかなければ話にならない映画」を最優先で可能な限り鑑賞しておく。 また必読文学 50 撲(国内 50 海外 50)も参考に手渡すのでこれも出来る限り読んでおくこと。 歴史と伝統に乗っ取った良品に効率よく触れることが最も重要であり唯一の近道と認識し予備学習に励むこと。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（伏木）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 伏木 啓
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習A（映画I）、領域演習B（インスタレーションI）、領域演習B（アニメーション）のいずれかを履修すること
授業の到達目標及びテーマ 作品制作、研究を通して、自身の「内なる他者」と出会うように、創造的に思考する姿勢と豊かに感受する力の獲得を目指す。具体的には、映画、映像芸術、アニメーション、メディアアートなどの学びをきっかけとして、他者や世界の多様性を実感し、例え理解が困難なものでも様々な角度から感受し、自身との重なりを見いだすことを試みる。また、作品制作と研究の両輪によって、言語と非言語のコミュニケーションをバランス良く経験することを重視する。			
授業の概要 前期は、研究と企画/制作を並行して行う。レクチャー、ディスカッション、プレゼンテーション、チュートリアル（個人指導）によって複合的に進める。作品研究（レクチャー/ディスカッション）では、19世紀末にはじまる初期映画からの様々な映像表現の試み：映画、ヴィジュアルミュージック、エクスパンデッドシネマ、ヴィデオアート、アニメーション、メディアアートを概観し、映像表現の可能性を探る。作品の企画制作に関しては、チュートリアル（個人指導）を中心に進め、プレゼンテーションの機会などで共有を図る。 後期は、個々で研究対象とする作品を定め、そのプレゼンテーションとレポート制作を行う。同時に、作品制作も進める。前期末と後期末で、合計2作品の発表と、研究レポートの提出が必要となる。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度及び、制作や研究への取り組み：30% 作品企画や研究のプレゼンテーション：30% 作品または研究の成果：40%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 ガイダンスと面談 第02～05回 レクチャー/ディスカッション（作品研究）と面談 第06回 作品企画プレゼンテーション/ディスカッションと面談 第07回 作品企画プレゼンテーション/ディスカッションと面談 第08～10回 レクチャー/ディスカッションと面談 第11～13回 チュートリアル（個人制作指導） 第14回 前期末作品〆切/作品発表/ディスカッション 第15回 作品発表/ディスカッション/夏季課題 第16回 夏季課題の成果発表 第17～19回 作品アーカイヴ、webなどの発表 第20回 ゼミ展作品の最終調整 第21回 ゼミ展作品のリフレクション 第22～25回 個人研究のプレゼンテーション/ディスカッション/後期作品企画 第26～28回 チュートリアル（個人制作指導） 第29回 後期末作品〆切/作品発表/ディスカッション 第30回 作品発表/ディスカッション/春季課題			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じプリントの配布や、参考文献を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 映画やアニメーションなどの映像作品を鑑賞することはもちろんのこと、美術、演劇、文学など、様々な領域の作品に触れるよう心がけて欲しい。その際、「わかる／わからない」「おもしろい／おもしろくない」という判断は留保し、新たな世界に出会う好奇心を大切にして、たくさんの作品を鑑賞して欲しい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (森)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 幸長
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習 A (映画 I) を履修すること。
授業の到達目標及びテーマ 映像や空間に対する音響効果をテーマとし、同時録音、PROTOOLS、LOGIC の習得、及び整音技術のみならず全ての音響効果の向上を目的とする。			
授業の概要 現場の録音から整音、スタジオワーク、効果音制作を学ぶ。その後ラジオ番組を制作。リアルタイムでの録音から機材への理解も深める。音は決して陰の立役者ではなく、映像と同様もしくはそれ以上の力を持つ事を実感し、常に音のデザインという観点から制作に取り組む事。面談を常に行い、個人の制作内容を把握、指導に当たる。音楽／サウンド作品制作、映像に対する効果音制作なども含む総合的な録音、整音を追求する。			
学生に対する評価の方法 制作作品、授業態度、レポート、ドキュメント制作で総合的に評価する。ゼミ展ではそれぞれの主張をしっかりと提示することが求められます。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 ゼミガイダンス、個人の方向性調査 第02回 D棟、音響編集室の使用ガイダンス 第03回 録音技術1 撮影時における同時録音技術の習得(機材解説、録音演習) 第04回 録音技術2 撮影時における同時録音技術の習得(録音演習) 第05回 編集技術基礎訓練1 第06回 編集技術基礎訓練2 (訓練用、整音作品提出) 第07回 整音講義1 (各自制作) ゼミ展個人面談 第08回 整音講義2 (各自制作) ゼミ展個人面談 第09回 サラウンド基礎講義演習1 作品鑑賞 第10回 サラウンド応用講義演習2 録音実践 第11回 サラウンド制作 第12回 講評 第13回 ゼミ展制作 第14回 ゼミ展に向けて制作のレジュメ提出締切日 個人面談 第15回 個人面談 夏休みのスケジュール、レジュメ提出 第16回 夏休み明け、レジュメ提出期限 個人面談 制作 第17回 各自レジュメに沿って指導 以後ゼミ展まで制作 第18回 各自レジュメに沿って指導 以後ゼミ展まで制作 第19回 ゼミ内講評 第20回 ゼミ展作品最終調整作業制作。 第21回 反省会 第22回 ゼミ展ドキュメント制作 説明会。(ラジオ番組制作 進行表、台本、ポスターの制作について) 第23回 ドキュメント制作 第24回 ドキュメント制作 第25回 ドキュメント制作提出締め切り 第26回 ラジオ番組制作 (各グループ毎に番組内容決め、録音スケジュールを組む) 第27回 ラジオ番組制作 (番組内使用する楽曲や取材、ポスター等の制作) 第28回 ラジオ番組制作本番 (音響編集室にてリハーサル兼録音ミキシング演習) 第29回 ラジオ番組発表 学内サーバーへアップデート ポスター掲示 (反省会、レポート提出) 第30回 4年時におけるゼミ対策会議			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 普段観賞する音楽や映画、日常のありとあらゆる音に対して繊細な部分まで意識を高める事。講義中、様々な説明を受けますが直ぐにメモをとるようにする。作曲を志す者は浮かんだメロディーをすぐに録音出来る様にIC レコーダー等に録音する等、工夫する。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (佐近田)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	[備考] 領域演習A (サウンドI) を履修すること
授業の到達目標及びテーマ メディアアート、サウンドアート全般をテーマとし、音響+映像のオリジナルな「アート」表現（展示系／パフォーマンス上演系など形態は問わない）を目指す。講義「インター・メディアアート論」で紹介した作品群のように、メディアを意識しメディア技術から「オリジナリティ」と「説得力」のある発想を引き出す姿勢を重視する。「オリジナリティ」を自己評価するためには「過去を知る」「他の作品と比較する」視点がなければならない。現代アート史の知識や現在の諸動向に対する鋭いアンテナを獲得することもあわせて求める。メディア研究の論文で単位を取得する者も歓迎する。			
授業の概要 「領域演習A (サウンドI)」で学ぶ知識・技術とリンクしながら、前期は既存の著名なメディアアート作品を題材に詳細な作品分析を行い、そこで使われている技術を自分で再現する演習を行う。アーティスト達がメディアの何に興味や関心を持ち、どのように発想を具体化し、説得力のある作品へと導いていったのかを、リサーチしながら実際に追体験する。発想と表現の強力な武器になるMax プログラミングの段階的習得も合わせて行う。個人制作指導では各自の制作テーマに応じて、その背景的知識や作品コンセプトの練り上げ、必要な技術などを個別指導する。 「領域演習A (サウンドI)」を必ずあわせて履修すること。集中講義「音響プランニング特別演習」の履修も強く推奨する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 50% 制作物 50%			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス、サウンドアートとメディアアートの歴史、個人面談 第2回 作品の分析と技術再現演習1 (音響メディアアート系) 第3回 作品の分析と技術再現演習1 (音響メディアアート系)、個人面談 第4回 作品の分析と技術再現演習2 (映像メディアアート系) 第5回 作品の分析と技術再現演習2 (映像メディアアート系)、個人面談 第6回 作品の分析と技術再現演習3 (音+映像メディアアート系) 第7回 作品の分析と技術再現演習3 (音+映像メディアアート系)、個人面談 第8回 個人制作プレゼンテーション (テーマの決定) 第9回 作品の分析と技術再現演習4 (身体メディアアート系)、個人制作指導 第10回 作品の分析と技術再現演習4 (身体メディアアート系)、個人制作指導 第11回 作品の分析と技術再現演習4 (身体メディアアート系)、個人制作指導 第12回 コンセプトワーク演習、個人制作指導 第13回 個人制作指導 第14回 個人制作指導 第15回 前期最終プレゼンテーション (必要に応じて夏期休暇中の個人制作指導) 第16回 ゼミ展作品企画書提出/プレゼンテーション 第17回 個人制作指導 第18回 ゼミ展作品完成〆切、ゼミ内講評 第19回 ゼミ展作品の最終調整 第20回 ゼミ展作品の講評 第21回 ゼミ展作品ビデオドキュメント制作 第22回 総合演習 第23回 総合演習 第24回 総合演習 第25回 総合演習 第26回 ゼミ展作品ビデオドキュメント提出 第27回 ライティング演習 第28回 ライティング演習 第29回 ゼミ展作品分析・紹介レポート提出 第30回 最終講評			
使用教科書 「Max の教科書」(リットーミュージック)、「メディアアートの教科書」(フィルムアート社)			
自己学習の内容等アドバイス 今後は学授業外の時間をどう過ごすかがますます重要になるだろう。授業で学ぶ技術は万人に平等であり、オリジナリティのために肝心なのは「発想」の柔軟性だ。どうすれば発想は柔軟になるのか?身近に答えがある。①本来のアートは常識を打ち碎き、あなたを柔軟な発想へと導くものだ。まずは自分の身体を動かして日頃から作品に直接触れ、批評を読みあさり、生活を「アート漬け」にすべきである。②そこでのアート体験が「なぜ面白い/つまらないのか?」を文章に残して繰り返し分析すると良い。文字を書いて頭を整理することは現代でも最強のメディア技術だ。③プログラミングは新しい外国语を覚えるのと同じことなので、反復練習して慣れるしかない。得手/不得手はなく、慣れれば誰でも習得できる。習得すれば、発想と表現のための「強力な武器」となることを信じてほしい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (鈴木)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 鈴木 悅久
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	[備考] 領域演習A (サウンドI) を履修すること
授業の到達目標及びテーマ 現在のサウンドクリエイションにおいて、20世紀以降の電子音楽がもたらす概念と技法は、新たな音の表現を示唆する重要な役割を果たしている。それら電子音楽分野での試みについて、歴史的背景と技術的変遷を分析研究することは、次世代における音の表現を探求する糸口となるであろう。本授業では、電子音楽の楽曲分析を通じ、客観的視点と作品の文脈を読み取る洞察力を養い、各自の作品における概念を歴史的文脈に位置づけ、研究成果物を制作することを目的とする。			
授業の概要 20世紀以降の電子音楽作品を取りあげ、概念的側面及び技術的側面からの楽曲分析を行う。電子音楽やコンピュータ音楽の表現に必要な知識と技術を、楽曲分析を通じて習得することで、現在の技術が表現へ結びつく意義を考察する。各自の制作については個人面談を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 50% 制作物 50%			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 作品分析I：ミュージックコンクレート / 個人面談 第2回 電子音楽制作演習I：「エレクトロアコースティック」 録音技術と再生システムによる表現方法(1) / 個人面談 第3回 電子音楽制作演習II：「エレクトロアコースティック」 マルチチャンネルシステムの構築 / 個人面談 第4回 課題制作I 「エレクトロアコースティック」 / 個人面談 第5回 課題制作I：発表・講評 第6回 作品分析II：十二音技法とトータルセリエリスム / 個人面談 第7回 コンピュータ音楽制作演習II：「作曲ツールとしてのコンピュータ」 Maxを用いたアルゴリズミックコンポジションの実践 / 個人面談 第8回 コンピュータ音楽制作演習II：「作曲ツールとしてのコンピュータ」 Maxによる音響合成の基本 / 個人面談 第9回 コンピュータ音楽制作演習III：「作曲ツールとしてのコンピュータ」 Maxによる音響処理の基本 / 個人面談 第10回 作品分析III：ライブエレクトロニクス / 個人面談 第11回 コンピュータ音楽制作演習IV：演奏とコンピュータとのインタラクション 演奏情報の処理方法 / 個人面談 第12回 コンピュータ音楽制作演習V：演奏とコンピュータとのインタラクション リアルタイム音響処理 / 個人面談 第13回 課題制作II 「ライブエレクトロニクス」 / 個人面談 第14回 課題制作II：発表・講評 / 個人面談 第15回 個人作品制作プレゼンテーション 第16回 制作進捗プレゼンテーション 第17回 個人制作指導 第18回 個人制作指導 第19回 個人制作指導 第20回 ゼミ展に向けてゼミ内講評 第21回 ゼミ展ドキュメント制作 第22回 ゼミ展ドキュメント制作 第23回 ゼミ展ドキュメント制作 第24回 ゼミ展ドキュメント制作 第25回 応用課題制作 第26回 応用課題制作 第27回 研究レポート作成 第28回 研究レポート作成 第29回 研究レポート作成 第30回 研究レポートプレゼンテーション、総評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 前期は広範囲の分野を短期間で取りあげるため、覚えることが非常に多い。得手不得手があるのは当然なので、自分の関心と一致する分野を見出することを及第点として授業に臨むように。最重要なのは、個人の制作物である。その制作物がどのような分野の延長線上に属するのかを捉えられるよう、心がけてほしい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (加藤)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 和郎
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	[備考] 領域演習A (TV I) を履修すること
授業の到達目標及びテーマ ジャーナリズムとは、社会事象やトレンドの情報を集めて検証し、その出来事や流れが持つインパクトや意味をメディアで伝える行為です。テレビやネットにおけるジャーナリズムは、「映像」で「一目瞭然」に伝えることを特長としますが、時として映像にならない部分にこそ、「真実」があるものです。インタビューによる証言やナレーションコメントによる「言葉」、データのグラフィック処理を添えてこそ伝える力を発揮するのです。社会を凝視し、分析し、伝えるべきものを企画して、ドキュメンタリー作品として発表してもらいます。			
授業の概要 ジャーナリズムの基本である5W1H (いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように) の徹底。政治・経済・社会(事件事故)・教育・文化芸能・科学など各ジャンルの取材の実際を、放送された番組やニュース企画をもとに検証する。NHKスペシャルにおける客観報道と、TBS系各局オムニバス「報道の魂SP」における主観報道との取材・制作者の立ち位置の相違なども検討する。また、過去の真相を証言ドキュメントするためのインタビュー技術なども身につけさせるとともに、放送用語など倫理面についても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 日々のニュースやドキュメンタリー番組についての自分なりの意見を持ち、積極的に発言し、質問力のあること。カメラフレームのなかで事実を認識し、フレームの外にある別の面の事実を思考する「視点&思点」の総合力を身につけようとする姿勢と努力を見極めて評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <p>第1回～4回 映像ジャーナリストとしての基本 (ジャンル別の仕組みと取材方法および構成スタイル)</p> <p>第5回～7回 ゼミ展作品として取り上げたい個々のテーマの検討 (関連の参考作品を見ながら)</p> <p>第8回～13回 各自テーマのリサーチ・交渉・取材／平行して最新番組の構成・ナレーション研究</p> <p>第14回～15回 作品制作の中間プレゼンテーション (夏季休暇中の制作指針)</p> <p>第16回～17回 最終仕上げに向けてのプレゼンテーション</p> <p>第18回～21回 ナレーション録音を前にコメント原稿の精査やグラフィック処理などポスト制作</p> <p>第22回～23回 ゼミ内の作品講評</p> <p>第24回 ゼミ展発表</p> <p>第25回～26回 ゼミ展における反応をもとに反省と評価 & 今後の目標と課題を討議</p> <p>第27回～30回 作品制作の経験を活かして自由研究 (メディア現場でのインターンなどを奨励)</p>			
使用教科書 特に使用しないが、以下を一読することを薦める。 「なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか」(講談社現代新書) 「ドキュメンタリーのすすめー視ること」(扶桑社) 「テレビ・ドキュメンタリーの現場から」(講談社現代新書)			
自己学習の内容等アドバイス 身の回りの社会を見つめること。少しでも好奇心を持ったら、その先を見極めること。 「好奇心の、その先」にこそ、君の未来があるかもしれません。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（吉野）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	[備考] 領域演習A（TV I）を履修すること
授業の到達目標及びテーマ テレビという放送メディアの支配的影響力とそのジャーナリストイックな根源の相関関係を理解し、テレビ映像コンテンツ制作の実践を多様な次元から試み、映像作品として完成させることを目標とする。制作時には、不特定多数の視聴者を意識し、その視聴動向や心理的反応を考察しながら、さまざまな映像をテレビコンテンツとして産業化できるそのプロセスを、演習と解説とともに「映像制作」の実践の中から習得していく。			
授業の概要 ドキュメンタリー、テレビドラマ、コマーシャル、バラエティー、レポート、MVなど多様な映像コンテンツがどのように完成されるかを知り、企画、取材、交渉、制作といった一連の作業を経験し、映像作品を制作する。企画、取材などのノウハウ、制作に求められる技術の習得をはじめ、映像作品のコンセプトを、倫理、ジャーナリズム、ジェンダー、映像政策、経営活用などに照らし合わせた講義や議論のもと、「視聴者」という存在に対峙させた映像制作を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への積極的参画と学生の問題意識や探究心の維持（60%） 完成映像作品（40%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～2回 テレビを把握する ①公共の財産である電波とテレビ ②視聴率は誰のもの、ジャーナリズムは何を守る 第3～4回 テレビ制作とは ①カメラレンズから社会を見る、そして見られるを体験する ②交渉力はこうして身につく 第5～7回 テレビ制作とは ①撮影と編集は得意でいたい ②みんなの制作力をみんなで講評 第8～9回 3年次作品を考えよう ①企画から始めよう「なぜ」の意味は、政治、経済、国際社会につながっている ②3年次作品のプレゼンテーション 第10～13回 3年次作品の制作を始めよう ①構成、撮影、編集、MAなど ②3年次作品の完成度を高めよう 第14～15回 3年次作品をみんなで講評しよう 第16～19回 4年次にむけて、新しいリサーチ、プロジェクトを創造しよう 第20～24回 ①知識、ノウハウ、技術の補完、他領域学習の推奨 ②映像制作をひとつでも多く制作しよう ③3年次作品の結果を踏まえた将来学習計画 第25～27回 新しい映像制作（コンペ参加作品やプロジェクトなど）の開始 第28～29回 新しい映像制作プレゼンテーション 第30回 全体講評			
使用教科書 書籍「文化・メディア」、「マスメディアの周縁・ジャーナリズムの核心」などを参考にする。			
自己学習の内容等アドバイス 日頃の問題意識は映像制作に不可欠である。小さな疑問は社会的な大きな問題に繋がっている。視野は広く、日本の社会に限定せず、国際社会の動向を意識できるそんな感覚を日常的に持ち続ける必要性を感じてほしい。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（小笠原）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	[備考] 領域演習B（インсталレーションI）を履修すること
授業の到達目標及びテーマ 現代におけるアートとは何かを基軸に、まずは近代から現代にいたる美術の流れを学び、その上で創造的活動（アート活動）をする今の自分のポジショニング、スタンスを探ることから始める。この基盤に立ち、自らのアート作品制作を通して、創造行為全体（「芸術理論」「発想・イメージ」「コンセプト」「リサーチ」「構成・構想」「表現技能」「まとめあげる力」「作品発表」「ドキュメンテーション」というプロセス全体）を学ぶこと、これを最大の目標としている。制作実践においては、単に個性の表出に終りとらず、自らのテーマが現代の社会と如何に密接な関係を持ちうるかを探り、それを表す具体的手法の柔軟な発想と独創性、テーマに対する必然性を追求する力を養い、制作プロセスにおける自己確認（問題点の発見・解決方法・表現技能・発表にたいする意識）、新たな表現形態に対する積極的姿勢を身につけていく。			
授業の概要 前半では、自らの制作テーマを追究するために、様々なアート表現のリサーチと具体的な作品形態の実験を行う。後期は、ZEMI展に向け、制作実践を通して現代におけるアート表現とは何かを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 制作作品の表現内容・方法の追及の深さを重視し、受講態度、ドキュメント制作をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 課題をとおして実際の制作における基礎技術修得（1限-共通講義 / 2.3限 個人制作） 柔軟な発想をもとにイメージを具体的に構成していくなかでテーマを探り、具体的な手法の実験を重ねる。 第1回 現代におけるアート表現とゼミについて / 個人制作・・・興味関心からテーマへ 第2回 テーマ・リサーチ発表全体発表 / 個人制作・・・テーマの焦点化・調査資料呈示 第3回 様々な表現手法と作家 / 個人制作・・・イメージ確認 第4回 現代美術の限界 / 個人制作・・・イメージ図(空間構成)素材・サイズ 第5・6回 ポスト・モダン以降のアート 1.2 / 個人制作・・・素材と映像 第7回 美術館・アートギャラリー見学・体験1 第8回 修正テーマとプランニング全体発表 / 個人制作・・・スタディーズモデル作成・機材システム確立 第9,10回 素材演習1.2 / 個人制作・・・実空間での設営 1.2 第11回 空間構成 / 個人制作・・・空間構成・最終シミュレーション 第12回 コンセプトテキストについて / 個人制作・・・前期作品相互批評会 第13回 作品プレゼンテーション / 個人制作における修正後の作品チェックと展覧会準備 第14回 前期作品外部発表 美術館・ギャラリー発表 第15回 外部発表を終えて ゼミ展への最終計画と研究報告書(テーマと作品についてまとめ) ゼミ展をめざし作品完成をさせるとともに制作過程も含め、ドキュメンテーションを作成 第16-18回 夏期中の制作進行確認へ 制作実践へ ゼミ展作品制作徹底 第19回 ゼミ展作品プレゼンテーション/ 個人制作作品修正 第20回 ゼミ展最終チェック 展示空間完了～コンセプトシートまとめ 第21回 ゼミ展 発表・批評 / 個人制作ドキュメント撮影 第22回 ゼミ展作品相互批評会全体 第23-25回 ドキュメント映像制作 / 個人制作ドキュメント映像編集 / アートギャラリー見学・体験2 第26~28回 テキストのまとめ方～個人制作におけるテーマ追究と研究報告書作成 第29回 卒業制作プレゼンテーションへの参加 第30回 卒業研究テーマ・リサーチ発表 / 個人制作における来年度テーマ展開を含めた研究報告書提出			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などをし)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（瀬島）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬島 久美子			
[単位数] 6	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 領域演習 B（インсталレーション I）を履修すること			
授業の到達目標及びテーマ 情報社会においては、メディアリテラシーはもちろんのこと、偏在する情報を取捨選択し、読み取り、編集し、構築し、まとめあげて活用していく力が必要とされる。この一連の作業によって構築された情報を伝えるために、新聞やwebニュースのように、わかりやすく文章化、視覚化することがCreative Writingである。 本講では、このCreative Writingの作業と作業によって独自の研究テーマを明確化することを目的とする。						
授業の概要 独自の研究テーマを明確化するために、自分を取り巻く環境の中から、気になることからキーワードとして拾い上げ、キーワードにまつわる情報、背後にある歴史、社会との関係性、問題などを掘り起こして考察し、テーマをひとつに絞り込む。そのテーマに関係する文献から得た資料を整理し、これらを歴史的、または理論的に再構築して編集。諸考察全体に有機的デザインを付与して視覚化して完成させていく。						
学生に対する評価の方法 授業への参加態度(40%) 情報の収集、文献へのアプローチなどの研究態度 (40%) 研究成果を視覚的完成度 (20%)						
授業計画（回数ごとの内容等）						
第1回	ガイダンス。Creative Writing に向けての方法論について 表現したい文章のタイプは理論型か歴史検証型かなど、自分の表現タイプを明確にする。					
第2～3回	気になっている物事をキーワードとして挙げ、分類、関係づけを試みる。					
第4～7回	キーワードの掘り下げ。キーワードにまつわる歴史、社会的位置付け探索のために 資料を探索、検索し、問題点も検討し、列挙していく。					
第8回	文献、参考情報の中から活用すべき資料を整理する。					
第9～13回	整理した資料を活用して、キーワードについて小論としてまとめてみる。					
第14回	キーワードを再検討し、関係性を再構築することによってテーマに絞り込み作業を行う。					
第15回～19回	テーマの裏付けとして、キーワードとテーマの関係性を構築。小論を発展させ、 テーマ抽出までの裏付けとして短文の集合体を作成。					
第20回～24回	テーマに関する情報を収集し、テーマについての歴史、社会的位置づけ、問題点などを 確認し、短文から長文へと発展させるべきものは長文として作成する。					
第25回～29回	これまでの作業で作成した文章に有機的デザインを付与していく。					
第30回	有機的デザインを施した文章群の整合性を確認する。					
使用教科書 特に使用しない						
自己学習の内容等アドバイス 文章作成に馴れるために、新聞、webなどテキストデータを読み込み、これらの特徴を研究する。						

[授業科目名] 映像メディア領域演習A (フォトI)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安達 洋次郎・安形 嘉真 小山 智大・村上 将城
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 教員合同でオムニバス形式の授業や、作品制作に不可欠なライティング等を含む撮影技術の演習を行う。中判、大判カメラを使った撮影から現像・引伸しまでのアナログ技術の習得、展示設計から設営・運営のシミュレーションをトータルで指導し、個人制作と共同制作の両立を目指す。			
授業の概要 2年次受講した映像メディア演習（フォト）をベースに、写真メディアをさらに考察／研究し、オリジナリティーを持った作品を制作することで各自ポートフォリオの充実をはかる。その過程において社会に適応しうるコミュニケーション能力、企画力、コンセプトを構築して制作する力、高度な撮影技術を修得する事をテーマとし、主体的に考え、研究／創作しうる能力を身につける事を目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の演習態度 20% 課題 80%（前期演習作品 40%、後期演習作品 40%） 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、中判、大判カメラの仕組、扱いについて 第2回 中判、大判カメラの仕組、扱いについて 第3回 撮影、ライティング 第4回 撮影したフィルムの現像、引伸し 第5回－6回 ポートレイト、スチルライフ作品制作 第7回 ポートレイト、スチルライフ課題 各1枚提出 第8回－9回 展示設計（作品仕上、展示プラン） 第10回－11回 展示設営及びシミュレーション 第12回－14回 10点課題作品制作 第15回 作品講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 授業内課題は最低限であり、写真技術書（アナログ及びデジタル）を読み、自主的に作品制作を行い教員からアドバイスを受ける事 大学図書館の著名な映像／写真作家の作品集や写真集を鑑賞する事 積極的に美術館やギャラリーに行き名作のオリジナル作品を鑑賞する事			

[授業科目名] 映像メディア領域演習A (映画Ⅰ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 真・仙頭 武則・伏木 啓 森 幸長・柿沼 岳志
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1,2 年次の「映画・ビデオ」の学びを踏まえたうえで、より実践的に映画・映像製作の一連の流れを、企画から上映まで経験する。プロデュース、ディレクション、撮影、照明、美術、録音、編集、整音といった個々のパートの位置づけや技術を知り、自身の興味と特性を探ることを目標とする。また、映像製作を踏まえることで、映像を消費するような鑑賞姿勢ではなく、あらゆる映像を豊かに感受し思考する力の修得を目指す。			
授業の概要 映画・映像、シナリオ、ラジオドラマなどのオリジナル作品を、グループまたは個人で製作する。プリ・プロダクション（企画立案/役割割り）、プロダクション（演出・撮影・録音）、ポスト・プロダクション（編集・MA）といった映画・映像製作の一連の流れを経験しながら作品を完成し、上映／展示する。シナリオ制作の場合も同様に、企画、執筆、校正といった段階を踏まえながら進める。			
学生に対する評価の方法 ① 作品制作や研究への取り組み方（受講態度や面談などを通して評価）：30%程度 ② 企画プレゼンテーションの評価：20%程度 ③ 作品／論文、研究／分析レポートの評価：50%程度 以上3点より、総合的に評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 イントロダクション 第02回 企画立案 第03回 プrezentation 第04回 プrezentation 第05回 シナリオ制作／技術ワークショップ／個別面談 第06回 シナリオ制作／技術ワークショップ／個別面談 第07回 最終プレゼンテーション（以降、夏季休暇期間を利用した制作活動） 第08回 編集チェック 第09回 講評 第10回 ゼミ展準備 第11回 ゼミ展作品のリフレクション 第12回 個別課題／作品研究／レポートの制作 第13回 個別課題／作品研究／レポートの制作 第14回 個別課題／作品研究／レポートの制作 第15回 総評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 映画を観る行為が創る行為につながっていくので、ぜひ古今の名作に接してもらいたい。愛知芸術文化センターで定期的に行われる映画(国立フィルムセンターからの作品が上映される)や名古屋シネマテーク、シネマスコーレ、名演小劇場、シアターカフェなどの上映スケジュールをチェックして足を運ぶ努力をしてほしい。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習A (CG I)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人・愛澤 伯友
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ CG を様々な表現に活かすためには、3DCG の基本要素である「モデリング」「テクスチャ」「カメラ」「アニメーション」「レンダリング」の技術が欠かせない。3DCG アプリケーションが進化しても、この基本要素は変わらない。豊かな映像表現のために、2 年次までに学習してきたこうした内容をさらに高めることが到達目標である。			
授業の概要 2 年次「3D コンピュータアニメーション I II」で学んだ 3DCG の基礎技法の応用に加え、作品完成のために必要な合成、編集技法など他ツールとの共同作業なども学ぶ。3DCG では、特に応用技術として「リギングの応用」と「カメラワーク」「フォトリアリストイックなマテリアル表現」「レンダリング技法の応用とその設定」「パーティクルとダイナミックス表現」「スケーリング」などの項目を学ぶ。また、様々な映像作品の分析も並行して実施する。			
学生に対する評価の方法 課題 80%、授業参加度 20% (プレゼンテーションを含む) 実践的な作品制作を基本に評価する。評価の基準は、目標到達度と作品の完成・発表による。 <u>再評価は実施しない。全ての授業への出席を必須とする。</u>			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション：何を学ぶか、何を造るか? 第2回 ポストプロダクション技法1 第3回 ポストプロダクション技法2 第4回 リギングの応用1 第5回 マテリアルの表現技法1 第6回 レンダリング技法1 第7回 ダイナミックス1 第8回 課題作品プレゼンテーション・講評1 第9回 リギングの応用2 第10回 スケーリング 第11回 マテリアル表現技法2 第12回 レンダリング技法2 第13回 ダイナミックス2 第14回 ポストプロダクション技法3 第15回 課題作品プレゼンテーション・講評2			
使用教科書 適宜指定			
自己学習の内容等アドバイス 独創的なアイデアを視覚表現するためには、地味な努力が必要である。感性だけで進めていくと突き当たる壁は、数学的、物理学的に考えると解決出来ることが多い。理系の心を少し持てると CG は楽しくなる。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習A(サウンドI)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康・鈴木 悅久
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代のポピュラー音楽および映像コンテンツにおける音楽制作の際立った特徴は、空間／音色に対する鋭い感性と技術的な挑戦である。そこにはアカデミックな電子音楽や実験的ポップスの歴史が積み上げて来た革新的なアナログ／デジタル表現が合流し、最も刺激的なフロンティアのひとつとなっている。これを自分のものとするためには、音楽制作のすべての段階に関わる音響機材について基本的理解と応用力が必要になる。この授業では一年間を通じこれらを実践的に習得し、各自がオリジナルな音楽的発想力を発揮する技術的基礎を手に入れることを目的とする。			
授業の概要 音響編集室を使ったスタジオワーク、フィールドレコーディング、マイクからスピーカーに至るアナログ／デジタル音響機器の習得、ステレオ環境ならびにマルチチャンネル環境での空間的音響表現、オブジェクティブプログラミング言語“Max”による機器・音響・映像コントロールを盛り込んだ課題制作をグループで行い、音響機器を取り扱うために必要な知識と技術を身につける。前期では基礎的な事柄を中心に取りあげ、後期では習得した技術を応用した課題制作を行う。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 60% 課題提出 40%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション：スタジオ利用、D棟利用ガイダンス 第2回 音楽空間表現演習I：録音技術と空間表現、マイク、レコーダーの取扱、アナログオーディオの理解、スタジオレコーディングの実際 第3回 音楽空間表現演習I：フィールドレコーディングの実際、現実音の加工、ステレオ音響空間の設計 第4回 音楽空間表現演習I 発表・講評 第5回 音楽空間表現演習II：マルチチャンネル空間での音楽表現、デジタルオーディオの理解、オーディオインターフェース、ミキサー、スピーカー、各種ケーブル&コネクタの取扱 第6回 音楽空間表現演習II：Max プログラミング1（プログラミングの基本操作、MIDIとOSCネットワーク、照明と映像のコントロール） 第7回 音楽空間表現演習II：Max プログラミング2（音響空間コントロール） 第8回 音楽空間表現演習II：PA（舞台音響技術）演習およびマルチチャンネルスピーカーシステムの構築 第9回 音楽空間表現演習II：制作とアドバイス 第10回 音楽空間表現演習II：発表・講評 第11回 応用課題制作：さまざまなインタラクションの方法とプログラミング 第12回 応用課題制作：音響合成の原理とプログラミング 第13回 応用課題制作：制作とアドバイス 第14回 応用課題制作：発表・講評 第15回 応用課題レポート、まとめ			
使用教科書 Maxの教科書（リットーミュージック）			
自己学習の内容等アドバイス レクチャーと講評の間の期間は制作日とするため、各グループともにスケジュールの調整を適宜行うように。特にスタジオや特殊な機材を利用する際は、計画的に予約すること。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習A (TV I)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 和郎・吉野 真理子 海老名 敏宏
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドキュメンタリー、CM、テレビドラマなど、さまざまなテレビ映像コンテンツを立案からはじまり、プロダクション、ポストプロダクションを経て完成に至る一連のリサーチ、交渉、構成、ならびに、撮影、編集、音響などのプロセスを学び、作品として完成させることを目標とする。さらに、テレビ領域内での重層的な講評を試み、映像のインパクト、映像作品からくみ取れるコンセプトについて学生自身が議論を主導し、相乗効果をもたらす経験を重ねる。			
授業の概要 テレビ特有の視点を学び、テレビ映像コンテンツを制作していく。時代を代表する、時代を反映するなどといった、高い「視聴率」を出したテレビ番組、または話題を提供した映像、長く記憶に残る映像など、その制作背景や要因を検証し、議論しながら、そこにある「なぜ」の理由の考察内容を、学生の制作する映像作品に反映させていく。			
学生に対する評価の方法 授業の理解と積極的な参画（60%）、完成作品（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 テレビメディアの社会的インパクトとは 第2回 テレビの視点 視聴者と制作者、ヒットする番組とは 第3回 撮影実習 ①基礎 第4回 編集実習 ①基礎 第5回 音響実習 ①基礎 第6回 講評 その1 第7回 ゼミ展に向けた作品の立案、企画、制作計画、取材、交渉 第8回 ゼミ展作品のプレゼンテーション 第9回 撮影、編集、音響など ②応用 第10回 撮影、編集、音響など ③完成 第11回 ゼミ展作品 最終プレゼンテーション 第12回 ゼミ展後の領域演習内講評 第13回 各種コンペティション参加作品の制作への準備、他領域学習 第14回 次年度にむけて、制作ノウハウ、技術力の検証と補完、他領域学習 第15回 次年度新企画、プロジェクトのプレゼンテーション／全体講評			
使用教科書 書籍「Directing The Documentary」、「ドキュメンタリーの修辞学」、「戦争とテレビ」などを参考にする。			
自己学習の内容等アドバイス 視聴者、時間、インパクトなどを意識したテレビ映像を制作するため、日頃からどんな物事に対しても、能動的な「見方」「感じ方」「リズム」そして「なぜ」を意識してほしい。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (インスタレーション I)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬島 久美子・小笠原 則彰 齋藤 正和
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 異なるメディアを必然的に統合させていく中で、形成される新たな空間表現を追究する。具体的には、映像と様々なオブジェクトとの組み合わせより創出される関係性の総合空間を作り上げる知識と技術、機材の設営の仕方などを学ぶ。 また、制作された作品を外部で発表することにより、現場空間におけるインスタレーション作品としてリアル化する力を養うとともに、外部の方より客観的な批評を頂く中で、客観的批評能力・作品を自己言及する力を培うと同時に、展覧会の企画・広報・運営・設営を自ら主体的に取り組む姿勢を身につける。			
授業の概要 前半では、自らの制作テーマに沿って、様々なアート表現のリサーチと作品形態とシステムの実験を行う。後期は、ZEMI 展に向けて、一つの完成された作品として成立させ、制作実践を通して表現とは何かを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 制作作品における技術の習熟度および、受講態度、展覧会の企画・運営に対する姿勢をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 個人制作に基づく具体的な手法の実験の積み重ねと、現場における空間制作の基礎技術の修得			
第1回 インスタレーション表現とは / 個人制作・・・興味関心の把握 第2回 作品イメージと空間構成について 基礎的図像 第3回 様々な素材と機材における実験 / 展覧会企画 第4回 機材の基礎 1.撮影機材と使い方 2.再生機材 3.投影機材設営 / 展覧会広報デザイン 第5回 作品プランニング全体発表 / 個人制作・・・スタディーズモデル作成・機材システム確立 制作 第6回 個人制作における素材と機材での実験 / 展覧会設営準備 第7回 前期作品外部発表 美術館・ギャラリー発表 第8回 ゼミ展最終チェック / 個人制作・・・空間構成・最終シミュレーション 第9回 ゼミ展作品プレゼンテーション/ 個人制作作品修正 第10回 ゼミ展 発表・批評 / 個人制作ドキュメント撮影 第11回 ドキュメント映像制作 / 個人制作ドキュメント映像編集 第12回 後期外部発表に向けて 個人制作作品と展覧会企画 第13回 個人制作における素材と機材での実験 / 展覧会広報準備 第14回 個人制作における修正後の作品チェックと展覧会設営・運営準備 第15回 後期作品外部発表 美術館・ギャラリー発表と相互批評会			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などを)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (アニメーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森下 豊美
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ Adobe AfterEffects CS6, Adobe Photoshop CS6 等のソフトウェアを使用して2DCGアニメーション作品制作を行う。ポストプロダクションまでの一連の作業を1人で行う事で、アニメーション作品制作のプロセスを学ぶ。			
授業の概要 1 : コンセプトワーク、ストーリーボード制作、アニメーション制作 2 : 作品素材の編集、ポストプロダクション作業 3 : 講評、分析、発表			
学生に対する評価の方法 受講態度、作品への取り組み、完成作品などを総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 導入、作例の紹介、ソフトウェアレクチャー 第02回 作例の紹介 / ストーリーボード制作 第03回 作例の紹介 / 絵コンテ制作 第04回 Video コンテ制作 第05回 アニメーション制作 第06回 同上 第07回 1次中間発表（進捗チェック） 第08回 2次中間発表（夏季期間中の進捗チェック） 第09回 ポストプロダクション作業 第10回 ポストプロダクション作業、最終調整 第11回 ゼミ展リフレクション / 分析 第12回 個人課題の取り組み 第13回 個人課題の取り組み 第14回 個人課題の取り組み 第15回 最終プレゼンテーション/ 個々の今後の展望に関して			
使用教科書 特に指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 古今東西の様々なアニメーションを観賞し、構造や表現の工夫を分析して下さい。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (映画アニメーション研究)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 押井 守・佐藤 敦紀・柿沼 岳志
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 前期：「映像には原則があり文法がある」これを理解し分析し自分の作品作りの際に役立ててもらうのが本講の目的である。ここではハードウェアの使い方ではなくソフトウェアとしての撮影／編集技法を学ぶのが目的である。同時にPostProductionにおいては欠かせないAfterEffects FinalCut等を使ったエチュードも行っていく。 後期：映画及びアニメーションは常に社会を映し出す鏡である。様々な作品の表象分析を通じ映像表現のリテラシーを学ぶ。			
授業の概要 前期：授業は理論と実践を交互に繰り返す形を取っていく。(佐藤) 後期：映画及びアニメーション作品の参考上映及び分析。(押井、柿沼)			
学生に対する評価の方法 レポート提出			
授業計画（回数ごとの内容等）			
○前期 (佐藤) 第1回 映像の原則 1 / 編集・合成エチュード1 第2回 映像の原則 2 / 編集・合成エチュード2 第3回 映像の原則 3 / 編集・合成エチュード3 第4回 映像の原則 4 / 編集・合成エチュード4 第5回 映像の原則 5 / 編集・合成エチュード5 第6回 映像の原則 6 / 編集・合成エチュード6 第7回 映像の原則 7 / 編集・合成エチュード7 第8回 総評			
○後期 (押井・柿沼) 第9回 サイエンスフィクション分析① 古典的SF：『2001年 宇宙の旅』他 第10回 サイエンスフィクション分析② ニューウェーブ以降のSF：『ブレードランナー』他 第11回 サイエンスフィクション分析③ サイバーパンク以降のSF：『攻殻機動隊』他 第12回 戦争の表象：『機動警察パトレイバー 2 the Movie』他 第13回 歴史と映像の関係性：『人狼 JIN-ROH』他 第14回 メタフィクションについて：『うる星やつら 2 ビューティフル・ドリーマー』他 第15回 恋愛の表象：『スカイクロラ』他～総評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 授業内に留まらず自主的な実践、研究を強く勧める。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (作曲・アレンジ理論演習)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 周防 義和・鈴木 悅久
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 楽曲制作における音楽理論の習得を目的とする。 コードスケール、ダイアトニックコード、テンションノート、ドミナントモーション等ベーシックなコードプログレッションの学習を通じ、和声に対する理論的な側面からの作曲技法を身に付ける。			
授業の概要 映像映画音楽における作曲編曲法の具体例をあげ、映像と音楽を理論的に関連付けられる視点を養う。 ポップミュージックの楽曲分析においては、ペントトニックスケール、ブルーノート、シンコペーション、リズムのグルーヴ感（ドラム&ベースによるリズムのボトムを構築する）などの学習による、西洋古典音楽にはない現代ポピュラー音楽の重要な要素を追求する。それによって現代感覚のポップな作曲編曲の独自性を身につける。 これらのプロセスを経て、テーマによる作曲課題を与える。理論的に学習した各 факторを抽象的なテーマに置き換えて、または発展的に解釈して客観的な作曲編曲能力を養うことを目的とする。 初級者からでも理解できるよう、レベルに応じた課題が設定される。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 20%、課題提出 80%			
授業計画（回数ごとの内容等） <ul style="list-style-type: none"> 第1回 和声をヴォイシングに導く・解説 第2回 和声をヴォイシングに導く演習 第3回 応用レベルのコード進行演習1 第4回 発表と講評 第5回 モード手法、4度堆積和声の分析 第6回 ブルーノートとブルースを用いた作曲演習 第7回 発表と講評 第8回 弦楽器の作曲法 第9回 弦楽カルテットの作曲法 第10回 弦楽カルテットの記譜法 第11回 弦楽カルテットレコーディング 第12回 映画、ドラマ劇中音楽の分析解説 第13回 映画、ドラマ劇中音楽の演習1 第14回 映画、ドラマ劇中音楽の演習2 第15回 発表と講評 			
使用教科書 特に使用しない (授業で配付する多くのプリントが教科書となるので整理するバインダーを用意すること)			
自己学習の内容等アドバイス 初級者にとっては覚えることが非常に多くなるため、予習、復習を欠かさないように。中級者以上の学生は、身に付けた技法を積極的に駆使し、一曲でも多く作曲することを期待する。 五線紙と鉛筆（シャープペンシルは不可）を必ず持参すること。 ※参考図書：楽典—理論と実習（音楽之友社）			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (ポストプロダクション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 斎賀 和彦
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像編集は、編集ソフトを使いこなす、という技術的スキルの側面と、演出を理解し、編集段階でより深く、映像の意味性を補強する創造性の側面という2軸が存在する。本演習はその2軸をつねに意識し、表現を支える技術スキルの取得、向上を到達目標とする。			
授業の概要 本演習では知識の取得より自分の実になる知見の獲得を重んじる。そのため、一方通行型の授業ではなく、課題を立て、それを実際に実地検証するなかでポストプロダクションを理解する方法論を基本とする。例えばコードデックによるレンダリング両性への影響など、がそれである。そのため、問題意識を持ち、積極的に参加し、それを体系化していく姿勢が求められる。			
学生に対する評価の方法 授業への積極的関与。実地検証への関与。(評価ウエイト、あわせて50%) 個々の作品制作にとって重要な表現および技術についての体系化レポートと、自己の作品への反映(実地へのフィードバック)(評価ウエイト、あわせて50%) (再評価はおこなわない)。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 演習アジェンダの解説 (演習の進行スタイルの提示と到達目標、評価方法について) 第2回 ポストプロダクションの理論と考え方 第3回 カメラフォーマット1: AVCHD, H.264 ほか 撮影 第4回 カメラフォーマット2: AVCHD, H.264 ほか 撮影 第5回 コードデック検証1: コードデックの特性検証 第6回 コードデック検証2: コードデックの特性検証 第7回 ディスカッション: 画質とは 第8回 編集理論1: 編集の歴史: Before Digital フィルムの時代 第9回 編集理論2: 編集の歴史: After Digital デジタルの時代 第10回 カラーグレーディング: 色とは 第11回 カラーグレーディング: 色深度 第12回 コードデック検証3: 色補正とコードデック 第13回 コードデック検証4: コンポジット 第14回 実地検証: コンポジット 第15回 ディスカッション: まとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 問題意識を持つ>ディスカッションを経て仮説を立てる>実地検証する>結果を分析、評価する>体系化するといったプロセスをほぼ毎回行います。ノープランで授業に来ないこと。知識の体系化を行うこと。を推奨します。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (デジタルフォトワーク)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小山 智大
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ デジタル環境における写真や画像の取り扱いなど、基本操作から応用まで自由に修正・加工できるよう指導し、クリエイティブ環境の可能性を広げる事を目的とします。			
授業の概要 前半では Adobe Photoshop の基本操作を含め実践的な技術指導をします。 中盤以降デジタルカメラを使い撮影からデジタル現像・デジタル暗室処理・色調補正など指導。 終盤ではフォトレタッチを施した作品制作をします。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 40%、講義の内容の理解度 40%、最終提出課題 20% 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第0 1回 Adobe Photoshop 概要説明及びデモンストレーション（ワークショップ） 第0 2回 Adobe Photoshop 演習 1（基本操作編） 第0 3回 Adobe Photoshop 演習 2（色調補正編） 第0 4回 Adobe Photoshop 演習 3（ブラシ操作編） 第0 5回 Adobe Photoshop 演習 4（レイヤー、マスク編） 第0 6回 Adobe Photoshop 演習 5（パスワーク編） 第0 7回 Adobe Photoshop 演習 6（応用編） 第0 8回 デジタルカメラ演習 1（基本操作編） 第0 9回 デジタルカメラ演習 2（デジタル現像・暗室処理編 1） 第1 0回 デジタルカメラ演習 3（デジタル現像・暗室処理編 2） 第1 1回 デジタルカメラ演習 4（総集編） 第1 2回 実習（スタジオ撮影） 第1 3回 実習（スタジオ撮影） 第1 4回 課題制作 第1 5回 課題の講評			
使用教科書 必要に応じテキストを配布します。			
自己学習の内容等アドバイス 技術的な指導が多いため原則すべての授業の参加をする事。 デジタル一眼レフカメラ、又はミラーレス一眼カメラの購入を推奨します。 Photoshop やデジタルカメラに関する雑誌や本など、授業の予習・復習としてなるべく目を通す。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (Web & クリエイティブコーディング)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像メディア学科の各領域での表現手法を extends (拡張) するための演習です。各領域にはそれぞれのメディアフォーマットに依拠した表現手法があります。今日、その枠組みが変容してきていることは皆さんも気づいていると思います。この演習では、コンピューティングを主体とした新たな表現手法の枠組みについて学び、3年次制作展の制作構想に向けて、技術的な選択肢を増やすことを目標とします。			
授業の概要 ブラウザやアプリケーションを主体とした技法を前提として授業を進めます。特に、映画や写真を使ったインタラクティブな表現を学びます。また、ブラウザ上で動く複雑なプログラミングの習熟を行い、最終的にはプラグインあり/なしで駆動する簡単なゲームの制作を行います。			
学生に対する評価の方法 授業への参加態度 (習熟度) 各フェーズでの作品品質			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ブラウザで写真を扱う 第2回 アプリケーションで写真を扱う 第3回 ブラウザでサウンド、ムービーを扱う 第4回 ブラウザでムービーを扱う (1) 第5回 ブラウザでムービーを扱う (2) 第6回 ブラウザでムービーを扱う (3) 第7回 アプリケーションでムービーを扱う (1) 第8回 アプリケーションでムービーを扱う (2) 第9回 アプリケーションでムービーを扱う (3) 第10回 ブラウザでゲームを作る (1) 第11回 ブラウザでゲームを作る (2) 第12回 ブラウザでゲームを作る (3) 第13回 アプリケーションでゲームを作る (1) 第14回 アプリケーションでゲームを作る (2) 第15回 アプリケーションでゲームを作る (3)			
使用教科書 毎回教員がスライド資料や、コードテキストを作成してきます。 参考書籍は授業内で適宜掲示します。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間内では時間が足りなくなってしまいますので、事前事後学習が重要となります。 自力で解決できない場合は、さまざまな手段で担当教員に質問してください。			

[授業科目名] 映像メディア領域演習B (レコーディング&MA)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 幸長
[単位数] 3	[開講期] 3年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 適正レベル、適正な音質でのレコーディング、及びミキシングの方法、的確なエフェクター処理方法を学び、最終的な再生環境を考慮した音づくりが出来る様になります。音を通じてコミュニケーション力を高める事をテーマとします。			
授業の概要 映像作品や音楽作品において多岐にわたり必要とされる音について、フィールドレコーディング、音響編集室を使用したレコーディング、ミキシング技術、録音に関する様々な機材も含め取り扱いとその応用を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 ① 授業態度 (評価ウエート 30%) ② 理解度 (評価ウエート 30%) ③ ペーパーテスト (評価ウエート 40%) による評価。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 電源周り、スタジオルーティングマトリクス解説。録音に必要な基礎知識 1 S/N比とダイナミックレンジ。マイクの種類と指向性の選択肢。近接効果。録音環境における音の干渉とその対策。 第2回 録音に必要な基礎知識 2 声とアコースティックギターへの理想的なマイキング法。 第3回 録音に必要な基礎知識 3 エレクトリックギター録音。 第4回 録音に必要な基礎知識 4 ドラム録音。(各マイクの位相について) 第5回 課題曲録音。(アコースティックギターとボーカルで構成される曲の録音演習) 第6回 エフェクター解説。第6回でレコーディングしたボーカルとギターを使用し、コンプレッサー、イコライザー、ディエッサー、ディレイ、リバーブを解説。 第7回 ミキシング講義 1 マルチトラックレコーディングされた楽曲を使い解説。(各自MIX課題とする) 第8回 ミキシング演習 マルチトラックレコーディングされた楽曲を各自MIX。提出 第9回 講評 第10回 ショートムービー&セリフ収録。フィールドにおける収音方法。ワイヤレスマイク。ガンマイクの扱い、カメラへの音声入力。ノイズ対策) 第11回 第10回で収録し編集済みの映像への部分的なアフレコレコーディングとその方法。整音演習 1 第12回 整音演習 2 第13回 整音演習 3 第14回 講評 第15回 ペーパーテスト。(後日、結果配布)			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 授業中はしっかりとメモを取り、授業外でもスタジオやサウンド実習室を借り機材やソフトウェアを扱えることは基本なので、機会を増やして、早く慣れる様にしましょう。			

[授業科目名] 情報と職業		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松田 淳一
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標：ショービジネスを形成している多岐にわたるジャンルの職業を理解する。 テーマ：オーディエンスの「観たいもの、聴きたいもの」とアーティストの「やりたいもの」この2者の間でマッチングをしていく作業が制作プロデュースという仕事です。この仕事で一番大事なものは感性と情報です。感性と情報をショービジネスの内容に反映させていく方法を模索し、将来ショービジネスの世界で活躍できる人材になるための基礎を作る。			
授業の概要 今の時代、様々な職業で求められる「企画」や「プランナー」に関わる基礎的な能力について、理解を深めることができる授業を行う。題材としては「ショービジネス」に関わる職業を取り上げる。社会の中では、たくさんのショービジネスが行われている。その一つ一つのショービジネスにはそれぞれ理念がある。その理念に基づいて企画が立案され、制作されて人々の目に触れることとなりショービジネスとして成立する。本科目では、実際のショービジネスの制作現場で何が行われているのかを具体的に理解するために様々な資料映像や、実際に使われているツールなどを紹介しながら、ショービジネスの始まりから終わりまでを学習し、将来ショービジネスの現場で使える知識を身に付けていく。併せて国家試験（技能検定）取得へのサポートも行う。			
学生に対する評価の方法 授業参画態度(50%) プレゼンテーション(50%) 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス（授業の目的、授業計画、評価方法等） 第2回 ショービジネスの世界①コンサートの作り方 第3回 ショービジネスの世界②ダンスショーの作り方 第4回 ショービジネスの世界③オペラの作り方 第5回 ディレクションの考え方①企画の重要性 第6回 ディレクションの考え方②企画と予算と制作 第7回 舞台監督の仕事 第8回 照明プランナーの仕事 第9回 音響プランナーの仕事 第10回 プロデューサーの仕事 第11回 演出家の仕事 第12回 国家試験対策Ⅰ（学科） 第13回 国家試験対策Ⅱ（実技） 第14回 国家試験対策Ⅲ（ヒアリング） 第15回 プレゼンテーション			
使用教科書 特に使用しない。適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 多種多様なエンタテイメントの中から、自分が一番興味のあるものにフォーカスを当て、その成り立ちをディープに調べておくこと。			

[授業科目名] 映画構造分析論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 酒井 健宏
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 何気なく撮影した「動く映像」と、ふだん我々が「映画」と呼んでいるものには違いがある。映画とは、いくつもの規則に基づいてシステムティックに組み立てられる構築物なのだ。この講義では、映画を一つの構築物として把握・分析するための方法とその意義について基礎的な知識および概念を修得することをテーマとする。あわせて学生各位が自身の映像作品制作や視聴・批評活動において分析的な視点をもって取り組むことができるようになることを到達目標とする。			
授業の概要 「映画分析の基本」「形式分析」「内容分析」「ジャンル分析」を軸に、具体的な映画作品を取り上げながら構造分析のストラテジーについて概説する。また映画構造の変遷は歴史的文脈や社会・文化的状況から多分に影響を受けるものであることを考慮しつつ、特定の地域性や時代性あるいは作家性に偏ることなく客観的に作品を見つめる能力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度や発言・質問等を含めた積極的な参加(30%)、小テスト(30%)、期末に実施するレポート課題(40%)で総合的に評価を行う。学習意欲の低い者、および過度の遅刻、早退、私語、居眠り等をする恐れのある者はあらかじめ受講しないこと。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 イントロダクション 授業の目的と講義の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明など			
第2回 映画分析の基本 (1) ショット、シーン、シークエンス			
第3回 映画分析の基本 (2) ストーリー、プロット			
第4回 映画分析の基本 (3) 物語世界、時間、空間、因果性			
第5回 形式分析 (1) 初期映画と様々な映画形式			
第6回 形式分析 (2) 古典的ハリウッド映画とオルタナティブ1			
第7回 形式分析 (3) 古典的ハリウッド映画とオルタナティブ2 (小テストあり)			
第8回 内容分析 (1) 作家主義			
第9回 内容分析 (2) 構造主義、記号学、テクスト論			
第10回 内容分析 (3) 精神分析学的映画理論			
第11回 内容分析 (4) 認知派、ネオ・フォルマリズム			
第12回 ジャンル分析 (1) ジャンル論の基礎、ジャンル生成のメカニズム			
第13回 ジャンル分析 (2) メロドラマ、フィルム・ノワール			
第14回 オーディエンス研究 人種、ジェンダー、文化 (期末レポート出題)			
第15回 まとめと考察			
使用教科書 【参考図書】「フィルム・アート 映画芸術入門」 デイヴィッド・ボードウェル クリストイン・トンプソン著 (名古屋大学出版会) 他			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げる映画作品は可能な限り各自で入手し、復習を含め分析的な観点から繰り返し視聴すること。			

[授業科目名] フィルム映像演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 仙頭 武則・渡部 真
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像制作の原点であるフィルムによる実習を通じて、映像との関係を深め、技術の進歩を理解すると共に映像の本質に触れ、専門職へのアプローチの立脚点とする。			
授業の概要 サイレントによるフィルム短編作品(10分程度)を企画・制作し、その過程を通して技術の進化、映像の歴史を認識し、映画、CM、TVの本質的な違いも理解。専門職への第一歩となるようにする。			
学生に対する評価の方法 成績評価—平常の授業態度(30%)、作品完成後、提出する論文による評価(70%)で総合的に評価を行う。 再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） I : 制作 企画、制作、仕上げまでを組織として制作する。計画を主体的に立案・運営すること。例外を認めない。 完成後、「フィルムで撮影すること」というタイトルの論文(2000字以上4000字以内)を提出 【制作内容】 フィルム撮影・ノンリニア編集による短編（10分程度）サイレント映画制作 短編脚本を学生により撮影を行う。 撮影したものを各人が編集する。 最終日はすべてのものを鑑賞、個々の尺、カット数、等分類剖析し、「編集」についての理解も深める。 【スケジュール】 第1回 フィルムキャメラの基礎講義 第2回 フィルムキャメラの基礎講義・実習 第3回 フィルムキャメラの基礎講義・実習 第4回 サイレントで撮影する意味、サイレント映画、作品研究 第5回 ロケーション・ハンティングと撮影準備の心得 第6回 リハーサル・その重要性を認識 第7回 撮影準備 第8回 撮影実習 第9回 撮影実習 第10回 撮影実習 第11回 撮影実習 第12回 編集実習(ノンリニア編集) 第13回 編集実習(ノンリニア編集) 第14回 編集実習(上映) 第15回 上映・総括 後日論文発表提出 II : 論文 以下の形式に準じること。最終授業時に提出 【論文の規定】 (a) 基本は横書き。手書きは不可。 (b) 表紙をつける。上段に授業名、中央にタイトル、サブタイトル。下段に学籍番号と氏名を記載。 (c) 紙はA4の白色紙あるいはオフホワイト紙 (d) 本文の書式は一行30文字×20行になるように設定する。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等を事前に調べておくこと			

[授業科目名] ドラマ制作論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三枝 健起
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 新しく知り合った仲間とアイディアを出しながら、小さな映像作品を作る夏の3日間。 それは、気づかなかつた自分の才能の発見、友人の才能を知る機会でもある。 シナリオ募集（7月20日締め切り。学校構内で出来る作品） 到達目標 ① シーンをまず字コンテに起こす。そしてヘタでも絵コンテを描いてみる。その大きさを知ってもらう。 ② チームとしての共同作業の経験。（制作、俳優、カメラマン、音声、照明、記録、そして監督） ③ ト書きに惑わされてはならない。ドラマ・芝居・演技って一体どうして決定されるのか？			
授業の概要 シナリオと映像が大切なのは分かる。しかしドラマは役者がちゃんと無理なく演じることが出来るかにかかっている。そうするにはちゃんとしたシーンのネライ、意味を書きこんで、相手に伝える技術だ。 絵コンテとはスタッフ全員が具体的にどこからどう撮るのか明確に伝える共通言語。 絵コンテを切るとは自分のイメージを一度固定化することで、客観的にみることできる唯一の手法。			
学生に対する評価の方法 レポートが大きな要素。題名は「この3日間で何となく分かったこと」それだけでいい。800字以上。 再評価を実施しない。たったの三日間。（チームを組んだ以上一人でも欠席すると作品は完成しない）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 一日目・募集シナリオを決定する。 第2回 字コンテの大切さ。絵コンテの発見。カット割りとはどんな形で決定されてゆくのか。具体的な例。 第3回 チーム編成（8人・代表制作、監督、役者、撮影、音声、スクリプト編集）を決める。 第4回 各シーン・字コンテを文章にしてみる。→何がここで描きたいのか確認する。 第5回 絵コンテに起こす。→迷子にならないための、作品に向かう道しるべ。 第6回 二日目・必ず絵コンテ提出。 第7回 ロケ→香盤表の作成（どこの教室で、何時～何時までロケか） 第8回 ロケ 第9回 ロケ 第10回 ロケ 第11回 三日目・残りのロケと編集中に気づいたカットの再撮。同時に編集作業に入る。整音。 第12回 アフレコ・効果音。 第13回 音楽入れ。 第14回 スッタフ・テロップ入れ。 第15回 手直し。 四日目・午前中 作品発表、鑑賞。（同じシナリオで、他のチームがどう作ったか！興味あるところ）			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 1 シナリオは一人で考えるはつらい。グループで考えるのも得策。誰かに語ることによりモヤモヤしていたものが整理されるからだ。 2 「序・破・急」小さな作品でも3シーンと考えて欲しい。①キッカケ（状況）②葛藤（問題）③落ち（解決） 3 頭脳は映像に走りがちだが、大切なのは「音なんだな」ともう一度考えて！シナリオを作つてみよう。 ※ 上手に仕上がっている作品なのに、何か心にこない、感動出来ないのは何故？何故と一緒に考えたい。			

[授業科目名] 視覚表現のための プログラミング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ インタラクティブ作品、映像作品、インスタレーション作品などにおける、プログラミングによる映像表現方法の学習。また、それらを実現するための数学的、物理的処理も合わせて学習する。視覚化を実現する言語としてActionScript3.0をおもに使用する。			
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな映像表現を視覚化する方法 ・物理現象を解釈し、プログラミングを実施 ・ActionScriptを通じてオブジェクト指向言語の書法 			
学生に対する評価の方法 授業の参加態度（30%）、項目ごとの確認テスト（20%）、最終課題提出（50%）			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 Flash の復習</p> <p>第2回 ActionScript での基本的な記述方法</p> <p>第3回 基本的モーションに関する記述方法</p> <p>第4回 物理的運動に関する記述方法（1）基本的な物理法則</p> <p>第5回 物理的運動に関する記述方法（2）ゲームなどに固有の物理法則</p> <p>第6回 物理的運動に関する記述方法（3）高度な数学処理を必要とする複合領域の数学的処理</p> <p>第7回 色彩表現に関する記述方法</p> <p>第8回 音声に関する記述方法（1）</p> <p>第9回 音声に関する記述方法（2）解析</p> <p>第10回 3Dに関する記述方法（1）基本的な3D描画技法（含、IK）</p> <p>第11回 3Dに関する記述方法（2）プラグインを用いる応用的な描画技法（PaperVision3Dなど）</p> <p>第12回 映像に関する記述（1）Flash Video 基礎技法</p> <p>第13回 映像に関する記述（2）応用的な映像技法</p> <p>第14回 ウェブカメラを利用した記述方法</p> <p>第15回 統合的な技法</p>			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 授業は毎回項目が変わるので、その回の内容は定着するほどに、必ず復習すること。その際には、簡易なものを短時間で組み上げられるようにトレーニングすること。			

[授業科目名] 音響プランニング特別演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 梅村 真吾・福井 孝子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期 (集中)	[必修・選択] 選択	備考 原則として定員 60 名
授業の到達目標及びテーマ パフォーマー、スタッフ、オーディエンスなどの様々な視点から一つの舞台を捉え、感じ、舞台芸術について学ぶことをテーマとし、オーディエンスに対し「表現する」「伝える」という目的について技術的な事項と深く考える力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 この授業では、ライブ演奏やサウンド・パフォーマンスの上演には欠かせない舞台音響 (PA) と舞台照明に焦点を当て、その基礎知識から応用的な実践までを演習形式で学習する。具体的には、朗読と演奏のパフォーマンスを題材に、音響と照明による舞台作りをグループワークで行い、上演する			
学生に対する評価の方法 受講態度 (60%) + 課題制作発表 (20%) + レポート (20%) 短期間の集中講義でグループ課題制作を行うため、遅刻は厳禁とする。 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 舞台技術とは何か 第2回 舞台照明の基礎知識 第3回 舞台音響の基礎知識 第4回 グループ分けとテーマ演習課題 第5回 テクニカル・セッティング (1) 第6回 舞台作品制作 (1) 第7回 舞台作品制作 (2) 第8回 舞台作品制作 (3) 第9回 舞台作品制作 (4) 第10回 舞台作品制作 (5) 第11回 テクニカル・セッティング (2) 第12回 リハーサル 第13回 舞台作品上演 (1) 第14回 舞台作品上演 (2) 第15回 講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 舞台芸術に意識的に接し、照明や音響が与える効果について考察する。 作品制作では、伝えたい事の主軸をグループごとにまとめ、限られた条件のなかでの演出表現手法と可能性を熟慮し、舞台作品として完成させる。			

[授業科目名] プロジェクトマネジメント論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 仙頭 武則
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ プロジェクトマネジメント(PM)とはプロジェクトを成功裏に完了させることを目指して行われる活動のことである。PMは競争力の優位性を保つ源泉でその有効性が認識され、欧米では、PM資格は最も人気の高い資格の一つである。日本においてもPMAJによるプロジェクトマネジメント(PMC・PMS)資格試験が実施されITから建設に至るあらゆる産業でその重要性が認識されつつある。当然、映像制作においても不可欠な要素であることはいうまでもない。			
授業の概要 授業では資格試験問題も参照しながら、主に映像制作はじめとする身近なプロジェクトを例題として検討し、社会活動への基礎づくり、考える力、いかにして実社会で生きていくべきかを示唆する。			
学生に対する評価の方法 毎回の感想、受講態度、グループディスカッションでの発言回数、内容、論文。 上記から総合的評価、再評価を行わない。特に第14回と最終回欠席者は公的な理由によるもの以外、評価対象としない。			
II:論文 「プロジェクトマネジメントとは」 以下の形式に準じること。最終授業時に記述・提出。 【論文の規定】 (a)基本は横書き。手書きは不可。 (b)表紙をつける。上段に授業名、中央にタイトル、サブタイトル。下段に学籍番号と氏名を記載。 (c)紙はA4の白色紙あるいはオフホワイト紙。 (d)本文の書式は一行30文字×20行になるように設定する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 概論 ～資格試験例題からPMに対する視点を知る 第2回 概論 ～計画(Plan) 実行(Do) チェック(Check) 是正(Act) からなる 管理サイクル(PDCAサイクル)について 第3回 概論 理念と理想 第4回 概論 知っておかなければならぬ社会の基礎=構造からひも解くということ 第5回 概論 現実社会に照らして 第6回 計画(Plan)について 第7回 計画 人生設計について 第8回 概論 企業社会とは 第9回 概論 情報とは何か 第10回 実践例題 第11回 例題検証 第12回 実践例題2 第13回 例題検証 第14回 論文記述・今後10年の人生計画(社会貢献を踏まえて) 第15回 論文記述・プロジェクトマネジメントとは			
使用教科書 特に使用しないが、日本プロジェクトマネジメント協会発行の「P2M プロジェクト&プログラムマネジメント 標準ガイドブック」を参考することもある。			
自己学習の内容等アドバイス 上記参考ガイドブックまたはプロジェクトマネジメント協会のホームページ等に目を通し、資格の概要等を頭に入れておくとよい。			

[授業科目名] マスコミ論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 村上 正樹
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高度情報社会の現代、マス・メディアなくして我われの生活は成り立たなくなっている。世界の動向から政治、経済、そして卑近なニュース、娯楽、更には溢れんばかりの広告宣伝等に至るまで、四六時中この“メディア情報”なる巨大な怪物に搦め捕られている実態。マス・メディアとは一体何物なのか。性本来ジャーナルで、“時代を映す万華鏡“の如く、祝祭的な惑乱性も併せ持つ。本講義では、映像メディアの首座に君臨する『テレビ』に主たる照準を合わせ、実社会が求める”映像的思考“の鍛磨と”想像力と感性“の涵養を図る。			
授業の概要 1. 新聞・R・TV・映画・出版・広告などの機能と特性、さらにIT社会の動向。 2. TVメディアの諸相（番組編成・放送倫理・デジタル化など）の知識と理解。 3. 報道の重要性。TVジャーナリズムの今日的課題を考察し、検証。 4. TV番組（ドラマ・バラエティー・音楽番組など）の制作手法を解析。 5. 制作現場の視座から、“映像的思考”的実践力鍛磨。			
学生に対する評価の方法 1. 期中、小レポートを作成・提出（1・2回実施）～30%。 2. 学期末、「課題レポート」を作成・提出～70%。*1及び2の配分で総合評価。 3. 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 マス・メディアの現在・・・・・・ *新聞・ラジオ・TV・出版・広告そしてIT戦略 第2回 映像メディアと活字メディア（1） *新聞～活字メディアとしての特性と機能 第3回 " (2) *TV～映像メディアとしての特性と機能 第4回 TV放送50年の史的変遷・・・・ *TV放送の草創期*番組の変遷*技術革新 第5回 TVメディアの考察（1）・・・・ *放送制度*NHKと民放*衛星放送とデジタル 第6回 " (2)・・・・ *局の組織*番組編成*視聴率とCM*放送倫理 第7回 TV報道とジャーナリズム（1） *ニュース取材*ドキュメンタリー*戦争報道 第8回 " (2) *「知る権利」と人権*TVジャーナリズムの課題 第9回 TV番組の構造分析・・・・・・ *バラエティー・音楽・ワイドショウ・スポーツ 第10回 TV実践的番組制作法・・・・・・ *制作過程*演出・美術・技術・照明・音響の役割 第11回 TVドラマの制作・演出法・・・・ *企画・脚本・演出（カメラコンテ、撮影、編集） 第12回 “劇的創造力”とは何か・・・・ *想像力の源泉～能・歌舞伎・芸能・音楽・劇画 第13回 映像の芸術性と社会性・・・・・・ *映画の誕生と文化的軌跡*映画文法～変幻の時空 第14回 映像メディアとIT社会・・・・・・ *放送と通信の融合*時代が求める“映像的思考” 第15回 総括			
使用教科書 原則として、配布プリントを使用。 参考文献は適宜開示。			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義用プリントを予習しておくこと。 主要項目を事前に調べておくこと。			

[授業科目名] マスコミ論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 浅川 健次
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ			
20世紀は戦争の100年だった。21世紀は「情報戦」の世紀になるだろう。ことし世界の携帯電話保有台数は75億と、人口70億を超える。先進国・新興国を問わず、情報は映像付きで瞬時に地球上に流れる。デジタル化・多様化・汎化した情報社会。いま映像メディアの世界で生きて行こうとする者に求められるのは何か? ネガティブ(受け身になって情報の海に溺れる)か、ポジティブ(世界を見すえて「真実」を受・発信できる)か。そこを分かろうとするのが、この授業の狙いだ。			
授業の概要			
まず先生自ら身を置いてきた新聞、TVという旧来の「マスメディア」界の現状と課題を、生の姿で見ていく。次にいま猛烈な勢いで膨張しているネットの、あまりにも便利で、かつ、それ以上に危うい世界(これを「サブメディア」の世界と呼ぶ)、その功罪を、みんなでいっしょに考えていきたい。			
後半は、そのメディアたちが今、伝える国内外の重大な時事ニュースを解説する。「アベノミクス」「TPP」「尖閣・竹島・北方領土」の三つは欠かせない。あといくつか、みんなで選んで、先生が説明し、みんなで意見を言い合う、そういう授業にしたい。			
学生に対する評価の方法			
① まず授業参画態度が50% ② 次に、毎回の授業後、出欠表の空欄に書いてもらう「私はこう思う」が50%。 ③ したがって、テストはせず、最終回も授業をする。			
授業計画(回数ごとの内容等)			
第1回 受講生が「どのメディアにどの程度、接しているか」についてのアンケート実施。<関連DVD>			
第2回 ジャーナリズムとは何か。「真実の報道」である。それが多メディア化で、危機に。<関連DVD>			
第3回 ジャーナリズムの原点=新聞。若者の活字離れに苦しむ、いま「過渡期」の姿。<関連DVD>			
<DVD「どこへ行く新聞ジャーナリズム』 8:18>			
第4回 TVの世界を内側から見る。キーワード①は「視聴率」競争。			
<DVD「日テレ視聴率買収事件』 6:07>			
第5回 TVの内側、キーワード②は「系列局と下請け」。			
<DVD「あるある辞典ねつ造事件—納豆ダイエットはねつ造だった』 3:20>			
第6回 ウエブメディアの爆発的な普及。しかし「広告で稼ぐか、有料課金か?」惑う。			
第7回 ウエブメディアへ走るアメリカ。新聞の崩壊→電子新聞は成功するか?			
<DVD「新聞が消えた日—R/MTN紙の150年』 13:46>			
第8回 お仲間ネット・SNSの闇の深さ。<DVD「Line殺人事件」「加ネットいじめ」「米若者ネットポルノ依存」「日スマホ依存50万人超」「日中学生・悪意の書き込み30%がやった」「日・婚活サイトを悪用』			
第9回 情報戦争の時代。ウイキリークス、E・スノーデン元米CIA職員の暴露した米当局の監視網。サイバー戦争。宇宙空間の情報戦。<関連DVD>			
《ここからは、メディアの伝える世界の重大ニュース》			
第10回 アベノミクス <DVD「アベノミク三本の矢』 3:44>			
第11回 TPP <写真「交渉12か国の分布』 >			
第12回 尖閣諸島、竹島、北方領土 <DVD・写真「領海とは?』 >			
第13回 靖国神社参拝問題 <DVD「分祀は神社が決意せよ』 12:38>			
第14回 使用済み核燃料「トイレなきマンション」<写真「青森県六ヶ所村の核燃料再処理施設』 >			
第15回 日本の農業の行方 <DVD「減反政策見直し』 3:18>			
使用教科書			
教科書なし。参考書「2020年新聞は生き残れるか」長谷川幸洋著、13年11月講談社刊¥1400。「5年後メディアは稼げるか」佐々木紀彦著、13年8月東洋経済新報社刊¥1200。「日米同盟と原発」中日新聞社会部編、13年11月同新聞社刊¥1600。			
自己学習の内容等アドバイス			
① 1日1時間、新聞を読む習慣をつけよ。②それは作品制作の視点にも直結する。③就活にも必ず結び付く。			

[授業科目名] 卒業研究・制作 (フォト)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 西宮 正明・安達 洋次郎 光 幸國・前野 漠・安形 嘉真
[単位数] 12	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 写真のスペシャリストを志す学生にとって最終の総仕上げとして以下の3方向で卒業研究とする。			
1. 6月中旬の校外展にあわせ、前期中に小グループに分かれそれぞれのテーマで共同制作を行い、作品を発表する。コミュニケーション能力、問題解決能力を身につける事を到達目標とする。 2. 夏期休暇中の課題として小論文「私の写真論」を書き上げる。各自「写真とは」をしっかりと考察し、研究することで卒業制作のエネルギーとする。 3. 卒業制作は4年間の集大成として、各自の個性を最大限に生かし、前後期を通して大きなテーマに取り組む。各ルームではマンツーマンで制作の助言指導を徹底することで将来、プロフェッショナルとして第一歩が踏み出せるよう導く。しっかりと人間性と高度な技術を習得する事を到達目標とする。			
授業の概要 共同制作はテーマの設定からすべて学生の自主性で行い、前期中に制作を終了する。 各自の卒業制作はスケジュール管理を徹底し12月中には制作を終了する。西宮教授のチェックを年間3回行う。(企画チェック7月下旬、中間チェック9月下旬、最終チェック11月下旬) 作品の制作・進行・チェック及び講評はゼミ全体で行う。			
学生に対する評価の方法 共同制作(授業への参画態度)の評価(30%) 卒業制作(小論文私の写真論を含む)の(70%)。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 卒業研究について(オリエンテーション)。 1.共同制作(チーム編成、展覧会コンセプト&テーマの研究)について 2.小論文について 第2回 1.各チーム企画会議 第3回 1.共同制作テーマ全体チェック。 2.各自テーマについて教員とマンツーマンで研究 第4回 1.コンセプトワークおよびテーマの研究 第5回 1.ロケハン及び撮影取材 第6-7回 1.撮影取材 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第8回 1.最終チェック、プリント開始 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第9回 1.展示用プリント制作 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第10回 1.展示 第11回 1.展示、講評 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第12回 1.コンセプトワークおよびテーマの研究 第13-14回 1.資料収集 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第15回 テーマ全体チェック 8月下旬から9月上旬に夏期合宿 * 校外展共同制作の反省会 *卒業制作小論文の方向性について。 第16回 卒業制作進行状況チェック 第17回 卒業制作西宮中間チェック 第18-21回 制作 第22-24回 制作(作品グレードアップ期間) 第25回 卒業制作最終全体チェック(ゼミ教員全員参加) 第26-27回 制作およびプリント制作 及び作品集制作 第28-29回 卒展用プリント制作.展示レイアウト構成研究及び作品集制作 第30回 卒展用プリント制作 展示及び講評			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 日常生活のなかで、常にあらゆるものにレンズを通して見る習慣をつける。 大学の図書館等で著名な写真家の作品等を積極的に鑑賞する。			

[授業科目名] 卒業研究・制作（映画）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 真・仙頭 武則・伏木 啓
[単位数] 12	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 各自の判断でテーマ選択、企画作成、制作、発表にいたるまでを行う。またそのための協力者へ依頼要請をして態勢を整える。テーマを熟考し、自身の視点を投影した映像表現となっていることを要求する。しかし単なる自己表現というのではなく、他者の視点を意識したい。但し、時流に迎合する必要はない。 論文、シナリオはテーマを見据えて、論理や因果関係を意識して記述すること。			
授業の概要 オリジナル映像作品・オリジナル脚本の完成、および映像に関する研究論文の上梓。 論文の対象制限はないが、仮説、分析、実証が明確であるものに仕上げること。映像を鋭く分析したもの期待する。作品は自己発現に依りながらも、広く理解を得やすく創る。 レポートは制作プロセスを分析して次の作品や研究へ継承する布石を作ることが目的である。			
学生に対する評価の方法 「作品」または「論文」と、そのほかの「提出資料（分析レポート等）」によって総合的に評価する。 作品は設定した目標に達しているかどうか、論文は着眼点・問題設定の特異性そして分析・実証の精確さによって判断する。プレゼンテーションの内容や、作品／論文への姿勢（面談にて判断）、グループへの関わりなども考慮する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 イントロダクション 第02回 企画立案 第03回 企画立案 第04回 企画検討・技術指導 第05回 企画検討・技術指導 第06回 技術指導 第07回 技術指導 第08回 技術指導 第09回 技術指導 第10回 技術指導 第11回 ゼミプロジェクト 第12回 ゼミプロジェクト 第13回 個人企画プレゼンテーション 第14回 個人企画プレゼンテーション 第15回 個人企画プレゼンテーション 第16回 卒業制作・個人／グループ指導 第17回 卒業制作・個人／グループ指導 第18回 卒業制作・個人／グループ指導 第19回 卒業制作・個人／グループ指導 第20回 卒業制作・個人／グループ指導 第21回 卒業制作・個人／グループ指導 第22回 卒業制作・個人／グループ指導 第23回 卒業制作・個人／グループ指導 第24回 講評 第25回 講評 第26回 講評 第27回 講評 第28回 卒業制作展への指導 第29回 卒業制作展への指導 第30回 卒業制作展への指導			

制作物について

【制作内容】

1) 映像作品

- ・作品は動画であること。
- ・完成尺は、映画（ドラマ/ドキュメンタリー）は本編時間30分以内、アニメーション、アート映像、実験映画などの場合は、原則として本編時間15分以内とする。
- ・コマーシャル映像は15秒、30秒、60秒の3タイプを制作すること。
- ・グループ制作において、単位を取得できる役職は「プロデューサー」「監督」「撮影」「録音・音響」であり、それ以外の役職で取得したい場合は純任教員（渡部）の承諾が必要。
- ・スクリーンに投影しないメディア・アートやパフォーマンスの場合は事前に専任教員と相談すること。
- ・作品以外に制作に関するアイデアの推移、作業過程、自己分析などを記したレポート（8000字以上）を提出。手書き不可。

2) シナリオ

- ・オリジナル脚本であること。完成尺数90分以上の分量。
- ・2度以上の推敲を担当教員と重ねる。

3) 研究論文

- ・作家・作品研究、映像技術・メディア論、映画・映像論、その他、視覚領域やイメージに関する認知心理学や文化人類学に沿った研究など。
- ・提出前に、2度以上の推敲を担当教員と重ねること。

【提出】

期日までに次のものを提出する。表書きに「タイトル」「学科とゼミ名」「学籍番号」「氏名」を記載すること。データのファイル形式はワード、テキスト、PDFのいずれかにし、映像資料はJPEGにする。手書き不可。

1) 映像作品の場合

a) 作品提出（提出用のフォーマットは授業内に通知する）

最終提出物

- ・作品
- ・スクリーンショット×10枚
- ・メイキング写真×5枚

※全てアイシス（ISIS）上の指定フォルダに上げること。

b) 分析レポート A4サイズ、縦位置横書き。文字サイズは10ptないしは14Q以上にする。同じものをデータで提出。

2) シナリオの場合

横位置縦書き。シナリオフォーマットに準ずる。かならずあらすじ（800字以内）を書き、人物表とともに提出すること。文字サイズは12ptないしは16Q以上に設定する。同じものをデータでも提出。完成尺は90分以上。

3) 研究論文の場合

A4サイズ紙、縦位置横書き。文字サイズは10ptないしは14Q以上にする。論文の形式をふまえてまとめること。文字数は2万字以上とする。（データでも提出、フォーマットはPDF）

使用教科書

特にありません

自己学習の内容等アドバイス

企画は無理なく仕上げられる範囲を見極めること。大人数での制作となるので計画作成が重要になる。特に編集や整音を考えて余裕を持って取りかかりたい。

論文は資料を的確に選択し、広げすぎないこと。資料の量を競うのではなく、よく考え、論点を明確にしてから読み込んでいくことで、深さを増すことが出来る。

[授業科目名] 卒業研究・制作 (CG)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人・山本 努武 愛澤 伯友
[単位数] 1 2	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ CG 技術の基本をおさえた上で、さらに高度で新たな表現スタイルを志向し、表現力豊かな作品制作を目指す。 言い換えれば、それはクリエイティブでインディペンデントな研究と制作が到達目標となる。			
授業の概要 4 年間の集大成として、 ・ 2D アニメーション ・ 3D アニメーション ・ メディアデザイン ・ プログラミング&デザイン ・ 実験的映像 以上のCG領域の追究、あるいは領域を横断して研究・制作する。 作品のアーカイブについても考察と研究、それとともに研究内容や制作プロセスについて論文にまとめる。			
学生に対する評価の方法 実践的な作品制作を基本に評価する。評価の基準は、目標到達度と作品の完成・発表による。 <u>再評価は実施しない。全ての授業への出席を必須とする。</u>			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 卒業研究のOVERVIEW 実例CGの視聴(次回以降も随時)。 作品制作のためのテクニカルメソッド(次回以降も随時)。 第2回 研究・制作コンセプト構築1 第3回 研究・制作コンセプト構築2 第4回 ストーリーボード制作1 第5回 ストーリーボード制作2 第6回 研究・制作概要プレゼンテーション 第7回 CG制作1 第8回 CG制作2 第9回 CG制作3 第10回 CG制作4 第11回 CG制作5 第12回 CG制作6 第13回 CG制作7 第14回 CG制作8 第15回 第1回中間発表 第16回 CG制作9 第17回 第2回中間発表 第18回 CG制作11 第19回 CG制作12 第20回 CG制作13 第21回 CG制作14 第22回 CG制作15 第23回 ポストプロダクション1 第24回 ポストプロダクション2 第25回 研究・制作のまとめ(論文) 第26回 研究・制作のまとめ(論文) 第27回 卒業制作作品の講評 第28回 卒業制作展準備・アーカイブメディア制作1 第29回 卒業制作展準備・アーカイブメディア制作2 第30回 卒業制作展準備・アーカイブメディア制作3			
使用教科書 授業の中で適宜提示する。			
自己学習の内容等アドバイス CG の映像表現はたかだか 20 年の歴史である。CG 映像表現や未来の CG のあり方をつねに考える習慣を身につけてほしい。未だ見たことのない未来の世界を CG の視点から展開してほしい。そのためには、歴史的 CG の分析、現状の CG のあり方、未来の社会のあり方等を様々な視点から分析し、そして考え行動してほしい。			

[授業科目名] 卒業研究・制作 (サウンド)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康・森 幸長 鈴木 悅久・周防 義和
[単位数] 1 2	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ			
<p>■ 佐近田担当ゼミ ■</p> <p>4年間の総決算として「研究」の名に値する総合的な卒業制作を行う。作品制作について、より高度で専門的な知識と技術を追求することはもちろん、テーマに関わる幅広いリサーチ(調査研究)を通じて総合的な「知」の獲得を到達目標とする。あわせて自主的な対外発表を通じて、個人的な思いと社会との関わりを具体的に体験し、アートがなぜ社会的コミュニケーションのひとつなのかについて自分なりの考えを獲得する。</p>			
<p>■ 森担当ゼミ ■</p> <p>4年次は各自研究テーマを掲げ、その実験、制作に関わる指導を中心とする。3年間での経験を活かした、より高度で実験的な要素が感じられる作品制作を行い、さらなるレベルアップを目的とします。</p>			
<p>■ 鈴木担当ゼミ ■</p> <p>3年次に制作した作品及び研究を概念的に発展させ、卒業展覧会にて作品を発表する。より高度な技術や知識を通じ、作品制作における意義を明確化するための俯瞰した視野を養うことを目的とする。</p>			
<p>■ 作曲特別演習 (周防) ■</p> <p>作曲特別演習(周防)については、上記3ゼミのいずれかに所属したうえで、特にみずから制作テーマとして作曲・編曲を志す者についてガイダンスと面談のうえ選択することができ、音楽理論と課題制作の両面から段階的に本格的な作曲法・編曲法、映像・映画音楽を学ぶ。</p>			
授業の概要			
<p>■ 佐近田担当ゼミ ■</p> <p>個人研究&制作指導が中心になるが、それを確実に進めるために、各自、卒業制作と関連したリサーチテーマを掲げ、研究レポートを執筆する。前期は既存の著名なメディアアート作品を題材に詳細な作品分析を行い、そこで使われている技術を再現する演習を行う。また、対外的発表を含む自主プロジェクトを企画・制作・広報・実行する。評価については卒業制作作品と自主プロジェクト、研究レポートを総合して行う。</p>			
<p>■ 森担当ゼミ ■</p> <p>さらなる高度な技術を習得するためスタジオワークを積極的に行い、セリフや楽器、Foley等々、生音を録音整音します。また卒業制作において他ゼミとの共同制作が多くなるため、早い段階でのスタッフミーティングが重要なポイントとなります。後輩(3年生等)とのコミュニケーションもその一つとなります。各自の実験テーマを研究レポートとしてまとめ、卒展後提出します。学外コンペにも積極的に参加します。</p>			
<p>■ 鈴木担当ゼミ ■</p> <p>現代における音楽表現の意義を、作曲技法や表現メディアの視点から分析し、各自の専門分野においての調査、研究を行う。これを一つのプロジェクトと位置付け、成果物としてまとめる。</p>			
<p>卒業制作については個人制作面談を通じ、各自の研究テーマに則した作品制作、研究レポート制作を行う。定期的にプレゼンテーションを行い、専攻生同士のディスカッションを通じて制作意図を深く考察し作品の強度を強めていく。</p>			
<p>■ 作曲特別演習 (周防) ■</p> <p>音楽理論と課題制作の両面から段階的に本格的な作曲法・編曲法、映像・映画音楽を学ぶ。受講に際しては、Logicの基本操作をマスターしていることと初步的な譜面読解力が求められる。また何らかの楽器演奏を経験していることが望ましい。</p>			
学生に対する評価の方法			
授業態度(30%)、制作内容およびレポートやドキュメント等提出物(70%)で総合的に評価する。			

授業計画（回数ごとの内容等）	
【佐近田担当ゼミ】	
第1回	イントロダクション
第2回	作品の分析と技術再現演習1（音響メディアアート系）
第3回	作品の分析と技術再現演習1（音響メディアアート系）
第4回	作品の分析と技術再現演習2（映像メディアアート系）
第5回	作品の分析と技術再現演習3（音+映像メディアアート系）
第6回	作品の分析と技術再現演習3（音+映像メディアアート系）
第7回	卒展作品・研究レポートテーマに関する面談
第8回	3年・4年合同プレゼン（卒業制作テーマ、研究レポート、自主プロジェクトについて）
第9回	作品の分析と技術再現演習4（身体メディアアート系）
第10回	作品の分析と技術再現演習4（身体メディアアート系）
第11回	自主プロジェクト演習1／個人制作指導
第12回	自主プロジェクト演習2／個人制作指導
第13回	自主プロジェクト演習3／個人制作指導
第14回	自主プロジェクト演習4／個人制作指導
第15回	ライティング演習
第16回	研究レポート提出／プレゼン
第17回	個人制作指導
第18回	卒展作品企画書提出／個人制作指導
第19回	個人制作指導
第20回	個人制作指導
第21回	個人制作指導
第22回	個人制作指導
第23回	卒展作品プロトタイプ発表
第24回	個人制作指導
第25回	個人制作指導
第26回	個人制作指導
第27回	卒展作品完成〆切／ゼミ内講評
第28回	卒展作品の調整
第29回	卒展作品の調整
第30回	卒業制作展／最終講評
【森担当ゼミ】	
第1回	録音講義演習1（音響編集室にて楽器の収録ピアノ、アコースティック&Gアンプ篇）
第2回	録音講義演習2（音響編集室にて楽器の収録ドラム、声の収録ボーカル篇）
第3回	録音講義演習3（音響編集室にて小テストを行う）
第4回	Foley演習1（音響編集室にてシナリオを用意し、音響デザインミーティング～収録）
第5回	Foley演習2実践（音響編集室にて収録）
第6回	Foley演習3実践（音響編集室にて収録）
第7回	Foley演習4整音（サウンド実習室にて）
第8回	Foley演習5整音（サウンド実習室にて）
第9回	Foley演習 講評（サウンド実習室にて）
第10回	サラウンド収録演習。（フィールドレコーディング演習1）
第11回	サラウンド収録演習。（フィールドレコーディング演習2 第10回で収録して来た音と、Foley演習で収録した音のライブラリー化。要提出）
第12回	卒業制作展に向けたレジュメ提出 個人面談
第13回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第14回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第15回	レジュメに従って制作指導 個人面談

第16回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第17回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第18回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第19回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第20回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第21回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第22回	ゼミ展見学。レポート提出	
第23回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第24回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第25回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第26回	レジュメに従って制作指導	個人面談
第27回	講評（提出厳守）	
第28回	最終調整	
第29回	卒業制作展	
第30回	レポート提出。	

【鈴木担当ゼミ】

第1回	イントロダクション、研究レポートのプレゼンテーション 卒業制作・研究の計画	
第2回	プロジェクト演習 (講義) 作曲技法と表現メディア	
第3回	プロジェクト演習I アルゴリズミック・コンポジション	個人制作
第4回	プロジェクト演習I アルゴリズミック・コンポジション	個人制作
第5回	プロジェクト演習I アルゴリズミック・コンポジション	個人制作
第6回	卒業制作・研究プレゼンテーション	
第7回	プロジェクト演習II ネットワークアンサンブル	個人制作
第8回	プロジェクト演習II ネットワークアンサンブル	個人制作
第9回	プロジェクト演習II ネットワークアンサンブル	個人制作
第10回	卒業制作・研究プレゼンテーション	
第11回	プロジェクト演習III アクースモニウムシステム	個人制作
第12回	プロジェクト演習III アクースモニウムシステム	個人制作
第13回	プロジェクト演習III アクースモニウムシステム	個人制作
第14回	卒業制作・研究 中間報告	
第15回	プロジェクト成果発表	
第16回	卒業制作・研究 進捗報告	
第17回	個人制作及び個人面談	
第18回	個人制作及び個人面談	
第19回	個人制作及び個人面談	
第20回	個人制作及び個人面談	
第21回	ZEMI 展への協力	
第22回	個人制作及び個人面談	
第23回	個人制作及び個人面談	
第24回	研究レポート 発表、講評	
第25回	ゼミ内事前講評	
第26回	個人制作及び個人面談	
第27回	個人制作及び個人面談	
第28回	個人制作及び個人面談	
第29回	個人制作及び個人面談	
第30回	卒業制作展	

【作曲特別演習（周防）】

コードスケール、ダイアトニックコード、テンションノート、ドミナントモーション等ベーシックなコードプログラミングの学習を通じて基本的な和声に対する解釈を養うことを目的とする。

和声に対する理解力を向上させる為にリハーモナイズに於ける課題を与え演習を行う。それを通じて和声理論の応用力を養うことを目的とする。

主旋律に対してオブリガートを構築する課題を与え、演習を行う。それを通じて対旋律の入った上級レベルの楽曲の編曲能力を養うことを目的とする。

また映像映画音楽への作曲編曲法も具体例をあげ、映像そのものの解釈とともに学習する。

ポップミュージックの楽曲分析に於いてはペントトニックスケール、ブルーノート、シンコペーション、リズムのグルーヴ感(ドラム&ベースによるリズムのボトムを構築する)などの学習により、西欧古典音楽にはない現代ポピュラー音楽の重要要素を追求する。それによって現代感覚のポップな作曲編曲の独自性を身につけ養うことを目的とする。

それらのプロセスを経て、テーマによる作曲課題を与える。それらを通して理論的に学習した各ファクターを抽象的なテーマに置き換えて、または発展的に解釈して客観的な作曲編曲能力を養うことを目的とする。

これらを経て4年クラスでは自由な課題による作品制作を最終目的とする。

また理論の講義は講師周防義和自らの作品での実際例を提示してリアリティある解説にしていくことで机上の理論事象を具体的に説明していく。

第1回	和声をヴォイシングに導く・解説
第2回	和声をヴォイシングに導く演習1
第3回	和声をヴォイシングに導く演習2
第4回	和声をヴォイシングに導く演習3
第5回	和声をヴォイシングに導く演習4
第6回	応用レベルのコード進行演習1
第7回	応用レベルのコード進行演習2
第8回	発表と講評
第9回	モード手法、4度堆積和声の分析1
第10回	モード手法、4度堆積和声の分析2
第11回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習1
第12回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習2
第13回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習3
第14回	発表と講評
第15回	弦楽器の作曲法1
第16回	弦楽器の作曲法2
第17回	弦楽器の作曲法3
第18回	弦楽カルテットの作曲法1
第19回	弦楽カルテットの作曲法2
第20回	弦楽カルテットの作曲法3
第21回	弦楽カルテットレコーディング1
第22回	弦楽カルテットレコーディング2
第23回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説1
第24回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説2
第25回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説3
第26回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説4
第27回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説5
第28回	映画、ドラマ劇中音楽の分析解説6
第29回	発表と総評
第30回	発表と総評

使用教科書

別途授業中に指示する

自己学習の内容等アドバイス

(佐近田) 3年次のゼミ以上に、4年次は自分でテーマを定め、自分で調査し、自分で問題解決することが基本になる。各自でスケジュールを立てて進行しないと無為な時間を過ごすことになる。内外のコンペティション参加、学外での展覧会・コンサート開催等、対外発表を積極的に行い、卒業に向けて自己と社会をつなぐ姿勢を大事にして欲しい。研究レポートの執筆にあたっては、基本的な論文の形式（授業内で指示する）に準じ、論理的な目次構成を意識する。主張には根拠が必要になり、そのために資料を使う。中心となる資料の参考文献から芋づる式に膨大な文献へのリンクが拡がり困惑するだろが、効率的に資料収集し、可能な限りレポートに反映すること。

(森) 自分のやるべき事を明解にし、その関連事項において専門書等を読み実験、研究する。映画作品の観賞を多く行い、音響効果的な探求をする事。制作においてスケジュール管理を徹底する事。写真家がシャッターチャンスを逃すまいとカメラをいつも持ち歩く様に、いつも身の回りの音に意識が向く様に意識し、高性能なハンディーレコーダーを持ち歩くくらいである事が理想です。また個人の音のリファレンス環境を整える事は非常に重要です。いつも整音をするスピーカーやヘッドフォンを限定し様々な環境でモニターリングし基準にある音がなんであるかをしる必要があります。推薦専門書：*ハンドブック・オブ・レコーディング・エンジニアリングセカンドエディション/ジョン・M.アーガル（著）*サウンドレコーディングマガジン/リットーミュージック

(鈴木) 主観的な視点だけではなく、客観的な視点から物事を考え論説することが、作品制作や研究の成果物には重要な事柄です。そのためには、より多くの人と意見を交わすように心がけること。また、コンサートや美術館に足を運び、多くの作品に触れる事。

(周防) 例えば授業では基本的にCmajorでの説明したものを12keyすべてで把握できるように自己学習すること。それらは感覚的なことではなく合理的に完成されたものなので、技術として単純な訓練により身に付けるべくものである。授業中に質問できなかつたことを、改めて確認し、もしどうしても理解していないければ次に質問できるような、問題意識をもっておくこと。理論など新たに学習した事柄は頭でわかったとしても音楽という実践の中で真に身体に入って理解するまでは時間がかかる場合があるので、学んだことを即自らの作品の中で生かすように作曲編曲してみることが一番理解力を深めることになる。自分の作品制作に関しては自己学習の段階でどこまで客観的になれるかが問題なので、自分で論理的に聴ける段階まで、ヴォリュームを小さく聴きバランスよく聴いたり、逆に大きく聴いて音質のチェックをするなど、作品を聴き直し、冷静に作品を判断することが望まれる。

[授業科目名] 卒業研究・制作 (T V)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 和郎・吉野まり子
[単位数] 12	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業研究・制作は、3年次作品の制作プロセスの学習に基づき、さらに高度に、概念的・技術的な進化を目標にすることや、新たなジャンルの研究や作品制作を取り組むことを到達目標とする。授業時間内に限らず、個別指導を加え、卒業作品としての評価基準を超える成果物につながるよう制作活動を総合的に指導する。			
授業の概要 卒業研究・制作においては、その立案から完成に至る計画全般を、学生の自主性や自己管理を尊重することを重視しながら、指導教員に限らず、他の領域教員からの助言や協働をも実現できるよう働きかけ、総合的に高度な学術的完成度を追及していく。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解度と自主性・自己管理 (30%)、受講態度 (30%)、卒業研究・制作の完成度 (40%) を総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1~4回 「目を肥やす」「センスを磨く」という点から優れた映像作品や話題作を素材に、表現論、映像論を展開させる。また、技術研修として、カメラワーク、照明、音響、編集などの基礎的映像技術を備える実践指導を行う。特に3年生の作品制作においては、4年生を先輩として取材・リサーチの助言や技術指導に当たらせ、「教えることで学ぶ」ことを実践させる。 第5~6回 前期前半の時点で、ゼミ展の経験を踏まえ、卒業作品に対する関心のあるフォーム、スタイル、内容等について、あるいは卒業研究のテーマについての暫定的プレゼンテーションを行う。 第7~13回 卒業作品の制作、研究に関しては、メッセージ（主題）、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画などが確定した学生から制作、研究を進める。また、大学以外の組織や団体との協力による多様なテーマの映像化や研究など取材プロジェクトを組ませて、近い将来社会人として参画する映像研究ならびに制作の実践にさらに社会性を強めたい。 第14~15回 前期最終の段階における、卒業作品、研究についてのプレゼンテーションを行う。 第16~17回 後期最初の段階における、卒業作品、研究についての最終プレゼンテーションを行う。 第18~23回 すでにプレゼンテーションにて制作方針が定まっている卒業作品制作、卒業研究をすすめる。 第24~25回 卒業作品制作、研究の中間報告（プレゼンテーション）の実施 第26~28回 卒業作品制作、研究のゼミ内講評 制作過程においては、メッセージ（主題）、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画、自己評価など、制作にかかわる文書化した資料等の提出を義務付ける。 第29~30回 ゼミ内講評を受け、制作、研究の最終段階をへて、卒業作品、卒業研究を完成させる。			
使用教科書 書籍「現代の戦争報道」、「文化・メディア」などを参考とする。			
自己学習の内容等アドバイス 大学の最終学年という自覚に基づき、将来に関わる様々な活動を積極的に行う中から、卒業研究・制作に最適なメッセージが見えてくる機会を逃さず、その研究や映像化の挑戦を躊躇しないという努力を開花してほしい。			

[授業科目名] 卒業研究・制作 (インсталレーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬島 久美子・小笠原 則彰 齋藤 正和
[単位数] 12	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 爆発的に進展してきたデジタル・テクノロジー (装置としてのカメラ、コンピュータなど) が可能にするイメージを新たな〈画像〉としてとらえ、それらが生活環境の中でどのように意味ある仕方で発展させていくか、インсталレーション作品制作 (環境を射程内とした空間としての:芸術表現) を通して研究し、発表することを目標とする。 また、外部における展示発表を研究制作の中に取り入れ、自ら企画し、展覧会の広報・運営・設営していく実践力を身につけていく。			
授業の概要 三年次の制作テーマを発展させより深く追究した制作実践とともに、社会に置ける自らの作品の位置づけを明確に伝達するための研究報告書を作成する。			
学生に対する評価の方法 自らの表現内容・方法の追及の深さが、明確に伝達される作品・テキストであるかを評価とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <前期> 個人制作において表現主題の徹底追究を行なう 第1回 「自らの表現主題と現代社会との関係について」研究報告 第2回 「個人研究の方向性と具体的な作品イメージ提案」空間表現としての必然性 第3~4回 「空間構成 (映像素材・物質材料・システム) とテーマのリサーチ」～個人制作面談を中心に 第5~6回 「展示企画1の提案」展示空間と作品の関係より 具体的作品のイメージ決定 第7~12回 「前期作品制作支援」徹底した個人制作と外部発表 (展覧会の運営遂行の支援) 第13回 「前期作品発表」校内展示・相互批評会 第14回 「展示企画1」外部展覧会発表 会場にてディスカッション 第15回 卒業制作展への具体的な作品構想についてのまとめ/ 外部展覧会より再考察 <後期> 卒業制作展の作品研究の内容の深さと細部に渡る技術の向上をめざす 第16回 「卒業制作展作品コンセプトとイメージ」 プレゼンテーション 個人の作品内容と具体的な手法について、最終討議を行なう 第17~20回 「個人制作面談と制作支援」徹底した個人制作 ～ 1. 映像ソース 2. 空間構成図面制作 3. システム図(機材決定) 4. 物質素材(サイズ・数量)選定 5. システム設定 6. 素材加工 7. 空間設定 8. 映像編集 9. 音響・ライティング設定 10. 作品最終設定 第21回 「後期作品発表」校内展示・相互批評会 第22回 「展示企画2」外部展覧会発表 会場にてディスカッション 第23回 「展示会をより作品修正」 第24回~25回 「個別制作」最終制作 第26回 「卒業制作シミュレーション設定」 第27回 「卒業制作シミュレーション展示より相互批評会」 第28回 「卒業制作作品最終合否会 ～27回の批評会での修正を通して」 第29回 「卒業制作展会場にて・批評会」 第30回 「作品制作における研究報告書・ドキュメント」発表・提出			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などを)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] 教職入門		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三浦 浩子
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 教職の意義及び教員の役割を考察し、教員の職責内容、研修・服務及び身分保障などについての理解を深める。これらの学びを通して、教職のイメージを明確にし、教職に就くために必要な資質を理解し、教職志望の意識を確認する。			
授業の概要 本授業においては、はじめに教師が職務を遂行するために知っておくべき必須のことがらや使命について学ぶ。つぎに、教育現場の今日的な課題について考える。また、その対応に必要な資質についての考察をし、教師に必要な資質能力について理解する。最後に、信頼される教師になるための他者との人間関係構築のあり方について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況と態度(20%)、レポート(30%)、試験の結果(50%)等を総合的に判断して評価を行う。 教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点の対象となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の目標及び内容・授業の進め方・自己学習の必要性と方法） 第2回 「教育とは何か」 第3回 「自己の教育史」 第4回 学校組織と教師の役割（公教育の役割・教員の役割と職責等） 第5回 学校教育にかかわる諸法規（憲法・教育基本法・学校教育法） 第6回 学校教育と教育課程の編成（学習指導要領の役割とめざすところ） 第7回 先人の教育論に学ぶ1 第8回 先人の教育論に学ぶ2 第9回 教育現場における課題1（不登校問題とその対応） 第10回 教育現場における課題2（いじめ問題とその対応） 第11回 教育現場における課題3（学校における諸問題） 第12回 教える者と学ぶ者の人間関係づくり 第13回 学校と家庭の人間関係づくり 第14回 魅力ある教員を目指して（まとめと試験） 第15回 魅力ある教員を目指し（まとめとレポート）			
使用教科書 ・「ともし続けることば」大村はま（小学館） ・中学校学習指導要領解説書「総則編」			
自己学習の内容等アドバイス 学校現場における今日的な課題を意識し自分なりに考え関心をもつことが、教師としての資質を備えることへつながる確かな道である。そのためには、教育に関わる図書をはじめ幅広い読書や他者との意見交換の場を多くもつよう心がけることをすすめる。			

[授業科目名] 教育原論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 教師を志す学生にとって、教育の原理や方法は不可欠である。その基礎的な知識や考え方を習得することを主テーマにし、それに基づき自分なりの教育観をもち、今日的な教育諸問題について主体的に考える態度を身につけさせることを到達目標とする。			
授業の概要 「教育」「子ども」「教師」「学校」「保護者」「地域」などを中心に今日の教育問題について歴史的な観点と照らし合わせてみていく。その原因と対策、今後の方向性を考える。			
学生に対する評価の方法 教員養成を目的としているため、授業態度を重視する。 筆記試験 60% 小論文と発表 20% 授業態度 20% なお、この授業は、再評価をしない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 教育原論入門 第2回 教育の発生 (教育の意義) 第3回 教育と環境、学習の必要性、生涯教育 第4回 学力とは 第5回 こども観 第6回 教師像 第7回 学習指導要領 第8回 学校の歴史 第9回 学校の機能 第10回 教育方法 第11回 生活指導 (1) 校内 第12回 生活指導 (2) 校外 第13回 教育の今日的な課題 (1) 教育課程 第14回 教育の今日的な課題 (2) 諸条件 第15回 筆記試験とこれからの教育			
使用教科書 テキスト：プリント			
自己学習の内容等アドバイス 今日の教育問題に関心をもつと共に授業内容を予習し、また、学習内容を深化し、追求したことをまとめる。			

[授業科目名] 教育心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 解良 優基
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間の基本的な学習・発達過程を教育心理学的な観点より理解し、児童・生徒の心身の発達に応じた教育のあり方について考えを深める。			
授業の概要 効果的に学習を促すには、学習者の発達における心理的特性を理解し、発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では、発達や学習、そして動機づけといった観点から人間の基本的な理解を深め、学級集団への指導や教育評価などへの応用について考える。受講者は、授業で学ぶ教育心理学の知見を踏まえ、より良い教育実践について積極的に考える姿勢を心がけてほしい。			
学生に対する評価の方法 ①平常の授業態度（30%）、②途中で実施する小テスト（20%）、③最終に実施する試験（50%）により、総合的に評価する。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要、履修上の注意）・導入 第2回 発達の捉え方 人間の発達の基本的特徴と、教育とのかかわりについて学ぶ 第3回 思考の発達 ピアジェの理論をもとに、子どもの知的能力の発達について学ぶ 第4回 社会性の発達 愛着や道徳的判断といった観点から、子どもの社会性の発達について学ぶ 第5回 自己の発達 エリクソンの理論をもとに、子どもの発達段階と各段階の課題について学ぶ ここまでの中間評価のための小テスト① 第6回 学習理論 連合論と認知論から学習のメカニズムについて学ぶ 第7回 記憶 記憶のメカニズムについて学ぶ 第8回 教授方法 学習の指導法の形態に着目し、効果的な学習指導法について学ぶ 第9回 教育評価 児童・生徒の学習活動に対する評価の目的や種類、そして考慮すべき点について学ぶ ここまでの中間評価のための小テスト② 第10回 動機づけの理論① 児童・生徒の学習へのやる気について、内発的動機づけ理論をもとに学ぶ 第11回 動機づけの理論② 児童・生徒の学習へのやる気について、より認知的な理論の観点から学ぶ 第12回 原因と動機づけ 「原因」に対する認知とやる気との関連について学ぶ 第13回 教師と生徒との関係 教師のリーダーシップや、児童・生徒への学習支援の方法について学ぶ 第14回 生徒同士の関係 子どもの仲間関係について、社会的・学習的な観点より学ぶ 第15回 筆記試験および総括			
使用教科書 必要な資料を適宜配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 事後学習により講義内容をよく理解し、自分の考えを整理しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 教育行政学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、我が国の教育行政の主体である国（文部科学省）と地方公共団体（教育委員会）・学校との関係やこれまでの歴史、現状・改善点を学び、併せてこれから の課題について考え、教職に必要な教育関連法規の知識を確実に身につけさせることを目標とする。			
授業の概要 教育行政は、教育法規に基づいて実施されているので、現場の教育問題を基にした教育法規の読み取りを中心に行う。そのために、教育小六法を熟読し、教職に必要な知識・教養が身につくような授業を展開する。			
学生に対する評価の方法 教職を目指す学生を対象としているので、授業態度を重視する。講義中の真剣な取り組みが求められる。 テスト 60% 小論文 20% 日本国憲法模写提出 授業態度 20% なお、この授業は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教育行政学概論 第2回 教育行政の組織 第3回 学校の管理と運営 第4回 教育費と教育財政 第5回 教育活動を支える諸条件 第6回 教職員の養成・採用・研修 第7回 学習指導要領と教育課程 第8回 日本国憲法と教育基本法 第9回 国家公務員法・地方公務員法・地方公務員特例法 第10回 学校教育法・教育職員免許法 第11回 学校保健安全法・学校給食法 第12回 義務教育費国庫負担法・市町村立学校教職員給与負担法 第13回 学校を取り巻く諸問題 第14回 学校事故と対策 第15回 筆記試験とまとめ			
使用教科書 「教育小六法」平成26年度版 兼子 仁 ほか 学陽出版			
自己学習の内容等アドバイス 教育に関する時事問題に关心をもち、これを記録し、まとめたり、発表したりして教育行政の在り方を学ぶ。			

[授業科目名] 教育課程		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考 (この講座では再評価は実施しない)
授業の到達目標及びテーマ			
到達目標 ：学習指導要領に基づく各教科・教科外の教育課程編成法及び特質が理解できること。「評価の観点」に配慮した授業計画、学習指導案が書けること。基本的学习指導法にしたがった授業実践ができること。 テーマ ：教育課程及び指導法に関する学修。教育課程の基礎理論の理解。教育基本法等の法律やこれに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた指導法の習得。			
授業の概要			
教育課程の基礎理論とその類型を学ぶ。教育の法治主義に基づく教育基本法をはじめとする法律や、これに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた教育課程の編成及び教育の内容・方法に関する事項を系統的・体系的に学ぶ。			
学生に対する評価の方法			
PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェートは高い。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回、第2回 教育課程論 — 教育課程の基本原理 教育課程の概念、カリキュラムの類型、カリキュラムと教育課程の包含関係			
第3回 学習指導要領 教育課程に関する法規、学習指導要領の性格、歴史的変遷、新学習指導要領の特質			
第4回 教育課程と学習内容 人間形成と教育内容の関わり、教材の役割、教科書の教材化、生きる力と個性伸長の関連			
第5回 学習指導要領が定める学校教育活動の構成 各教科と特別活動・道徳教育の関連、道徳教育・特別活動の意義			
第6回 教育方法論 — 学習指導の原理 問題解決学習と系統学習、発見学習と動機付け、初等・中等教育時代の自己の体験発表と協議			
第7回 学習指導案の役割： 学習指導から学習支援への推移、授業の三角形と教材・発問、授業計画と学習指導案の作成、マルチメディアの活用			
第8回 中間考査を実施 まとめと解答			
第9回 道徳教育の理念と実践： 道徳教育の理念、道徳教育の指導法、実践例の研究と協議			
第10回 特別活動の指導法 学級活動（ホームルーム活動）の指導法、児童会（生徒会）活動の指導法、学校行事の指導法			
第11回 ポートフォリオと教育評価 学力論の変遷、新学力観、観点別評価、指導と評価の一体化、指導要録の内容、通知票の意義と内容			
第12回 教育実践論 — 授業実践の例示：問題解決学習型の例、系統学習型の例、例について研究と討議			
第13回 総合的な学習の時間について、教職実践演習の趣旨 創設の意義、学習の内容、実践例の研究と協議、学習指導案の課題提示			
第14回 教育実践 観点別評価に配慮した学習指導案の作成、研究と討議 グループ別に研究と討議をした後、全体発表			
第15回 最終考査を実施、まとめと解答			
使用教科書			
実践に活かす 教育課程論・教育方法論 山口 満、唐澤 勇 監修 学事出版			
自己学習の内容等アドバイス			
学習を含めた生活全体の行動計画表を作成するとともに、ポートフォリオを自己省察に活用させる。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを常に考えることである。理解のためには予習3割・復習7割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 美術科教育法 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育は人間教育 到達目標：造形には発達段階があることを知り、発達の各段階において人格形成と深く関係することを理解 ① 発達段階によって表現が異なることの理解 ② 各発達段階における表現の特徴と課題の理解 ③ 発達段階ごとにおける教育の方針の理解			
授業の概要 美術科教育は、芸術家育成教育ではなく、幼児期から生涯を通じて、一貫して持続されていく人間教育の重要な教育領域であることを、幼児期から思春期にかけての造形発達を事例を確認しながら理解する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「講義のオリエンテーション」 美術科教育 I～IVの概要説明 講師紹介、受講生アンケート等 第2回：「幼児の造形体験」 幼児画を模写することによって、幼児の造形について体験的にアプローチする。 第3回：「発達ということ①」 人間成長を発達という視点から捉え、発達の概念を理解する 第4回：「発達ということ②」 造形においても非可逆的な発達段階があることを、幼児期から思春期における 絵画資料と「美術による教育 (ビクター・ローエンフェルド)」などの著作を資料として概説する 第5回：「造形発達① 幼児期の平面造形1」 幼児期の造形についての説明 幼児期全体の位置づけ 第6回：「造形発達② 幼児期の平面造形2」 幼児期の造形についての説明 幼児期における描画の特徴説明 (発達段階的、環境的に特徴のある幼児の描画を教材に、描画の特徴を理解する) 第7回：「造形発達③ 幼児期の立体造形」 幼児期の立体表現の事例を通して、造形的認識を理解する。 第8回：「造形発達④ 児童期の造形1」 児童期(小学生)の造形の特徴についての説明 幼児期における描 画との違いを、両段階の描画を比較対照することによって明確化する 第9回：「造形発達⑤ 児童期の造形2」 児童期における全体的発達に関する知見をもとに、児童期における 造形の意義と課題を示す。 第10回：「造形発達⑥ 児童期の造形3」 児童期における造形教育のあり方について、基本方針と手法を理 解する。 第11回：「思春期の造形1」 思春期(中学生)の造形の特徴についての説明 前、二段階の描画等との違い を、それぞれの描画等の特徴差から理解する。 第12回：「思春期の造形2」 思春期の発達課題についての概説から、思春期における描画と発達の関係を理 解する。 第13回：「思春期の造形3」 思春期における美術教育の意義とそのあり方についての基本概念を理解する。 第14回：「造形発達と美術教育1」 前講までの内容をまとめ、造形の発達についての全体理解を確認する。 第15回：「造形発達と美術教育2」 全員参加の討議によって美術教育と造形発達の関係について理解を深め るとともに、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場 への資料ノートの持込みは禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と教育方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の理解 ① 関連法律（日本国憲法、教育基本法、学校教育法）の概要理解 ② 美術科教育の領域、工芸・デザインの理解 ③ 学習指導要領の理解			
授業の概要 前講（I）における美術科教育の目的理解を前提に、美術教育を構成する各領域における目的と教育内容について理解する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義における集中度、私語等の有無などの態度（20%） 2. 各講義における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度（20%） 3. 各講義における予習・復習に関する質問に対する達成度（20%） 4. 試験における成績（40%） ※上記1. については減点、2. ～3. については、加点とする。 ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「法律と美術科教育①」 日本国憲法・教育基本法と美術科教育の関係理解。 第2回：「法律と美術科教育②」 学校教育法、学習指導要領と美術科教育の関係理解。学習指導要領については、美術科教育の構成を理解。 第3回：「法律と美術科教育③」 学習指導要領の詳細理解。 第4回：「法律と美術科教育④」 学習指導要領の詳細理解 第5回：「美術科教育の領域①」 工芸・デザイン、立体・平面領域、表現と鑑賞、それぞれの評価に関する構造的理解。 第6回：「美術科教育の領域②」 デザインの歴史的理と今日的意義の理解（消費者視点からの教育） 第7回：「美術科教育の領域③」 デザイン領域の基礎学習（授業における領域の広がりと構造） 第8回：「美術科教育の領域④」 デザイン領域の基礎学習（授業における領域の広がりと構造） 第9回：「美術科教育の領域⑤」 工芸領域の歴史的理 第10回：「美術科教育の領域⑦」 工芸領域と環境問題との関連による工芸領域の今日的意義 第11回：「美術科教育の領域⑧」 工芸領域の基礎学習（授業における領域の広がりと構造） 第12回：「美術科教育の領域⑨」 平面・立体領域の歴史的理と今日的な教育上の意義 第13回：「美術科教育の領域⑩」 平面・立体領域の基礎学習（授業における領域の広がりと構造） 第14回：「美術科教育の領域⑪」 平面・立体領域の基礎学習（授業における領域の広がりと構造） 第15回：「美術科教育法Ⅱのまとめと確認」 学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題についてとりまとめを行い、本講の学習成果の確認（「択一問題」「論述問題」による達成度確認）を行う。（試験会場への資料ノートの持込は禁止する）			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法III		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の学習指導方法一本時（校時単位）の計画ー 到達目標：各領域におけるカリキュラム構成の理解と、校時単位の指導計画作成の基礎取得 ① 授業計画手法の理解 ② 校時単位の指導計画の基礎手法取得 ③ 評価の意義と手法の理解			
授業の概要 前講（II）をもとに、カリキュラムについての構造的理解を進め、事業計画の模擬的作成を通して、指導計画と評価のあり方について理解し、計画作成の実際について学習する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「美術科教育のカリキュラム」 学校教育（美術科）におけるカリキュラムの位置づけ、意義について学習する。 第2回：「美術科教育のカリキュラム」 実際のカリキュラム（1～3年までの全体計画、年次計画、題材別計画、本字の計画）を参考に、カリキュラムの構造を理解する。 第3回：「本時の計画の作成研1—①」 校時単位の指導計画の作成を行う（素材体験） 第4回：「本時の計画の作成研究1—②」 校時単位の指導計画の作成を行う（素材体験） 第5回：「本時の計画の作成研究1—③」 校時単位の指導計画の作成を行う（授業構成） 第6回：「本時の計画の作成研究1—④」 校時単位の指導計画の作成を行う（授業構成） 第7回：「本時の計画の作成研究1—⑤」 校時単位の指導計画の作成を行う（発表） 第8回：「本時の計画の作成研究2—①」 校時単位の指導計画の作成を行う（素材体験） 第9回：「本時の計画の作成研究2—②」 校時単位の指導計画の作成を行う（素材体験） 第10回：「本時の計画の作成研究2—③」 校時単位の指導計画の作成を行う（授業構成） 第11回：「本時の計画の作成研究2—④」 校時単位の指導計画の作成を行う（授業構成） 第12回：「本時の計画の作成研究⑤」 校時単位の指導計画の作成を行う（発表） 第13回：「美術科教育の評価」 美術科教育の特殊性に配慮した評価の方法について基本的な理解を得る。 第14回：「美術科教育の領域と評価のまとめ」 前講の内容も含め、領域の意味と評価のあり方について内容を整理する。 第15回：試験による本講の学習成果の確認 今年度の講義全体のとりまとめを行い、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。（試験会場への資料ノートの持込は禁止する）			
※第3回から第7回までのテーマはパステル画、第8回から第11回までのテーマは自画像を想定			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法IV		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術科教育の方法と目的一年間計画一 到達目標：人間教育としての中学校における美術科教育の重要性を認識し、学習指導要領に準拠しながら、年間計画を策定する能力の基礎を習得する。 ① 美術科教育の人間教育としての重要性認識の共有 ② 中学校における年間授業計画策定手法の基本的作成能力の獲得 ③ 自らの視点からの美術科教育観の確立			
授業の概要 中学校1学年から3学年を通した学習指導計画の策定を通して、美術科教育法Ⅰ～Ⅲの内容を学生諸子の中で再構築するとともに、美術科教育の目的についての合意形成と個別の認識深化を行う。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「学習指導計画立案①」 年間計画の確認、学習指導計画の再確認 グループ編成 第2回：「学習指導計画立案②」 学習指導計画のテーマ設定 対象生徒のシチュエーションづくり。 第3回：「学習指導計画立案③」 目標および全体計画の策定の情報収集 第4回：「学習指導計画立案④」 全体計画策定チェック① 第5回：「学習指導計画立案⑤」 全体計画策定情報収集 第6回：「学習指導計画立案⑥」 全体計画策定チェック② 第7回：「学習指導計画立案⑦」 全体計画の発表① 第8回：「学習指導計画立案⑧」 全体計画の発表② 第9回：「学習指導計画立案⑨」 本時の計画の策定方法 第10回：「学習指導計画立案⑩」 本時の計画の策定チェック① 第11回：「学習指導計画立案⑪」 本時の計画の策定 第12回：「学習指導計画立案⑫」 本時の計画の策定チェック② 第13回：「学習指導計画立案⑬」 本時の計画の発表① 第14回：「学習指導計画立案⑭」 本時の計画の発表② 第15回：学習指導計画策定をテーマにした小論文（評価テスト）および学習指導計画案の製本・提出。			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 指導案作成に当たっては、インターネット情報等を含め、周辺関連情報の収集を十分に行うこと。			

[授業科目名] 道徳教育の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 重留 紘治
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講座は良き社会人になるために、児童・生徒の道徳性を発達させ、「道徳性」「規範意識」の育成をするために必要な基礎的な知識、考え方を修得することをテーマとし、自分なりの道徳教育に対する教育観を構築することを到達目標とする。			
授業の概要 現在起こっている道徳教育の抱えている課題を具体的な事例を織り交ぜ、日本の道徳教育の歴史的考察、道徳性の発達理論、道徳教育の授業方法、これから道徳教育の方向、について平易な講義を行い、ローブレ・グループディスカッション等により、子どもと真正面に向き合う道徳教育の実践力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の態度(20%)・レポート(予習20%、授業内容20%)、考査(中間・期末)(40%)によって総合評価する。 授業態度については、常識的な観点。レポートについては、予習による授業時の発言内容、授業時のまとめがしっかりとできているかの観点。考査については、知識、理解度、独自性、等を観点とする。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 道徳教育の歴史 (教育勅語。教科書の国定制度。戦後の道徳教育) 2回 道徳的的社会化 (道徳教育の必要性。社会化のメカニズム) 3回 道徳性発達の理論 ピアジェ。コールバーグ。ケアリング論。 4回 道徳教育の授業方法1 モラルジレンマ授業。 5回 道徳教育の授業方法2 価値明確化の授業。 6回 行動による道徳教育 スキル・トレーニング。モラル・スキル・トレーニング。 7回 1回～6回までの内容の中間試験 8回 道徳教育と生徒指導 生徒指導の光と影。カウンセリングマインド。 9回 道徳教育と教育臨床 教育臨床とは。道徳教育に求められているもの。 10回 道徳教育と特別活動 特別活動の重要性 11回 地域・家庭における道徳教育 家族の道徳的機能。地域の道徳的機能。 12回 道徳性と社会文化 一般化する他人志向。主我と客我。 13回 道徳教育の課題と展望 道徳教育の課題。道徳教育の展望。会話による教育 14回 8回～13回までの内容の期末試験 15回 学習のまとめ。再試験			
使用教科書 パワーポイントによる授業 参考文献 (予習用レポートにその都度掲載する)			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に、翌週の学習内容に関するレポートを渡すので、その項目について教科書や参考書で調べて記入し、予習してくる。その際に必ず自分の見解も書いてくる事。			

[授業科目名] 特別活動の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育においては、児童・生徒の個性の伸長と心豊かな人間性ならびに在り方生き方の育成が重要な課題である。そのため、これらの課題に応える基礎的な知識・技能の修得をテーマとし、それに基づき各自の教育に対する考え方、あるいは生徒指導上の諸問題を主体的に考え、判断し、解決する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 「特別活動の意義」、「学級会活動（ホームルーム活動）」、「児童会活動（生徒会活動）」、「学校行事」を中心に実践例を挙げながら講義を進める。また、各自の体験発表、討論等を通して理論と実践の深化を図るとともに、生徒指導上の諸課題を解決する力や実践力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業の内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。 課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校教育と特別活動の意義（今後の学校教育の目標、特別活動の役割、児童・生徒の生活実態、人間としての生き方教育） 第2回 特別活動の変遷（戦前の課外活動、戦後の特別活動、昭和期における特別活動、平成期に入っての特別活動） 第3回 特別活動の特質と目標・内容（学習指導要領のうたう目標、特質と指導法、内容と特質、生徒指導、総合的学習との関連） 第4回 指導計画・指導案の作成（学校の教育計画との調和、3領域ごとの指導計画と指導法、指導案の役割と指導案の作り方） 第5回 学級（ホームルーム）活動（目標と性格及び問題点、活動の内容、指導計画の作成と指導方法） 第6回 児童会（生徒会）活動（目標と性格及び問題点、活動内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第7回 クラブ活動・部活動の指導①（目標と教育的意義、実態と指導及び課題） 第8回 クラブ活動・部活動の指導②（指導計画の作成と評価）・中間試験日 第9回 学校行事の指導（目標と性格及び問題点、内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第10回 特別活動の評価（意義と観点、評価の方法と事例、人間としての在り方生き方教育） 第11回 特別活動と学級・学年・学校経営（特別活動の組織・運営、特別活動と学校事故、学級経営の内容、学級・学年・学校経営との関連） 第12回 完全学校週5日制時代の学校・家庭・地域の関わり（学校・家庭での対応上の留意点、地域の教育力への期待、学校・家庭・地域の協力、地域での特別活動） 第13回 これから特別活動の展望と課題（在り方についての組織図、社会教育との関連、教育課題との関連、国・地方教育団体との関係） 第14回 試験とまとめ 第15回 事例研究：県立学校経営案に見る特別活動の位置づけと活動内容（事例を見て研究協議をする）			
使用教科書 現代の特別活動 一理論と実践一 <第2版> 中野直明・小川一郎編 酒井書店・育英堂			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育方法論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 野々山 里美																														
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考																														
授業の到達目標及びテーマ 実際の教育活動に活かす指導方法について研究し、具体的な学習指導方法や技法を学ぶことで、教師に必要な実践力の基礎を身につけるとともに、研究成果を学習指導実践へ還元する力を身につけることを到達目標とする。																																	
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> この講座では、プリントとテキストにより授業を進める。学習指導の実際については実習的な内容で授業を行う。 学習指導要領が目指す人間像・学力観・教育方法観を概観しながら、教育の方法・技術を通して教育活動を構築する。 教授メディアの効果的な活用を研究すると共に、実習的な活動を通してコミュニケーション能力を高める。 																																	
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> 試験 (筆記) (60%)、小テストやレポート (20%)、授業の参加態度やグループ討議の態度 (20%) を総合的に判断して行う。また、授業の遅刻や欠席等は原則的に認めず、減点対象とする。 試験の欠席は認めない。また、この授業の再評価は実施しない。 																																	
授業計画 (回数ごとの内容等) <table> <tr><td>第 1回</td><td>オリエンテーション (教育方法論を学ぶ意義・授業の進め方・授業に関する諸注意等)</td></tr> <tr><td>第 2回</td><td>教育方法論と学習指導要領 (学習指導要領との関連、および学習指導要領の変遷)</td></tr> <tr><td>第 3回</td><td>教育方法史 1 (教育学者の教育理論)</td></tr> <tr><td>第 4回</td><td>教育方法史 2 (教育学者の教授法)</td></tr> <tr><td>第 5回</td><td>教育方法の構造 (子どもの発達段階と教育方法の関連、カリキュラム編成の原理)</td></tr> <tr><td>第 6回</td><td>授業設計の方法 (授業の構造と意義、問い合わせ・発問・説明のあり方と授業展開等)</td></tr> <tr><td>第 7回</td><td>授業設計の技術 (学習指導形態、板書・ノート指導等)</td></tr> <tr><td>第 8回</td><td>教科教育の具体例の研究 (教材研究と教材開発等の実践事例研究)</td></tr> <tr><td>第 9回</td><td>教科外教育の具体例の研究 (特別教育活動・道徳等の実践事例研究)</td></tr> <tr><td>第 10回</td><td>教科外教育の具体例の研究 (道徳・総合的学習等の実践事例研究)</td></tr> <tr><td>第 11回</td><td>教育方法と教育評価 1 (指導と評価の一体化、相対評価と絶対評価、自己評価と相互評価等)</td></tr> <tr><td>第 12回</td><td>学習障害の理解と指導 (今日的課題)</td></tr> <tr><td>第 13回</td><td>学習する立場と教授する立場のロールプレーティング (模擬授業の開発)</td></tr> <tr><td>第 14回</td><td>教育方法論の課題とまとめ (筆記試験)</td></tr> <tr><td>第 15回</td><td>講義内容の総括的レポート作成</td></tr> </table>				第 1回	オリエンテーション (教育方法論を学ぶ意義・授業の進め方・授業に関する諸注意等)	第 2回	教育方法論と学習指導要領 (学習指導要領との関連、および学習指導要領の変遷)	第 3回	教育方法史 1 (教育学者の教育理論)	第 4回	教育方法史 2 (教育学者の教授法)	第 5回	教育方法の構造 (子どもの発達段階と教育方法の関連、カリキュラム編成の原理)	第 6回	授業設計の方法 (授業の構造と意義、問い合わせ・発問・説明のあり方と授業展開等)	第 7回	授業設計の技術 (学習指導形態、板書・ノート指導等)	第 8回	教科教育の具体例の研究 (教材研究と教材開発等の実践事例研究)	第 9回	教科外教育の具体例の研究 (特別教育活動・道徳等の実践事例研究)	第 10回	教科外教育の具体例の研究 (道徳・総合的学習等の実践事例研究)	第 11回	教育方法と教育評価 1 (指導と評価の一体化、相対評価と絶対評価、自己評価と相互評価等)	第 12回	学習障害の理解と指導 (今日的課題)	第 13回	学習する立場と教授する立場のロールプレーティング (模擬授業の開発)	第 14回	教育方法論の課題とまとめ (筆記試験)	第 15回	講義内容の総括的レポート作成
第 1回	オリエンテーション (教育方法論を学ぶ意義・授業の進め方・授業に関する諸注意等)																																
第 2回	教育方法論と学習指導要領 (学習指導要領との関連、および学習指導要領の変遷)																																
第 3回	教育方法史 1 (教育学者の教育理論)																																
第 4回	教育方法史 2 (教育学者の教授法)																																
第 5回	教育方法の構造 (子どもの発達段階と教育方法の関連、カリキュラム編成の原理)																																
第 6回	授業設計の方法 (授業の構造と意義、問い合わせ・発問・説明のあり方と授業展開等)																																
第 7回	授業設計の技術 (学習指導形態、板書・ノート指導等)																																
第 8回	教科教育の具体例の研究 (教材研究と教材開発等の実践事例研究)																																
第 9回	教科外教育の具体例の研究 (特別教育活動・道徳等の実践事例研究)																																
第 10回	教科外教育の具体例の研究 (道徳・総合的学習等の実践事例研究)																																
第 11回	教育方法と教育評価 1 (指導と評価の一体化、相対評価と絶対評価、自己評価と相互評価等)																																
第 12回	学習障害の理解と指導 (今日的課題)																																
第 13回	学習する立場と教授する立場のロールプレーティング (模擬授業の開発)																																
第 14回	教育方法論の課題とまとめ (筆記試験)																																
第 15回	講義内容の総括的レポート作成																																
使用教科書 <ul style="list-style-type: none"> 「教育の方法と技術」 柴田吉松・山崎準二編 学文社 (参考文献) 「授業力をみがく」 船越俊介・家田晴行・斎藤規子 著 啓林館 (参考文献) 小学校学習指導要領解説 必要に応じてプリントを配布する 																																	
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> 次回の授業の課題 (ホームワーク) を提示するので、幅広い資料分析をして予習し、自分なりの考えを確立し、かつ、わかりやすい発表のための工夫をしてくること。 読み手に自分の考えがより深く伝わるような書き方やまとめ方を工夫したレポートや小テストの作成に心がけること。 授業計画は授業の進行状況に応じて前後することがある。 																																	

[授業科目名] 生徒及び進路指導		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 生徒指導及び進路指導は特定の教師のみが行うのではなく、すべての教師が学校教育全体を通じて行うものである。そのため、生徒指導及び進路指導について教育的な概念や教育方法について、基礎的な知識・基本的な理論、技能の修得をテーマとし、児童・生徒が学校を含めた社会の中で自己を生かした活動ができるよう成長するのを援助する力や実践的指導力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 生徒指導では、「生徒指導の意義」、「学業指導」、「適応指導」、「社会性の指導」、「自己を生かす指導」を中心に事例を挙げながら講義を進める。また、進路指導では、生徒が主体的に進路選択や社会に適応するための能力の伸長を図るよう教育する方法を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。 課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 生徒指導・進路指導の意義と課題 (生徒指導とは、生徒指導の実践原理と課題) 第2回 生徒指導の原理と理論 (生徒指導・実践の原理、生徒指導と領域) 第3回 児童・生徒理解の進め方 (児童・生徒理解の意義と目的、理解の方法、支援・指導につなぐ児童・生徒理解、児童・生徒理解を左右する教師の見方) 第4回 学級経営の進め方 (生徒指導からみた学級経営の意味、学級集団の力学、学級経営の方法) 第5回 教科指導と生徒指導 (生徒指導と教科指導の関係、実践例の研究、生徒指導からみた教科指導の課題と解決策) 第6回 生徒指導実践における教師像と研修 (生徒指導の実践上必要となる教師の資質と技能、生徒指導の実践力を育成するための研修のあり方) 第7回 学校の指導体制と家庭・地域との連携① (学校の生徒指導実践における課題・指導体制の確立) 第8回 学校の指導体制と家庭・地域との連携② (生徒指導における学校・家庭・地域社会の連携) 中間試験日 第9回 進路指導の意義と課題 (進路指導の教育的意義と目的、課題、進路指導理論) 第10回 自己発見と自我同一性の確立 (自己の発達、同一性の確立、自己理解と進路指導) 第11回 就労観・職業観の形成と変容 (現代青年の就労観・職業観、就労観・職業観の形成と変容、就労観・職業観の形成を促す進路指導のあり方) 第12回 進路指導実践の学校体制 (学校教育における新指導の位置づけ、体制づくり) 第13回 学校教育における進路指導の実践展開 (「学校の教育活動全体を通じて」の進路指導、進路指導における「ガイダンス機能の充実」) 第14回 試験とまとめ 第15回 現実の高校における進路指導の手引きの研究・協議 (事例を見て研究・協議をする)			
使用教科書 生徒指導・進路指導 高橋 超・石井真治・熊谷信順 編著 ミネルヴァ書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育相談とカウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一																														
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考																														
授業の到達目標及びテーマ テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。																																	
授業の概要 不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。																																	
学生に対する評価の方法 授業への参加態度 (15%)、レポート (20%)、試験の結果 (65%) 等を総合的に判断して評価を行う。 教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない																																	
授業計画（回数ごとの内容等） <table border="0"> <tr><td>第1回</td><td>ガイダンス</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>学校教育相談の歴史</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>コンサルテーション</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>ディレクティブとノンディレクティブ・聞くことの重要性</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>相談の目標と終結</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>人が人を変えるということ</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>不登校</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>いじめ</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>ノイローゼ等病的事例</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>特別支援教育</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>クライシスセオリー</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>思春期の理解</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>教育相談を行うときの注意事項</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>まとめと試験</td></tr> </table>				第1回	ガイダンス	第2回	学校教育相談の歴史	第3回	学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割	第4回	コンサルテーション	第5回	ディレクティブとノンディレクティブ・聞くことの重要性	第6回	相談の目標と終結	第7回	人が人を変えるということ	第8回	不登校	第9回	いじめ	第10回	ノイローゼ等病的事例	第11回	特別支援教育	第12回	クライシスセオリー	第13回	思春期の理解	第14回	教育相談を行うときの注意事項	第15回	まとめと試験
第1回	ガイダンス																																
第2回	学校教育相談の歴史																																
第3回	学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割																																
第4回	コンサルテーション																																
第5回	ディレクティブとノンディレクティブ・聞くことの重要性																																
第6回	相談の目標と終結																																
第7回	人が人を変えるということ																																
第8回	不登校																																
第9回	いじめ																																
第10回	ノイローゼ等病的事例																																
第11回	特別支援教育																																
第12回	クライシスセオリー																																
第13回	思春期の理解																																
第14回	教育相談を行うときの注意事項																																
第15回	まとめと試験																																
使用教科書 『親面接のポイント』 加藤純一著 ほんの森出版 [参考図書] 『学校教育相談学 ハンドブック』 ほんの森出版																																	
自己学習の内容等アドバイス 毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。																																	

[授業科目名] 教職実践演習（中・高）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝・井垣 理史
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 (この講座では再評価は実施しない)
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：一般、教職並びに情報に関する科目で学んだ知識・技能の整理・統合化・体系化を図る。教育現場の今日的諸課題を既得の知識・技能等を用いて解決できること。当講座を通して不足している知識・技能等を知り補完する術を見いだす。 テーマ ：美術の教諭として、また学級担任としての知識・技能、思考力・判断力・表現力の実践適用力を養う。また実践演習を通して知識・技能、思考力・判断力・表現力を省察し補完するとともに、現職に就いてからの課題は何かを明らかにする。			
授業の概要 教職と美術に関する科目の実践演習を半々に実施する。実践時は既得の知識・技能、思考力・判断力・表現力が今日的諸課題とどう関わり、これをどう整理・統合化・体系化すれば課題解決に有効か、活用の方法・過程をどうすべきか考える。このためグループ討議、ロールプレイング、事例研究、模擬授業、現地見学・調査、現職教諭をまじえたTTなどを多用する。こうして、教員としての使命感・責任感・教育愛・社会適応性・人間愛・指導力・組織運営能力を培う。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。授業態度・参画態度について評価のウェートは高い。学生には各回にわたり到達目標に照らし自己評価させ、その程度も教員が評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス及びリフレクション：授業の進め方、目的と授業方法の理解、1年次から行ってきた関連資料の整理。 第2回 学校組織と教師の職務について：学校経営、教師の役割、職務内容等、その内容は何かであったかシラバスより明らかにし、整理する。また6軸との関連も明らかにし評価シートに各自が記載し提出する。 第3回 児童生徒の理解と学級経営について：学校現場の課題を聴取し、児童生徒の理解法について討論。この際関連する科目と内容は何か、美術の教諭と学級担任との関わり方はどうあるべきか協議。（講義・グループ討議・演習） 第4回 キャリア発達能力（社会性や人間関係能力等）について：職業観・勤労観、教員としての資質、社会人かつ教員としての倫理観、服務規律等について。シラバスを基に関連する科目と内容を明らかにする。（事例研究・ロールプレイング） 第5回 生徒指導について：第3回「児童生徒の理解」を基に生活指導、教育相談、進路指導を一般教員の立場から考察する。該当する科目と内容をシラバスで調べ整理する。今日の課題につき実践的対応訓練をする。（講義・事例研究・ディベート） 第6回 学習指導について：第3回「児童生徒の理解」を基に、学習指導を一般教員の立場から考察する。該当する科目と内容をシラバスで調べ整理する。6軸との関連も明らかにし評価シートに各自が記載し提出する。（講義・演習・討議） 第7回 模擬授業と研究協議：一般教員が作成する学習指導案と評価の観点に基づいて、教科以外の教育活動の学習指導案作成を試み、一般教員の授業法理解に役立てる。模擬授業を実施する。（研究・協議） 第8回 試験日①：前半の実践に関する知識・技能、思考力・判断力・表現力の総仕上げを評価し指導する。 第9回 美術室運営案の作成：美術室運営案を作成する。美術とどの科目のどの内容が関連しているかを整理する。（講義・演習・討議） 第10回 美術科教育に関する学習指導要領の解説を理解し、その具現化について検討する。（講義・討論・ロールプレイング） 第11回 10回の検討に基づき、学校経営案作成要項を参考にしながら美術教育計画を作成する力を養う。ここでの職務・職責義務を明確化し、関係者との連携上の配慮点を整理する。（講義・討論・グループ学習） 第12回 自己の専門教科の学習指導案を作成する。指導案は評価の観点を踏まえたものとし、学生の自己省察（メタ認知）を改善させる工夫をする。（講義・演習） 第13回 学習指導案に基づく模擬授業の発表A：全員がチェック項目を記載したコメント用紙に意見を記入する。（研究・協議） 第14回 学習指導案に基づく模擬授業の実践または発表B：13回の発表を通して得た改善点などを踏まえた内容を実践・発表。 第15回 14回の模擬授業について全員にコメントさせ研究・協議する（研究・協議）。9～14回分を総合評価する。			
使用教科書 教職実践演習ノート（自作）、教員研修の手引き・学校経営案作成要項（県教委）、ポートフォリオ、各科目のシラバス、			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを理解することである。理解のためには予習3割・復習7割の時間配分が良い。			

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考 (この講座では再評価は実施しない)
授業の到達目標及びテーマ			
到達目標 ：教育実習の効果を上げるための留意点を身につける。生徒を引きつける授業が出来ること。観点別評価・指導と評価の一体化について理解した授業が出来ること。教師としての基本的な生活態度定着化。 テーマ ：教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての資質・能力、実践力を身に付けさせる。			
授業の概要			
教育実習全体の概要、教育実習の意義、実習効果を上げるための留意点を知る。観点別評価・指導と評価の一体化について理解し、これに基づいた学習指導案を作成する。この指導案をもとに全員が交代で50分の模擬授業を行い、研究協議する。また、受け入れ校の教職員や生徒に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について協議する。			
学生に対する評価の方法			
PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と模擬授業発表者に対する評価の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェートは高い。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
<3年次後期>			
第1回 教育実習の意義と課題、教育実習の範囲と実習内容 教員養成課程と教育実習、教育実習の意義、課題および実習生としての自覚 学習指導、学級経営、校務分掌、部活動指導			
第2回 全般的留意事項、実習過程での留意点 勤務・服務などについて、実習前（事前指導、実習校の決め、実習校との打ち合わせ） 実習中（観察、参加、研究授業）、実習後（反省会への準備、実習校との関連事務、大学との関連事務）			
第3回 良い授業のための工夫 生徒理解、自作教材、授業参観、教材研究、板書の工夫。観点別評価・指導と評価の一体化。			
第4回 以降 観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 この模擬授業は4年生の前期、教育実習に出る直前まで継続して行う。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 全員が交替で発表し研究協議した模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成することを心掛ける。自己の模擬授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 (この講座では再評価は実施しない)
授業の到達目標及びテーマ			
到達目標 ：単元計画から日案作成までを体系化し教育実習直前の総仕上げが出来ること。実習先との綿密な事前打ち合わせをし、確実な研究授業が出来ること。実習校での実践結果をまとめ上げ実践の自信を確実にすること。 テーマ ：教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての資質・能力、実践力を確かなものにする。			
授業の概要 4年次の前期は、3年次の後期に学んだ内容を教育実習で実践し、教師として理論と実践の融合に必要な力量を磨く。教育実習終了後、実習校の研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして実践結果を発表しあい、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究する。			
学生に対する評価の方法 実習直前の指導、実習校での評価、事後指導結果を総合し、PISA型学力観の5点（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして、各20%で到達度を評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p><4年次前期></p> <p>1回～5回（4月～5月） 3年次後期に引き続いて観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。</p> <p>残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。</p> <p>6回 教育実習に出る直前の指導 3年次後期、1～3回で指導した内容の再確認と総仕上げ。特に勤務・服務、実習生としての心構えを重視。</p> <p>（6月第1～3週、教育実習）</p> <p>7回以降 教育実習を終えた後、実習中全日の行動を簡潔にまとめた報告書の作成、この報告書と研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして体験を発表しあい、自己評価、相互評価を通して、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究協議する。</p>			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 全員が交替で発表し研究協議した模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成することを心掛ける。自己の模擬授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習Ⅰ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択(教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ ：教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする。			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手立てと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。			
 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム活動、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習Ⅱ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 中学免許も希望する時、実習Ⅰに統合して履修
授業の到達目標及びテーマ			
到達目標 ：これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ ：教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要			
これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手立てと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法			
実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。			
実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム活動、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書			
適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス			
3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 生涯学習概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中井 俊樹
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業が終了したときに、受講者のみなさんが以下のような知識や能力を身につけることを目標にします。</p> <p>①生涯学習および社会教育の意義を理解し、生涯学習に関する制度・行政・施策、家庭教育・学校教育・社会教等との関連、専門的職員の役割、学習活動への支援などの現状と課題を説明できるようになる。</p> <p>②学芸員が生涯学習社会の中でどのような役割を担っているのかを説明できるようになる</p> <p>③生涯学習に対する自分なりの考えを根拠とともに説明できるようになる。</p>			
授業の概要 <p>上記の到達目標を達成するために、この授業では一方通行的に講義するのではなく、生涯学習に関わる映像を視聴した上で考えたり、少人数のグループで課題に取り組んだりするなど、みなさんが主体的に課題に取り組み、授業に参加できるようにします。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>この授業では、下記の3つの形態で授業の到達目標にどの程度到達しているのかという基準で成績評価を行ないます。また、最終の成績評価におけるそれぞれのウェートは以下の通りです。</p> <p>①授業での質問やコメントペーパーへの記述などによる参画態度（評価のウェート 20%）</p> <p>②小グループによる課題（評価のウェート 30%）</p> <p>③授業内容の理解度をチェックする最終試験（評価のウェート 50%）</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 ガイダンスー教育とは、学習とは、生涯学習とは</p> <p>第2回 生涯学習・社会教育行政の展開ー生涯学習がなぜ重要になってきたのか</p> <p>第3回 発達段階と発達課題ー人は発達段階に応じて何を学ぶのか</p> <p>第4回 働くことと学ぶことー就職すると人はどのように学ぶのか</p> <p>第5回 図書館、公民館における生涯学習ー図書館や公民館では人はどのように学ぶのか</p> <p>第6回 博物館における生涯学習1ー博物館にはどのような学びが期待されているのか</p> <p>第7回 博物館における生涯学習2ー博物館では人はどのように学ぶのか</p> <p>第8回 ジェンダーと生涯学習ー男女の違いでどのような生涯学習の違いがあるのか</p> <p>第9回 高齢化社会における生涯学習ー高齢化は学習をどのように変えるのか</p> <p>第10回 情報技術と生涯学習ー情報技術は生涯学習をどのように変えるのか</p> <p>第11回 グローバル化における生涯学習ーグローバル化は生涯学習をどのように変えるのか</p> <p>第12回 学校・大学の開放と生涯学習ー学校や大学はどのように生涯学習を支援しているか</p> <p>第13回 成人の学習の特徴と学習成果の評価ー成人学習にはどのような特徴があるのか</p> <p>第14回 生涯学習・社会教育指導者の役割ー生涯学習関係の専門職員はどのような役割を担っているのか</p> <p>第15回 最終試験の実施とまとめ</p>			
使用教科書 <p>教科書は使用しない。初回の授業で参考書を紹介し、各授業で関連資料を配付する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>初回に配付するシラバスで授業の詳細を伝えます。授業で取り上げられるテーマについて、事前に検討しておくこと。また、初回の授業は重要ですので必ず出席してください。</p>			

[授業科目名] 博物館概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館は生涯学習機関であり、社会との関わりが深い。公立や私立を問わず、博物館の専門職員である学芸員は、高い見識とともに社会人としての一般常識が求められる。コミュニケーション能力を含め、それらをしつかり身につけて欲しい。			
なお、この科目はデザイン学科の選択となっているが、学芸員資格取得には必須の単位である。資格取得を目指す者はこの単位を修得していなければ、経営論以降の履修を認めない。			
授業の概要 いま博物館に何が求められているか、それに答えるためには何が必要か、期待される新たな博物館とは何かを考える。そのために、まずは博物館の歴史を振り返り、ついで博物館法に基づき、現代の博物館の種類、機能、役割などを順次解説する。なお、学期中、通常の講義とは別枠で学外の施設見学を行う。			
学生に対する評価の方法 成績は、試験の平均点を指標（50%）に、受講態度、出席カードへの記入状況やレポート等加味（50%）しながら、総合的に判定する。まずは、補講を含め第14講義までに3分の2以上の出席が不可欠である。追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。博物館とは何か、各自が思い描く博物館像を問い合わせ、あわせてこれまでの博物館利用体験などをアンケート調査する。 第2回 アンケート結果の公表。これをもとに各自の抱いている博物館像を浮き彫りにするとともに、博物館の実態について述べる。 第3回 博物館概論とは何か。 第4回 博物館法1。博物館法を定義から順次読み進む。 第5回 博物館法2。改正の要点を解説。 第6回 博物館の歴史その1－海外編、近代前－ 第7回 博物館の歴史その2－海外編、近代以後－ 第8回 博物館の歴史その3－日本編、近代前－ 第9回 博物館の歴史その4－日本編、近代以後 第10回 博物館の組織と職員、指定管理者制度。 第11回 博物館の仕事1－研究－ 第12回 博物館の仕事2－収集－ 第13回 博物館の仕事3－展示－ 第14回 博物館の仕事4－教育－ 第15回 評価試験とまとめ 補講 名古屋市博物館を見学し、レポートを提出する。それをもとにレポートの書き方を講義する。			
使用教科書 特定の教科書は用いせず、適宜資料を配布する。 【参考図書】倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』 東京堂出版			
自己学習の内容等アドバイス 博物館は生涯学習機関であり、社会との結びつきが深い。一般常識を身につけるため、普段から新聞その他のマスメディアに親しんで欲しい。美術館は、博物館という上位概念の中に含まれ、並立しない。			

[授業科目名] 博物館経営論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ここでは、博物館に関する必要な科目の内、博物館経営論について講義する。 博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営に関する基礎的能力を養う。とかく「経営」と聞くと金銭面が思い浮かぶが、それがすべてではない。それよりも、どのような理念の下、いかなる使命を帯びて博物館を運営していくか、その大きさを知る。			
授業の概要 まずは、「経営」とは何か、言葉の意味から説き起こす。それを踏まえたうえで、改めて博物館経営とは何かを講義する。具体的には、博物館の経営基盤、博物館の経営、博物館における連携などについて、それぞれ具体例を挙げながら解説する。また、人前で話す練習として、毎回講義の冒頭に新聞に取り上げられた博物館に関する話題で、3分間スピーチを順次行う。さらに、通常の講義とは別に、学外の施設見学を行う。			
学生に対する評価の方法 成績は、試験の平均点を指標(50%)に、受講態度(出席カードへの記入)、レポート等加味しながら(50%)、総合的に判断する。まずは14講義までに3分の2以上の出席が必須条件。追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 導入。博物館経営とは何か、アンケート調査をする。あわせて、博物館概論の復習もする。 第2回 アンケート結果の講評。経営とは何か、その一般論から述べる。 第3回 ミュージアムマネージメントとは何か、その概要を述べる。 第4回 博物館は、公的な機関である。法に基づく行財政制度について述べる。 第5回 博物館は非営利であっても、運営資金は必要である。財務を考える。 第6回 施設・設備。利用者にも職員にも使い勝手のいい博物館とは何か、考える。 第7回 組織と職員。博物館の円滑や運営に必要な、組織や職員のあり方を述べる。 第8回 使命、計画、評価。理念なくして博物館は運営できない。事例紹介をする。 第9回 博物館倫理。資料の購入や貸借には、高い倫理観が求められている。 第10回 危機管理。事故や災害にどう対応するか、具体例を挙げながら述べる。 第11回 広報。チラシなどの紙媒体からインターネットまで、種類と効果を考える。 第12回 博物館の対費用効果について、具体的な事例紹介をする。 第13回 博物館の作り方、計画から開館まで。一みのかも文化の森ー 第14回 博物館と地域の連携(博学連携、市民参画)ー美濃加茂市民ミュージアムー 第15回 評価試験とまとめ 補講 受講生の希望する施設を一館見学し、レポートを提出する。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。 【参考図書】倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』、加藤有次他編『博物館情報論』			
自己学習の内容等アドバイス 新聞等のマスコミに触れ、常に博物館に関する話題の情報収集につとめる。			

[授業科目名] 博物館資料論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館は、人工物や自然物、生き物など様々な資料を収蔵・育成している。それら博物館資料の収取、整理保管等に関する理論や方法についての知識・技術を習得し、また博物館の調査研究活動について理解することを通じて、博物館資料に関する基礎的能力を養う。			
授業の概要 資料は、博物館の性格を決定する重要な要素である。単なるモノはモノでしかなく、博物館資料となりうるためにには、モノを調査研究し、情報化しなければならない。その結果、初めてモノは展示品や研究資料になりうる。資料の概念、調査研究活動、資料の収集・整理・活用を通じて、資料化の過程を理解し活用法を身に着ける。適宜、スライドで具体的な事例紹介をする。			
学生に対する評価の方法 成績は期末試験の平均点を指標（50%）に、受講態度（質疑応答や出席カードへの記入）、レポート等を加味しながら（50%）、総合的に判断する。まずは14回目までに3分の2以上の出席が不可欠である。追試験は、病気、自然災害、交通機関の事故等、正当な事由がある場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。博物館資料とは何か、これまで知っていることを確認する。博物館の種類を復習。 第2回 アンケート結果を講評。博物館とその資料の多様性を説明する。属性分析とは何か。 第3回 博物館資料としての文化財。その保護制度の変遷。 第4回 歴史系博物館と有形文化財。 第5回 美術系博物館と美術工芸品。 第6回 民俗系博物館と無形文化財・民俗文化財。 第7回 動植物園水族館と記念物。 第8回 博物館資料の情報化、考古資料の実測と拓本。 第9回 博物館資料の情報化、資料写真の撮影。 第10回 博物館資料の収集。寄託、寄贈、購入。 第11回 博物館資料の整理。目録、収納、収蔵庫。 第12回 博物館資料の活用。展示、貸し出し、利用者への便宜。 第13回 博物館資料の公開。所有者への配慮、著作権の保護。 第14回 美術工芸資料の取り扱い。箱、掛け軸。梱包と輸送。 第15回 まとめと評価試験。これまでの講義を振り返り、博物館資料とは何か再確認する。 補講 受講生の希望する施設を一館見学し、レポートを提出する。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配布する。 【参考図書】倉田公裕・矢島国雄『新編 博物館学』			
自己学習の内容等アドバイス 常に新聞等のマスコミに触れ、博物館や文化財に関する情報の収集に努める。			

[授業科目名] 博物館資料保存論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ これまでの学芸員養成課程では、博物館活動の根源となる資料の保存や修復に関する視点が欠けていた。博物館における資料保存、展示環境、収蔵環境を科学的に捉え、資料を良好な状態で保存していくための知識を習得することを通じて、資料保存に関する基礎的能力を養う。			
授業の概要 博物館における資料保存の意義とは何か、そのためにはどのような保存環境が望ましいか考える。温湿度に始まり、生物、光、化学物質等、有害要因の種類とその対策を、古典的手法から最新の科学技術まで紹介する。また、資料の保全と修復についても触れる。適宜、スライドで具体的な事例紹介をする。			
学生に対する評価の方法 成績は、試験の平均点を指標（50%）に、受講態度、出席カードへの記入状況やレポート等加味（50%）して、総合的に判定する。まずは、補講を含め第14講義までに3分の2以上の出席が不可欠である。 追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、公欠に準ずる正当な事由のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。博物館で資料を守る意義について説明する。 第2回 資料保存の歴史、正倉院の保存環境について。 第3回 資料の保存、温湿度管理（防虫、防黴、防錆等）。 第4回 資料の保存、生物被害対策（IPM、総合的有害生物管理の理念）。 第5回 資料の保存、光の性質とその対策（演色性、紫外線等）。 第6回 資料の保存、化学物質とその対策（大気汚染、シックハウス等）。 第7回 資料の保存、人為災害と自然災害（火災、盗難、地震、水害等）。 第8回 展示室、収蔵庫の環境調査と対策。 第9回 資料輸送中の環境、梱包・温湿度。 第10回 有機質素材の劣化と修復（育成を含む）。 第11回 無機質素材の劣化と修復。 第12回 地域資源の保存と活用（エコミュージアム等）。 第13回 文化財の保存と活用（景観、歴史的環境を含む）。 第14回 自然環境の保護（生物多様性・種の保存を含む）。 第15回 まとめと評価試験。講義を振り返り、資料保存の意義を再確認する。			
使用教科書 特定の教科書はなく、講義の新行為に合わせて適宜資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 物理や化学など自然科学の要素が多いので、高校までの理科の教科書をもう一度読み直し、基礎的な知識を再確認してほしい。			

[授業科目名] 博物館展示論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岡田 哲弥
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考 学芸員資格希望者必修
授業の到達目標及びテーマ 展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する知識・技術を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う。 なお、この科目はデザイン学科の選択となっているが、学芸員資格取得には必須の単位である。 資格取得を目指す者はこの単位を修得していなければ、これ以後の学芸員課程の履修を認めない。			
授業の概要 博物館展示の意義を講義で学んだ後に展示計画演習を行い博物館展示のプロセス、展示の開設活動、企画・デザイン・技術・施工等の展示の制作、他の博物館・所蔵者・専門技術者等の関係者との協力など展示の実際について学ぶ。 また展示空間、展示コンポーネントや展示手法のベーシックな知識習得、教育における展示の活用についても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 成績は、試験の平均点を指標（50%）に、受講態度、出席カードへの記入状況やレポート等加味（50%）しながら、総合的に判定する。 追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。博物館における展示の役割（コミュニケーションとしての展示、調査研究の成果の提示など） 第2回 展示と展示論の歴史 第3回 展示のプロセス 第4回 展示にチャレンジ※これ以降はワークショップ形式で授業を行います。 第5回 展示空間の発想と実現 第6回 展示のコンポーネント（展示資料について） 第7回 展示のコンポーネント（展示ケースについて） 第8回 展示のコンポーネント（照明について） 第9回 展示のコンポーネント（映像・音響について） 第10回 展示のコンポーネント（グラフィック・サインについて）解説文・解説パネル・展示図録・パンフレットなど 第11回 ハンズオン展示（人による解説） 第12回 博物館における情報・メディア（機器による解説） 第13回 展示評価と改善・更新 第14回 教育における展示の活用 第15回 展示の政治性と社会性、ワークショッププレゼンテーションと評価、まとめ			
使用教科書 『博物館の展示をつくる 展示論』 日本展示学会編集 株式会社雄山閣発行			
自己学習の内容等アドバイス 展示手法、技術等は時代とともに変化し新しい取り組みも行われている。博物館、美術館への関心を高め、常に意識をもち自分の目で確かめ蓄積することが重要である。			

[授業科目名] 博物館教育論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西尾 圓
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 学芸員資格希望者必修
授業の到達目標及びテーマ			
博物館での「学び」、すなわち生涯学習の場としての博物館機能が重要視されている。博物館における教育活動とはどのようなものか、その基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する考え方など基礎的な能力を養うことをねらう。なお、この科目は選択となっているが、学芸員資格取得には必須の単位である。資格取得を目指す者はこの単位を修得しなければならない。			
授業の概要			
本科目は大きく3つのテーマで進めていく。はじめに博物館での教育活動を考えるための教育理論や博物館をとりまく社会的な状況や学びの特徴について触れる。次に、学びの主体である人、つまり利用者を理解する視点を示す。最後に博物館での教育活動の事例を紹介する。各個人の博物館経験や具体的な活動事例を通じて、博物館教育について考えていく。			
学生に対する評価の方法			
成績は、以下の3点から総合的に評価する。 (1) 期末試験(30%)、(2) 授業への参加態度・授業中に課した小レポートなど(40%)、 (3) 博物館の教育活動の実際のレポート(講義初日に課題提示)(30%) なお15回のうち、3分の2以上の出席をすることが必要である。最終日のレポート報告の欠席と追試験は、病気・自然災害・交通機関の事故等、正当な事由の場合のみ認める。再評価はしない。			
授業計画(回数ごとの内容等)			
第1回 導入。学びの意義と生涯学習の場としての博物館 第2回 博物館教育の意義と理念1：博物館諸機能の教育的意義について考える。 第3回 博物館教育の意義と理念2：博物館の学びの特性とコミュニケーションとしての博物館教育、その双方向性について考える。 第4回 博物館教育の意義と理念3：地域における博物館の教育機能 第5回 博物館教育の意義と理念4：博物館と学校教育、学習指導要領に記された博物館利用のあり方から探る。 第6回 利用者を理解するために1：博物館の利用実態と利用者の博物館体験 成長と発達からみる博物館体験の必要性と博物館リテラシーの涵養を考える。 第7回 利用者を理解するために2：人材養成の場としての博物館 博物館に近い友の会、ボランティアとの関係を考える。 第8回 利用者を理解するために3：誰にも開かれた博物館するために 日本語以外を母国語とする人々や特別な支援を必要とする人々の利用を考える。 第9回 博物館教育の実際1：教育活動の方針と評価、手法、企画と実施について 第10回 博物館教育の実際2：事例紹介1（歴史資料を活用した活動） 第11回 博物館教育の実際3：事例紹介2（美術品などを活用した活動） 第12回 博物館教育の実際4：事例紹介3（自然を活用した活動） 第13回 博物館教育の実際5：レポート報告1（初日に課した博物館の教育活動のレポート報告） 第14回 博物館教育の実際6：レポート報告2（初日に課した博物館の教育活動のレポート報告） 第15回 まとめと試験 1回目から14回目までの講義を通じて学んだことから、各自が博物館教育についての考えをまとめる。			
使用教科書			
特定の教科書は用いず、授業に必要な資料は適宜配布する。			
自己学習の内容等アドバイス			
日頃から博物館へ出かけ、そこで活動がどのように行われているのか、経験と関心を深めておくことが大切である。また「教育」は、各個人が受けってきた学校教育の経験を基に考えがちであるが、それはごく一部の経験でしかない。来館者に博物館でどのような学習経験を提供するのか、広い視野を身につけるためにも学習者の発達や心理、教育方法など、広範囲ではあるが様々な教育分野の文献にも目を通すことを勧める。			

[授業科目名] 博物館情報・メディア論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木田 歩
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館での情報やメディアのあり方や役割を考えることをテーマに、博物館における情報やメディアの意義とその活用方法や情報発信の課題について理解し、博物館情報の提供や活用等に関する基礎を学ぶことを目指します。			
授業の概要 社会教育施設であり生涯学習の拠点である博物館で活動するために、情報の意義を把握したり、活用方法の課題に気付いたりすることは、なぜ必要なのでしょうか? 本学におけるこれまでの学びを活かしながら、講義だけでなく、博物館の見学や活用実践への参加を通じて、情報やメディアの可能性を探るきっかけにします。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参加態度 (評価ウエート 30%) ②博物館見学に関する課題レポート (評価ウエート 25%) ③活用実践の成果発表 (評価ウエート 20%) ④科目全体に関する課題 (評価ウエート 25%) 以上 4 点を総合的に評価します。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 第2回 博物館における情報・メディアの意義 第3回 メディアとしての博物館、ICT 社会の中の博物館、情報教育の意義と役割 第4回 博物館における情報・メディアの現状と課題① (調査研究活動における情報活用) 第5回 博物館における情報・メディアの現状と課題② (展示活動における情報活用) 第6回 博物館における情報・メディアの現状と課題③ (教育普及活動における情報活用) 第7回 博物館における情報・メディアの現状と課題④ (博物館における情報管理と公開の方法) ※第4回ー第7回は、博物館見学の予定 第8回 博物館活動の情報化 第9回 ドキュメンテーションとデータベース化、デジタルアーカイブの現状と課題 第10回 博物館と知的財産 第11回 博物館における情報発信とその課題① (博物館メディアの役割と学習活用) 第12回 博物館における情報発信とその課題② (情報機器の活用) 第13回 博物館における情報発信とその課題③ (インターネットの活用) 第14回 博物館における情報発信とその課題④ 第15回 科目全体のまとめ			
使用教科書 教科書は使用しません。関連資料等を授業内で必要に応じて紹介・配布します。			
自己学習の内容等アドバイス 博物館学芸員資格に関する科目の一つです。すでに受講した関連科目の内容を振り返りながら、受講してみてください。			

[授業科目名] 博物館実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 3	[開講期] 3年次後期～4年次	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 博物館の主な活動は、資料収集、展示保管、教育普及であり、それらは専門職としての学芸員の重要な仕事である。ここでは、4年次における学外館務実習を円滑に進めるため、3年次では東海地区の様々な種類の博物館4～5館へ施設見学に出かける。その都度事前質問を取りまとめたり見学のチラシを作り、見学後すみやかにレポートを提出する。4年次では、学芸員の実務を体験する。			
授業の概要 3年次、施設見学の他に、準備室の資料整理、フィルムカメラによる資料写真の撮影を行う。 4年次の夏休みには学外館務実習があるが、実習先は各自で確保すること。4年次後期には、3年生と合同で実習成果の報告会を行う。			
学生に対する評価の方法 学内での実習に取り組む姿勢、写真の仕上がり、レポート、学外館務実習先での実習態度等、総合的に判定する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 3年次後期 第1回 導入。博物館の実務にどのようなものがあるか、実習ではどんなことをしたいのか、施設見学先などアンケート調査。あわせて講義の概要を説明する。 第2回 アンケート結果の講評。見学実習先を選定し、4～5人で一班とし、見学の計画やそれに関する資料作り、反省会、お礼状の作成などを共同して行う。 第3回 スライドを用いて、写真の基礎知識を学ぶ。 第4回 資料整理、写真撮影1。 第5回 施設見学1。 第6回 資料整理、写真撮影2。 第7回 施設見学2。 第8回 資料整理、写真撮影3。 第9回 施設見学3。 第10回 資料整理、写真撮影4。 第11回 施設見学4。 第12回 資料整理、写真撮影5。 第13回 施設見学5。 第14回 撮影した資料写真の合評会。 第15回 4年次の学外館務実習へ向けての抱負発表。 見学施設：総合博物館、美術館、歴史民俗系博物館、動植物園、水族館、理工系博物館などの中から、5館選んで見学する。見学終了後、すみやかにレポートを提出する。 4年次 第1回 各自実習先候補の概要（施設名、実習期間等）や準備状況を報告する。 第2回 実習先の再確認、実習日誌の記入法や、実習に際しての心構えを説明。 第3～14回 班別に準備室の整理作業、資料取り扱いの練習などの学内作業。 第15回 学外館務実習に向けての最終確認。 適宜 各自確保した施設で、主に夏休み中に学外館務をおこなう。夏休み明け、実習成果報告会をする。			
使用教科書 特定の教科書はない。			
自己学習の内容等アドバイス 学外館務実習では、他大学の学生と一緒にになって、博物館の実務をこなすことになる。社会常識をわきまえ、節度あるコミュニケーションがとれなければならない。			